GATE 4:ALL-OUT ATTACK

ゲート

4.総撃編

自衛隊彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ
Yanai Takumi



アルファポリス


GATE 4:ALL-OUT ATTA
4.総撃編
ゲート
自衛隊
彼の地にて
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス

ゲート ―4. 総撃編―

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

主な登場人物紹介

日本

伊丹耀司（いたみ ようじ） …… 33歳。陸上自衛隊二等陸尉、特地資源状況調査担当。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は生活と趣味のための収入源と割り切っている。

黒川二曹（くろかわ にそう） …… 23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、身長190㎝の美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

栗林志乃（くりばやし しの） …… 24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

古田陸士長（ふるた） …… 機関銃手。元老舗料亭の板前。独立開業の費用を貯めるために自衛隊に入隊。情報活動の為に皇城に潜入中。

森田総理大臣（もりた） …… 辞任した本位の後を継いで総理大臣に就任する。事なかれ主義者の上に、深く物事を考えている様子が見えない。

嘉納太郎（かのうたろう） …… 日本の外務大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

菅原浩治（すがわらこうじ） …… 外務省のエリート官僚として将来を嘱望されている。官僚トップの座を狙って冷徹な野心家を演じているが、意外にも熱血漢。

梨紗（りさ） …… 伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

望月紀子（もちづきのりこ） …… 日本の住民の性格や気質を調べるために帝国によって拉致されていたが自衛隊によって救出された。

栗林菜々美（くりばやしななみ） …… 栗林志乃の妹。テレビ局の新人アナウンサー。局のやり方や報道姿勢に疑問を抱く。

古村崎哲朗（こむらざきてつろう） …… テレビ局勤務で報道局一筋のベテラン。世の中の事象に対しては常に批判的な姿勢を貫く。

アメリカ

ディレル …… アメリカ合衆国大統領。『特地』から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

中国

臺徳愁（とうとくしゅう） …… 中華人民共和国国家主席。『特地』に移民を送り出すことによって、利権独占を狙っている。

ロシア

ジェガノフ …… ロシア連邦大統領。『特地』からの資源流入によるロシアの影響力低下を懸念して、様々な策謀を巡らせている。

異世界(特地)

テュカ・ルナ・マルソー …… 165歳(外見は16~17歳)。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。

レレイ・ラ・レレーナ …… 15歳。ヒト種の賢者、魔導師。老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つ。

ロゥリィ・マーキュリー …… 961歳(外見は13歳)。亜神、神エムロイの使徒。異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

ヤオ・ロゥ・デュッシ …… 315歳(外見は20代後半~30代前半)。ボンテージ鎧のよく似合う肉感的な美人ダークエルフ。

モルト・ソル・アウグスタス …… 異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

ピニャ・コ・ラーダ …… 19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。

ゾルザル・エル・カエサル …… 皇帝モルトの長子、皇女ピニャの兄。あくまでも戦争継続を主張し、政権を掌握するや講和に賛成する勢力の弾圧を図る。

ディアボ・ソル・カエサル …… 皇帝モルトの次子、皇女ピニャの兄。皇位の継承を狙っていたが、ゾルザルが政権を掌握すると帝都を脱出し『門』外の諸外国との接触を目論む。

テューレ …… 帝国に侵略された部族を守るために我が身を差し出して奴隷となったが、生き残った同族からは裏切り者とされている。ゾルザルに仕えつつも全てを恨み様々な策謀を巡らす。

シエリー・テュエリ …… 12歳とは思えぬ聡明さを備えた少女。傾きつつあった家を盛り上げるために日本からの外交官である菅原に近付き、次第に恋心を抱く。

ジゼル …… 400歳超(外見は20代前半)。亜神、冥府の神ハーディの使徒。竜人族出身。神官服はフリルたっぷりの白ゴスだが、着崩しているのでいろいろ隠せていない。

ハーディ …… 特地世界の冥府を司る女神。ベルナーゴ神殿に祀られている。銀座に『門』を開いた張本人。

01

瑞々しい緑の麦畑が地平線まで広がる開拓地の景色は、風景画と見紛うばかりの美しさだった。だが、画家が手元か、あるいは情緒の一部を狂わせてしまったようにも思えるドス黒い染みが、その印象画的な美観を完膚無きまでに台無しにしている。

集落が燃えて黒煙を上げているのだ。

第三偵察隊所属の富田二等陸曹は、立ち上がる太い煙を遠望して、大空に向かって飛び立とうとする巨竜の姿を連想した。しかしそれは平和な村で生活している人々の命や住まい、そして次の収穫までの蓄えを供犠として呼び起こされたものだ。そう考えて見直すと、この風景画は『邪竜の衝天』とでも名付けるのが相応しいかも知れない。

彼を乗せた大型ヘリコプター・チヌークの大編隊は、僚機と共に黒煙に包まれた集落を、その屋根をかすめるようにして駆け抜けた。

眼下では紅蓮の炎が、人々の住まいや家具などに灼熱の牙を剥いて、噛み砕き、咀嚼音をたて喰らい尽くそうとしている。蛇の舌先にも似た炎熱がちろちろと燃え草を探してとぐろを巻き、その息吹は轟音を上げていた。

それらを四千三百三十六の軸馬力を発するターボシャフトエンジンの爆音が力ずくでねじ伏せ、頭ごなしに抑えつける。

前後に二つ列んだローターブレードが、黒い紗を幾重にも重ねたような煙を引き裂き、その裾を強烈なダウンウォッシュによって巻き上げる。炎の一部などは、ただそれだけで吹き消されてしまったほどに。

同乗している、と言うより富田達の方が乗せて貰っている側なのだが、陸上自衛隊特地方面派遣部隊第四戦闘団四〇三中隊所属の隊員達は、眼下に広がった無惨な光景を見て一様に口を噤んでいた。

喋り続けているのはテレビニュースの取材スタッフだけ。

誰に許可を得るでもなく当然のように景色が一番よく見える場所を占領した彼らは、カメラの砲口を眼下の集落へと向けている。マイクを手にした古村崎という男は、見れば誰にでも分かるような「集落があります」「煙を上げています」「あちこちに犠牲者の姿が見えます」といった内容を、あたかも自分だけが知る特別な秘密であるかのごとく喋っていた。

そんな情景を眺めながら、富田は傍らの栗林二等陸曹の耳元に口を寄せた。

「護衛するテレビのスタッフって、てっきりお前の妹だと思ったんだけどなあ？」

「なんでかなぁ、最近のあたしらって、こんな任務ばっかりしてない？　これってもう偵察じゃないよね」

会話が微妙に噛み合っていない。だが、それぞれに愚痴をこぼしたいだけだったこともあり、特に言葉を重ねることもなく視線を交え、互いに肩を竦め合うだけに終わった。

「野郎共、見ての通りの惨状だ。ここでの俺達の任務はゾルザル派の掃討だ。今度こそ奴らの本隊を見つけだして、ぶっ潰す。わかったな!?」

先任陸曹長の怒鳴るような声を受けて隊員達は一斉に「オッス！」と頷いた。

「良い返事だ。よし、弾込め！」

第一小隊の隊員達は取り出した弾倉の角を、ヘルメットにコンコンとぶつけた。

計二十発の七・六二㎜弾が弾倉内できちんと揃うようにしているのだ。些細な配慮だが、戦闘中に小銃が弾詰まりなどの作動不良を起こせば命にかかわる。この程度の用心ですら怠ったが故に、生死を分けることになるのが戦場であり、彼らがこれから向かう場所なのである。

慣れた手つきで、六四式小銃に弾倉を装着し終えた隊員達は、槓桿から手を放し薬室に弾丸を送り込む。装弾、装填、閉鎖……彼らが手にする愛銃は、この瞬間をもってあっけないほどに獰猛な凶器となった。

「弾込め良しっ、安全装置良しっ！」

とは言え、銃が攻撃色を発するわけでなく、猟犬のように体毛を逆立てて今にも襲いかからんと唸るわけでもない。冷たい鋼鉄の表情は、弾を装填しようとしまいと一切変わらないのだ。しかし人差し指に、引き金の重さ二・七～四・三キログラムを僅かに超える力を入れさえすれば撃鉄が雷

管を打ち、持ち主が意図した方向に凶悪な殺意の塊を吐き出す。

考えてみれば、隊員達もこの小銃と同じかも知れない。

日頃の彼らも、誰かの友人であり、あるいは誰かの夫で、誰かの息子だ。テレビのスポーツ中継番組で派手な演出を受けて登場する格闘家のような、一目でそれとわかる外見的要素は少ない。制服を脱いでしまえば、そうと言わなければ誰にも気付かれないくらいなのだ。

けれど弾を装填した銃を持ち、命令によって安全装置を解除された彼らは、飢えた狼のように斃(たお)すべき獲物を探し、命令という名の引き金を引かれることによって、敵を殲滅(せんめつ)せんとして一斉に飛び出して行くのだ。

部品の脱落を防ぐためと、不必要な物音を防ぐ目的で施した黒ビニルテープの補強を確認した隊員達は、負い紐を伸ばすと銃を背負った。中には、町工場で作ってもらったマウントを用いて、私物の照準補助具(ダットサイト)を強引に装着している者もいる。そうした隊員は、薄暗いチヌーク機内であちこちに銃口を向け、十字照準刻線(レティクル)の見え具合を確かめてから銃を背負った。

隣にいた隊員が問いかける。

「そんな無理矢理とりつけたダットサイト、あてになるのか？」

「なんかの拍子に倒れるかもしれない照星と照門と同じくらい……かな」

戦闘状況が過酷になり始めると、陸自上層部も隊員達がそれぞれに行う創意工夫をかなりのレベルで許すようになっていた。照準補助具もその一つで、前方握把やレーザー照準具を取り付けてい

る者もあるのだ。
二機のチヌークが、集落の広場に影を落として静止する。
少し離れたところを、戦闘ヘリのコブラが旋回し降下する隊員達を支援する構えをとっている。
運動会で使う綱引きの綱ほどに太いファーストロープが地面まで下ろされると、小隊長は上げた手を静かに下ろした。
すると第一小隊の隊員達は放たれた弾丸のように、ファーストロープに飛びついて、次から次へと滑り降りていった。
そんな彼らの姿を、報道のカメラが見送る。
その脇では、富田達が地上に銃口を向けて、降下する隊員達を攻撃するような敵がいないかを見張っている。
第一小隊の隊員達をすっかりと降ろしてしまうと、チヌークはファーストロープを引き上げて、再び高度を上げ始めた。
閑散とした機内では、古村崎がヘリパイ・ヘルメットをかぶった隊員に詰め寄っていた。
「おい、どこかに着陸しろ。俺たちが降りられないじゃないか！」
航空科の機上整備員が内心で辟易としていることのわかる、作ったような愛想笑いで答えた。
「はい、了解しました。でも、着陸するのは地上の安全を確認してからですよ」
「それじゃあ、緊迫した地上の映像が撮れないじゃないか!?　今すぐ、俺たちを降ろせ！」

「いいですけど、……これ使えます？」

機上整備員がファーストロープを指し示して説明した。

戦場を往来するヘリコプターが最も危険に曝されるのは、離着陸する瞬間である。それを避けるために懸垂降下や、ファーストロープによる降下等の方法が開発されたとも言える。もちろん、素人に突然「やれ」と言って出来ることではないがこれも機体の安全、つまりは取材クルーの安全を確保するために必要な処置なのだと言うと、さすがの古村崎も「仕方ねぇな」と、罵倒混じりに舌打ちするしかなかった。

カメラマンと古村崎が物欲しげに大地を見下ろす中で、チヌークは高度をどんどん上げた。そして地上の安全が確認されるまで、燃えさかる村の上空を旋回することとなったのである。

隊員達は、地面に降り立った瞬間から、四方八方へと散るように駆け出していく。

何かと競争をしているかのように、疾駆しながら銃を構え、警戒の視線とそれに一致した銃の照準とを周囲に向けて巡らせた。

照準を家の戸口、植え込み、人の居そうなあらゆる場所に合わせる。だが、彼らが生きて動いている人間の姿を見つけることはなかった。見えるのは、あちこちに転がっている、つい先ほどまで生きていたであろう様々な種族の男女である。みんな、剣により斬られたり刺されたり、あるいは獣に食いちぎられたような傷を負って倒れていた。

「ターゲット・サーチャーを使ってみろ！」

分隊長の指示で隊員の一人がＳＦ映画に出て来るような未来型の光線銃に似た道具を取り出して植え込みや物陰へと向けた。

それは体温を持つ生命体が発する赤外線を感知して、姿を隠した存在を発見する装置である。主に狩猟の獲物探しの道具として、大型の獣なら約九百メートル、鳥などの小動物でも、約二十メートル離れた場所から発見できる。また、遭難者の捜索といった用途にも用いられている。しかし、これもまた官品……国からの支給品ではなく隊員の私物であった。残念な話だが予算の制限がきつい自衛隊では、装備の不足は隊員達が自腹を切って補わなければならないのだ。

「熱源があちこちにあって駄目です」

優れた機械ではあるが、近傍で巨大な熱源があればその効力も半減してしまう。家屋を包む炎が邪魔であった。それにあちこちに散らばる死体すらまだ生暖かいのである。

「ちっ……」

機械が有効に働かないとなれば、自らの目と耳とで確認するしかない。

結局の所、各個の隊員達に求められる技量は、古来から変わることなく注意力と観察力が基（もとい）となる。これを磨き鍛えるしかないのだ。どれほどに機械の進歩があったとしても、その性能が有効に発揮されない場面や、敵味方で互いにその機能を騙し合い、妨害し合うという状況は、いくらでも起こり得るのだから。

隊員達は、倒れている者の中にまだ生きている者はいないか、あるいは襲撃者から身を隠している者が残っていないかを探す。しかし、炎に包まれてパチパチとはぜる建材の燃える音が、もしかしているかも知れない生存者の声の確認を阻害した。靴底が大地を踏む時のざらざらとした音すらも、敵の気配を探ろうと尖らせている神経に障った。

それでも、隊員達は呼吸を静かに抑え、じわりじわりと進みながら些細な異変を見逃すまいとしている。皆の視線は速過ぎることも、遅過ぎることもない速度で、あらゆる箇所を巡り、覗き込み、探っていった。

突然の発砲音が集落に響く。

『どうした!?』

空電音に混じって、無線機に報告を求める声が放たれる。

すでに、これ以上は強くなりようがない程に張り詰めていた隊員達の反応は早い。

素早く姿勢を低くし、ある者は音のした方向を振り返り、また一部の隊員達は、音とは別の方向に視線を巡らせて警戒の漏れを防いでいた。

『そっちに……集落の南方に逃走！』

警声（けいせい）と、散発的に続く銃撃音。

無線で敵の数、移動方向が報告され、小隊長の指示を受けた分隊長は隊員達を率いて、敵の逃れようとしている南へと走った。

（前へ！）

分隊長のハンドサインで分隊は敵を待ち構えるように広がった。

最近、このあたりに出没して住民達を襲っている敵は、帝国兵であることを示す姿形をしていない。近在の農民と同じ服装をして襲って来るので、帝国兵なのか、はたまた帝国兵に襲われて恐慌に駆られ、農具を武器として握った農民なのか見ただけでは判別がつかないのだ。だから隊員達は、武器になる物を持って向かって来る者を見れば、全てを敵と認識するしかなかった。いや、何も持っていなくても、敵かも知れないと警戒しなければならないのだ。

「逃げる奴は敵だ、逃げない奴は訓練を受けた敵だ！」という発言は、戦場の狂気を揶揄する戦争映画の中で用いられたセリフだが、狂気の渦巻く戦場では「理性」を保ち続けることが出来る方が異常だ。そもそも、どうやって理性的に人間を殺すと言うのか？　今の価値観に従うならば、理性的に人間を殺せる者の方が恐ろしいはず。戦場では、狂気に駆られていることの方が正常なのである。そして正常と狂気の切り替えに失敗した者から病んで行くことになる。

それに、昔から敵味方を識別する標をつけず、戦闘員の証しとなる戦闘服もまとわない者は武器を持って戦う権利がないとされている。彼らがしているのは、捕らえられたその場で射殺されても文句は言えないほどに卑劣な行為と言える。ハーグ条約はもちろんのこと、ジュネーブ条約ですらも、最低限の条件として「武器を公然と携行すること」と定めているのだから。

だが、「病的な潔癖症」に感染した者はこれらの違反をした者ですら擁護する。そして一般市民

を楯にし、市民の間に隠れながらする卑劣な戦闘手段を、弱者が強者に立ち向かう唯一の方法と称して認めてしまう。市民を楯にすることは非難と駆除の対象とされるべきなのに、その攻撃に曝されている兵士の方を指差して「人殺し」「冷血漢」と罵ってしまうのだ。

そう、摘発でも掃討でもない。駆除である。無辜（むこ）の民を楯とする者はゴキブリや鼠のごとき駆除の対象とすべきである。テロリズムは、数多の憎悪と不幸をまき散らし、狂気と理性を、日常と戦時との境界を脅かして浸食させる、卑怯極まりない行為なのだ。その戦いに市民が巻き込まれたとすれば、その責任の大部分、ほぼ全ては市民を楯とした側にこそある。

にもかかわらず、制服をまとった兵士には完璧であることが求められる。

一瞬の勘違いと、判断の誤りと、手違いが当たり前のように横行する戦場にあって、味方を守り、自分が生き残る鉄則は「敵らしければ撃つ」しかないのに、あたかも殺人マシンのような完璧な敵味方識別能力が求められ、出来なければ「完璧ではない」と非難されてしまうのである。

こうして、兵士達は守っているはずの味方からの、背後からの攻撃によって傷つけられる。罪悪感をあおり立てられ、敵の銃弾を受ける以前から、味方の手によって精神的に参らされていくこととなるのだ。

隊員達は荷車に乗った商人とおぼしき男達を見つけ銃口を向けた。総勢八人。皆、特地で言うところのヒト種だった。

引き金を引く、引かないの一瞬の迷いが起きる。
同僚や誰かを傷つける敵かも知れない存在を、絶対に安全な死体へと変えて安心したいという衝動が隊員達の中にこみ上げた。だが、彼らはまだそこまで疲弊していなかった。強固な意志でこれを抑え付けることに成功し、隊員達は危険に身を晒したまま命令を待った。
「止まれっ！」
アルヌスで習い覚えた片言の言葉で呼び止めながら、隊員達は一斉に銃口を商人達に向けた。
しかし、声が聞き取れないのか、それとも何か理由があるのか商人達はそれを無視して強行突破をはかろうとした。分隊長は威嚇として馬の足下に向けて弾倉一個分の銃撃を加えた。パラパラと薬莢（やっきょう）が地に散らばり、銃声に驚いた馬は竿立ちになって暴れた。
慌てた御者はいきり立つ馬を落ち着かせるために手綱をひく。そしてどうにか馬を宥め終えると、観念したように両手を挙げた。
ゆっくりと止まる荷馬車。
隊員達は、射線上に味方をおかないように充分な距離と間隔を広げて荷馬車を半包囲した。そして油断無く男達に銃口を向けて、荷馬車から降りるように指示する。
「いったい何の御用ですか？　俺たちは旅の商人でして、何かご入り用ですか？」
謙（へりくだ）った言い方で御者台から声をかけてくるひげ面の男。
隊員達は、男達の下腹部に照準を合わせた。

帝国兵は剣や槍を用いることに優れ、その防御技術は熟練のボクサーにも比肩されるほどだ。そのために頭や胸部はすぐに狙いからはずされてしまう。だが、下腹部は脚を使わなければ動かすことは出来ない。その分、動きが少なく、咄嗟の動きの中でも比較的捉えやすい部位なのだ。

「何故、逃げようとしたんですか？」

数歩の距離を置いたままで、分隊長は丁寧に尋問を始めた。

ひげ面の男は男達の代表を兼ねているのか、肩を竦めて答える。

「当然でしょう！　たまたまこの村の近くを通ったら、煙が上がってましてね。何が起こったのかと覗いてみたらこの始末でしょ？　巻き添えになったらたまらないって逃げるのは普通のことですよ……」

実際、巻き込まれてこの始末だとぼやく。

言い訳としては、一応筋が通っていた。だがそれで見逃していては仕事にならない。分隊長は小隊長に状況を報告すると、「荷物を見せてもらえますか？」と告げた。

「い、いや……それは」

「何か見られて困るような物でもあるんですか？」

商人の男達は互いに顔を見合わせ、仕方ないと荷台に被せていた幌を取り払った。

荷台には家具や什器、それから貴金属製品などが山積みとなっていた。この世界の手工業品は新品と中古品の区別が付きにくい。分隊長は荷台の品物を上からさっと見渡して言った。

「まるで、そこらの民家から掻き集めてきたみたいな品揃えですね」
荷台の一番底に置かれた大きな箱に注意をひかれる。誰も触れていないのに、わずかに動いたように見えたのだ。分隊長は、「その箱を開けて見ろ」と言うつもりだった。だが、その直前にひげ面の男が抗議するかのように言い放ったためタイミングを失った。
「勘弁してくださいよ。これでも立派な商品なんですよ！」
男は大仰に天を仰いでいた。
「まあ、故買品（盗品）も中にはあるんでしょうけどね。でも、仕入れるのに出先をいちいち尋ねていたらこの商売はやっていけないですよ」
「こいつをどこに運ぶんですか？」
「あちこちですよ。戦争中の今は、あちこちで物が売れるんです」
「例えばどんなもの？」
「何でもですよ。食べ物、家具、什器、それと酒。ついでに奴隷。そうだ、女奴隷です。女、欲しくありません？　いろんな種族を取りそろえてますよ。きっとお好みに合うのがいるはずです」
ひげ面の男は、どんなご注文でも承りますよと言って下品に笑った。
「このあたりをうろつく商人なら、帝国正統政府発行の商人鑑札か、フォルマル家発行の通行許可証を持ってるはずですね。見せて下さい」
分隊長の問いに商人は「ええ、あります。ありますとも」と御者台に置かれた鞄を開いた。

「どこにやったかな？　大事な物だから、ちゃんとしまい込んでおいたんですがねぇ。こう言う時に限って見つからないや。待ってて下さいね。もし、お手間なようだったら、見つけるまで他の仕事をしてもらっていても……」

分隊長は告げた。

「別に、急がなくて良いですよ。ゆっくり探して下さい」

ひげ面の男は見た目にも緊張した様子だった。「お優しいこって」と舌打ちしている。他の男達はどうなるものかと固唾を呑んでそれを見守っていた。

「ああ、あったあった。これだ……」

「代表者、それを持って前へ。こちらに近づいて良し」

分隊長の指示で、代表の男は折り畳んだコピー紙の束を差し出した。見ると紙面の隅に赤黒い汚れが付着している。

「これ、血で汚れてるぞ」

「いや。ついこのあいだ手を切っちゃいましてね。それで汚しちまって……」

そんなことを言って、手をぶらぶら振るひげの男。

分隊長は書類を開くと、その記述に目を走らせた。

「グレゴルー・ベントン？」

「グレゴリー・ハー・ベイトンです。俺の名前です」

ひげ面の男は、そんなカマかけにはひっかからねぇぜと言いたそうな表情をした。

「ね、本物でしょ？」

そう。確かに通行証はフォルマル家の発行した本物であった。とは言え、通行証は商人の氏名、扱う品、その身元を保証するパトロンたる貴族の氏名などが特地語と日本語の双方で書かれているに過ぎない。

分隊長の関心は、通行証を発行する時に収集される情報にあった。特地の人間には意味を理解することのできない、書類の末尾に記されたバーコードがそれを引き出すのである。

「確かに、この書類は本物ですね」

この言葉で、隊員達の緊張も和らいだ。敵である可能性が低くなり、安全である可能性が高くなったからだ。

分隊長は通行証の発行日時を確かめると、書類の下辺に記されたバーコードに携帯していた機械をあてた。すると、書類の発行時に登録されたグレゴリー・ベイトンという男の顔写真が液晶パネルに表示される。

「……ふ～ん」

分隊長は、傍らにいた隊員達に画面を見せた。そして日本語で「こいつら偽物だ」と告げる。画面に表示されたのは、ひげ面の男とは似ても似つかない老人だったのだ。

「どうしたんで？」

隊員達のまとっていた雰囲気がガラッと変わったのを察したのだろう、ひげ面の男は何か書類に不備があったか、血で汚したことが問題なのかと話しかけた。だが、背後の男達はその緊張に耐え続けることが出来なかった。一斉に隠していた武器を引き抜いて、自衛官相手に一か八かの勝負を挑んできた。

とは言え、この事態を予測し、充分に距離を取っていた隊員達にとって、対処するのはそれほど難しい事ではない。

武器を手にした者は腹部などに銃弾を受けて、折れるようにしゃがみ込み、あるいは倒れ、剣を抜く事も出来なかったひげ面の男は、銃剣を突きつけられて捕らえられることとなった。

「村を襲ったのは、きっとこいつらですよ」

隊員の一人が、斃(たお)れた男を口汚く罵ると彼らが抜いた武器を指差した。

その剣には、拭き取られることもないままに血がこびり付いていたのだ。おそらく村人の血液だろう。しかも、その剣の柄には帝国軍の紋章が刻印されていた。

「おい、ちょっと待て、お前達！　何をやっている？　まさか、民間人を殺傷したんじゃないだろうな!?」

古村崎がカメラマンを引き連れてやって来たのはその時であった。

「違いますよ。帝国のゲリラ兵です」

「本当か？　適当なこと言って民間人虐殺をごまかしてるんじゃないだろうな？」

古村崎は犠牲者の姿を撮影していたカメラマンを呼び寄せた。
「おい、死体を撮影しろ。しっかりと顔が写るようにな。それと自衛隊の隊旗なんか画面に入れるなよっ！」
古村崎の指示で、商人に扮した帝国兵達の姿を撮影していくカメラマン。
分隊長は、今、この瞬間の映像が夜の報道番組に使われるかも知れない事を意識しながら、血の付いた剣とそれに刻まれた帝国軍の紋章を説明し、捕虜としたひげ面の男に荷台の箱や荷物を開けさせた。
全ての箱を開け、壺があれば中を覗き込むという徹底ぶりである。すると開拓民からの略奪品がぞくぞくと出て来た。さらには迷彩服を真似たのか、緑や濃緑でまだらに染められた柄の衣服まで出てきた。
「ちっ……帝国兵の奴ら、これを着て掠奪（りゃくだつ）とかやってるのかよ」
隊員達は古村崎の耳や、映像に記録させるためにあえて口にした。
自衛隊の迷彩服とは似ても似つかないが、こんなものでも加害者の姿が人間の口を介して伝えられていくと「まだら緑の服を着た男達」となってしまうのだ。
動かぬ証拠を目にすると、古村崎もさすがに呻かざるを得ない。
「証拠があって、運が良かったな」と憎まれ口を叩くと、カメラに向かって「帝国兵とおぼしき男達が、村を襲った模様です。しかし、本当に殺害する必要があったのでしょうか？　捕らえて裁き

にかけると言う方法を全く考慮していない自衛隊員の振る舞いには、我々は疑問を感じざるを得ません」などと語りかけていた。

「俺達、ケーサツじゃねーもん」という、一部の隊員から放たれた呟きは、ほぼ全員の気持ちを代表したものだった。

分隊長は、先ほど気になっていた箱を開けさせた。

すると中から出てきたのは、小さな女の子だった。土や血で汚れた身体を脅えたように丸めて身を震わせていた。猫系統の種族なのか、猫目で側頭部に尖った耳を持ち、茶の体毛がある。鋭い爪が手足にあり、首には竹で出来た小さな笛を下げていた。

分隊長は、安心させようと頭を軽く撫でてやり尋ねた。

「名前は？」

「……クーシ」

両手を上げているひげ面の男に、分隊長は振り返ると大仰に尋ねた。

「さてと、どこにネスト（根城）を置いて活動しているのか。本隊はどこにいるのか、きりきり吐いて貰うからそのつもりでいろ！」

何度も言うが一般市民を楯にしながら、爆弾を炸裂させたり、武器を振り回したりするような存在の人権を認める必要はない。だが潔癖症の社会ではこのような者にすら、捕虜となる権利を与えなくてはならないのである。

このひげ面の男も、協定に基づいてフォルマル伯爵家に犯罪者として引き渡すことになる。ただし、そこで取り調べを受けることが、はたして幸せかどうかは当事者とならなければ理解できないことと言える。

カメラの接眼レンズには、ひげ面の男の恐怖に引きつった表情がアップとなって映されていた。

「何？　もう一度繰り返せ。……集落の西側で黒妖犬の群を発見しただと!?」

分隊長の声に隊員達が一斉に身構えた。

「こくようけん？」

古村崎は、護衛としてついている富田に尋ねた。

「特地乙種害獣、通称『黒妖犬』です。犬のような外見をしてますが、虎並みにでかい。それが群れて、襲って来るんだそうです。最近のゾルザル軍はそんな生き物を武器に使ってるんです」

富田は栗林と共に古村崎の両脇を固めて周囲を警戒し、戸津、東は仁科一等陸曹の指示でカメラマンや、大きなマイクをつけた竿を握る音声担当者の周囲を固めた。

「ここは危険ですから、空に上がりましょう。今、チヌークを呼びましたから拾ってもらえます」

「馬鹿言うな！　そんな危険な動物がいるなら、その姿を撮影しないでどうしろって言うんだ？」

古村崎はそう言うと西へと向かう隊員達を指差して「みんな向かって行くじゃないか!?　大丈夫ってことだろう？」と言い放った。

だが、実態は違っていた。第四〇三中隊の中隊長は、ここで姿を現した敵性怪異を叩きのめすことを選んだのだ。

特地の害獣は確かに危険だが遠隔地から操れる性質の物ではない。従って、それが放たれたあたりにこそ、敵の本隊が存在している。危険だが火中の栗を拾ってこれを叩き、ゾルザル軍のゲリラ活動の根を断とうとしているのだ。

第一小隊の小隊長も、抱えていた童女と捕虜を栗林に「預かっててくれ」と押し付けると、西へと走って行く。

「これ、どうしろって言うのよ?」

「おっぱいでも呑ませてやってくれ。それだけでかけりゃでるだろ?」

「無茶言うなっ！　出産しなきゃ出ないように出来てるんだよっ！」

童女を抱えて呆然と立ちつくす栗林。

その一方で富田は、戦線に向かおうとする古村崎の前に廻り、両手を広げて通せんぼをしていた。

「ちょっと待って、待って下さい！　駄目ですってば！」

古村崎は、富田の胸に人差し指を突きつけ邪魔するなと怒鳴る。

「報道には最大限の便宜を図るのが自衛隊の義務だろう！」

だが、古村崎の怒声など塗りつぶしてしまう空気の切り裂き音が響いた。さらに集落の西側方向からは大地を底から揺さぶるような爆発音が轟く。

支援の砲撃が始まったのだ。
上空ではコブラが銃撃しつつロケット弾を連射し、地上では隊員達が銃弾を放つ。爆音があちこちで響き、富田と古村崎は二人揃って首を竦めた。
地を這う獰猛な獣がその肢体を引き裂かれ、血飛沫を散らす。だが、撤退という言葉を知らない四足の怪異達は、数に任せて愚直に突き進んで来る。
「迫力のあるシーンを撮りたければ、空からだって撮れますよ！」
「地上からの画像と、安全な上空からの画像とじゃ、較べ物にならんよ。たかが犬相手に何を脅えてるんだ？」
「犬はヤバイんです！　速いし、姿勢は低いし、危険だ。それが群れてるなら尚更だ！」
富田は戦闘の専門家として身につけた知識から、戦闘用に訓練された軍用犬がどれほど恐ろしいかを語った。そして黒妖犬はそれを超えると告げた。
油断をすれば命にかかわる。これから始まるであろう戦いでは、前後左右に敵を迎えることとなる。「後方」などという安全地帯はなく、敵に襲われない場所など見つけることも難しいのだ。
「それに、この子をどうするんです？　俺達は護衛だからあんた達についていかないといけない。このままここにいれば、この子を戦闘に巻き込むことになりますよ」
富田は、栗林の抱えているクーシと名乗った少女をどうするのかと古村崎に迫り、古村崎はこの時、初めて逡巡する姿を見せた。

猛烈なダウンウォッシュが吹いて砂埃が巻き上がる。
富田が呼んだチヌークが着陸した。富田達を迎え入れるように後部ハッチを開く。
「あ、来ました！　見えました」
だが、カメラマンは接眼レンズを目に当てながら叫んだ。
高性能のハイビジョンカメラを常に覗き込んでいるカメラマンは、いち早く敵の実態を把握していた。
「お、でっかいオーガーもいますよ。マンモスみたいなのも混ざっている。まるで特地野獣の博覧会だ。まっすぐ、こっちに向かってくる！」
夥(おびただ)しい数の黒妖犬の中に、分厚い鎧に身を固めたジャイアントオーガーの姿までもが認められたのだ。
電柱と見紛うばかりの巨大な棍棒を持っている。迂闊に近づけば、その強烈な腕力で叩きのめされてしまうだろう。
それが大きな楯を連ねて壁を作り、重装歩兵さながら銃弾をはじきつつ進んで来るのだから戦車以上の迫力がある。
自衛隊の指揮官は陣地を構えているわけでもないため、これを真正面から受け止めるようなことはせず、左右に道を開き両脇から叩き伏せることにした。隊員達は、その為の指示を受けて移動を開始する。

「急げ！　急げ！　次の砲撃が始まる前には離陸しなきゃならん！」
捕虜を受け取った航空科員が銃を振りながら「早く乗れ」と急かしている。
「なら、その子だけヘリに乗せればいい。俺たちは地上で取材を続けるぞ」
古村崎の言葉に不安そうな眼差しを向けるカメラマン。戦闘、移動、戦闘、移動、その繰り返しに重いカメラを抱えたまま、はたして付いていくことが出来るのかと心配になったのだ。
「古村崎さん、不味くないですか？　ヤバイですよ」
翻意を期待してかカメラマンが言った。
「馬鹿野郎。お前らはそんなんだからいつまでたってもペーペーなんだよ！」
古村崎はそう怒鳴りつけると、カメラマンの襟首を掴み無理矢理に引きずって前に進んでいった。
自衛官達が立ち退いて既に無人となった、敵の真正面に向かって行く。
富田は、栗林を振り返ると童女と一緒にチヌークに乗るように告げた。
「みんなはどうするの？」
「俺達は彼奴らを連れ戻してくる。ヘリを上空で待たせて置いてくれ！　出来れば援護をしてくれ！」
「あんな馬鹿野郎達、見捨てちゃえばいいじゃない！」
栗林が怒鳴って返した。
「そう言うわけにはいかないだろう？　伊丹隊長が言ってたろ、俺達は国民に愛される自衛隊だ

よって」
富田はニッと片目をつぶると、栗林の抱えた童女の頭を軽く撫でた。
栗林を載せた巨大なヘリコプターは地上を離れていく。見上げる富田の表情は頼もしげに微笑んでいた。
「ヤバイ。ぐっと来た」
栗林はそう呟くと、頬を赤く染めて、戦線へと向かっていく富田の背中を見送るのだった。

「これがいい。お誂え向きに壁が隙間だらけだから、立て籠もっても外の様子が見える」
古村崎は集落の外れにある小屋の戸を開けて、中の様子を覗き込んだ。
その小屋は、急造の粗い作業を感じさせながらも、それなりに耐久性を確保するためか柱の数が多かった。
床には住人らしき翼人女性が陵辱された姿で倒れている。こんな開拓民の中にまじっているのが不思議なほどの美人で、それが襲撃者の獣欲を誘ってしまったのかも知れない。
その側では彼女を守ろうとしたのか、青年が腹部に剣を突き立てた姿のままで倒れていた。
だが古村崎はその二人の素性や人生を一顧にすることもなく叫んだ。
「ここだ福島。ここから撮影だ！」とカメラマンに叫ぶ。
「いや、駄目ですって。古村崎さん、まずいっすよ！　野生動物は臭いに敏感でしょ、見つかっち

まいますよ」

「大丈夫だ。まわりにこんなに死骸があるんだ。臭いに紛れてわからんよ！」

興奮した様子の古村崎。理性のたがが外れたようなギラギラした瞳の輝きに、カメラマンと音声担当は思わず後ずさった。だが、逃げようにも、もう時間切れだと宣言するかのようにチヌークが頭上を通過していく。

さらに、すぐそこまで黒妖犬を主力とする怪異の群れが迫っていた。最早、古村崎の言うとおり、この半壊した納屋に隠れて敵をやり過ごすしかないのだ。

カメラマンらは、追いかけてきた仁科ら自衛官と共に、小屋に飛び込むと扉を閉めた。

その直後、巨大な犬が戸にぶつかって派手な音を立てる。野獣の荒い息と、戸をひっかく音が恐怖感を、自分達がいかに危険な状態に陥ったかを実感させた。

「何をしてる、とっとと戸をふさげ！」

古村崎の指示で戸の前にバリケードを積む作業が始まる。

「バリケードは、大きな家具を下にするんだ！　寝台は逆さまにして接地面を広くしろ。柱を利用してつっかえを噛ませろ！」

「こ、古村崎さん、随分と詳しいんですね」

音声のマイクを置いた、取材クルーの松崎（まつざき）が作業をしながら尋ねた。

「全共闘内ゲバ世代を舐めるなよ……俺はな、チェーンバリ越しに、鉄パイプでの叩き合いをやっ

た実戦経験者なんだよっ！　その材木はここだっ、ここに噛ませろっ！」
家具を片っ端から掻き集めて、戸の前に積みあげてバリケードにしていく。
頭上を旋回するチヌークは地上に向けて盛んに銃撃を加えていた。栗林が怪異の数をわずかでも減らそうとしているのだろう。
だが、全身に分厚い装甲をまとったジャイアントオーガーにはそれが通じない。左右から飛来する銃弾を跳ね返しながら、柱にも似た棍棒をやたらめったらと振りまわし、無人の家屋や納屋を蹂躙するように破壊していった。
上空を舞うヘリコプターを落とそうとしているのか、棍棒をぶん投げる個体もいる。
流石に命中しなかったが、当たったら最後、一撃で撃墜されかねない迫力で、見ているだけでも冷や汗が噴き出してくる。
そんな光景を撮影しながら、古村崎やカメラマンの福島が歓喜の声を上げた。
「いいぞ、いいぞ！　すっげぇ迫力だ！　ピューリッツァー賞間違いなしだぜ！」
「こ、こいつら、まともじゃねぇ」
座り込んだ富田は古村崎の姿を見て呻くように呟いた。
戦場を駆け回る時の自分達も、いささかまともとは言えないが、ジャーナリストという存在はそれ以上だと思ったのだ。
実際、目の前で人が殺されようとも、大災害によって目の前で人々が危険に呑まれようとしてい

ても、自由自在に飛び回れるはずのヘリコプターに乗りながら、警告もせず、助けようともせず、報道と称してただひたすら傍観し、撮影してメシの種にする行為は、相当な冷血漢でなければ出来ないだろう。

ジャーナリストとは、トラックが危険に飲み込まれる瞬間を撮るために、ヘリコプターのパイロットに高度を下ろさせ、危険に向かって突き進んでいるトラックに向けて「危ない！」と警告することすらしない存在なのである。

ふと、仁科達が「お、おいっ、富田」と肩をつついて来る。

どうしました？　と振り返ると、仁科一等陸曹は傍らに倒れている鳥人（ハーピィ）女性を指差して「これを見ろ」と言った。

「こ、これ、テュワルさんじゃないんですか？」

東陸士長から聞き覚えのある名を聞いて、富田は「えっ？」と近づいて覗き込むようにして女性の顔を確かめた。

それは地揺れの発生を予言し、開拓民として堅気の生活を始めるのだと恋人と共に帝都の悪所を去って行った鳥人女性のテュワルであった。

富田は、まだ温もりの冷めてない彼女の頬を軽く叩いてみた。

死んでいるのか。まだ生きているのか？

コホッ！

テュワルがわずかながら反応を示した。
「まだ、生きてる！」
「おおっ！　生きてたか⁉」
死んでしまっていると思っただけに、仁科らの表情は明るくなった。だが、このままにしておけば、か細く小さくなった彼女の命はいずれ消えてしまうだろう。可及的速やかに医者に見せる必要があった。
「このままほっとけば、死んじゃうんじゃないか？」
「仁科さん、時間なんかないですよ」
戸津と東の言葉に仁科は頷いた。
「よし、富田、チヌークを呼べ。ここを離脱するぞ」
だが、仁科一等陸曹の決断に古村崎が抗議の声を上げた。
「馬鹿言うな。今さら外に出ようって言うのかよ⁉」
外に出れば間違いなく、外をうろついている怪異に見つかってしまう。
あの膨大な数の野獣を、ここにいる四名ばかりの自衛官では防げないことは素人にもはっきりと理解できるのだ。
「じゃあ、この女性をほっとけって言うのかよ⁉　あんたら日頃から人命がどうのって俺達のことを非難してるくせに随分と薄情じゃないか？」

だが、古村崎は自分達を巻き込むなと言った。
「優先順位って物を考えろって言ってるんだ。特地の死にかけた女を救うのも確かに大事だが、それってここにいる俺達日本国民を危険に曝してまでしなきゃいけないことかって言ってるんだ。ったく、軍隊って奴はホントに国民を守らないよな」
仁科と古村崎がにらみ合う。
だが富田が割って入った。
「大丈夫ですよ。外に出なくったって、ヘリに収容することは可能です」
「どうやって？」
「あれに穴をあければ良いんですよ。ロープで吊り上げます」
富田はそう言って天井を指差した。そして古村崎に蔑むような目を向けた。
「俺達は昔の帝国陸軍じゃねぇから。現代の陸上自衛隊なんだってところを見せてやるぜ」

半壊している建物の屋根を抜くのはさほど難しいことではなかった。梁に銃弾を浴びせてへし折り、柱を昇って屋根板を蹴り割って、剥がしていけば良いだけだった。
だが、作りの粗い小屋の梁を折ったことで、それまで堅牢さを感じさせていた壁が突如としてぐらぐらと揺れ始めた。どうやらこの建物は梁によって束ねられることで安定していたようである。それを失ったため、安物の舞台演劇用大道具のごとく建物自体がぐらつき始めたのだ。

しかも、負傷者収容のためにチヌークが上空に滞空したことが、怪異達の注意を引き寄せたようだ。怪異が四方八方からこの小屋めがけて押し寄せて来た。

怪異達の群れ目掛けて、迫撃砲（百二十㎜）の重榴弾が降り注ぐ。

土砂が吹き上がり、特地の様々な怪異達は全身を引き裂かれて次々と埋葬されていった。

滞空するコブラがロケット弾を叩き込んで、重装オーガーをなぎ倒していく。

凄まじい爆音と、頼りにならなくなった壁を前に、古村崎は耳を押さえて怒鳴った。

「畜生っ！　全然守れてないじゃないか！」

建物にあいた隙間から、黒妖犬がその鼻先を突っ込んで来た。驚いたカメラマンが仰け反って悲鳴を上げながらしりもちを付いた。

「撃て！　撃て！　撃て！」

富田が、着剣した小銃を突き出して、刺突するとともに引き金を引く。すると反動で銃剣が抜け、敵には確実にダメージを与えることが出来るのだ。

あちこちに出来た隙間に鼻先を突っ込んで来る怪異を寄せ付けまいと、富田達は建物の外に向けて射撃を開始した。

「次は、あんた達だ」

仁科の声に顔を上げる古村崎。見上げるとテュワルを背後から抱きかかえた戸津が、チヌークの中へと引き込まれていった。

「お前行け！」
古村崎は音声担当の松崎を次の脱出者として指名した。すると仁科が太いロープを、松崎の脇の下に通すようにかける。
「その次は福島、お前だ」
「こ、古村崎さんは？」
「俺は民間人としては最後に決まってるだろう。何しろ、現場の責任者なんだからな。上から俺が昇っていくところをちゃんと撮れよ」
途端、トラックが突っ込んできたかのような衝撃が小屋を揺さぶった。
埃と木材の切れ端が頭上から降り注いだ。見ればバリバリと壁板が割れて、その隙間の向こうに犀にも似た巨大な怪異の姿が見えた。その太く鋭い角で、壁を突き破ろうとしているのだ。
富田は流れるような動作で弾倉を交換し、銃撃を加える。
その犀に似た生き物は、全身に銃弾を浴びるとやがて座り込むようにして斃れた。だが、それによって開いた壁の穴が突破口となって、怪異達が一気になだれ込んで来る。その中には最近では見ることの少なくなったトロルや、コボルトなどの姿もあった。
東陸士長が引き金を引きっぱなしにして瞬く間に弾を撃ち尽くす。
慌てて空となった弾倉を交換しようとするが、手間取り、その隙にゴブリンが斧を振りかざして迫った。

拳銃を抜いた富田が東の肩越しにゴブリンの腹部に発砲。そのまま前蹴りを繰り出して、蹴倒すと、素早く小銃を構えなおす。開口部の前後に積み上がりつつある屍(しかばね)の山を、乗り越えようとして来るトロルめがけて連射を加えた。

その頃には東も弾倉の交換を終えて、射撃を再開。富田と共に互いに弾倉の交換する隙を埋めるような効果的な連携がとれるようになった。

幸いなことに敵は頭が良くない。

開口部が一つ出来ると、そこから押し入ろうと拘(こだわ)る。だから、その一カ所を守りさえすれば敵の侵入を防ぐことが出来たのである。

「よし、次は俺達だ」

振り返れば、古村崎の脚が天井にあいた穴から消えていく。

「エクストラクションロープでの離脱！　一荷吊(いっかづ)りでいくぞ！」

仁科はそう宣言して、戦闘で手が放せない東と富田の身体にスリングロープを装着していった。

三人ともまとめて吊り上げて、この場から一気に離脱しようというのだ。

「よし、やってくれ！」

無線に怒鳴りつける仁科の声で、チヌークは毎分六百メートルもの強烈な速度で高度を上げた。

三人とも、ものすごい勢いで小屋の上空まで吊り上げられる。

下に向けた銃口から弾倉に残っている限りの弾丸をばらまき、さらに「置き土産だ」とばかりに

持てる限りの手榴弾を落とした。
その爆発の衝撃によって、眼下の小屋が倒壊して、多くの怪異達がその下敷きとなった。
高度を上げていく富田達の目前をファントムが通過する。ナパーム弾を投下して、戦場は一瞬にして劫火に包まれた。
怪異の焼かれる臭いと、悲鳴が、あたりに満ちる。
見れば第四〇三中隊が怪異の現れた方角に向けて突き進んでいく。上空からは、その向こう側に帝国軍の隊旗を掲げる一隊を認めることが出来た。

＊　＊

帝国軍の将兵達は作戦の失敗を悟ると、逃走を図った。
開拓村を襲い、出てきた日本の軍に、商人や村民の姿を借りて襲いかかり、混乱している隙に怪異の大集団を嗾けるというのがここしばらくの彼らの手口であった。
だが効果があったのは最初の数回だけ。敵は瞬く間に対応力を上げて、今回に至っては本隊を見つけられて逆に追い詰められそうになっている。
ゲリラ戦の総指揮を担当するヘルムは、また別の方法を考えなくてはならないと思い悩みながら馬を駆っていた。

「森の奥に逃げよ！　あちこちに散るとかえって見つかりやすくなるぞ！」

このような状況になると、兵士達は本隊から外れて逃げ散りたがる。敵は大きな集団を狙って集中するから、そこから離れれば逃げ延びることが出来るかも知れないと思ってしまうのだ。だが、分散してしまっては、すぐに次の作戦にかかることが出来なくなる。

徒歩で、馬の足下をちょろちょろと走る怪異使い達を邪魔に感じるが、彼らは今やゾルザル派軍にとってなくてはならない存在なのだ。

「仕方あるまい」

ヘルム将軍は馬の足を止めると懐から笛を取り出して口に銜えた。

「将軍、折角埋伏した毒をここで使ってしまうのですか？」

副将の一人が兵達を散らさないように指図しながら、問いかけてきた。

音のしない笛を吹き鳴らしていたヘルムは、一旦笛から口を離すと「我々がこの先生きのこるためにな。少しでも敵の足止めになることはやっておきたいのだ」

ヘルムはそういうと、再び音のでない笛を吹き鳴らした。

＊　＊

チヌーク機内に収容された富田は、床に這い蹲って喘ぐような荒い息をしながらも、古村崎に勝

ち誇ったように問いかけた。
「へっ……どうだ？　……見たかよ!?」
すると古村崎は忌々しげに言い返した。
「ああ、わかった。わかったよ。軍隊は国民を守らない。そいつは俺の信念だから譲るつもりはない。だが、お前らは軍隊じゃねぇ。確かに自衛隊だ……って、何を撮ってるんだよ。俺を撮るなよ」
古村崎は傍らで自分にレンズを向けるカメラマン福島に苦笑しつつ抗議した。
富田の言い分を認める自分の姿を撮られるのは格好が悪いと思ったのだろう、古村崎はレンズを伏せるように軽く叩いた。
だが、カメラマン福島はそのままレンズを下に向けてチヌークの床を撮影した。
「おい！　どうした!?」
カメラを覗き込んだ姿で硬直したまま、口から鮮血を溢れさせ、そのまま俯せに倒れ込む。
古村崎は床に赤黒い地が広がるのを見て叫んだ。
「何があった!?」
カメラマン福島の背後には、いつの間にか大型怪異の姿があった。
その怪異は福島の背中に、右手から伸びる太い爪を突き刺していた。しかもその怪異は、メリメリと音を立てながらさらなる巨大化をしようとしていたのだ。
四肢は隆々たる筋肉に包まれ、爪は禍々しいまでにさらに伸びて鋭くなっていく。

毛皮は茶と栗色の混在した土色で、狼とも猫科の肉食獣ともつかない獰猛な顔つきをしている。ただ、雌であることを示す印だけが胸部にあった。妙に人間っぽいところもあるから、もしかするとヒト種の血も混ざっているのだろう。

つい先ほどまで童女であったクーシは、ついにはチヌークの天井に頭がつかえるため、背中を丸め首を引っ込めなければならないほどの大きさとなった。

もとよりチヌークは天井が低いため、大型の怪異は四つん這いに近い姿となる。そのため知性のかけらも感じられない獰猛さばかりが際立っていた。

仁科ら自衛官達は、クーシと名乗った亜人少女が怪異化していく様に唖然として身動きする事も出来ない。

この位置からでは銃を撃つことすら出来ないのだ。

怪異は彼らからすると機体の前方、つまりコクピットの方角にあり、外れた弾がコクピットに流れればパイロットや操縦系統を傷つけてしまう可能性が高いからだ。

怪異化したクーシは、手当たり次第にその剛腕を振り回した。

その凄まじい腕力で、ヘチマのようなマイクをつけた竿を抱えていた音声担当者の松崎が吹き飛ばされ、まだ閉じられていない機体後部から飛び出していってしまう。

「あ、ひぃぃぃ！」

それを見て腰が抜けたのか、古村崎は立ち上がりかけた姿勢から尻餅をついた。

だがそれが幸いし、頭一個分上を怪異の剛腕が空を切った。どうやら怪異は、手近な者から順に獲物にするつもりなのか、次は古村崎を狙いと定めたようである。

反対側の腕が振りかざされ、風を切る音とともにその爪が古村崎を抉った。

と思われた瞬間、重い金属のぶつかり合うような音と共に、古村崎の身体が機体の後部へと押しのけられる。

逆手にナイフを構えた栗林が怪異の爪を弾いたのだ。

「く、栗林！」

富田が叫ぶ中、栗林は「古村崎さんとテュワルを守って！」と答えた。

富田達は銃を拾うとテュワルを、仁科が古村崎の襟首を掴んで機体後部に引きずって下げた。だが下がると言っても開口部まで。そこから向こうは外だ。空だ。墜ちたら死ぬ。

仁科は、無線で機長に着陸させろと叫いた。

抉られた傷の残るヘルメットを棄て、野獣と正対する栗林。ヘルメットでは防ぎきれなかったのか、額から血が流れ、頬と顎を伝って戦闘靴の爪先を汚した。

額に流れる血を袖でぬぐう。栗林はナイフを構えると油断無くクーシの隙を窺った。

「見た目は可愛い子供だったのに……正体はこんな怪異だったなんてね。よくもまあ、騙してくれたじゃない？」

怪異は、自分に立ち向かって来る小柄なヒト種の雌を訝しそうに睨んだ。

体格差は歴然。戦わずともその結果は火を見るよりも明らかなのに、逃げようともせず挑んで来る小動物の存在が理解できないのだろう。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

栗林は、気合いの声と共に突進し、ナイフをひらめかせた。

野獣の爪とぶつかり合って、甲高い音を立てる。

再度ナイフを振る。甲高い音が鳴り響き、鋼の火花が散った。

牙を剥いて、威嚇し、力ずくで腕を振る怪異。

栗林は、床を転がって躰を回旋させながらその爪を紙一重、衣服一枚、皮膚一枚で躱し、勢いを逸らし、懐に入り込んでは肉弾による打撃とナイフによる刺突、斬撃を繰り返した。

交錯するたびに、互いの四肢は傷ついて、そこから鮮血を吹き出す。

栗林の腕や腿は、瞬く間に傷を負って満身創痍の状態となった。

対する怪異もその毛皮に斬創、刺創を負って、体毛をどす黒い血の色で染めていった。

動くのに邪魔だとばかりに重いボディアーマーを脱ぎ捨てた栗林は、俊敏な動きで、怪異を翻弄する。数回のフェイントを放ち、一瞬の隙を衝いて、必殺の一撃を放つべく一気に距離を詰めた。

だが、怪異も剛腕を振るった。栗林の身体を振り払うように荷室の壁へと叩きつける。

「げほっ！」

受け身すらとれない勢いで壁に叩きつけられた栗林は、滑るようにしてずりずりと床に落ちた。

怪異もその左脇に斬創を受けて、苦痛を堪えられないとばかりに片膝をついて呻く。そして、よくもやったな、この野郎！　という勢いで転がった栗林に掴みかかった。

だが、東、戸津、富田らが銃剣を連ねて、突撃を敢行。

彼らの突撃は、怪異を傷つけることは出来なかったが、栗林を守ることに成功した。

雄三匹の乱入に憤ったクーシは、狭い機内で耳を引き裂くようなうなり声をあげ、両腕をやたらめたらに振り回した。その鋭い爪がチヌークの窓を突き破り、暴風のように機内の内装を破壊していった。

くらくらとする頭を二～三回振った栗林は、床運動の選手のように両手をつき素早く倒立すると、野獣の顎を蹴り上げた。低い天井に頭をうち、下から顎を蹴られダメージを負う野獣。

栗林は畳みかけるように、打撃の連打を放った。たまらず守りのために腕を縮めた野獣の肘先にナイフの切っ先を突き立てていた。

「尺骨神経溝。通称肘電気……人間ならそこをぶった切れば、神経が切断され、手は全く使い物にならなくなるわ。あんたの場合はどうかしら？」

完全に力を抜いてるつもりでも筋肉は常に張力を発揮している。それを筋トーヌスという。

腕が自由に動くのは、伸筋と屈筋の発する張力のバランスがとれているからだ。もし一方の、つまり伸筋の神経が切断されたら、曲げる筋肉だけが働くこととなり、動かすこともままならなくなる。神経が麻痺するなどの障害を負った方が、腕を縮める独特な姿勢をとっているのはそのためである。

右手を鷲の手のような形状で麻痺させられてしまった野獣は残された左腕一本で、栗林に襲いかかった。だが、片腕だけではやはり隙が大きくなる。
栗林はバックステップで躱し、野獣の爪をかいくぐると怒鳴った。
「機長！　合図で、機体を後進させて！」
「……どう言うことだ!?」
「四の五の言わずに、機体を後ろに傾けてくれりゃあいいの！　こいつを放り出すわっ！」
その言葉を聞いた仁科はテュワルを抱き寄せると、古村崎や、富田達に機体に掴まって放り出されないように指示した。
栗林は、両腕を床につくと床運動の選手のように、両足を回旋させてクーシが床についている左腕を払った。
左腕に体重を預けていたクーシは、上体を床に打ちつけて顔をしかめる。すぐさま躰を起こすと左腕で栗林を捕まえようと腕を伸ばした。
その瞬間を栗林は狙っていた。隙となった野獣の懐に飛び込むと「今だ！」の合図とともにチヌークの後部に向けて一本背負いを放った。
だがクーシは体重を栗林に預けると上から押しつぶしにかかる。
背負い投げに失敗した栗林は、怪異の巨体にのし掛かられてしまった。
急傾斜のついた床を滑り落ちていくクーシは、機体から放り出されまいと左腕をのばして機体に

捕まる。そして懐の栗林を頭から食いちぎろうと牙を立てて迫った。
「いくら強くても女同士は嫌っ！」
クーシの顔を両手で必死に抑える栗林。
「くぅぅぅ。キスがしたけりゃ男を探せってのっ！」
だが凄まじい怪力に栗林は抗いきれなくなってくる。ぬらぬらと唾液のしたたる舌と、太い牙の生えた顎を避けるために顔を「嫌だぁああ」とそらすしかなかった。
「栗林！」
機体は後方にむけて傾斜していて、古村崎やテュワルを落ちないように支えるだけで手一杯の富田達は黙って見ていることしか出来なかった。
その牙が栗林の首についに触れようとした瞬間、栗林は獣共通の急所とも言える鼻先に頭突きをくらわした。
「しつこいっ！」
鼻先の激痛に思わず顔面をそらすクーシ。上体が浮き上がった瞬間、栗林はクーシの巨体から抜け出すと素早くその首に両脚を絡めて背後から締め上げにかかった。
「落ちろ！」
攻守の逆転に、栗林を払いのけようとするクーシ。躰を急激に起こすと天井に向けて頭を振り上げた。

天井に栗林の躰ごとクーシの頭部が激しくぶつかる。凄まじい音とともにクーシの巨体が傾斜を滑りながら開口したままの後部ハッチへと向かった。

気を失った栗林までもが機体の外へと転がり落ちていく。

慌てて栗林に飛びつく富田。富田の脚を掴もうと手を伸ばす東と戸津。あわやのところで栗林の弾帯に富田の指先がかかって捕まえることに成功した。

機体を襲った衝撃におどろいたのか、機長はすぐさま姿勢を水平に戻す。

怪異はハッチの端に爪をかけてまだぶら下がっていた。それどころか左腕一本でよじ登ってこようとしている。

それを見た戸津達は怪異を蹴落とそうと、戦闘靴の踵で蹴りつけた。怪異は突き落とされまいと懸命に抵抗したが、九㎜拳銃を抜いた富田が銃口を突きつけた。

「あばよ」

連射された銃弾がクーシの顔面を割れたザクロのように変える。それでもしぶとい野獣は叫び声を上げ、手足を振り回しながら地面に向かって落ちていった。

意識を取り戻した栗林は、皆から、「お前、すげぇ女だな」と感嘆の声でたたえられた。

「ここどこ？」

頭を打ったせいか、記憶がはっきりとしない。視界がかすんで頭がふらふらとしていた。

「大丈夫か？　俺たちがわかるか？　わたしは誰？　とか言うなよ」

富田達があまりにも強く肩を叩くものだから、栗林は激痛に呻いた。おかげで記憶が素早く蘇って自分の置かれている状況を思い出した。
「痛いっての！　あっちこっち怪我してるんだから乱暴にしないでよ」
「悪い悪い。でも、やっぱすげぇよなお前」
富田の言葉に栗林は笑って答えた。
「惚れた？　良かったら私とつきあってみる？」
冗談めかした言い方をしたのは、富田が今つきあっている女が居ることを知っていたからだ。振られても傷つかないように、そして万が一の可能性を探るように試みてみたに過ぎない。だが、答えは当然と言えば当然だが、その時の栗林が予想していなかった形で返ってきた。
「ああ、そりゃだめだ。だって俺、この戦争が終わったら結婚するから」
場が沈黙に包まれた。
「へっ……」
ざわと顔を青ざめさせる仁科達。栗林も、自分の軽率な言動がどのような事態を引き起こしたのかを知って、慄然とした。
「ちょ、おまっ！」
「そ、それって」
「死亡フラグ！」

そう。戦争中に「この戦争が終わったら、結婚するんだ」とか「今度子供が生まれるんだ」の類の事を口にした者はみな死ぬというのが、戦争を舞台にする物語の鉄則である。他にも「ここは俺に任せて先に行け」というセリフも全滅を予兆するものとして知られている。

伊丹はこれらを禁句に指定し、中華人民共和国並みの言論統制を第三偵察隊の面々に施していた。グッても、「法令に基づいて、削除されました」と表示されてしまうぐらいである。にもかかわらず、富田はこのセリフをついに口にしてしまったのである。

自分が言わせた形になる栗林が、狼狽えるのは当然と言えた。

「ど、どうしよう!?」

怪異を前にした時よりも動転する栗林。それを見て富田は言った。

「いや、気にするなって。大丈夫だから……迷信迷信」

「駄目だよ。早く隊長のところにいかないと」

栗林は富田の襟首を掴んで叫んだ。

「た、隊長って伊丹隊長のこと？　何で？　どうして!?」

「隊長なら、きっと何とかしてくれるからよ！」

栗林は言い放った。あのふざけた人生を送っている男なら、死亡フラグすらセセラ嗤いしながらへし折ることが出来るはずなのだ。

そんな根拠のない思いつきを信じてしまうほどに、富田のたてた死亡フラグは栗林を追い詰める

こととなったのである。

＊　＊

フォルマル伯爵家の城館は、伯爵家開闢以来の賑わいで満たされていた。

「ゾルザルに囚われていた皇帝と皇女が、自衛隊の助力を得て帝都を脱出し、このイタリカの地で正統政府の設立を宣言した」ことによって正統政府の仮皇城となり、元老院議員とその家族たちが、これを慕って大量に集まったからである。

帝国正統政府が最初に手がけたのは、帝都奪還を目指すための軍を編制することであった。

だが、講和派貴族がそれぞれの領地で養っている私兵だけでは、ゾルザル派と対抗するのに充分な数を揃えることは出来なかった。そのため、諸外国、諸侯に支援を求めると同時に、これまで軽んじて来たヒト種以外の亜人部族に対しても、その地位向上を約束して兵の供出を求めたのである。

皇帝の仮皇城にして、軍事行動の策源地ともなったイタリカの城市は、城外に広大な宿営地がつくられ、街角の居酒屋や食堂は、様々な種族や民族の兵士で溢れかえるようになった。ただ、兵士の扱いはこれで良いとしても、これを指揮する高級将校は、相応の礼遇でもてなさなければならない。そのため伯爵家のメイド達はてんてこ舞いの忙しさで、息を付く暇もなくなってしまった。

こうなってしまうとフォルマル伯爵家では少数派でしかないヒト種のメイドだけでは接待業務の

全てを賄うことなど不可能である。そのため、帝都ならばこうした表舞台の席に姿を現すことのない亜人……猫耳眼鏡メイドのペルシアや、ヴォーリアバニーのマミーナ、メデュサ種のアウレア達が、接客に給仕に、そして各種の任務にと総動員されることとなった。

触手にも似た緋色の蛇髪をウニョウニョとうごめかせたメデュサ種のアウレアが、「メイド長、タイヘン！　タイヘン！」と厨房へ足早に向かっていた。

厨房には、料理人の手際が悪いと叱りとばし、接客メイドの服装の乱れを厳しく叱咤しながら、全体指揮をしているメイド長の姿がある。

「メイドチョウ。ヘイカカラ、オ呼ビ出シ！」

どうやら、緋色の触手髪の先に干からびた男を絡めていることは「タイヘン」なことでは無いらしい。

その男が若かったのか、それとも年寄りだったのか、既にミイラ化してしまっているため判別はできないが、着ている服から見ると、どうにか性別は推測できる。その顔をよく見ると、恐怖でも苦悶でもなく、大変幸せそうな表情で果てていた。

メイド長は、それを見て眉根を寄せる。

「アウレア。また、ネズミが入り込んでいたのですね？」

捕まえるのは良いですが、厨房が穢れます。駄目です、そんなものをここに持ってきてはとお小言を呟く。だがアウレアは、意にも介さずに嬉しそうに言った。

「ネズミ見ツケル。捕マエテ精気吸イ取ル。アウレア、オナカイッパイデ嬉シイ！」
どれほどの精気を吸い集めたのか、アウレアは肌をつやつやテカテカとさせていた。朱色の目を細めると、満面の笑みを浮かべていた。
「適当にしておきなさい。美食に慣れてしまうと、後で我慢しなければならなくなった時が辛いですよ」
「ワカタ。スコシ我慢スル」
しょぼーんとしている心情を表しているのか、アウレアの髪は一斉にしなだれた。ミイラ化した男も床に放り出されて、メイド達によって、ばっちいものであるかのように片づけられていった。
「で、どのような素性の者でしたか？」
虫も殺さないような愛らしい風貌をしているアウレアだが、その実彼女は吸血鬼ならぬ吸『精』鬼である。
その捕食方法も、強烈な腕力と鋭い牙で獲物をねじ伏せて、その肉を喰い千切る肉食動物的なものではなく、その人形のような美貌と愛らしさで獲物を引き寄せ、蛇のような触手髪で絡め取り精気を吸い取るという食虫植物的なものであった。
鋭い牙もなく鋭い爪も持たない彼女は、捕らえた獲物を逃さないようにするため、快楽を与える。被害者はその触手に絡め取られたが最後、筆舌に尽くしがたい地獄の快楽を味わい、抵抗しようという気力を失ってしまう。そして気がつけば最後の一滴まで精魂を吸い取られ、冥界の住人とな

るのである。さらに、被害者の記憶もまたアウレアに覗き込まれる。脳髄の内にある限り、彼女に対して隠しておけるものは何一つ存在しないのだ。とは言え、アウレアが全ての情報を蓄積できるわけではないから、彼女が記憶するのは自分が関心を持ったことだけである。

「コノ男。ボウロ、トイウ者ノ配下ダッタ。食ベモノニドク混ゼヨウトシテタ」

アウレアの報告にメイド長は「やはり……」と嘆息した。

「ボウロという男を捕らえない限り、何も分からないということですね」

アウレアはコクリと頷いた。

メイド長は歎息すると気を取り直したように問い直した。

「ところで、貴女の用件は陛下からのお呼び出しでしたね。すぐに参りますから、モーム、アウレアの二人はついてらっしゃい。急ぎますよ」

年老いたメイド長は、そう言うとスカートをむんずとつかみあげた。

そして事もあろうか腹心のモームとアウレアを引きつれ、年齢に似つかわしくない勢いで廊下を爆走し始めたのである。

その進路上を歩いていたヴォーリアバニーのマミーナは、素早く壁に張り付いて道をあけた。

汚れた皿を厨房に運ぶ途上の猫耳眼鏡メイドのペルシアは、突き飛ばされそうになった瞬間、くるりとスカートを翻(ひるがえ)しながらアクセルターンを決め、さらにトレイに積み上げた皿をなんとか保持して落とさないという曲芸を披露して、周囲の同僚達から拍手喝采を得ていた。

階段を怒濤にも似た勢いで最上階まで駆け上がった老メイド長は、大きな扉の前でいったん立ち止まり、深呼吸して呼吸を整えた。素早く汗を拭いて、服装に乱れがないかを点検する。

モームとアウレアも互いに襟の乱れ、スカートの裾を直し合った。

扉の両脇には、ピニャの騎士団の女性士官達が直立不動の姿で警衛勤務についている。

その同情するような視線を浴びながらも、取り澄ました表情を取り戻したメイド長は、根性の力なのかはたまた特殊な能力なのか、流れる汗すら蛇口を締めるように止めてみせ、「陛下のお召しで参りました」と告げて扉を開けさせた。

見ると中には、大きな寝台に横たわる病臥中のモルト皇帝の姿があった。その傍らでは皇帝を補佐する内務相のマルクス伯爵と、そして日本からの使節である菅原(すがわら)の姿もある。

「お召しにより参上いたしました」

皇帝は傅(かしず)くメイド長に視線を向けると、傍らの菅原を紹介した。

「こちらはニホンからおいでになった外交官のスガワラ殿だ。この地にしばらく滞在されるので、宿泊の手配を頼みたい。無理は承知しているが、何とかしてもらえんだろうか？」

皇帝の言葉ではあるが、メイド長は一瞬だけ表情を引きつらせた。

フォルマル伯爵家の館は、すでに限界を超えて賓客達を受け容れている。帝国の元老院議員や貴族達が滞在する宿舎が足りないため、城市街の豪商、豪農の屋敷、見栄えの良い民家などがあれば片っ端から借り上げている状態なのだ。

城壁の外ですら、集まりつつある貴族軍の将兵が宿営地を築いて、ちょっとした街のような様相を呈している。

そんな状態なのに、一人とはいえ部屋をあてがえと言い出されると困ってしまうのである。

だから菅原が「陛下、お気遣い無く。市内での宿泊場所は確保しております」と言い出した瞬間、メイド長は安堵のため息を漏らすという、いささか礼を失した行為におよんでしまった。

「ほぅ、どちらに滞在なされるのですか？」

だが、メイド長の失態は誰にも注目されなかった。マルクス伯爵が意地悪そうに問う言葉の方が皆の注意をひいたからである。外国人である菅原が、このイタリカに宿舎を確保できる理由を、あからさまなまでに勘ぐって見せているのだ。要するに嫌味である。

「我らも何かと不自由を味わっておりましてな、そういった余裕がある屋敷などがあれば、あやかりたいぐらいですぞ」

「実は、知り合いの商店に頼んで倉庫の一角を借りました。この際ですから雨風を凌げるような寝場所さえあれば、多少のことはどうでも良いと思いまして。手狭ですが、学生時代の下宿に比べればマシといったところです」

それを聞いた皇帝は安堵したように頷いた。

「大変結構だ。ニホンからの使節を粗略に扱っては帝国の威信に関わると思って、メイド長に無理を申したが、そういうことならば心配する必要はあるまい。命令は取り消すことにいたそう」

皇帝はそう言うと、メイド長に退室を許可した。
「しかし、ニホン人もなかなか油断がなりませんな。いつの間にか我が帝国の商人との間に、倉庫を貸し借りできるような深い結びつきを築いてらっしゃる。警戒を強めませんと」
「これ、マルクス伯。意地の悪いことを言うでない」
「しかし、何時の間にやらニホン人に親しい者によって周りを取り囲まれていたとなっては……」
「何を今更なことを申しているのやら。ニホン人の手によって帝都から連れ出された時より、我らの周りは常にニホン人と親しい者ばかりだ。そうであろう？　メイド長」
「はい。その通りでございます」
部屋から外に出る寸前に声をかけられたメイド長は、振り返ると事実をありのままに伝えた。
「ほらみろ。このイタリカももうニホンの影響下だ」
憤懣やるかたないといったマルクス伯爵の顔色を見たメイド長は、理由の説明を始めた。
「それもこれも薄汚いネズミ共を操ってこのフォルマル家に、そして恐れ多くも陛下に害を為そうとしている者があるせいでございます。しがない伯爵家がこれと対抗するためには、ニホンと協力関係を築くしかなかったのです」
デリラが日本人殺害を企てた事件は、伯爵家を窮地に陥れた。潔白を証明するためには地下組織の洗い出しをしようとする日本側に進んで協力するしかなかったのである。そのため、今では日本政府の特地代理店と称しても良いほどに、密接な関係となっていた。

明らかに不満顔をしていたマルクス伯だったが、最後には「致し方あるまい」と不平不満を飲み下す苦い表情となった。

実際、フォルマル伯爵家が日本とそのような協力関係にあったからこそ、帝国の正統政府も落ち着き先を得ることができたとも言えるからである。

「……で、戦況はどうか？　帝都は奪い返せそうか？」

皇帝は尋ねた。

マルクスは、帝都奪還のために正統政府軍が進撃中である旨を報告した。日本から返還された捕虜五千を中核にすることでどうにか軍の体裁は整えることが出来た。

だが正規軍であるゾルザルの軍はやはり手強く、途中途中に並べられた要害を抜いてまで前進することはできなかったのである。

「第二軍をただいま編制中でございます。増援が戦地に届きさえすれば、我が精鋭は帝都に近づくことができましょう」

他に言いようがないことは承知しているが、マルクスの物言いがあまりにも楽観的すぎるため皇帝は小さく嗤った。

「で、影なる戦いはどうかな？」

メイド長は、モルト皇帝がイタリカに腰を据えてから、館内に侵入しようとした者や、イタリカ市街で騒動を起こそうとした者の数がすでに五十にも及ぼうとしていると報告した。

「こうしている今も、宴席に紛れ込んでいるネズミが複数みつかっております。つい先ほど、食料庫の食材に毒を混ぜようとした者がありましたが、ここに控えるアウレアが排除いたしました」

アウレアは静かに頭を下げた。彼女も大人しくしている限りは、楚々とした野に咲く花のような少女である。その見た目にほだされかけた皇帝だが、メデュサ種の食虫植物的な性質を思い返して複雑な表情をした。

そして、フォルマル家の先の当主はこのメデュサ種を家臣にして何をしていたのだろうと考える。もし……もし、である。『死に至らない程度に』とか『健康を害さない程度に』と加減して精を吸わせることが出来るならば、それによって与えられる快楽を楽しむという遊戯が成り立っていたことになるからだ。

伝説的に語られている地獄の快楽。自分が干からびて死のうとしているのに、抵抗の気力すら湧かなくなる吸精の情交とやらを味わってみたいという誘惑は、魔薬的な魅力を放つのだ。

「アウレアとやら。そなたは先の当主とはどのような関係をもっておった？」

などとつい尋ねたくなった。

答えによってはアウレアを手元に置いて侍らせることも考えた。

「館内に入り込んでいる間者は、ただ今、監視を続けております。適当なところで排除いたします」

だが、皇帝の思惑に気づいたメイド長は、皇帝の思考を中断させるかのように言った。

これが貴族のヒト種女性相手なら、いや、他の亜人メイドでも、皇帝が関心を持ったという気配

を察しただけで、皇帝の枕頭に送り込んで侍らせるのだが、アウレアだけは駄目だからである。
「その者らも、ゾルザルの手の者なのか？」
皇帝が呻くように言い、マルクス伯が頷いた。
「諸外国の密偵という可能性もありましょうが、今はおそらく、左様に見て間違いないかと」
この仮皇城となったイタリカの街は、ゾルザルからの影なる攻撃の目標として集中攻撃を受けている真っ最中なのだ。それを考えればアウレアは貴重な戦力だ。戦線から引き抜いてしまうことなど出来るわけがない。
だが……それでも。
「ヘイカ。アウレアハ先代様カラ、治ラナイ病気ヤ、怪我デ死ヌノガワカテル人間ニ、死ヌ怖サ、痛サヲ、気持チノ良サデ消シテアゲル仕事ヲマカサレテイ……イマシタ」
アウレアも皇帝が自分に向ける目の色に気づいていた。
悲しいが彼女に似たような目を向ける者は少なくない。と言うか、この地にたどり着くまではそういう者ばかりだった。故に、彼女たちメデュサは堕落の原因として拒絶され、厭われて来たとも言えるのだ。
「そうか。では、余がいずれ迎えるであろう臨終の瞬間に不安を感じた時、お前の手を借りることにしよう」
「ハイ」

皇帝は、深々と歎息して「では、行け。行って敵と戦うがよい」と告げた。

『参加者名簿にない顔を見つけた。今、広間の西の角に立っている奴だ』

ヴォーリアバニーのマミーナは、耳に差し入れたイヤホンから聞こえる声に従って配下の戦闘メイドを率いて宴席に紛れ込んだという鼠を静かに包囲した。

裡にこめた殺気を、愛想の良い笑いと訓練で身につけた品の良い所作で覆い隠すと、トレイに酒を乗せて近づき「お飲物はいかがですか？」と声をかける。

男は、一瞬脅えたような表情を見せたが、マミーナがおだやかな笑顔をしていることに安堵したようで「あ、ありがとう」と言って琥珀色の液体の入ったグラスをトレイから取り上げた。

「ヴォーリアバニーがメイドをしてるなんて、珍しいな」

「フォルマル伯爵家では、メイドの八割が亜人種です。失礼ですが、貴方様はどちらのご家中でらっしゃいますか？」

「俺はニーガス。モントレー男爵家の家令をしている」

あらかじめ用意してあったのか、男はマミーナの問いにすらすらと答えた。

モントレー男爵は数少ない中立派だったが皇帝への帰順を表明し、一昨日イタリカに彼の私兵達共々到着していた。新参とも言えるので見覚えがないのは当然で、見たことがないというだけで誰何したのならその説明で納得して、見逃してしまっただろう。

『嘘だな。モントレー男爵が連れてきた家人にニーガスという名は確かにあるが、顔がまるっきり違う』

だが、空電音とともに聞こえる男声が、男の嘘を指摘してくれた。

見上げると、この館の天井には無数のカメラが仕掛けられている。そして会場内の隅から隅までを映し出し、別室におかれたコンピューターが参加者名簿と顔写真とを照合し、不審人物を洗い出すのである。

このような手段と技術があるということを知らない「敵」にとって、このイタリカの街、そしてフォルマル伯爵家の館は、送り込んだ密偵が一人残らず行方不明になってしまう地獄の入り口であった。

マミーナは微笑みながら「ニーガス様は素敵なお方ですね。よろしければお話を聞かせていただけません？」と胸の尖端が触れるまで身体の距離を詰め、耳もとろけよと言わんばかりに甘い声で囁いた。

「お、俺にかい？」

「はい。ヴォーリアバニーがどのような習性を持つかはご存じでしょ？　私は素敵な殿方を見つけたら、機会を逃さないようにしてるんです。人目のないところでしっぽりと……いかが？」

マミーナが、潤んだ瞳で男を見つめると、男は魅入られたかのように動きを凍り付かせた。

腹部に感じたチクンとした痛みが、身じろぎどころか呼吸すらも慎重に、ゆっくりとすることを強要してきたからである。

マミーナの瞳から視線をそうっと下げてみる。
すると彼女のふくよかな双丘を経由して、自分の脇腹に押し当てられている切っ先鋭い短剣にたどりつく。
前後左右からメイドに取り囲まれて、身体をまさぐられると言う傍目では羨ましくなるような姿であったが、その実態たるや三方から刃物で脅されて、身体検査を受けているという絶体絶命の状況なのだ。
「さ、こちらにいらして下さい」
「……な、何かの誤解がないか？　俺はこういうプレイを楽しめるタイプじゃないんだ」
「お惚けになっても無駄です。本名から、どこの誰に指図されてここまで来たのかまで、全部口にしていただきますので。最初に申しておきますが、我が家ではメデュサを家臣として抱えておりますから抵抗は一切無駄ですよ」
こうして、引きつった笑顔を浮かべた密偵がまた一人、広間から連れ出された。
多少の拷問で口を割るような質の劣る密偵ならば採石場かどこかの鉱山で強制労働となるだろう。もし最後まで口を割らないような優れた密偵であれば、アウレアの餌となって快楽にのたうち回りながら干からびていく運命が待ち構えているのだ。
人気のない廊下に出ると、男は言い訳の言葉を並べ始めた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺は確かに密偵の一人だが、皇太子派じゃない。皇帝陛下に忠節を

尽くそうと思っているんだ。本当だぜ。その証拠に皇帝陛下万歳って叫べる。ゾルザルの奴を一日中罵ることだって出来る」

「だったら、素直に所属と名前を吐いて手間を取らせないで下さい」

「そう言うわけにはいかないんだよ。身内に、裏切り者がいないかを調べるのが俺の仕事だからな。本当だよ。君たちの警備は最高だった。俺の存在をあっという間に見つけ出した手腕は見事なものだった。対応も申し分がないほどだ。満点をつけてもいい」

「お褒めの言葉をありがとう。だけど、誰の命令で動いているかを言えないようでは、信じるわけには参りません。これで信じるようなら、馬鹿でしょう？」

「そりゃそうだ。確かに……わかったわかった。名前と所属を言うよ」

マミーナは男が口を開くのを待つために立ち止まった。

「俺の名はノッラ。実は、内相のマルクス伯爵様の配下なんだ」

マルクス伯？　ならば確かに、現状では同じ陣営にある味方である。しかし、何故突如としてこの男の声は女みたいな声に代わったのか？

一瞬の思考時間が、隙となった。

男はわずかな隙を衝いてマミーナ達の囲みを破った。いや、男の衣服と肉体を破るようにして、中から女が飛び出したのだ。その予想外の出来事にマミーナ達の反応が遅れた。

「あ、待て！」

慌てて後を追う、マミーナ達。
「そう言われて待つような密偵がいるかってのっ！」
「ジヴォージョニー!?」
女は亜人だった。
野獣とも言える躍動的な運動能力で、猫科のマミーナにも匹敵する跳躍力を見せていた。その戦歴を感じさせる、傷だらけの肉体が放つ凄みに皆、圧倒された。
マミーナがダークを投擲する。その、ほとんどが甲高い音と共に叩き落とされたが、数本がノッラと名乗った女に突き刺さった。
「くっ！」
女はダークを引き抜くと傷を押さえ「くそ、覚えてやがれ！」と捨てぜりふを残し、廊下の窓から外へと飛び出していった。
「ちっ、くそ！　逃げられた。後を追うよ！」
『いや、大丈夫だ。発信器はちゃんと彼奴にくっついている。事後の追跡はこちらで引き受けた』
空電音の後に続く声が、追跡しようと駆けだしたマミーナ達の足を止めた。
「はっしんき？」
『あんた、俺が支給した投げナイフを使ったろ？　あれは引き抜いてもその尖端部は体内に残るようになってるんだ。切開して取り除かない限り、どこへ逃げても居場所をこっちに教えてくれる』

するとマミーナはニヤリと微笑んだ。
「じゃ、うまくいったんだね？」
『そうだ。傷の手当をするにしても、潜入が失敗したことを上司に報告するにしても、奴はアジトに戻らなきゃならん。そこから芋蔓式に、奴らの根城を潰してやるって寸法だ』
「それじゃあ、後は任していいんだね、ヤナギダ？」
『ああ。あとはこっちに任せておけ……奴らは、この俺が必ず潰してやる』
それとともに、フォルマル家城館の庭から、遠隔操縦観測システムのラジコンヘリが離陸する音が聞こえて来る。
『デリラ。わかってるな？』
無線機から会話が漏れ聞こえる。
『あたいにまかしておきなよ、ヤナギダの旦那。あたいはあんたの言う通りにやってみせるさ。それが、どんなことだってね』

＊　＊

そんな暗闘がすぐ隣でなされている中で、講和派元老院議員達は、帝国の行く末に関わる話し合いを続けていた。彼らにとっては口舌が武器、議場や宴席が戦場、討論こそが戦闘であった。直接

の命の取り合いではないが、彼らもまた、それぞれの部署で戦っているのである。
猫耳眼鏡メイドのペルシアに傅かれ、飲み物を受け取ったキケロは難しそうな表情で酒を口に含んで、それを隣に座る友人から見咎められていた。
「別に、亜人メイドが持って来たからと言って、飲み物の味が変わるわけではあるまい？」
もてなされる側の態度として、無礼な態度なので感心しないというのが友人からの忠告である。
キケロは、言い訳めかした言葉を返した。
「いや、そうではないのだ。フォルマル家の先代当主が、我々一般の習慣に反して、何故亜人の娘達を雇い入れたのかに思いを馳せていたのだよ。私は、これまで亜人などは野蛮で……失礼。君たちを貶すつもりは決してないのだよ」
キケロは、まだ目の前で傅いているペルシアにそう断ってから話を続けた。
「……亜人を用いるなど品性に欠けると思い込んでいたのだ。だがここに来て、彼女たちを実際に見て、これまでの考えを改めた方が良いような気がして来てね」
「ああ。作法にしても気遣いの良さにしても、ヒト種のメイドと遜色ない。一面ではヒト種のメイドより優れていると言っても良いくらいだからね」
「その通りだ」と、キケロは頷きながら広間で働く亜人のメイド達の姿を見た。
実際、このフォルマル伯爵家のメイド達は働き者で、その上に容姿でも大変に優れている。また、耳がよくて呼び止める声を聞き逃すと言うことがほとんどない。喧噪の中に入ってしまうと、はっ

きりと大声を出さなければ振り向いてもくれないヒト種のメイドとは段違いである。
「だが、どうにも慣れなくてね。違和感をぬぐえないのだ」
キケロは肩を竦めながら戸惑う心情を吐露した。
「慣れの問題ならば時間が解決するよ。今や我々の軍は亜人なくして成り立たない。あのゾルザルですら、ジャイアントオーガーを戦列に並べ始めたという噂だ」
「ああ、わかっている。いずれ慣れることは出来るだろうからそれまでの辛抱だ。だが、同じような辛抱を、ここのメイド達がしてくれるだろうか？」
「大丈夫、彼女達は礼儀正しいからな、君が慣れるのを待ってくれるさ。さぁ、そんなことよりシェリー嬢の報告を聞こうじゃないか。せっかく彼女が帰って来てくれたんだ。彼女が見聞きしたことを聞かなきゃいけないのだろう？」
キケロは「そうだ」と頷くと目の前で待っているテュエリ家の一粒種に問いかけた。
「待たせて済まなかったね。では君がニホンで見聞きしたことについて話して欲しい。ではまず近々起こるという政変について、説明して欲しい」
「はい、キケロさま」
シェリーは議員達の注目を浴びても、臆する態度を少しも見せなかった。
堂々たる態度で、自分を取り囲む元老院議員に向けて解説を始めた。
「まず、あらかじめご理解していただきたいことは、ニホンという国の宰相は、元老院によって選

び出されるということです。そして宰相が自分の閣僚を選ぶのです」
「つまり、宰相がその国の代表者にして政策立案の責任者なのだね？」
「はい。そして現在ニホンの元老院には任期の満了が近付いているのです。それによって新たな議員が選ばれることになります」
自らも似たような立場にあるだけに、元老院議員達はその意味が理解できる。一斉に苦々しい表情となった。
「どのような者が議員になるかで、国の方針がこれまでとは一変してしまうこともあるということか」
「はい。ニホンでは元老院議員は、市民の選挙によって決まります。従ってある日を境に、元老院議員の構成ががらりと入れ替わることもありえるのです」
問われたシェリーは苦笑に似た複雑な表情を浮かべた。日本という国で起こる政変の如何（いかん）によって、自分達の運命が大きく翻弄されかねないことを理解していたからだ。シェリーは、このことを報せるために、菅原についてきたのである。
「何という時代遅れの制度だろうか。わが帝国にも共和制だった歴史はあるが、執政官が代わる都度、対外政策が変わってしまうことの不利益が問題となっていた。だからこそ一貫した政策を続けることが出来る帝政が求められたのだ」
目の前にいるシェリーが子供と言うこともあってか、キケロの物言いはどこか教師のようであっ

た。だからだろうか、シェリーも教師の質問に答える模範的な生徒のように振る舞った。
「はい。第一人者による統治ですね」
「うむ。君は、よく勉強しているね。では、帝国の統治制度の要諦を説明できるかね？」
シェリーは「はい」と軽く頷くと教科書を暗唱するかのように語り始める。
「国全体の仕組みを左右するような政策と外交については皇帝が担います。内政については地域の実情に基づいた統治を行うため、皇帝の代理人たる地方長官がこれを担います。また歴史の深い都市や街のほとんどは自治が認められています。任期のある地方長官が治めるに相応しくない、じっくりと時間をかけた安定化政策が必要となる地方、例えばこのフォルマル伯爵領のように異民族、異種族が混在して住まう土地などは、相応しい能力を示した者に与えられます。これが帝国に中央集権制と封土制が併存する理由です」
「大変よろしい。私が教師なら君にご褒美をあげたいところだ。何故、時の皇帝は封土制を取り入れたのかね？　その時の皇帝の名は？」
「残念なことですが任期のある地方長官は、いずれその土地を立ち去ることもあり、その土地を豊かにすることよりも自分の懐を肥やすことを考えてしまいがちです。それによって多くの内乱や騒乱が起こりました。しかし、その土地が自分の財産になるとなれば、慎重に扱うだろうと時の皇帝コーラス陛下は考えられたのです」
「その通りだ。満点をあげよう」

「ありがとうございます」
シェリーは口頭試問に合格した学徒のように、はにかんだ笑みを見せた。
「こんな幼い少女ですら知っていることだ。このように統治とは一貫性と継続性こそが大切なのだ。それと多様性だな。ある土地では生活しにくい者も、別の土地では生活できるという多様性があることが望ましい。風向き一つで、国の政策がそっくり代わってしまうような制度は問題ありと言えるだろう。特に対外政策において方針がころころと変わることは好ましくない」
すると、これまで沈黙を保っていたカーゼル侯爵が手を挙げた。
「いや、民から選ばれた者が国を統治するという方法は、あながち時代遅れとは言えんぞ。皇帝による統治も後継者選びという問題がある」
周囲の議員達も、「そうだ、そうだ」とその意見に同調するように頷いた。
キケロも「確かに」と頷く。だがその上で反論した。
「人間が人間を統治する以上、なんらかの欠陥は必ずあるものだ。ありもしない完璧さを求める行為自体が、人間としての幼さを露呈したものと言えるだろう」
カーゼルもキケロと同じように相手の意見に同意できる部分を認めた上で反論した。
「要するに帝政、共和制、どちらの欠点を必要経費として許容するかなのだ。我々は皇帝による統治の即決制と継続性を重視した。だから皇帝制を敷いたのだ。その制度が持つ欠陥を補うのは、運用する我々の役割と言えるじゃろう」

「お二方に尋ねたい。ゾルザルのような男が現れることを防げなかったのは、制度的な欠陥とは言えないか？」

聴衆の放った質問に、キケロが厳めしい声で答えた。

「自らが為した失敗を、制度の欠陥に転嫁するのはやめたまえ。これは明らかに区別されるべき事柄だ。皇帝の後継者の鑑定は我らに課せられた義務だった。我らは、事なかれ主義に陥って、あの男を権力の座に近づけないようにする努力を怠ってしまったのだ」

「その代価なら、我々は血と苦痛で充分に払った。こうしてここにいることがその証だ」

だがキケロは首を振って「いや、まだだ」と議員達の意見を否定した。

「まだ支払い終えていない。不足だ。我々は、帝国をこの手に取り戻し、正常な状態を取り戻さなければならない。それが済んで初めて、自らの失敗の代償を支払ったと言える」

議員達は口々に言った。

「だが、どうやって帝国を取り戻したものか？　ゾルザルは帝都の放棄こそしたものの、政権と国軍を掌握しつづけている。皇帝陛下がゾルザルの廃嫡を宣言したと言うのに、国軍の将兵は今やあの者に従っている」

「力ずくで無理矢理従わせているだけだ！　陛下より勅任された将軍達は、陛下が呼びかければきっと正道に立ち返ってくれるはずだ」

「いや、無理を言ってはいかんぞ。ゾルザルの奴は、国軍の各部隊に『掃除夫（そうじふ）』共を配置して、将

軍はおろか、兵達にまで監視の目を光らせているというからな。迂闊に逆らえば、たちまち殺されてしまう。我らが危うくそうされかけたようにな」

掃除夫とはゾルザルの政策に反対する者を摘発し処刑する、政治将校のような存在である。正式には帝権擁護委員（オブリーチニキ）と呼ばれ、彼らの所属する機関は帝権擁護委員部（オブリーチニナ）という。ここに集まっている講和派元老院議員達は皆、彼らによって捕らえられ粛清される寸前だったのだ。

「そんな奴ら、やっつけてしまえばいい。皆で戦場に出て決戦に挑むのだ！」

「だが、我らの数は少ない。戦線はどうにか膠着（こうちゃく）しておるが、それもニホンがゾルザル派を牽制しているからだと言うことを忘れてはならん」

つもり積もった恨みの感情が議論の流れと相互作用を起こして、場が紛糾しそうな気配を見せたその時、シェリーが愚痴をこぼすかのように問いかけた。

「外国や諸侯国の方々は、お力を貸してくださらないのでしょうか？」

少女の声は、大人達とは音程も音質も異なる。そのため誰の耳にも彼女の声は際立って聞こえた。本来ならば大人の話に口を挟んではいけませんと叱りつけるべきところである。だがなんとなく教師と生徒という感覚が残っていることもあり、キケロはその質問を不調法とも思わずに答えた。

「当然、使者を送って援軍は要請しているよ。だが、態度を明らかにしない国ばかりだ。みな、日和見を決めこんでいる」

こうしてシェリーは、女子供は口出し無用とされる場で、意見を表明する自由を獲得した。そし

てさらに駄目を押すべく、答えの分かり切った質問をあえて発した。
「こちらには皇帝陛下がおわします。外国の方々が、あきらかに正しい側に与しないのは、どうしてなのでしょうか？」
「そりゃ話は簡単だ。もし我々に味方して、ゾルザルが勝つようなことがあれば、我々に味方した者にとっては破滅を意味するからだ。逆もまたしかり。国の将来を賭けた決断だ。慎重になるのも当然と言える」
「つまり、わたくしたちは味方を得るためにも、勝つ見込みのあることを内外に示さなければならないのですね？」
「その通りだ。だが皇帝陛下はご健康が優れず、何時またお倒れになるかわからないと来ている。さらにゾルザルは国軍を掌握している」
傍らで聞いていた貴族の一人が、酒を口に運びながら追加した。
「属州を治める、地方長官共も奴に従っているしな」
シェリーは「ずるいですわ」と子供っぽく唇を尖らせた。
「贔屓目に見ても、ゾルザル様が有利すぎます」
「そうなのだ。それでも、諸外国がゾルザルに与しないのは、ニホンという要素がこれに加わるからだ。ニホンは敵に回すと大変にやっかいだ。にもかかわらずゾルザルは、ニホン打倒に拘っている。彼奴に味方すればニホンとの戦いにつきあわされるからな。諸国はそれを恐れているんだ」

キケロは「だから、あ奴にも味方しないというわけなのさ」と肩を竦めて講義を結んだ。
「だから、ニホンに対する関心が高まっているのですね？」
シェリーは、日本に関する質問を続けた。
「そうなのだ。ニホンが帝国を占領する意思をもっていないことは既にわかっている。彼らはあくまでも我々が帝国を統治し諸外国との平和を維持することを望んでいる。何も好意でそうしているのではないと言うことは理解できる。異民族の統治は気苦労ばかり多くて実入りが少ないからな。だが、ここに来て宰相が代わるかも知れないとなれば、新しい宰相が我らに対してどのような態度をとるのかが気になるところだ。なぁ、シェリー君、端的に言ってどうなのだろう？　君の見聞した範囲でいいから何か参考になることはないかね？」
そうですわね。シェリーは人差し指を頬に当ててしばし考える姿を見せた。
「ニホンの民衆は、ゾルザル様のやりように大変ご立腹しておいでだそうです。ゾルザル様のご配下が、あちこちの村や町を襲って、無辜の民を虐めてらっしゃるということが知らされているからです」
すると人垣の向こうから質問が投げかけられた。
「ゾルザルは、帝国軍がしたというのは濡れ衣だ、逆にジエイタイの為した虐殺であると非難し返しているようだが？」
実際に、まだら緑の衣服をまとった兵が、村落を襲ったという噂はまことしやかに流れており、

何人かの貴族はその質問に頷いた。
「そのような声もあるようですが、少なくともアルヌスにおられる皆様は全く信じておられません。盗賊や亜人の方々を嗾けてらっしゃるのがゾルザル様であることは、様々な方面からの証言がありますので」
「だがアルヌスにいるのは、ニホンと縁の深い者ばかりだ。そんな者の証言を信じていいのか？」
皆、同じ帝国の人間が、自分のしたことを他人のせいにするほど卑怯とは思いたくないと語った。焦土戦は悪辣な行為だが、必要に駆られれば行う戦術の一つでもある。やるならば堂々とやる。それを他人がやったことにするほどゾルザルについた者も落ちぶれていないだろうと言うのだ。
だがキケロは、手を挙げて皆を鎮まらせる。
「いや。ゾルザルの配下となった将軍がそのような方法をとろうとしているという警告は、ピニャ殿下も為されていたから、信じたくはないが、おそらく間違いないのだろう。……なるほど、あの男は本気でニホンとの戦いに勝つつもりなのだな」
事の良し悪しはともかく、侵攻軍を徹底的に煩わせるというやり方は決して間違っていない。実力に圧倒的な差がある時、手段を選んでいる余裕はないからだ。その、なりふり構わない姿勢からも、この戦争に勝利しようという本気度が伝わって来る。
とは言え、このやり方は全てを破壊する。
自分のしたことを他人がやったとすり替える手段をとったら、人心は徹底的に荒廃して、領民達

は誰も信じなくなってしまうからだ。

例え悪辣な行為であっても、帝国はこれまで「それは俺がやった。それがどうした」という態度をとってきた。これによって民の憎しみは帝国に向かうかも知れないが、同時に恐れを感じ、その恐れが民を従わせてきたのである。

だが、これを他人のせいにしたらどうなるか。

人々は自分が見聞き体験したことと、帝国が語ることの乖離から全てを疑う。そう、恐怖ではなく疑いの感情を抱くのだ。そうなれば、例え勝利を得ても、その後に国を治めることは非常に難しいものになる。

もし、これを力で治めるなら、疑いから湧き上がる憤りと反感が、政府へ向かないように、民の口を封じて、内心にまで踏み入るような政策を敷いていく必要がある。すべての責任は外敵にあるということを妄信させなくてはならない。

疑問を口にすることを禁じ、封じ、根すら残さないように徹底的に締め付ける必要が生じてしまうのだ。

だがきっと、そうなった国は自由など少しもない息の詰まった国となってしまうに違いない。

嘘を正当化するには、嘘を重ねるしかなく、そこには力尽くで嘘を真実だと言い続ける不断の努力が要求される。

真実を口にする者を攻め、攻撃し、嘘を信じさせる宣伝を絶えず続けなくてはならない。

言論の統制とは、まさしくそこに嘘が存在していることを証明するものなのだ。
「なんということか」
キケロは、帝国の将来を憂いて嘆息した。ゾルザルという暴風を払い除けることが出来たとして、荒廃した帝国をどうやって立てなおせばよいのかと心配になったのだ。
「そうなりますと、わたしたちがゾルザル様に対抗できるかは皇太女殿下の双肩にかかっておいでなのですね。それでピニャ様は、今、どうなさっておいでなのですか？」
シェリーは、周囲にピニャの姿を探しながら問いかけた。
だがキケロを始めとする議員達は、一斉に沈鬱な表情となった。
「あの方は、政治というものにすっかり失望してしまわれてな。『お前達は妾(わらわ)に兄様と殺し合えと言うのか』とおっしゃるとイタリカを出ていってしまわれたのだ」
するとシェリーは驚いた表情を浮かべて「皇太女ともあろうお方が？」と不愉快そうに眉を寄せた。敵前逃亡罪ですわ、と続けた言葉はあまりにも小さくて周囲の耳に入ることはなく、さらに何事も無かったかのような朗らかな笑顔がすぐさま取って代わる。
「それで、殿下は、今どちらにおいでなのですか？　もうお迎えにどなたかが向かっておいでですか？」
おかげで見ていた者は、シェリーの変貌を光線の具合か目の錯覚と思ったくらいである。
キケロもその一人のようで、目を軽く擦っていた。そして答えた。

「いや、しばらくそっとしておけと陛下が仰せなのでな。今頃は緑の人とやらと行動を共にされているはずだ」

シェリーは「緑の人……ですか？」と首を傾げることとなった。

02

時刻的には、太陽が青空を背景にして南の空に浮かぶ頃合いだが、生憎の悪天候。空は白い雲に覆われて、霧にも似た粒の雨が降り注いで大地を湿らせていた。

だが、戦闘服をまとっている陸上自衛官には傘を差すという習慣はない。

いつものように六四小銃、ボディアーマーといった重装備で身を固めた伊丹は、アルヌスのヘリポートに駐機したままローターを回転させているＣＨ－47ＪＡチヌークの傍らで次の任務の支度をしていた。

とは言っても、資源探査の任務を解かれたわけではない。以前からの任務はそのまま……広い意味では資源探査の一環として、日本の学識経験者を案内するという任務が課せられたのである。

目的地はクナップヌイ。イタリカから北西に千キロ程離れた辺境の地である。

そのため、移動手段としてチヌークが利用出来ることになった。

資源探査に潤沢な予算がつけられていたことがそれを可能にした。ある意味で流用とも言えるが、体裁は整っているのでどこからも文句は出て来ないはずであった。さらに今回は、第三偵察隊で隊長をしていた際の信頼できる部下もつけてもらえた。桑原曹長以下、倉田、勝本、笹川、そして黒川の五名である。栗林と富田、戸津、東、仁科らはマスコミの護衛任務、古田は諜報任務に就いているため不参加である。

その代わりとして現地協力者の同行が認められたので、伊丹はロゥリィ、レレイ、テュカ、ヤオの四名を選んでいた。もちろん四人とも、「クナップヌイの調査だよ」と伊丹からうち明けられた瞬間から、身支度を始めている。彼女たちは自分が伊丹に同行するのは当然と言うか、最早権利だと思っているのだ。

問題があるとすれば、帝国正統政府からの視察員が同行することだろう。皇太女と、彼女の供回りの女性騎士である。

皇太女とは、もちろんピニャ・コ・ラーダのことである。

「あの、本気で一緒に付いて来るんですか？」

伊丹の問いに、一本百円のビニール傘を差しているピニャは、これ以上ないというくらいに笑顔をほころばせて答えた。

「無論。妾も、冥王ハーディが下されたと言うお告げが気になるからな」

「そうは言っても、すっごく訳の分からない内容ですよ。そんなあやふやなものを確かめるために

殿下がわざわざ足を運ばなくていいと思うんですが」
「それでもイタミ殿は赴かれるのであろう？」
「そりゃ、まぁ、命令が出ましたから」
「それだけニホン政府が重要視しているということだ。イタミ殿も無視できぬと思っているのであろう？」
ピニャの伊丹への評価は、以前からの高さでずっと維持されている。そのため、日本政府が伊丹を派遣すると聞いただけで、彼女は重要なことが起きていると考えた。
だが伊丹は、逆に自衛隊の上層部は今回の調査をそれほど重要視していないと考えていた。学識経験者を現地に送り込むとは言え、その随伴に自分程度の人間しかつけないからである。
きっと、完全には無視できないから、とりあえず誰かに見てこさせようとしているのだ。そのように、推理していた。
「まぁ、地震とか星空の配列に異常が発生しているのは事実ですからね。それと関係している世界を巻き込む異変が起きつつあると言われれば、例え『神様のお告げ』でも全く無視するというわけにもいかないんでしょう。特に『門』とは深い関係を持っているようですからね、ハーディとかいう神様は」
「ならば、妾もその異変の原因とやらを確かめなければならぬ。あの地揺れとも、関係があると言うならば、なおの事にな」

ピニャは、伊丹に一歩近づいた。そして恨めしそうな視線を向ける。
「それに……もう政にかかわるのは嫌だ。帝国の将来のためにしたことを、皆から責め苛まれるようなことはもう懲り懲りなのだ。父上の下にいてはまた政争に巻き込まれてしまう」
「ですけど、殿下は皇太女になられたのでしょ？」
「妾は受けた覚えはない。父上や皆が勝手にそう言っているだけだ」
「でも、皇帝陛下は健康に不安があるでしょうし、万が一の時に代理をやれるのは殿下だけですよね。殿下が留守にするっていうのは、やっぱり不味くありません？」
するとピニャは唇を尖らせて頬を風船のように「ぷぅ」と膨らませた。
「もしや、イタミ殿は妾が邪魔なのではあるまいな!?」
「じゃ、邪魔だなんて……」
伊丹はあわてて取り成そうとした。だが、ピニャは恋人から別れ話をつきつけられた少女のように悲壮な表情をして、その顔を両手で覆った。
「ああやっぱり、妾は事のついでに拾われる程度の存在でしかなかったのだな!?」
「そんなことないですって」
「じゃあ、なんでイタミ殿はそこまで妾を邪険にするのか？」
「……あの、もしかしてふて腐れてます？」
「当たり前であろう。兄から見捨てられ、絶望の淵にはまり、主戦論者共の罵倒の嵐に曝されてい

た妾にとって、イタミ殿から差し伸べられた手は、暗闇の荒野に差し込んだ一筋の光明だったのだ。妾にはイタミ殿に後光が差して見えたほどだった。あの場所から救い出された瞬間、ようやく妾にも頼りとなってくれる騎士が現れたと思ったほどだ。あの一瞬、イタミ殿に『妾の全てを捧げたい、いや奪われたい』と不覚にも心の底から思ってしまった程だ。リサ様の描かれた作品にもよく用いられる王道のストーリー展開だ。胸が高鳴った。はっきり言って萌えた。妾が男でなかったのが悔やまれたほどだ」

「ぶっ！」

この発言は、伊丹とその周囲にちょっとした波紋を引き起こした。

一瞬、あたりが森閑としたかと思うと、それに続いてザワッとした空気がロゥリィや、テュカ、ヤオのたむろする方角から発せられたのだ。

「いや、俺としては出来れば女性のままの方がありがたいんですけど。男とどうこうする趣味は全然ないので、ほんと勘弁して下さい！」

「イタミ殿が『ピニャ！　来いっ！』と叫んで下さった時、妾は、妾は……」

「そんなこと言ったっけ？　俺」

振り返って過去の発言を、出発の準備作業に参加しているレレイとロゥリィに確かめる伊丹。

レレイは無言のまま答える価値もないとばかりに、荷物を抱えてチヌークの後部ハッチに向かって行った。

雨合羽を着てテルテル坊主状態のロゥリィは、テュカやヤオ達と額を寄せ合って、何やらひそひそと話し合っている。男色とか、衆道とか、その手の単語が聞こえて来た。
「……なのに、なのに、それなのに」
「それなのに？」
「イタミ殿が妾をあそこから連れ出した理由が、その実、もののついでにしかなかったと知った時の妾のがっかり感というか、蔑ろにされた感というか、軽く扱われてしまったという没落感がいかほどのものであったか!?　わかるか？」
「はぁ、まぁ、ちょっと想像できません」
「そうであろう。そうであろう。簡単に想像されてたまるか」
「あの……分かって欲しいんですか？　分からないほうが良いんですか？」
「分かって欲しいに決まっている」
「分かりました……」
「駄目だ。簡単に分かって欲しくない。簡単に分かられてたまるかっ！　妾の味わった悔しさはそんなに軽くない！」
「じゃ、どうしたらいいんです!?」
逆切れしたかのように問い叫ぶ伊丹に、ピニャは唇を噛んで「う～」と唸った。そして訥々と語り出した。

「妾が言うように想像してみて欲しい。まず妾が両膝両腕を大地について、頭(こうべ)を垂れている。ダンダンと地面を手のひらで叩いて、涙を流して大声でわんわん泣いて悔しがっているところをだ。あの時の妾の苦しみはそれぐらいだった」

「想像すればいいんですね？」

伊丹の鍛えられた想像力は、瞬時に注文されたとおりの姿を想像した。

「そうだ、出来るだけ惨めな姿で想像するのだ。今日のような雨……いや、豪雨の中でずぶ濡れとなっているところがよい。地面は雨で泥濘と化している。妾は、泥と雨にまみれているのだ」

「泥と豪雨……なんですね？」

「そうだ。泥は恥辱の象徴だ。髪は雨に濡れて、震える手で大地を掴んでいる。泥を握る指の爪は割れて血が滲んでいる」

「うっ……痛そうですね」

伊丹とピニャはそろって「っう」と呻いて指先をニギニギと擦った。いろいろな意味で発達し過ぎた二人の想像力は、痛覚ですらリアルに再現してしまうのだ。

「うむ、ちょっと痛いな。爪が割れるのは無しにしよう」

ピニャはちょっと後悔したように呟いた。

その言葉から伊丹はピニャが実際の体験を語っているわけでないことを悟った。いや、もちろん分かってはいたのだが、最初からそう決めつけるのは失礼だと思っていたのだ。

「と言うことは実際には、しなかったんですね？」
「本当にやったら汚れるし痛いじゃないか。いや、もちろん悔しかったのは本当だ。あまりの悔しさに我を忘れて、寝台で枕を叩きのめしてしまった。枕を涙で濡らした」
「枕が相手なんですね？」
伊丹はピニャがぽふぽふと枕を叩いている姿を想像した。
その姿はいつも着ているようなお姫様的な白い衣装である。だが、彼女が言うように雨に濡れているという条件が入ってしまったため、ピニャの肢体が透けて見えてるという想像となった。
「そっちを想像しては駄目だ！　土砂降りの雨、ぬかるんだ泥、ずぶ濡れの妾、この要素をどれも欠いてはならない！」
伊丹の想像はピニャの求める姿に再び修正された。
「どうだ。イタミ殿のつれない態度が、どれほどの苦しみを妾に与えたか、想像してもらえたな？」
「……」
「……」
口をぽかんと開けて、想像を続ける伊丹。一連の想像は、ちょっとばかり淫靡（いんび）だった。
ふと見ると、ピニャは伊丹がどのような反応を示すのかと期待する表情で待っている。伊丹は、どのような反応を返すことが適切なのかを確かめるべく尋ねた。
「ちょっとお伺いしたいんですけど、今、ここはどういう場面なんでしょう？」

「もちろん、イタミ殿が己の非を認めて謝罪し、妾の機嫌をとるために剣を捧げて忠誠を誓うところだ」
「非を認めろ……ですか？」
「そうだ。イタミ卿」
「剣なんて持ってないんですけどね」
「ならば、その手にしているジュウでもよいぞ」
「あ……そだ。部下の指揮しなきゃ」
伊丹はかつての部下達に話しかけることで、この場からの逃亡を試みた。
だが彼らは伊丹の指揮なんか必要としていなかった。細かい指図を受ける前から、率先して積載する天幕を運び、武器弾薬を点検し、食糧・水などを運んでいた。
とばっちりを受けたりしないように「忙しい、忙しい」と、伊丹に背を向けているだけだという説もあるが、決してそうではないはずである。絶対に違うと信じたい伊丹であった。
とは言え、任務に精励している彼らを邪魔することは出来なかった。となれば残るのは……そう、ピニャのお付きである女性騎士ハミルトンの面倒を見るという仕事がある。彼女も、航空機に乗るのは初めてのはずだから、それなりの配慮をする必要があると思うのだ。
実際、彼女は大変な問題を抱えていた。
まだ離陸までしばらくあると言うのに、チヌーク機内のトルーパーシートに腰掛けて、緊張した

面持ちで固まっているのだ。
機内にいるのは雨を避けるためだが、固まっている理由は彼女の発する「こんな大きな鉄の塊が空に浮かぶなんて、どうしても信じられません！」という悲鳴にあらわれている。
「馬で街道を行くんじゃ駄目なんですか!?　殿下！　クナップヌイまで、てくてくのんびり地上を参りましょうよ！」とまるで電気椅子に縛り付けられた死刑囚みたいな表情で叫んでいた。
「……う～む」
流石の伊丹も、声をかけることに躊躇いを感じてしまった。ピニャに至ってはあからさまにハミルトンから目をそらしていた。
「そんな重たそうな物をいっぱい積み込んで!?　どうやって空に浮かぶって言うんですか！」
皆も同じに思っているようでハミルトンに背を向けている。
倉田と勝本の二人は、「やめて、お願い許して！　重くしないで！」という声を浴びながら航空科の隊員と共に、搬入した物資の固定作業をしていた。
それを手伝っていたレレイも、青い顔をしてがたがた震えている女性騎士をちらりと視線で刺してからチヌークの操縦席へと向かう。
いつものように無表情であるため、レレイの感情の動きがどのようになっているかはわからないが、少なくともがたがた震えているハミルトンに飛行の原理について説明をして心配を取り除いてあげようとは思わないようだった。

彼女の関心は今、離陸前の点検をしてるパイロットの仕事ぶりへと向けられているのだ。
コクピットに入るとパイロット達の背中に、まるでしがみつくようにして見学している。その目は、まるで餌をもらえるのを待っている子犬のようであった。
高機動車の運転を覚えて以来、レレイの興味は自衛隊が特地に持ち込んだ様々な乗り物に向けられていた。施設科のブルドーザー、オートバイＸＬＲ２５０Ｒ等々。
ブルドーザーやオートバイの時にそうしてもらったように、「操縦席に座ってみるかい？」と声をかけられるのを待っているのだ。
だが、この少女を操縦席に座らせることは出来なかった。
この嘱託技官に高機動車を運転し、オートバイで荒野を疾走し、ブルドーザーを操って地面を平らに均せるようになるまで努力を積み上げる熱意があることはわかっているが、さすがに航空機を自由にさせるわけにはいかないからである。法律や、規則というものがある。いくら特地とは言えお目こぼし貰えることには限界があるのだ。
レレイもそこのところは承知しているようで、自分に操縦させて欲しいとは口にしない。だがその分、目で語る。そう、レレイは表情や言葉こそ乏しいが、身体で語る熱い女なのだ。
熱い視線をひしひしと感じるパイロット達は、レレイの視線にかなりの緊張を強いられることになる。自分の一挙手一投足が観察され、何かの検定を受けている気分になるからだ。
「ね、熱心に見ているようだけど、面白いかい？」と、パイロットの一人が尋ねてみたところ「魔

法に応用することを考えている」という答えが返ってきた。
さらにレレイは事も無げに続ける。
「魔法で空も飛べるようになると思う」
「そうなったらもう、本格的に魔法少女だよねぇ」
それが皆の感想であった。
しかし、ここまで話を聞けば、大抵の者が「やっぱり箒に跨るんでしょ？」とレレイに勧める。小説、映画、漫画等でおなじみの『魔法使い』＋『飛行』→『箒』という組み合わせからの発想だ。
だが、この言葉を発した者は、例外なく「イヤ」という拒絶の言葉とともに、『箒って何それ？そんな細い物に女の子に跨れって？　もしかして馬鹿なの？　死ぬの？　あんた変態なの？』という罵倒の冷たい視線が与えられたのである。
この出来事を聞いた伊丹は、「そう言えば、昔、箒に乗る練習と称して、鉄棒に座ってるアニメがあったなぁ」と語り、レレイに皆が、どうしてそういう発想をするのかについて説明した。
伊丹の説明で納得したレレイは、差し出された竹箒を眺めながら感想を述べた。
「普通は苦痛を感じる。イヤ……こんなものに慣れたくない」
伊丹もその言葉にしみじみと頷いた。
「確かにサドルのかわりに鉄パイプをつけた自転車には乗れないよな。ケツが痛くなりそ……」
冷静に考えれば至極当たり前の話である。

こうしてレレイに箒に乗れと言い出す者は居なくなった。絶滅した。根絶された。そして今日もまたチヌークのパイロットが、レレイからじいっと観察されることとなったのである。

パイロット達は、その熱い視線に背中が焼けるような感触を味わいつつも、これを黙殺して仕事を続けていた。

操縦士の養成課程は過酷だ。パイロットになりたい。その一心で自衛隊に入って訓練に励んだとしても、規定の時間内に課題を達成できないと、冷酷にも「お前要らない（ケッチン）」と放り出されるのだ。

ウィングマークを手にするのはそんな過酷な関門を越えた者である。

彼らの誇りの基は、血と汗と涙の訓練の日々によって磨き上げた技量だ。それが特地魔法少女の観察に耐えられないようなら立つ瀬が無い。辛い訓練の日々が走馬灯のように目に浮かんでしまう。誇りを守るにはレレイを充分に満足させる必要がある。彼女の熱い視線に応え、飛行とはこういうものだ、こうして空を飛ぶのだと力量を示し続けなければならないのだ。

そんな訳で、コクピット付近には猛烈な熱気が漂っている。誰もがちょっと近付きたくないなぁと思うような気配で充ち満ちていた。伊丹もここに突入するのは嫌だった。

つまりは、伊丹の逃げ場はどこにも存在していなかったのである。

「イタミ殿。何も言ってくれぬのか？」

ピニャに迫られた伊丹は、「うっ」と後ずさった。

「さぁ」と迫るピニャ。

「いや、その……」と退く伊丹。
「さあ、さあ、さあ」
ピニャが迫り、伊丹が後ずさった。
「おほんっ!!」
突然の咳払いに注意を喚起された桑原曹長が、背筋を伸ばして号令を発する。
「短間隔集まれ！」
倉田達が横隊に整列すると胸を張った。
救いの手が差し伸べられた嬉しさに、伊丹は基本教練の教範に載せたいぐらいに整った最高の敬礼をすると、皆の前に現れた狭間陸将に報告した。ピニャが恨めしそうな表情をしているが、今はそれどころではないのだ。
「出発準備、完了いたしました」
「うむ、ご苦労である」
かしこまった挨拶をそこまでとした狭間は、随伴してきた壮年や老年に達する男性達や、テレビ局のカメラマン他の取材スタッフを伊丹達に紹介した。
「こちらは、京都の大学で宇宙生物学を研究してらっしゃる漆畑教授だ。さらにこちらは国立天文台の白位博士。そして、こちらが養鳴教授だ。理論物理学がご専門で、東大に奉職されている。それと取材チームの栗林菜々美さん」

「漆畑です」
「僕、白位」
「儂が養鳴だ」
「栗林菜々美です。姉がいつもお世話になってます」
「えー、マスコミも同行するんですか？　聞いておりませんが……」
そんな伊丹の反応を耳にした養鳴教授は「儂らが直々に調査するのに、マスコミが注目せんはずがないだろう！」と怒鳴った。特地に学術研究者が立ち入るのは、実はこれが初めてなのだ。
「おじゃまにならないようにしますから」と両手を合わせる栗林妹の言葉を信用するしかないようである。
一方、養鳴は振り返ると狭間に向けて「何故、儂の紹介を最後にする」などと言いがかりのようなことをまくしたてていた。
「儂は東大の教授だぞ。履歴書の職業欄なんぞ、東大助手、東大講師、東大助教授、東大教授とたった四行で済むほどだ。そこらの連中と一緒にするな」
漆畑や白位を指さしての失礼な物言いに、流石の狭間も額に汗が吹き出た。とりあえず手ぬぐいで額を拭くと「先輩は、自分の身内という位置づけになりますので、いろいろと最後にさせていただいております」等と言って取り成した。
すると養鳴は急に態度を変えた。

「なんだ、貴様も東大出か？」
「はっ。先輩の五期後輩に当たります」
「おおっ、そうかそうか。身内扱いか。ならば仕方ないな。結婚式でも身内は一番後ろの席だ……うんうん。身内扱いか、あっはっはっ！」
何が気に入ったのか、養鳴の態度が急に鷹揚なものとなった。
そして、突然関心の方向を変えておもむろに傘をほっぽり投げると四つん這いになってアルヌスの大地をばんばんと叩いたり、「むむむ、これに乗るのかっ⁉」などと叫びながらチヌークの中をいきなり覗き込んで、トルーパーシートで凍り付いてるハミルトンの心拍数を、ドキンッ！と跳ね上がらせたりしていた。
漆畑は、養鳴の失礼な発言や奇行も全く気にすることもなく、この特地の風景を眺めたり、テュカやヤオの肢体をまじまじと観察したりしていた。
「ほうほうほう……なるほど、発生環境が地球に似ていれば知的生命体の形態は、ヒトと同じかそれに近くなるという説は正しかったようだね」
周りをぐるぐる回りながら、頭の先から足の先までをつぶさに観察する視線に曝された二人は、びくっびくっと怖がる表情を見せた。
普段のヤオなら、舐めるような視線を向けられれば、失礼過ぎると威嚇したり、ぶん殴ったりするはずである。だが漆畑博士のそれは、男が女に向ける淫らな視線とは明らかに色合いが異なって

いるため、どう対応したら良いのかと戸惑っているのだ。
そう、それは研究者が毛並みの良い実験動物を見るような視線であった。
伊丹などはそれを見て「この学者、もしかするとテュカとヤオを解剖したいんじゃないだろうな」と思ったりした。
案の定と言うべきか、漆畑は「あー狭間君。この二人は、持ち帰ってよいのかね？」と言い始める。
「漆畑先生、それはダメです。その二人は現地協力者ですから」
「そうか、それは残念だ」
何が残念なのかと問いただしたくなる発言であった。
そんな中、三人目の学者である白位は、反射型天体望遠鏡、手動式赤道儀のついた三脚などの膨大な機材を抱えていて、アルヌスのあちこちにカメラを向けシャッターを押しまくっていた。好事家なのか、最近では見るのも珍しいフィルムを用いたカメラのようである。
「雨が止むのが待ち遠しいなぁ。むっふふふふ、特地の星空はどんなんだろう。撮るぞ、撮るぞ、撮るぞ！」
それぞれ非常に個性的で、いろいろな意味で「奇特」な方々であった。
「これが大学の……先生方ですか？」
伊丹の問いに狭間は「うん、そうだ。……そのはずだ。多分」とその威儀の重さに反し、実に自信なさげに答えるのだった。

＊　＊

さて、問題はそもそも何だって、学者達を連れて特地の深奥部であるクナップヌイなどというところまで行かなくてはならないのか。それを語るには伊丹達がベルナーゴ神殿に赴いた時まで少しばかり時間を遡らなくてはならない。

レレイを狙う刺客がいる事をグレイ達から報された伊丹は、これから逃れるため、ロンデルにとどまらず、その周辺のあちこちを気まぐれに移動していた。

移動を続けてさえいれば、どれほど多くの刺客が放たれたとしても、伊丹達に追いつくことは出来ないと考えたからである。そして、それは概ね正解と言えた。もし、追いつかれることがあるとすれば、次の目的地がどこかを読みとられ、先回りされた時だけである。だが、抜け目のない伊丹は、これを避けるためにちょっとした工夫を凝らしていた。

「さて、次の目的地を決めるぞ」

ロンデルの西方、距離にして約五十キロのところにある、銅山の廃鉱をレレイの義姉であるアルペジオとともに調査し、サンプルの収集を終えた伊丹は、おもむろに落ちていた棒を地面に立てると、人差し指でその尖端を支えた。

「手を離すぞ」

そう、棒の倒れた方角に進むというやり方で進路を決めていたのだ。
ただ、棒を手で立てただけだと、無意識に倒れる方向を操作してしまうおそれがあるので、指先で棒を支えたらそのまま目をつむり、その周りをぐるりと一周するという方法で念を入れた。
さらに、倒れた棒がどの方角を指したとしても、必ずその場所に向かうというルールを定めていた。
もちろん厳密に従えば、何もないところを延々とうろつくことになってしまうので、棒の指し示した方角に向かいつつも、その近くに村や町、鉱山などを見つけ、そこを目的地とする程度には幅を持たせている。とは言え、これによって進路の選択がほぼ完全にでたらめとなったため、伊丹達の前にレレイを狙う刺客が姿を現すことはなくなっていたのである。
乾いた音を立てて転がった棒を、皆で一斉に覗き込んだ。
「方位、三百二十六度と……概ね北北西だな」
伊丹が方位磁石をおいて棒の指した方角を読みとった。
「北北西ねぇ？」
偶然のはずの結果に、ロゥリィは「ねぇ、今ぁ、変な風が吹かなかったぁ？」と疑義を唱えるかのように皆の顔を見た。
「いや。風なんか吹かなかったと思うぞ」
地面に広げた地形図に、現在位置から方位三百二十六度の方向に向けて、まっすぐに線を引いていた伊丹は、ロゥリィの問いに顔を上げて答えた。するとロゥリィの顔は、額を接するほどに近い

ところにあったりした。
「そうかしらぁ？」
首を傾げるロゥリィ。彼女は亜神だけに、ヒトには感じられないような気配を察知したらしい。
「よしんば風がふいて棒の倒れる方向が影響を受けたとしても、別にいいんじゃないの？」
テュカがそんな風に言いながら顔を上げた。やっぱりすっごく近いところに顔があった。
ロゥリィは「う〜ん」と唸りつつ、再び顔を下げて伊丹の手元を覗き込む。
「でも、これの行き先ってベルナーゴなのよねぇ。嫌な予感しかしないわぁ」
地形図に引かれた線を指先でなぞって伸ばして行くと……やがてベルナーゴと記された部分を貫く。それがあまりにもどんぴしゃりなので、ロゥリィは今の棒倒しの結果は偶然ではなく、何者かの意志が働いていると言うのだ。
伊丹はロゥリィがそう言う以上、そうかも知れないと思った。だが……
「ベルナーゴ神殿からは招待状が届いてたからなぁ。遅かれ早かれ、一度は行かなきゃいけなかったろ。何が問題なんだ？」
荷物の中にしまわれている禍々(まがまが)しい気配を放つ招待状。
それは血で染めたような黒い羊皮紙で、錆びた鉛の粉末をインクとして用いられていた。
内容は炎龍を倒し、使徒ジゼルを実力で退けた伊丹を神殿まで招待するというもの。しかも封蝋(ふうろう)にまで黒を使うという念の入った演出が施されており、これを諧謔(かいぎゃく)でやったのだとすれば、招待者

は相当に趣味が悪いと言わざるを得なかった。おかげで事務的な文面でしかないのに、一読しただけで焼き捨てたくなるような代物となっているのだ。とは言え、これがあるためベルナーゴは目的地の一つとなっている。

「ロゥリィだって、ハーディとかいう神様に、『あんたの嫁にはならない』って直に宣言するつもりなんだろ？　ヤオだって三行半を突きつけるとか言っていたよな」

「そうよぉ。けどぉ、今のぉこの時期にぃあそこに行くってことにはぁ、嫌な予感があるのよねぇ。彼奴のことだからぁ、刺客とかぁもぉ一緒に招き寄せていそうだしぃ」

「此の身も聖下のお考えに同意する」

そう言ってヤオは、かつて主神と仰いだ存在に対する不信感を表明した。

彼女は仲間のダークエルフを炎龍の餌にされたことを知って以来、ハーディへの信仰を捨てている。

この特地では、神は実在しているし、その数は多数いる。気に入った神に帰依し、気に入らなくなれば信者をやめるのはごく自然のことなのだ。信徒同士をいくつかの派閥に分けて、互いに殺しあいをさせる上に、もう嫌だと棄教することを罪とするような、どこぞの狭量な唯一絶対の支配神とは性格が全く異なるのである。

「あの……もう一度、棒倒ししたらどうでしょう？」

シャンディー・ガフ・マレアの横からの提案に、テュカが飛びついて「それがいいわね」と頷い

た。伊丹もうんうんと頷きながら棒を拾い上げ、もう一度立てる。
目をつぶって、その周りをぐるりと一周してから指を離す。
すると、倒れた棒の指向した先は……、
「……」
「……」
「北北西でありますな」
言葉を失って沈黙する皆を代弁するかのように、グレイ・コ・アルドが言った。
「どうするぅ？」
「もう一度だ」
伊丹はもう一度棒を倒した。
「……」
その結果を見て、レレイが視線をそらしながら歎息する。
アルペジオが、「ベルナーゴって、食べ物が美味しいところだそうですわね」などとグレイに話しかけて、これから赴くことになるであろう、街についての噂話を始めた。
「も、もう一度」
伊丹は、もう一度棒を手にすると、今度は思いっきり南の方角に傾けた。
そして、目を閉じて手を離す。

当然、棒は重力に従って南に向かって倒れようとする。だが、何故か突風が棒を煽り、北北西の方向へと倒した。

「……」

「……」

「は、ハーディの奴ぅ」

カンッと棒を蹴り飛ばすロウリィ。

飛んでいった棒は立木に当たって跳ね返り、「いてっ！」と伊丹の頭部を痛撃した。さらに律儀にもその尖端を北北西の方角へと向けた。

伊丹は、痛む頭を押さえながら、棒を指差すと言った。

「みんな！　見方を変えるんだ。この棒が指し示しているのは、北北西じゃなくて南南東だ」

伊丹は棒の太い側の断端（だんたん）を指差した。そして棒は矢印ではないから、どちらを尖端と考えても良いのだと主張した。

いささか苦しい意見であるが、皆この考え方を名案と思ってか「なるほどぉ」と手を打った。

だが、途端に突風が吹いた。そして棒を転がして、方向を北北西へと変える。

「くっ……」

伊丹は、この方法で行く先を決めることにした時、どんなに都合が悪くても棒の指し示した方向に向かうという宣言をしていた。ふざけてのことだが、誓いも立てたぐらいである。

レレイは膝を叩いて泥を払いながら立ち上がると、高機動車の運転席に座りエンジンをかけた。
テュカもロゥリィも、みんな諦めたような表情で車へと乗り込んでいく。
「仕方ない。充分に注意して行くことにしよう」
こうして、伊丹達はベルナーゴ神殿へと向かうこととなったのである。

ベルナーゴ。
そこは、冥府の神ハーディを祀る神殿都市として知られている。
冥府とは、一般的には死者の赴く地であると定義づけられている。感覚的にはやっぱり「あの世」だろうか。場所は、地底の奥深くとされていた。
とは言え全ての死者が冥府に赴くわけではない。例えば、戦いの中で斃れたり、格別の戦功をあげたりした者の魂はエムロイの下へと召される。
このように死者の旅立つ先は冥府以外にも存在しているのだ。だがそれは、死者全体からして見れば特殊にして希有な例であり、一般的には死した魂はハーディの支配する冥府へと迎え入れられる。その為、祖父母父母にはじまる祖先の冥福を祈ろうとする者はハーディを主神とするしないにかかわらず、ハーディの神殿に祈りを捧げることとなる。当然、ベルナーゴは多くの参拝客で賑わうこととなるのだ。
「すっごい混雑ぶりだねぇ」

伊丹は神殿へと向かう群衆の列を見て呻いた。
宿を確保して車を預けて街に出てみれば、道という道は参拝者で溢れていたのだ。その風景は初詣客で賑わう神社に例えてもよいだろう。
さらに、その門前には参拝客目当ての商店や露店が所狭しと列んでいる。その雰囲気は巣鴨の地蔵通りか、川崎の大師前、あるいは浅草寺の雷門前にも似ている。
神殿と言うからには厳粛で居心地の悪いところかと思ったが、意外や意外、世俗的なので伊丹はほっとしていた。
土産屋の扱う商品を見てみれば、どこにでも売っていそうな安っぽい木彫りの置物や金属製のカップ、あるいは風景を刻み込んだレリーフなどに、ベルナーゴ神殿の意匠が貼り付けられている。見ただけで分かる安物感とその実用性の無さという点では、これぞ正しい土産物と言えた。
さらに各地の鉱山などで採れた鉱物の原石なども土産物として並べられていた。
水晶や瑪瑙、翡翠などの宝石、貴石の原石などだ。形が珍しかったり、様々な色彩がちりばめられたりする正体不明の鉱石に値札が付けられていた。
なんでこんな物がこのベルナーゴの土産物にと疑問に思うところである。だが、レレイの姉、アルペジオの説明を聞けばなるほどと納得できた。つまり、ハーディが管轄するのは地面の下であり、そこから採掘される鉱物も冥王のもたらす富と考えられているのだ。そのため、鉱山のあるような街では例外なくハーディを守神として祀り、鉱石、鉱物の一部を貢ぎ物として神殿に納め、その財

政を潤すのである。そして、さらなる一部がこうして土産物として市場に列ぶというわけである。

早速、足を止めて物色を始めるアルフェやシャンディー。特に鉱物を研究の課題としているアルフェは、掘り出し物がないかと目の色を変えていた。

だが、伊丹達はロゥリィに急かされるようにして、群衆をかき分けて足早に神殿へと進んだ。さすがに置いてきぼりにはされたくないのか、シャンディーもアルフェも名残惜しげにしながらもついて来る。

それを見てレレイは言った。

「別について来る必要はない。買い物が済んだら宿で待っていればよい」

突き放したような冷たい言葉に聞こえるが、それが買い物を楽しんで来いというレレイの心配りだと理解したアルフェは、「とんでもないわ」と言って首を振って「ベルナーゴ神殿の深奥部を覗き見る絶好の機会だもの。これを逃すわけにはいかないでしょ」と、妹の肩に腕を回してがっしりと引き寄せた。「何が、研究の手がかりになるかわからないものね。そうでしょ？」

鉱物を研究するアルフェにとって、ハーディは宝の倉庫の管理人のような存在である。ご機嫌をとっておいて損のない相手なのだ。

一方、行列が出来ていると、最後尾を探すことが習性となっている伊丹は、周囲を見渡しながらロゥリィに尋ねた。

「おいおい、ロゥリィ。列に並ばなくて良いのか？」

「大丈夫よぉ。ベルナーゴからの招待状を持ってるんでしょぅ？」
「ああ、あるある」
伊丹は図嚢から黒い信書を取り出した。
「それがあればぁ、神官が案内してくれるわぁ」
「なるほど、こいつはサークル参加証みたいなもんなんだな」
実際、ロゥリィの言うとおりで、正門脇に立っていた係員にそれを見せるとその威光たるや凄まじく、白いフリルの鮮やかな神官達は雷に打たれたように凍り付き、スカートを翻して膝をついてひれ伏した。サークル参加証どころではない威力であった。
「うわ、すご」
なんだか自分がとっても偉くなったような気分になった伊丹は、ちょっとばかり調子に乗った。
「もう一度やってみよ」と改めて信書を突き出したのだ。
すると、再び頭を垂れてひれ伏す神官達。まるで、印籠を目にした悪代官とその手下の侍達のようだった。
さらにもう一度「ひかえおろう」と真っ黒の信書を突き出そうとしたら、ロゥリィにハルバートの柄でゴツンと頭を叩かれてしまった。
「痛っ……」
「いつまで馬鹿やってるのぉ？　行くわよぉ」

頭を抑えながら、ロゥリィに袖を引っ張られる伊丹。
こうして伊丹達は白ゴス神官達の案内で、一般の参拝客とは違う特別の扱いを受けて、ベルナーゴ神殿の奥へと立ち入ることとなったのである。
神殿の構造は、一言で言えば巨大な穴であった。
例えるならばその形状は逆ピラミッド。つまり、四角錐をさかさまにした巨大な縦穴なのだ。
もちろん露天掘りの青空天井ではない。それでは、雨が降ればあっという間に神殿は水浸しになってしまう。そのため、あちこちに大理石の柱が列び、梁が渡され、蓋のように穴を覆う巨大な天井を支えているのだ。そして、最も深いところにある錐体（すいたい）の尖端部分に、ハーディの祭壇が設置されていた。
どうやら、通常の参拝者が入れるのはここまでらしい。
祭壇の前では白ゴスをまとった女性神官達が、列を作る参拝者に祝福の儀式を施したり、言葉を授けたりしている。
「御身に祝福がもたらされんことを」
そんな祈りが漏れ聞こえてきた。
だが、伊丹達はさらに進むようにと白ゴス神官女性に促された。
見れば祭壇の裏側に狭い階段があり、地底深くまで続いている。そしてその先は見えなくなるほどに暗くなっていた。

どうやらこの先にこそ、真の祭壇、すなわち冥界の入り口があるらしい。
ここまでの天井は高かったし、広く作られているため閉塞感は欠片も感じなかったが、ここから先はいかにもな地下道である。
あまり背が高いとはいえない伊丹でも、天井の低さがもたらす圧迫感に、思わず首を竦めたくなった程だ。
ロゥリィなどは、泳げもしないのにこれから水に飛び込もうとしているかのように、悲壮な表情をしていた。目をぎゅっとつむり、鼻を摘んで、ぐっと息を吸って「えいやっ」と、底の深いプールに飛び込むのに似た心境なのだろう。
「大丈夫か、ロゥリィ？　やっぱり地面の下はダメなのか？」
「普段ならダメよぉ。断りもなく他の神が管轄する領域を侵すとぉ、いろいろと問題が生じるわぁ。だ、だけど今回は全然大丈夫よぉ。ハーディ直々の招待状があるからぁ、大丈夫なんだからぁ……」
強がりを言うその声は、微妙にうわずっていて、ちっとも大丈夫だと感じられなかった。
なわばりが云々以前に、ロゥリィには地下というものに対する根本的な苦手意識があるのかも知れない。なので伊丹は「俺が先に行くから」と先頭に立った。すると、ロゥリィは明らかにホッとした表情となって伊丹の背後に回ってその戦闘服の裾を掴んだ。
伊丹は一同を引き連れて、長い階段を降り始める。
ピラミッドの玄室へと続く通路にも似た階段を、五分ほど下るとやがてひらけた空間に出た。

それは巨大な神殿であった。広大な地下空間に無数の柱が立ち並ぶ光景は、雰囲気と言い、スケールの大きさと言い首都圏外郭放水路内にどこか似ている。そう言えば、炎龍の巣のあった火山へと繋がる洞穴もこんな雰囲気だったと伊丹は思い起こした。

ここまで天井が高くなればロゥリィも息が詰まらなくなるようで、さっぱりした表情となって周囲を見渡していた。それでも伊丹の裾から手を離すことはなかったが。

最奥の祭壇の前で祈りを捧げていた司祭が、伊丹等の到着を待っていたかのように厳かに告げた。

「来訪者達よ。主上ハーディがご降臨される。それぞれの流儀で最上の敬意を示せ」

闇を切り裂くスポットライトのような光が、祭壇に注がれ、神官達が一斉に膝を突いて祭壇に向かってひれ伏した。

ロゥリィがハルバートの切っ先を地に伏せて、片膝をつく。

伊丹は一瞬の迷いの果てに、挙手の敬礼をした。四十五度の敬礼なんて滅多にやらないから、とっさに出て来なかったのだ。ちなみにテュカやレレイ達は神官達に倣って片膝をつき、グレイとシャンディーは胸に手を当てる帝国軍式の敬礼をしていた。

やがて、天井近くのはるか上方から光の砂が降ってきた。それが中空で漂って次第に女性の姿を形作りだす。

伊丹は映画の特殊効果かホログラムの類を疑う誘惑に勝てず、背後に映写機がないか振り返った。だが、映画館の映写室などに見られるような、スクリーンへと伸びる光の筋はみられず、また神殿

の床や天井にも、見て解るような細工はなかった。
次第に光の中に、銀髪を腰まで伸ばした二十代女性の姿が形作られた。
静謐な表情はまるでガラス細工のごとき繊細な美しさで、細いたおやかな肢体は女性的な曲線を、慎ましやかながらも滑らかに描いている。
向こう側がかすかに透けて見える存在が、音もなくその一歩を踏み出した。
その瞬間、ハーディの緑瞳の視線と、見とれるかのごとく注視していた伊丹の視線とが合わさる。
彼女は、軽く微笑むと右手の指先を腰の辺りで軽く振って、小さな挨拶を送ってきた。まるで舞台上の有名人が、客席に知り合いを見つけたかのごとき振る舞いで、伊丹は思わずドギマギしてしまった。
炎龍の件もあって、伊丹はハーディという神に余り良い印象を持っていない。だが、美しい女性に微笑みを向けられれば悪い気はしないし、登場の仕方が神々しい厳かなものだったから、高飛車で高慢な性格かと思えば、実際には気さくな感じだったので妙に親しみを感じてしまったのである。
だが、ちょっと待てよ、とも思う。
ロウリィから聞いた話によれば、神様というのは容姿は思いのままだとか。ならば、ハーディのこの整った容姿も天然由来とは限らない。微修正であっても、それを繰り返している内に元の姿が分からなくなってしまうという例は、美容整形技術の発達した日本においても耳にする話であり、もしかしたら整形美女かも知れないなどと考えてしまったのである。

すると、ハーディは急に心外そうな傷ついた表情になり、傍らのロゥリィの袖を引いて何かを切々と訴え始めた。

残念なことに、それは伊丹達には全く聞こえない。しかも、ロゥリィはハーディの言葉を無視するかのようにずうっと口を噤んでいるから、まるでスピーカーをミュートにしたテレビ映像のように見えてしまう。

涙目のハーディは何やら必死になって、伊丹を何度も指さしてロゥリィに訴えている。

それを見ていて伊丹はだんだんと可哀想になった。自分を指差しているのだから、何かきっと自分と関係があることを喋っているのだ。せめて何を伝えようとしているのかぐらいは知りたいと思った。

「ロゥリィ。この神様、何を言ってるんだ？」

伊丹の問いに、ロゥリィはやれやれと言った感じで「『整形じゃない』って伝えてくれって言ってるのよぉ」と説明した。

伊丹も流石に不味かったと思って「これまた失礼しました」と頭を下げた。そして気づく。「って、もしかして『心』読んでます？」

わかってくれて有り難う、と言わんばかりに花開いたような表情となったハーディは、伊丹の思念に返事するかのように首肯した。

美女を前にして、思考が駄々漏れとわかって、疚(やま)しさを覚えない男はどれだけ居るだろうか。

相手が美人で艶めかしいほど、いろいろと不味い筈である。まぁ、不味くない人はそれでも良いのだが、伊丹の場合は「迂闊なこと考えらんねぇ……」と呻いてしまった。実に正直な男である。

ハーディはそんな伊丹の態度を見て、口元に手の甲をあてて苦笑した。そして何かを語り始めた。だが、伊丹には聞き取ることは出来ない。ロウリィはと言えば、憮然とした態度のまま通訳しないので、ハーディは途中で言葉を止めると、何かを探すように周囲を見渡した。

するとそれを待っていたとばかりに、女性神官達が一斉に前に進み出て傅き、自分を選んでくださいという表情で主神の姿を見つめたのである。

「あれ……何をしてるんだい？」

伊丹はロウリィに身体を傾けて尋ねた。

「自分の身体を使って下さいっていうアピールよぉ」

「身体を？　もしかして、神様を身体に降ろすってやつか……」

恐山（おそれざん）のイタコ、あるいは卑弥呼時代の巫者的なイメージを伊丹は抱いた。

霊魂だの神様の類は直接人間に働きかける術を持っていない。だが巫女の身体や口を借りることで、現世にある人間に向けてその意志を伝える事が出来るようになるのだ。

「主神をその身に迎え入れ一体化することは、神官にとって最高の栄誉なのよぉ」

「へぇ……」

「ただ、神なんていう巨大な魂魄（こんぱく）をその身に降ろせばぁ、大抵は精神が砕かれてしまうからぁ、自

殺に等しいんだけどぉねぇ」
「それじゃ、駄目駄目じゃん」と伊丹は言った。
伊丹としては、栄誉とは生きて居てこそ意味のあるものなのだ。死んでからどれほどの賞賛と名誉を贈られても少しもありがたくない。
「それでもいいと考えるのが、神官なのよぉ」
「なんでまたそんなことを？」
「神官として位を上げるチャンスだからよぉ。神をその身に降ろしてぇ、自らを保つことが出来ればぁ、神の力を分け与えられることもあるわねぇ……」
「ああ、なるほど。もしかして神様になれるチャンスだったりもする？」
「それについては、なれる時もあればぁ、なれないこともあるとしか言えないわぁ。あくまでも本人次第よぉ。なれない場合がほとんどだけどねぇ」
「そうだろうねぇ。それに神様なんかになったって、特別何か良いこともなさそうだし」
伊丹は、そのあたりのメリットがよく分からないと首を傾げた。
当の神様であるロゥリィまでも「そう言えばぁ、良い事なんてなぁんにもないわねぇ」などと呟いたりしたから、理解できないこと尚更であった。だがロゥリィは、すぐさま態度を改めて言葉を続けた。
「だけどぉ、信仰に生きる者にとってはぁ、それが何よりも価値を持つことなのよぉ」

「ふぅん。なるほどね」

一方、白ゴスをまとった神官達を見渡したハーディは、意中の者が見つからないのか、がっかりしたような表情となっていた。ため息をつくような表情すら見せたほどだ。そして、諦めたようにその視線を神官の列の外側へと泳がせ、突然嬉しそうな表情となった。

ハーディはそれに向かって歩き出し、それを見たロゥリィが慌てた様子で叫ぶ。

「あ、待ちなさいっ!!」

だが止めるのも間に合わず、ハーディはレレイの中へとすっと飛び込んでいた。

レレイは実体のある何かに正面からぶつかられたかのごとく、神殿の床に倒れ、淡い光に包まれてしまった。

「何ってことぉ……」

ロゥリィは交通事故を目撃してしまった少女のように、口を手で覆い呆然としていた。神官達も皆、唖然としていた。

アルフェが義妹の頬を叩いて、「レレイ、レレイ、しっかり！　目を開けてよっ！」と盛んに呼びかけている。

そんな中で、一瞬の内に白銀の髪を腰まで伸ばしたレレイは、身体を起こしてすっくと立ち上がった。そしてレレイを心配する義姉の手を軽く抑えておいて、安心させるように微笑み、語りかけたのである。

「遠路はるばる、よくおいで下さいました。わたくしがハーディです」と。

「さぁ、参りましょう」

レレイの身体を乗っ取ったハーディはまるでロゥリィに見せつけるようにして伊丹の前に進み出て、その腕を引いた。

「ど、どこに？」

レレイの声と顔で言われれば、レレイに誘われている気分になってしまう。だが、中味はハーディという神様だということを思いおこした伊丹は「ど、どこに行くんですか？」と言葉と態度を改めた。

ハーディは人差し指を唇にあてて、首をわずかに傾けた姿で思案する。

そして「ん～、まずは、食欲を満たすことにするわ」と宣言した。けれど時刻はまだ伊丹の時計で、午後三時をわずかにまわった程度。昼の食事には遅過ぎて、晩の食事にはいささか早過ぎる頃合いであった。

「しょ、食事ですか？　まだ、腹が減ってないんですけどねぇ……」

伊丹の消極的拒絶のセリフに対し、ハーディは「つき合ってくれないと、後で酷いですわよ」と剣呑な光で充ちた翠瞳をすうっと細めた。こんな風に険しいところを見せつけておきながらも、絶妙な力加減で腕にふんわりと抱きついて来る。さらには、下から見上げる視線は、瞬く間に媚びるような彩りへと変化する。

飴と鞭の実に巧妙な使い分け方だ。
この瞬間、伊丹の脳裏では警鐘ががんがんと鳴り響いた。
レレイならば絶対にしない、と言うかできないはずの婀娜っぽい瞳を見て、この娘が慣れ親しんだ少女ではないことを嫌でも理解させられたのである。それに、初見の女性に自分がモテるはずがないという思いは、三十年を越える人生経験において結構強固に形成されている。にもかかわらず、こんな風に近づいてくる女性が居たとしたら、美人局かハニートラップか、悪質なキャッチセールスの類に違いない。それが伊丹の認識であったから、伊丹は、すざざっと身を引いた。
「あら、随分と冷たい態度なのね。もしかしてこの身体の娘が嫌い？」
「そんなことはありません！」
伊丹を追ってさらに身を寄せるハーディ。伊丹の腕を捕らえると再び両の腕で抱き締めた。
「じゃあ、いいですわよね？」
「は、ハーディ様？　ちょっと困りますって」
伊丹は腕を取り戻そうと引っ張り、ハーディはそれを逃がすまいと力を込めた。
「いやよ。親しみと尊敬を込めてハーディって呼び捨てて欲しいわ。ロゥリィのことも呼び捨ててるんでしょう？」
「いや、その、あの……ハーディ……様？」
「ハーディ」

「……ハーディ……さん？」
「ま、いいわ。今はそれで妥協してあげます」
するとハーディは、伊丹の腕を解放した。
「ついていらっしゃい」
伊丹達、そして白ゴスをまとった神官団をぞろぞろと引き連れたハーディは、神殿を出るとベルナーゴの門前町にある一番豪華そうな食堂に入った。そして店の主人を呼ぶと、メニューを開き、上から順に卓上から溢れかえるほどの料理を運ばせたのである。
その量は、相伴を強いられることとなった伊丹達も思わず絶句したほどだ。八人がかりでも、正直言って食べきれるかどうか怪しい。肉、野菜、川魚、香草、キノコ、小麦、乳酪、乳精などをふんだんに用いた料理は、濃厚な味つけと油で輝いていて、見ただけでも胃がもたれてくる。なのにハーディは、それらを一人で食い尽くさんばかりの勢いで口に運んでいくのだ。
空となった皿がひとつ、ふたつと次々に積み上げられていく様を見て、腹でも壊さないかと、見ている者は心配になった。
「い、いくら、なんでも少しは気をつかったらどうなの……ですか？」
皆が、その余りの食べっぷりに絶句している中、レレイの身を気遣ったテュカが勇気を奮い起こして抗議の声を上げた。
だが、冥府の神は肩を竦めると一人嘯いた。

「あ～あ、神になんてなるものじゃないわよねえ。無限に続く時の流れに、どんどん無感動、無感情になっていくもの。このままだと、ただただ役割を淡々と果たすだけの存在になってしまうかも知れないわ。それを防ぐためにも、時々こんな歓びや潤いも必要なのよ」
「だから、食べるってこと？」
「そうよ。エルフの中でも精霊種たる貴女なら、わかるんじゃなくて？　数千の齢を重ねたエルフがどんな風にその生の終焉を迎えるか。あらゆることに無感動となって、最後には我が身を大樹の苗床としてしまうのも、人生に飽いて歓びを見失い、情動も意欲もなくしてしまうからよ。そうでしょ？」
「……」
「じゃぁ、食欲を満たせばレレイを返してくれるんですね？」
反対側からアルフェが、誘拐犯に人質の解放条件を確かめる家族のように尋ねた。
「もちろんよ。でも、いろいろと楽しんでからね」
ハーディは意地悪そうに言うと、ぺろりと唇を舐める。
「いろいろって、そんな……」
「もちろん、喜怒哀楽を共に出来る伴侶が現れてくれるなら今すぐにでも返してあげる……ロウリィ、わたくしの嫁になりなさい。別にわたくしが嫁になってもいいけれど、一緒に溶け合って永遠を楽しみましょう」

さすが神様である。性別などというものは障害にならないらしい。
それに大変な食べっぷりだというのに上品さをまったく損なっていない。こうして言葉を交わすにしても、常に優雅で余裕を感じさせる。
もちろんロゥリィも負けてはない。かりかりと乾いたパンを可愛いらしく噛り、急に振られた話には、顔を背けるという方法で拒絶の意思を示した。
「いやよぉ。もう間に合ってるものぉ」
「間に合っているって、それってやっぱりこちらの殿方のこと？」
ハーディは伊丹にすすっと顔と身体を寄せた。その分だけ伊丹は身を仰け反らせた。
「そう構えないで欲しいわ。悲しくなっちゃう」
業を煮やしたロゥリィがついに動く。
すとっと立ち上がると伊丹とハーディの間に割って入り、ハーディの細い首に、チャキっとハルバートの斧刃を押し付けたのである。
「いい加減にしないと怒るわよぉ」
「あら、礼儀を知らない娘だこと。亜神の分際で正神に刃を向けるとは良い度胸」
「わたしはぁ正神だからといって無条件で敬ったりしないわぁ。礼儀には礼儀、無礼には無礼で応えるわぁ。自分の神官でもない娘の躰を乗っ取ったりぃ、他人の男にぃ手を出したりぃする無礼な奴にはぁ、これで充分よぉ」

「そうは言っても、霊格の低い娘しかいなかったんだもの。神の魂をその身に受け容れられるぐらいに器のしっかりしている娘がいたら、自分の神官かどうかなんて気にしてられないわ」
「それがぁ、仁義に反していることぐらいぃ、分かっているのでしょう？」
「そうね。それは理解していますわ」
「だったらぁ、早くその躰から出て行きなさいぃ」
「嫌よ。久しぶりに肉の躰を借りたのだもの。悦楽を味わいたいと思うのはいけないこと？　ちょっとぐらい貸してよ」
「誰があんたなんかにぃ。ヨウジぃもレレイもわたしぃのものよぉ」
「まぁ、妬いてるのね。可愛いくてよ……だから横恋慕はやめられないのよね。他の女に惹かれている男を、自分の魅力の虜にするのってすっごく快感。背徳的でぞっくぞくしちゃうんだもの」
「愛のない交りでぇ、真の歓びを得られるはずないわぁ」
「流石、愛の神を目指すだけあるわね。じゃぁ、やっぱり本命の貴女に相手して貰わなくてはならないわね。わたくしと愛し合いましょ」
そう言って振り返ったハーディは、細い指先を伸ばしてロゥリィの頬を撫でた。
ロゥリィはハルバートの刃をハーディの首に更に押しつけて、おぞましげに「だから、やめぃ……」と突き放した。
「わたしぃは、あんたの嫁にはならないと言ってるでしょぉっ！　今回あんたの招待に応じたの

だって、それをはっきりと言う為よぉ」

脅しがまったく効果無いことを悟ったロゥリィは、唇を尖らせつつハルバートを降ろした。

「あら残念。でもいつかは気が変わることでしょう。それまで待つことにするわ。そこのエルフの娘はどう？　相手してくれないかしら。貴女、女の子でもいける口なんでしょ？」

それは伊丹的には聞き捨てならない発言だった。

だがテュカは動揺するでも、取り繕うでもなく堂々と取り澄ました表情で「でも、ハーディ様はお断りです」と答えた。

「あら、どうして？」

「好意を持てないからよ」

ハーディは、小さくため息をつくとその矛先をヤオへと向ける。

「そっちのダークエルフはどう？」

「御身ならば、問われずとも答えはご存じなのでは？　此の身の胸中をお察し頂きたい」

「……いじわるねぇ。たとえ神であっても、肉の躰に憑依すれば、肉の目、肉の耳を通してしか人間の意思を受け取ることは出来なくなるのよ。だから思っていることは口にして頂戴」

「ならば、改めてお断り申し上げます。かつてなら、お誘いに応えるのも吝かではなかったでありましょうが、今となっては御身に好意など持ちようもありません。本日、此の身がこちらに参上いたしましたのも、信徒たる位階をご返上申し上げるため」

「そう？　それは残念だわ」
「当然でありましょう！　友人や一族を炎龍の餌にされたとあれば、どうして好意など持ち続けることが出来ましょうか？」
ヤオの感情が高ぶり始めているのを感じた伊丹は、ヤオの膝を押さえて注意を促した。
「ヤオ、抑えて抑えて」
するとヤオは「……はい」と項垂れるように口を噤んだ。
「へぇ、この殿方に対しては従順なのね。ねぇ、だったら貴方、このダークエルフに命令してよ。わたくしの相手をするようにって」
「お断りします、ハーディさ……さん。別にどうこう言うつもりはないですけど、貴女がヤオに嫌われるのにも、相応の理由があるんですから」
「そうね、知っている。けれどだからといって反省するつもりなんかないし、遠慮もしないのだけどね」
「何故!?　それは、いったい何故ですか？」
ヤオは立ち上がって問いかけた。だがハーディは迷惑そうに肩を竦めると手を振る。
「不毛な問いを発するのは止めなさい。説明を受けたら貴女は納得するの？　無理でしょ？　だって理由を知ったからと言って貴女達が受けた苦しみが軽減されるわけじゃないんだもの。何故？　何故？　何故!?　……問い詰めるという言葉があるように、理由を尋ねるのは、答えを得るためじゃ

ないわ。他人に罪悪感を沸き立たせ、責め苛むことを目論む行為よ。どれほど答えても、そしてどれだけの答えを与えられても、呑めば呑むほど乾きが増す海の水と同じ。だったら、回りくどいことなんかせず、素直に、まっすぐにわたくしを憎めばいいの。嫌えばいいのよ。理由を知ろうとするフリなんてしなくていいわ」

「理由を知ろうとするフリ!?　我らの怒りや悲しみを、フリとおっしゃるのか？」

「ええ、そうよ。貴方達の怒りも悲しみも、わたくしは何とも感じないし思わない。だって、わたくしは常に確信犯なのだから」

「酷い！　酷すぎるっ！」

「それが何だと言うの？　何が酷いの？　例えば、貴女は食事をするわね。それは植物の命を、動物の命を奪ってるってことよ。それは酷いことではないの？　違う？」

「そうしなければ、あらゆる生き物は生きられないからです。自然の営みです」

「ならば炎龍が、餌を捕えて食べるのも当然のことよね」

「しかし、何も我らを餌にする必要は」

「何を食べるかは炎龍自身が決めた事よ。それにわたくしが貴女達を皿に盛りつけて、炎龍の前に餌として置いたわけじゃないわ。そうでしょ？」

「そ、そうかも知れませんが」

「よしんば、そうしたとしてもわたくしは気にしないでしょうね。肉食の獣を飼っている者が、そ

の餌とするために別の動物を殺す。何ら不思議のない自然の振る舞いなのだから。犬や鷹を飼う者が肉を与える。その肉はどこから得た物かしら？」

実際、水族館の職員は、飼っているイルカやシャチの餌に魚を与える。その魚と同種の生き物を、別の水槽で大切に飼っているにもかかわらずだ。何気なく見過ごしてしまう行為だが、考えて見ると実に身勝手で皮肉な風景である。

人間は無意識に自らを食物連鎖の枠外に置いているが、人間を超越した存在から見れば、それは自然の理に反していると、鼻で笑いたくなる行為なのかも知れない。

「弱肉強食は世の習い。だからこそ、貴女達にも身を守るために戦う権利があった。わたくしは貴女達が可愛い炎龍を討ったことに文句を言うつもりはないのよ。手駒を失ったことで予定は狂ってしまったけれど、それもまた自然のことなのだから」

「けれど！」

「そもそも冥府の主はわたくしなのです。死者の魂は一部を除けばみいんなわたくしの所にやって来るの。死後の幸福はこのわたくしが約束します。ならば生き物の生殺与奪もわたくしの自由。一時の苦しみも、死後が幸せならばそれは産みの苦しみと同じ。この現世からあの世へと移り住んだのと同じぐらいのことでしかないのよ。貴女の両親も、友人も、かつての婚約者も、みんな冥府で幸せに暮らしてるのよ」

それは、ヤオを揶揄するような物言いであった。

堪えきれなくなったヤオは、レイピアを抜くとハーディの首元にその切っ先を突きつける。
「幸せ!?　幸せだと!?　勝手に決めつけるな！　幸せとは自らつかみ取るもので、与えてもらうものでは決してないっ！　例え神でも幸せは与えられない！」
苛立ったヤオは突き動かされるように叫んだ。
伊丹は慌ててヤオを羽交い締めにすると「ヤオ。止めてくれ」と頼み込んだ。
「イタミ殿。止めないで下さい、此の身は、此の身は……」
「分かるけど駄目だ！」
伊丹にも、ヤオが腹を立てる理由はわかるような気がする。
ハーディの言い様は、一党独裁国家の指導者が「我が人民は、党の指導の下で幸せに暮らしている」と言い放つのに似た響きがあるからだ。
一人一人に話を聞けば、「私は、偉大なる指導者様のおかげで幸せに暮らしております」とでも言うだろう。だが、その言葉はどうしたって空々しく聞こえてしまう。と言うのも、幸せとは本来、決まった姿形はなく、それぞれに異なるものだからである。その全てを同時に満たすような制度や方法は存在しないのだ。
だからこそ、人間はそれぞれが他人の権利を害しないやり方で、自分を満たすように努力するしかないのである。そして、それぞれが自己の幸せを追求できる自由を尊び、そのための環境や制度を整える作業を『社会福祉』と呼ぶのである。

衣食住に不足がないことや、病の心配がないことは幸せの前提条件かも知れないが、決してイコールではない。もし、制度で幸福を実現しようとすると、『幸せとはこういうことである』と決めつけ、人々を無理矢理その型に押し込んでいくグロテスクなやり方となる。

「幸せだと思うようにしましょう」「私たちは幸せです」「幸せだと感じないことは異常です」「矯正が必要です」というスローガンが、街中に張り巡らされた理想郷。

それは魂に対する冒涜と言える。自分の友人や家族がそのような目に遭っていると知って、怒らない者はどれだけいるだろうか。

伊丹はヤオがハーディに向ける怒りに正当性があると感じた。とは言えそれをレレイの肉体に向けられても困るのだ。

「駄目だ。躰はレレイなんだぞ」

「けれど！」

「止めろと言ってるっ！　ロウリィもだ。見てないでヤオを止めてくれよっ」

声を荒げることなど滅多にない伊丹が怒鳴ったのを見て、ロウリィやテュカは驚いたように目を剥いた。そして、ヤオに意思のこもった視線を注いだ。

「……はい」

ヤオが口惜しげに黙ったのを見ると、ハーディは居住まいを正し刃を突きつけられていた首元に軽く触れ、赤い筋として現れていた傷を瞬く間に癒やした。

「ハーディ、魂を人形のように扱うのは止めて。魂はぁおもちゃじゃないのよぉ」
「救い出したければ、エムロイの眷属らしく戦って勝ち取りなさい」
このやり取りだけでも、ロウリィとハーディの間に根深い確執を感じる。このままにしておけば、雰囲気はさらに険悪なものになるかも知れない。
「ハーディ様。そろそろ俺たちを、ここに呼びつけた理由を教えてくれませんかね？」
伊丹は、本題へと入るようにと促した。あえて様をつけて呼んだのも隔意を伝える意味があった。
「……そうね。そうした方が良さそうね」
ハーディは今にも飛びかかりそうな表情をしているヤオを見て「おおっ、怖い怖い」とわざとらしく身体を震わせた。
「実は、貴方達に見て来て欲しいところがあるのよ。それで貴方達に来て貰ったというわけ」
「見て来る？　俺たちに？」
「そう。この世界の行く末にかかわることよ。いいえ違うわね。異世界人たる貴方にも関係のある話なの」
「それは、いったいどういう話ですか？」
ハーディは店の主人を呼ぶと果実酒を持って来るように告げた。そして酒杯を再び満たすとそれを口に運んだ。
「それを説明するには、まず『門』について話をする必要があります」

「そうね。『門』についてはぁ、問い質したいことがあんたにはあったのよぉ」
ハーディにずいっと迫るロウリィ。だが、ハーディは伊丹の問いに答えを返すことを優先した。
「二つの世界を繋ぐというのは、案外簡単よ。世界とは、宇宙開闢の瞬間を源泉とする川のようなもの。時空の地平たる混沌に向けて流れていく過程で、山や谷の影響を受け、蛇行し、細くなったり狭くなったりするわ。時に二つの世界が合流するほどに近付く時もある。その時、軽く力を加えてやると、二つの世界は接するわ。その時に『門』が開くというわけ。でも、その二つの流れはいつまでも並んでいない。やがてそれぞれの目的地に向けて離れていくの。ここまでは理解できて？」
「ええと、なんとなく……」
「アルヌスの『門』は二つの世界の接触した部分。本来は小さな穴でしかないの。世界の揺らぎの影響で不安定だから渡るのに少しばかり気を遣うわ。ところが帝国の魔導師はそれが消えないように魔法装置をつくってしまったわ。つまりは船をよせる埠頭を石で造り、船と鎖で繋いだようなものね」
「なるほど、それがアルヌスの丘にある門状の構造物なんですね」
「そう。あの魔法の建築物が二つの世界を無理矢理繋いでるの。お陰で『門』が消えなくなってしまったわ」
「『門』が消えないと何か問題があるんですか？」
「ゆっくりと離れていくはずの二つの世界は、今も無理矢理結合させられている。当然、いろいろ

な無理が生じてくるわ。その無理のしわ寄せは、双方の世界全体が受けることになる。世界が撓んで、歪んで、ねじれていくの。いくら帆を張っても、艫を漕いでも船は動けなくなってしまった。それでも船は行こうとするから、船体が、みしみしときしみ音を立てている。いえ、そろそろ、めりめりっとか、ぎしぎしって音に変わってる頃かも。桟橋の方にも地面に亀裂が入ってるかしら？」

ハーディはコロコロと笑いながら言った。その表現は聞く者の間に笑い事じゃないだろうと言いたくなるような不安を掻き立てるものであった。

「じ、実際に、どんなことが起きるんでしょう？」

「そうね、まず地揺れね……起きたでしょ」

地震。その言葉は、帝国人のグレイやシャンディーには息を呑ませる効果があった。

だが日本人である伊丹にはあまり危機感を沸き立たせなかった。「数十年以内には大地震が必ずおこる」と言われるような場所で、日々暮らしているからだろう。

だから伊丹は「他には？」と尋ねた。

ハーディは伊丹の問いに即座には答えず、黙り込んだ。

杯を口に運んで一息に空にする。そしていかにも楽しげに告げた。

「何が起きているのか直に見て確かめてらっしゃい。そして、どうしたらいいかと考えなさい。それが貴方達をここに呼んだ理由よ。もちろん、今すぐじゃなくていいわ。まだ時間的に余裕はあるでしょうし、あなた達も忙しいでしょうから。暇になってからでいいの。でも、そんなに先延ばし

に出来ることでもないと言うことも、わかっておいて欲しいのよ」

03

「あんたの狙いは何ぃ？」
ハーディと伊丹の会話が終わると、今度こそ自分の番であるとロゥリィが尋ねた。
「この世界をより美しく、より素晴らしくすることかしら？」
「引っかき回すためって言えばいいのにぃ」
「そうとも言うわね」
ハーディはコロコロと鈴を転がすような声で笑った。
「その割にはぁ、繋ぐ先が適切とは言えないわよぉ。なんであんなところに穴をあけたのぉ？」
「単なる偶然よ。それに『門』から流れ込んでくる様々な文物によって、古くて硬くてガチガチになった帝国は見事に揺れ動いたわ。帝国は自国より強大な存在があることを知り、ヒト種によるヒト種のための国が、ヒト種だけで支えられなくなった。これから様々な種族が台頭してその地位も向上するでしょう。面白いことになるわ」
随分と傍迷惑な話だと伊丹は思った。その為に銀座でどれほどの犠牲者が出たのか。だがハーディ

はそう言うことを全く意に介さない相手のようだ。おそらくきっと、言うだけ無駄である。
「『門』を開いた理由がそれならぁ、今のあなたの動きは何を目論んでいるのぉ？」
「見てみたいのよ。人間が、これからどんな決断を下し、どんな行動をするのか」
「決断？　行動？」
「そう。わたくしは冥王としての責任を果たすために、アルヌスの魔法装置を破壊するつもりでした。そのためにはアルヌスを占領して、『門』を守っている異世界の軍隊をやっつけないといけないでしょ？　でもジゼルだけじゃ負けちゃいそうだし、ロゥリィ、貴女も手伝ってはくれないでしょ？　だから手駒を増やす必要があったのよ。それで炎龍を目覚めさせたってわけなの」
　何故と問いかけた時には得られなかった答えが、今になって与えられたヤオは愕然とした。
「そ、そんなことのために？　『門』を閉じるためとおっしゃるなら、最初からそう言って下されば、なんとでもやりようはあったのに。何も炎龍なぞを利用しなくても……」
「あら、そうかしら。言えば、本当に分かるのかしら？」
「ええ。言葉を理解できる相手なら、語ればわかってくれるはずです」
「情理を尽くして頼み込んでも、誰も手をさしのべてくれない。そんな経験をした貴女が、本気でそれを口にするの？」
　そう言われるとヤオも、言葉を返すことは出来なかった。
　部族を守るため、炎龍を倒すため、頭を下げて、縋って頼んでまわったのに誰一人として助けて

くれなかったのだ。最終的に腰を上げてくれた伊丹ですら、ヤオを助けるために動いたわけではない。

だが黙り込んでしまったヤオを後目にハーディは言った。

「いずれにせよ、あなた達に任せることにします。わたくしの邪魔をしたのだからその責任をとりなさい」

「責任って……何をしろと？」

「『門』を放置したらどうなるか、それを見てきなさい。そして、どうするかを決めなさい。わたくしは、黙って見ているだけにします」

それは面白いことを期待するかのような態度であった。伊丹は思わず挙手した。

「あの、すると、こちらに戻って来てご報告する必要があるんですか？」

「報告はいらないわ。現地にジゼルを行かせているから、あの子と合流しなさい。貴方達は、さっき言ったように、見て、どうすべきかを考えて、行動すればいいの」

「しかし考えろといわれても、俺は専門家じゃないですし」

「なら、分かる人間を連れて行きなさい。事の結果を想像できる人間を……」

確かに『門』が存在することによって、地震に始まる様々な異変が起きると言うならば、調査をする必要はあるだろう。だが、もう少し具体的に事象の説明が欲しいところであった。やっぱり連れて行くべきは、地震の研究者だろうか？

「なんだか、分かったような分からないような顔つきね。わたくしの言っていること、本当に伝わっ

たのかしら？」
　ハーディは、伊丹を見ていて自分の意志が伝わったかどうかが心配になったようである。
「ヨウジぃは、いつもぉこんな顔よぉ」
「いや、この程度の説明で分かれと言われても、流石に納得し難くて……」伊丹はそう言いながら後ろ髪を掻いた。
「いいわ。そう言うことなら、やる気になるように報償を出します」
「報償ですか？」
「ええ。個人的な利益があった方が、納得できるでしょ？」
「具体的には、どんな報償でしょうか？」
「貴方達を悩ましている問題を、全部ってわけにはいかないけど、かなりの部分で片づけてあげられます。それでどうかしら？」
「俺たちを悩ませている問題って言いますと？」
「これに困ってるんでしょ」
　ハーディはそう言うと手にしていた酒杯を投げた。
　酒杯は放物線を描いて、料亭の壁に掛かっていたカーテンに当たり甲高い音を立てた。いや、甲高い音を立てたのは、カーテンの向こうに隠れていた何者かの頭に当たったからだ。
　その何者かは、ぶちぶちとカーテンを引きちぎるようにして俯せに倒れた。

グレイとシャンディーは、倒れた男におそるおそる近づくと、手にしている短刀やら身なりなどから「この者は、刺客ですな。多分」と判断し、それの意味することを悟り戦慄した。何の予告もなく、しかも高機動車という追随不可能な移動方法でベルナーゴに来たというのに、刺客達はどうやって追いつくことが出来たのだろうか？

「全部片づけていただく……ってわけにはいかないんですかね？」

伊丹は、いっそのこと問題を根本的に解決してもらえないかと尋ねてみた。

「それは駄目。わたくしが片づけてあげるのは、ベルナーゴに来た連中だけよ。この娘を狙っている刺客に、夢のお告げを下しておいたから、他の刺客に先を越されまいって焦ってる連中はここに来るでしょう。でも、当然のことながら来ない者もいます。多分その者が一番やっかいでしょうね。それは貴方達が自らの力で解決すべき問題。要するに試練なの」

「夢でお告げって……やっぱりぃあんたぁ、刺客を招き寄せていたのねぇ」

ロウリィはその鋭い犬歯を輝かせながらハーディに険呑な視線を向けた。

もし、伊丹がハーディの頼みを頭から拒絶する態度に出たら、その刺客全部とこのベルナーゴでご対面すると仄めかされたはず。つまり、断るという選択肢は最初から奪われていたのである。

だが伊丹はロウリィを制して感謝の言葉を返した。

「まぁ、それでも助かります。レレイを狙う奴が減るってだけでも逃げるのは随分楽になりますからね。これでレレイも、ロンデルの学会に出席しやすくなるでしょう」

ハーディが刺客の大部分を片づけてくれるというのなら異変が起きているという場所を覗きに行って来るぐらいのこと、全然大したことではないのだ。しかも、暇が出来た時でよいと言う。どうせ任務であちらこちらをうろつくのだから、それを兼ねればいいだけである。

「呆れた。もしかして、まだ逃げ続けるつもりだった？」

「ぎりぎりまで逃げ回るつもりですが……不味いですかね？」

伊丹の答えを受けて、ハーディはロゥリィになんとかしてくれという表情を向けた。

「ねぇ、ロゥリィ。貴女がついてて、どうしてこんな大事な人生の真理を教示しておかないの？」

「必要がないからよぉ。これがヨウジぃだものぉ。このままで良いのよぉ」

ハーディは「信じられない」と呟くと教えを授ける教師のように伊丹に正対して人差し指を振った。

「いいですか？『問題』というのは、逃げれば逃げるほど、行かなければならないところ、帰るべきところで待ち構えているものなのです。それでも逃げようとすると、帰るところも行くべき所も失うことになるわ」

例え好意の持てない相手でも神様のお告げである。伊丹は頷きながら聞いた。

「……まあ、そうかも知れませんね。痛いほど理解してます」

「つまりは、分かってて逃げてるって言うの？」

「まぁ、痛いとか辛いのとか面倒くさいのは、俺、嫌いなんで。出来るだけ避けられたらいいなぁって思ってます。はい」

こんな奴に炎龍が墜とされたって言うの!?　とハーディは両頬を押さえ、目と口を丸くして叫んだ。

「まあ、ヨウジに本気を出させたかったらぁ、よっぽど追い込む必要があるわねぇ」

「そ、そうなの？　ジゼルから聞いてたのとずいぶんイメージが違うわ」

「あの、どんな風に聞いていらっしゃるのでしょう？」

自分についてどのような風評が流れているか気になって、伊丹はおそるおそる尋ねた。

「見敵必戦の戦闘狂だと聞いたわ。なんでも、五十ユン四方の地面を一撃で掘り返すほどの凄まじい力の持ち主って言っていたわぁ」

亜神ジゼルは、伊丹の能力を随分と誇張して伝えたらしい。負けた言い訳として敵を強大に語るというのもよくある話だが、いささか度が過ぎているように思われた。

「それ、完全に間違ってます」

「そうよぉ。全く正反対よぉ。ヨウジぃは何かというとすぐに逃げ出すもの」

ロゥリィの揶揄するような視線に伊丹は「ほっとけ。どうせ臆病者ですよ」と言い返した。

「いいのよぉそれでぇ。譲れない線を守るためなら、怖いよぉと言いながらも前に進むところは、ちゃんと見せて貰ったからぁ。いろいろと期待しているのよ」

そんなことをロゥリィが言うと、テュカとヤオの二人は揃って頷いた。

だがハーディは、「けれど……」と切り出す。

「ここから先の試練は避けて通ることは出来ないわよ。貴方達の敵はそこで手ぐすねを引いて待ち構えています。そろそろ覚悟を決めなさい。この娘を、学会発表に出席させるんでしょう？」

ハーディはそう言って自分の……レレイの胸に手を当てた。

「……もし、もしですよ……学会発表をしないで逃げたらどうなりますかね？」

「もうわかってるんでしょ？　貴方達の敵は諦めない。逃げれば住処のあるアルヌスへと行くでしょう。そして最後には大切な者を巻き込んで、犠牲は今よりももっと多くなる。それだけのことなのよ」

「あ、やっぱり？」

伊丹は、舌打ちすると眉間に深い皺をつくって唸った。

＊　＊

薄暗いチヌークの中で、小さな窓から入る外光を頼りに、レレイは手の中にあるハーディの髪を見ていた。

厳密に言えば、それはレレイの髪でもある。

ハーディに憑依されたことによって、お尻に敷いて座れるぐらいに伸びた髪を一本の三つ編みとして束ね、襟元でばっさりと切り落としたのだ。きつく密に編み上げたためにやや短くなっている

が、その長さはレレイの片腕の長さほど。その色は当然の事ながら慣れ親しんだ白銀だが、ハーディの神性を帯びているせいか、まるで宝石のような透明感のある輝きを放っていた。

「神官ならぬ身で、神たるわたくしをその身に降ろした褒美として、聖術の使用を許可します。これを触媒となさい。ただし一度でも使うと、用途はそれに定まって他のことに用いることは出来ないので、何に用いるかは、しっかりと考えなさい。あと、久しぶりにご馳走を口にしたせいか、ちょっっっとばかり食べ過ぎちゃったの。後でダイエットに苦労するかも知れないけど、そこのところはごめんなさいね。脂肪を身体の特定の部位に集めるって対処法も考えたけど、あのヒトの好みとは違うスタイルになっても嫌でしょ。だからやめて置いたの。わたくしって賢明でしょ？」

ハーディはレレイにそんな言葉を残して去っていった。

「その髪を見た時の、ベルナーゴ神殿の神官達の物欲しげな顔と来たらなかったわよね」

隣のトルーパーシートに腰掛けるテュカが、レレイに話しかけてきた。

神官達からすれば伸びたレレイの髪は、主神の躰。聖遺物として神殿に安置しておくべきものなのだ。だが、ハーディが褒美としてレレイに与えた物ならば取り上げるわけもいかない。主神のご意志に背く行為となるからだ。なので彼女らに出来たことと言えば、短刀でばっさり切り落としたために不格好となったレレイの頭髪を、「綺麗に整えましょう」と申し出て、その切れ端を掻き集めることだけであった。ベルナーゴ神殿の神官達は、レレイの髪の切れ端を白絹と縒り合わせて織り、聖なる布として神殿に祀るつもりらしい。

その後の経緯は、既に語った通りである。

ベルナーゴを後にしたレレイは、伊丹達に守られながらロンデルに戻って学会に挑んだ。

レレイをつけ狙っていた刺客のほとんどは、誘蛾灯に誘われるようにベルナーゴに集まって神殿の僧兵によって捕らえられたということである。ただ自分の手を汚さない笛吹男と呼ばれる刺客だけは、どうすることも出来ず、シャンディーがその奸計にひっかかり、学会の場で騒動を起こすことになり、これを引き揚げさせるために、帝都の皇城に乗り込んで、そもそもの発端であるゾルザルと直談判することで事態の解決にたどりついたのだ。

だが、ハーディとの約束がまだ残っていた。

それを果たすためにこれからクナップヌイへと向かわなくてはならない。自分の為に皆に迷惑をかけているという気分が重たかった。

「気にすることはないわよ。あたしだってすっごい迷惑をかけたじゃない？」

テュカはレレイに気にするなと言った。『貸し』や『借り』が増えたり減ったりのやりとりこそが他人と関わるということなのだから、と。この煩わしさを避けていれば、確かに気楽で身軽かもしれないが、その代わりに孤独という死に至る病を味わうこととなる。

「あたし、レレイのことも好きよ。だから、煩わしい思いをさせてくれていいわ。良かったら、互いに嫌な思いさせたり、させられたりしましょ」

レレイを挟むように反対側に座るロゥリィも、うんうんと頷いた。

「……よろしく」
レレイはこっくりと頷くと呟くように言った。
「そろそろ出発しますよ。みなさん、そろそろ座ってください」
伊丹の呼びかけを合図に、倉田達が装備や荷物で狭くなっている機内にぞろぞろと乗り込んで、空いているトルーパーシートを降ろして腰掛けていった。
最後に伊丹も乗り込む。
「Arunusu tower, Juliet Golf 5044, request IFR clearance.」
機体前方のコクピットからは、パイロットがアルヌス管制塔と交わすやりとりが漏れ聞こえていた。何やらそのやり取りが怒鳴り合いのようになったかと思うと、突然、「がんっ！」と何かを激しくぶつける音がした。何事かとコクピットを覗きこむと副操縦士が項垂れている。
「俺って奴は、俺って奴は……」
副操縦士がぶつぶつと呻く傍らで、機長が同情の色を湛えた視線を注いでいる。
「ど、どうしたんです？」
伊丹の問いに機長は「まぁ、なんだ……」と口ごもりつつ答えた。
「いや実はこいつ、管制英語の発音がちょっとアレな奴でな、コントロールから『日本語でＯＫ』とか言われちまったんだ」

『こちらアルヌスタワー。陸自５０４４へ。クナップヌイまで、計器飛行を許可する。写しの用意はいいか？』

機長の言葉を証明するかのように、普段ならば何を言っているのか分からない管制英語を垂れ流すスピーカーから日本語が聞こえる。

「書き取りの用意出来ました。どうぞ」

『おっ、その声はレレイちゃんじゃないか。相変わらず上手な日本語だね。だけど管制英語についてこれるかな？　じゃあデータを読みあげるよ』

レレイが流暢な日本語と、管制英語とで、気象データを書き取っているのだ。コンプレックスを感じるなという方が無理だろう。

「ご愁傷様です。こいつのことは余り気にしない方が良いですよ。比べるだけ阿呆らしくなるチート娘なんですから。苦手なことは人任せにするのが上手くやるコツです。下手の考え休みに似たりって言いましてね、悩むだけ無駄。開き直ったほうがいいです」

伊丹としては、これでも元気づけるために言ったつもりである。だが副操縦士にとってはプライドをさらに踏みにじられるように感じられたらしく「ぐえっ」と呻くと、さらに深々と項垂れてしまった。

「おいおいっ、伊丹！　全然慰めになってないぞ。頼むから傷口に塩をすり込むようなこと言わんでやってくれ」

「あ、済みません。つい……」
だが、苦情顔で振り返った機長、土浦(つちうら)一尉が見たのは、伊丹の背後から虎視眈々と副操縦士の座を狙うレレイの瞳だった。
「心身の状態が不良ならば、代わっても良い」
副操縦士の姿を見て、思わずそうしたくなった土浦だったが、それをしたら副操縦士のプライドは再起不能になってしまいかねない。
「いや……いいから。大丈夫だから」
レレイの声を耳にした副操縦士は、顔を上げると慌てて離陸の支度を再開した。落ち込んでなぞいられないと思ったのだろう。その姿は元気が出たと言うよりは、尻に火がついたようにも見えるものだった。
ま、伊丹にとっては、飛んでくれれば良いのである。
荷室を振り返ると、既に窓から外が見えるような良い席は、ロウリィや、ピニャなどの航空機初体験組が占領している。隊員達は、その隙間を埋めるようにして席に着いていた。
教授達は、伊丹の報告にあった世界の歪みという現象が、どのような形として現れているかを推測する話に熱中していた。そのせいもあってか、三人の座るシートの脇は何席分か空いていて伊丹はそこに腰を下ろすことにした。
「報告を読んだ限りじゃと、この世界では星の配列にずれが生じるという現象が起きているそう

じゃ」

養鳴の言葉に白位が答えた。

「そのことなんですけど、実は、日本側でも星の配列に変化が起きてないかって、問い合わせが出てきてるんですよ」

「なんじゃと!?　なんでそれを発表せんのだ」

養鳴と漆畑は顔を並べて白位に迫った。

「まだ、天文学者達が首を傾げている段階だからですよ。ズレも機材の異常かなって思う程度に収まってますから。だって常識的にあり得ないでしょう。短期間で恒星が移動するなんて。そんな事、口にしたら能力や見識が疑われます。だけど、酒の席なんかで『実は……』なんて言い出す連中が出てくれば、この話、一気に広がりますよ」

「そうか。つまり『門』を挟んで両側で、同じ現象が起きているということか」

養鳴は「う〜む」と唸りながら顎を手で被った。

「僕は報告書の写しを見せられた時、『門』が原因だったか！　って納得しましたよ」

「では、地震はどうなんじゃ？」

「有感、無感含めると日本は四六時中地震が起きてますからね」

「多少地震の回数が増えたところで、有意な異常と見なすことはできん、か……」

エンジンの出力があがり、それと共に凄まじい爆音が機内にも響きだす。

ふわっと浮き上がる感触によって離陸すると、初体験組は小さな窓に顔を押し付けるようにして、遠のいていく大地に見入った。
「うわっ、うわっ、うわっ！」
風に煽られて機体がヨーイングするとハミルトンはピニャにすがりついた。しかしピニャも緊張しているのか顔色がよくない。定員一名の怖がり叫ぶ権利を、まるでハミルトンに奪われてしまったかのように、じっと堪えている様子だった。
「この程度のことで狼狽えおって、見苦しいのぉ」
養鳴が怒鳴るように苦言を呈し、隣に座る漆畑教授が取りなした。
「勘弁してあげて下さいな、養鳴教授。何しろ、彼女たちは空を飛ぶものに乗るのは、これが初めてだそうですから」
「確かに、未開の地の人間が、文明の利器を見て驚くのは致し方ないことだ。だが儂らは観光に行くわけじゃないんだぞ。学術調査にあんな小娘を同行させて自衛隊は何を考えているのだ？」
「あれでも、帝国政府の要人なんだそうですよ。目的地は一応帝国の領域ですからね、彼女達はいわば通行手形みたいなものだそうです」
「む……そういうことならば仕方あるまい」
その脇では、カメラマンが小さな窓に顔を並べているピニャ達の様子を収録している。
「あの赤毛の女性が、帝国のお姫様だって本当ですか？」

栗林の妹に尋ねられると黒川は「はい。そうですわ」と答えた。
「帝国って、銀座に攻め込んで来た敵なんですよね。どうして、こんな親しげにしてられるんでしょう？　捕虜とかにしたわけじゃないですよね」
「いろいろとあったんですわ」
「そのいろいろのあたりを、ちょっと聞かせて貰えますか？」
メモ帳を取り出し目の色を変えて迫ってくる栗林妹に、黒川は辟易としているようであった。
チヌークは離陸するとすぐに白い幕のような雲の中へと突入する。
眼下に見えるはずのアルヌスの景色を楽しむ暇もなく、窓から見える景色は真っ白になってしまった。
見える物と言えば窓の外側につく雨の水滴ぐらいであろうか。
だが、しばらくするとその水滴もつくのが止んだ。そして直後に、青い空を背景に燦然と輝く太陽の鋭い光が薄暗かった機内に差し込んで来た。
見れば窓の外には、白い毛氈にも似た雲海が広がっている。雲の上へと出たのだ。
目の前の幻想的な光景に、ピニャ達は「うわぁぁ！」と思わず感嘆の声を上げた。
「て、天界ってこんな風景だったんですね、殿下」
「神々はこのような素晴らしい世界に暮らしておられるのか」
ピニャとハミルトンの会話を耳にしたロゥリィは「全然違うんだけどぉ……」と呟く。どうやら

行ったことがあるようだ。
「イタミ殿。妾はこの白いふわふわの上を歩いてみたい！　降ろしてたもれ！」
「歩いてみたい!!」
ピニャ、ハミルトンの二人揃っての要請であった。ハミルトンなどは、つい先ほどまで怖い怖いと叫んでいたのに、脅えた様子はどこにも残っていなかった。
だが伊丹は「いや～、流石に無理ですよ」と首を横に振った。
「どうして!?　イタミ殿、なんとかならないか？」
「これ、雲なんですよ。霧みたいなものなんです。降りたら最後、突き抜けてどこまでも墜ちちゃうんです。怖いですよ～。恐ろしいんですよ～。地面に激突する瞬間は、無茶苦茶痛いでしょうね。全身の骨がぽきぽきって折れて、ぐちゃっと潰れる瞬間を想像するとゾッとしますよ」
伊丹の誘導に従って想像してしまったのか、ハミルトンは両耳を押さえてガタガタ怯え、ピニャはぞくっと身を震わせた。
だが気丈にも反論した。
「や、やってみなければ、わからないではないか!?」
どうやら、ふわふわな雪原を散歩するような気分を夢見てしまったようである。
「いや……やったら死にますから。確実に」
「本当なのか？　妾を騙しているのではあるまいな」

「騙してません。信じないなら試して頂いても良いですけど、俺の見てない時にしてくださいよ。俺としては、自殺を見過ごすことは出来ないんですから」
「くっ。神々の住まう世界は、我らのような俗人は迎え入れてはくれぬと言うのか」
残念そうに握り拳を固めるピニャ達。悔しそうに歯がみした。
あまりにも悔しそうで、切なそうなので、見ている此方まで滅入ってしまいそうだった。
教授連中が、「お前、どんな虐めしたんだ？」と責めるような視線を向けてきて、部下の黒川と倉田が、「まあ！　倉田三曹聞きましたか？　隊長がピニャ殿下を騙して酷いことをしたみたいですわ」と、悪い評判をひそひそと囁きあったほどだ。
「なんだか飛び降りるとか、神々の世界へ旅立つとか、自殺を仄めかしてるみたいですね」
「俺のせいかよ？」
自分を指差して抗議の声を上げる伊丹。
「違うのぉ？」
ロウリィが囁く。
「ちっ……、わかりました。わかりましたよ。どうしてもとおっしゃるならスカイダイビング、してみますか？　今日というわけにはいきませんが、次に日本に来た折にでも」
「な……んだと？　すかいだいびんぐ？」
ピニャはパチクリと瞬いた。

「ええ。落ちる速度を怪我しない程度に和らげるパラシュートというものがありまして。単独の自由降下には一定のトレーニングが必要ですが、インストラクターにタンデムで抱えてもらって降下するレジャーがあるんですよ。……安くないけどね」

「やるやる！」

表情を一転させるピニャ達。一喜一憂という言葉があるが、その典型みたいな変化だった。

「イタミ殿。妾は空の散歩を楽しみにしているぞ！」

「ちょっとぉ……ピニャ達だけぇ？」

口を揃えて文句を言うロウリィとテュカ。レレイも控えめながら声を出していた。

「わかった。お前達もな」

「やったぁ！」

伊丹は思った。おっこちることの何がそんなに楽しいんだろう？　と。この男は降下を楽しいと感じたことがないため、無邪気に喜ぶ女性達を不思議な生き物のように眺めるしかなかった。

きっとガラス越しに空を眺めているから、楽しそうに感じるのかも知れない。

爪先からわずかな先が「奈落」という場所で空を眺めれば、きっと別の心境になるはずだ。開口部から吹き込む外気の奔流に身をさらし、地上は遥か彼方。そんな状況になれば彼女たちの笑顔も恐怖に引きつるに違いない。

伊丹はその様を想像し、邪悪そうにほくそ笑もうとした。だが、自分の恐怖体験が先に思い起こ

されて失敗してしまった。

チヌークは、まるで波のない湖に浮かぶ遊覧船の如く、雲海を滑るように進んでいた。

クナップヌイに近づくと、ゆっくりと高度を下げる。やがて船底に穴でもあけたかのように、機体は完全に雲の中に潜りこんでしまった。

窓の縁のすぐそこに、雲の絨毯がたゆたっているという光景に魅入られていただけに映画の再生が突如中断されたかのような興醒めながっかり感が乗客達の間に広がる。

「窓の外が、また真っ白になってしまったな」

ピニャが言い、伊丹が答えた。

「ええ、高度を下げてるんです。このあたりも下での天気は良くないみたいですね」

実際、窓には霧状の水滴がまとわりついていた。

機体が上下、左右に揺れて安定しない。しかも、なかなか視界が開けない。

高度を下げるときの急激な気圧の変化から耳が痛くなることを覚悟していた隊員達は、耳抜きの準備をしていたのになかなかそれが起きないことから、機体の降下速度が相当にゆっくりであることに気づいた。

「随分と慎重に高度を下げるんですね」

「多分、初心者がいるので、気を遣ってるんでしょう」

そんな会話が黒川や倉田達の間で交わされている。だが実際はそんなものではなかった。

ここは飛び慣れた演習場の空ではない。初めての土地だ。そんな場所の雲中で高度を下げることは、航空機のパイロットにとっては恐怖そのものなのだ。

日本の空ですら、救難ヘリが視界のない雲中で山に激突してしまう事故が起きる。パイロットが自機が今どんな姿勢をとっているかを理解できなくなる空間識失調という現象に陥るのも、視覚による平衡感覚補整を脳が行えない雲中飛行時に多い。

二人のパイロットが「セットリング・ウィズ・パワーを気をつけろ」「この高度の山はないっていう、地形図を信じて後は祈るだけだ」と歯を食いしばり、突然目の前に地面が広がっていても対処できるようにと必死になっていたことを知れば、伊丹は落下傘をつけて飛び降りた方がマシだったと思ったかも知れない。

実際、雲を突き破ると目前にグランドキャニオンにも似た崖淵と、それが作る段丘の大地が広がっていた。充分に距離があって安全であったにもかかわらず、その巨大さに錯覚したパイロット達が、慌てて操縦桿を引いたほどだ。

「おっと!」

盛大に揺れて、みんな、トルーパーシートから投げ出されまいと慌てて掴まった。

見れば、眼下には雨と霧の降り注ぐ峻険な土地の風景が広がっていた。

「何だ、あれ?」

だが、レンズを外に向けていたカメラマンが呻く。谷間にたゆたう雨霧が、我々が知るような白いものではなかったのだ。

その色は、まるで澄んだ水に墨汁を流したかのような黒。表面は波のない水面のごとく綺麗な平面である。そんな黒い霧が、丘陵の渓谷、谷間を埋めるように大地を覆って、あちこちの山の頂がまるで黒い海に浮かぶ島のようであった。

「有毒ガスか何かでないといいがな」

「ええ」

教授達が渋面で語る。パイロットも同じように思ったのか、黒い霧に触れることを避けるように高度を上げて機体を旋回させた。

当初予定した谷間に着陸するのをあきらめ、機体を降ろす場所を探す。

「どうしました？」

操縦席から呼び出された伊丹が、機長より予定の変更を告げられた。

「伊丹二尉。悪いが予定変更だ、ここは駄目だ。ちょっとばかり離れた場所に降ろすぞ」

「はい、一尉。お任せします」

「おうっ……正直、助かるぜ」

陸上自衛隊の性格は「用意周到・頑迷固陋（がんめいころう）」という言葉で表現され、予定の変更を非常に嫌う。操縦者の技量は、それがために向上してしまうぐらいである。だが伊丹はいろいろな意味で適当な

ので、予定に拘らない。そのため着陸地点の選定など一切をパイロットに任せてしまった。
「土浦さん、あの島みたいになってるとこの頂上なら、降りられますよ」
副操縦士が指さしたが、機長は否定した。
「この近くは駄目だ。計器がアテにならない」
「計器が？」
「この土地の磁場か何かだろうか？　見た目と計器の数値とが微妙に違って来るみたいだ」
機長は、長年の飛行経験が示す感覚と、計器が示す数値との間にずれがあることを察知していた。これまで無かったことが突如起こったことから、この辺に着陸するのを避けることにしたのだ。
ちなみに機長は一等陸尉で、階級上は伊丹の上官にあたる。しかし全体の指揮は伊丹が執っていた。どうしてこういう事が起こるのか、このあたりの説明としては「軍医は階級がどれほど高くとも、部隊を指揮することは出来ない」という極端な例示で理解していただければ良いだろう。
機長は黒い霧の畔（ほとり）から、少しばかり離れたところにある山の頂が棚のようになっている場所を見つけ、チヌークを着陸させた。

「お姉ぇさま。お待ちしておりました」
上空から見る限り、周囲には民家が無かったこともあり、クナップヌイを無人の地と思っていた。だが、降り立った伊丹達を出迎える声があった。

見れば、雨に湿った灰色の髪を肌にまとわらせ、背からコウモリにも似た翼をいっぱいに広げた竜人女性が頭上に浮かんでいたのだ。

見た目二十代前半の肢体。深緑色の肌にはトライバルのタトゥーが入っている。袖を肩で切り落とした白ゴス神官服をまとい、縦に割れた金色の瞳にどんよりとくすんだ輝きをたたえていた。

伊丹はその姿を見た途端、部下達とともに一斉に銃を構えた。と言うのも目の前に姿を現したのが、その女性だけでなく無数の翼竜だったからである。空を覆い尽くすような数の翼竜が、伊丹達を取り囲んで獰猛な牙や爪を見せつけていた。

「あれは誰なのだ？　知っているか？」

ピニャの問いに、ＬＡＭを構えるヤオは「真後ろに立たないでください。危ないですよ」と告げた後に要点のみを手短に答えた。

「あの方は、冥王ハーディの使徒で、亜神ジゼル猊下です」

「なんと。あの方が……」

ジゼルは死神が振るうような大鎌を抱えたまま地に足を降ろすと、何の非もない一般人に理不尽な難癖をつけるチンピラにも似た表情で周囲を見渡した。そして伊丹の姿を発見するとびくっと体を震わせた。じわじわっと、後ずさりながら口を開く。

「こ、この前は随分と世話になったよなぁ。こ、こ、ここ、ここであったが千年目……」

「帰るわよぉ」

だが、ロゥリィがあっさりと背を見せると、途端に縋るような物言いと態度に変わり、「あっ、待って下さいよぉ。お姉さま！」とロゥリィの背中にすがりついた。
「お姉さま達に帰られたら、主上さんに叱られてしまいます！」
「だったらぁ、もう少し態度を改めなさぁい。以前から思っていたのだけどぉ、貴女のその態度や言葉遣いは神官として少し問題よぉ。いくらベルナーゴ神殿の規律がゆるいと言ってもぉ、少しゆるみすぎてるんじゃないぃ？」
ジゼルは青い肌に脂汗をじとっと浮かべた。
以前、よそ行きの言葉遣いに挑戦したことがあったが、鉄火肌な物言いが染み付いて、丁寧に話そうとすると舌を噛むのだ。ここで急に改めろと言われても無理があった。
何かを話そうとして口を開くも、言葉が出てこない。ジゼルは、まるでしゃべり方を忘れてしまったかのように、情けない表情となった。
「……」
涙で目を潤ませるジゼルの背中を、ロゥリィは同情するかのように叩いた。
「わ、わかったからぁ。努力する姿を見せてくれるだけでいいわぁ」
ジゼルはぺこりと頭を下げた。
だが、皆からの生温い視線に気が付くと「おら、お前。何を見てやがんだ？」と、こんな奴にまで舐められて溜まるかと言いたげに再度凄む。

「ジ・ゼ・ル？　今注意したぁばかりでしょぉ？」
「は、はい……控えますですはい」
こうして、べらんめい調を改め訥々と敬語を喋ろうとする亜神が完成したのである。
その姿を見ると、伊丹の部下達も重たい銃をいつまでも構えているのが馬鹿馬鹿しくなったようで、指示もないのに銃を下げていた。
周囲を取り囲んでいる翼竜達まで、脚で頭とか掻いている。その表情もどこか「やれやれ」と呟いているように見えたのもきっと錯覚ではないに違いない。

「で、わたしたちぃに見せたい異変って、やっぱりアレなのぉ？」
「あ、え、はい。間近で見るにはこの山を下らなきゃなんねぇ……ですから、こいつらに乗ってください。お姉さま」
ジゼルは口笛一つで翼竜を呼び寄せるとロゥリィ達を乗せるよう告げた。
「こ、これに乗れと言うのかね？」
養鳴教授の狼狽えるような言葉に眉を寄せるジゼル。
「神経の細かい奴だなぁ。いや、違う！　えーと、ふ、振り落としたりしないように言い聞かせてありまするゆえ、心おきなくごゆるりとお乗り遊ばせ。あっ、一頭につき二人までござる」
ロゥリィの鋭い視線に狼狽えたためか、ジゼルの物言いが何やら面白いことになっていた。

早速、ロウリィとレレイとテュカとヤオの四人がジャンケンを始める。
「はっ、やっ、ほっ、とっ」
あいこが三回続いて四回目で勝ち負けがつく。チョキを出したヤオが右腕を天に突き上げて「やたっ！」と歓声をあげ、他の三人が「くっ」と悔しげに俯く。
こうして翼竜への騎乗はロウリィとテュカ、レレイと養鳴、漆畑と白位、栗林妹とカメラマン、ピニャ主従、そして伊丹とヤオの組み合わせとなった。
ちなみに桑原達は、チヌークの警備もかねて着陸地点に残る。主に宿営の支度が担当であった。
ヤオは「勝てるとは思わなかった。此の身の運気も上り調子になってきたようだ」と伊丹の手を握る。だが伊丹は残念そうな表情で答えた。
「ヤオ、悪い。実は俺、こういうの駄目なんだ。だから手綱を頼むわ」
「えっ、まさか炎龍を撃った緑の人ともあろう御身が翼竜ごときに？」
だがそれは冗談ではないようだった。伊丹は真剣に青ざめた表情をしていた。
「お前だから打ち明けるんだけど、俺、実は高いところ苦手なんだ」
「えっ！　けれど、へりこぷたーとかは大丈夫だったようだが？」
「ああ言うのは不思議と大丈夫なんだ。掴まるところもあるしな。だけど、見てくれよこれ」
目の前に鎮座するのは「巨大なワニ？」と思いたくなるような生き物である。獰猛な瞳に、鋭い牙。ただこれに触れとか、跨がれという程度のことなら何とか出来るかも知れないが、身を任せて

飛ぶとなるとどうしても尻込みしてしまう。ましてや操る事なんて出来やしない。だからこそ恥を忍んでヤオに頼むのだと伊丹は囁いた。

「言っておくけど、これは絶対に内緒だぞ。ヤオだから打ち明けたんだからな！」

しかし、此の身が手綱を取って大丈夫だろうかという不安がヤオの脳裏に走る。

自分の運の悪さを思い返すと、かえって危険なような気がしたのだ。

だが、高所が苦手だと言い、翼竜を前に青ざめている伊丹に、手綱を押しつけるのも可哀想である。何よりも伊丹の役に立ちたいというのが今のヤオの心情だった。

「大丈夫、最近の此の身の運気は向上している。悪いことはこのところ起きてない。ジャンケンにも勝てたではないか。聖下からいただいた護符もある。だから大丈夫、大丈夫」

胸にぶら下げた五円玉を握りしめながら自分にそう言い聞かせたヤオは、翼竜にひらりと跨がると「ささ、ヨウジ殿。参られよ」と自分の腰をポンポンと叩いた。

伊丹は、おそるおそる翼竜に触りながらその背によじ登る。

「振り落とされないように、しっかりと此の身に捕まるように」

「こ、こうか？」

「もっとしっかり。遠慮などしてはいけない！」

伊丹は、ヤオに指図されるままに、彼女の細い腰に腕を回し、そのなまめかしい背中にぴったりと張り付いた。

それを目撃したテュカは、自分の右手に「なんでパーなんか出したの、あたしぃ！」と苦情を叫び、ロゥリィは「くっ。羨ましいぃ」とヤオに恨めしげな視線を向けた。

レレイは自分の右手をじっと眺める。

養鳴に「お嬢ちゃん、手がどうしたか？」と訊ねられると「計算を間違えた」と答えている。どう計算したらそういうことになるのか、「五回目で勝てるはずだった」と宣(のたま)っていた。

「ヨ、ヨウジ殿。御身の吐息が背中に……」

体にぴったりとしているボンテージ鎧は、伊丹の吐息の熱さをダイレクトに伝える。おかげでぞくぞくっとした感触が背筋に走りヤオは思わず仰け反った。

「あっ……」

だが伊丹はそんなことにも気が回らない様子で、必死にしがみついていた。安全ベルトのような身体の固定具もなく、パラシュートもない以上、我が身を託せるのはヤオだけなのだ。

「ホント、ヤオが一緒で助かったぜ」

「えっ？　それはどうして？」

「だって、ロゥリィやレレイや、テュカにしがみつくわけにはいかないだろ？」

伊丹がそう口にしたのは主に体格的な理由からであった。他の三人は伊丹より小柄なので、しがみつくというよりは、抱きしめる格好になる。そのため伊丹の方が支える側にまわらなければならないのだ。その点、背の高いヤオは頼り甲斐がある。

だがヤオは、伊丹の言葉をそのようには受け取らなかった。自分だからよいと言っているように聞こえたのだ。

「あ、こ、此の身がよいとおっしゃるか⁉」

嬉しそうに、勇気を得たように背筋をしゃんと伸ばしたヤオは「わかった。任せておかれよ」と翼竜の手綱を握った。自分は運が悪いからと、いつも控えめで従属的な振る舞いをするヤオだったが、この時ばかりは凛々しく毅然とした態度となった。翼竜の胴を軽く蹴り、伏せた姿勢から立ち上がらせる。

「おおっ、うわっうわっ！」

伊丹は思わず叫んだ。断崖絶壁の縁から見下ろす風景は、足場がしっかりしていても肝が冷えるのに、不安定な動物の背の上ともなるとそれが数倍にも感じられるのだ。

ヤオは伊丹を振り返って心配するなと告げた。

「大丈夫だ、ヨウジ殿。決して此の身から手をはなさないように。さりげなくだったら胸を触るのも許可だ。さすがに皆の見ている中でわしづかみにされるのは恥ずかしいが、どさくさに紛れてだったらいつでも良いからな」

「人聞きの悪いこと言うな！　今の俺には、んな余裕は無い！」

目をぎゅっとつぶっている伊丹に出来ることは「とにかく安全運転で頼む」と叫ぶことだけだった。

こうして支度が調って、翼竜達は航空母艦から発進する艦載機のごとく翼を広げた。
「晩飯の用意して待ってますからね」
倉田がまるで発艦士官のごとく誘導しながら「さよ～なら～」と手を振る。
「んじゃ、俺達行ってくるから。後を頼むわ」
皆の準備が整ったことを確認したジゼルは、自前の翼を大きく広げた。
そしてハングライダーの離陸のように崖を蹴る。翼竜達も、その後に続いて崖から離陸して速度を得るため、急速に高度を下げていった。
航空機と違って生物の背の上というのは独特の不安定さがある。内臓を下から押し上げるような落下の感触に伊丹は、「うわぁっ」と思わず叫き、渾身の力でヤオの柳腰を抱きしめる。
「うふっ！　仕方のないおヒトだ」
思わずヤオの表情がほころぶ。だがその瞬間、前方を飛んでいるテュカやロゥリィの視線がヤオを貫いた。二人の口元が何やら不穏な言葉を連ねているのが見えて、急速に背筋が冷えた。
具体的にはテュカが「鎮まれ、鎮まれ、あたしの右手」と拳を振るわせ、ロゥリィは「主神エムロイ。あの者の罪をお許し下さい。あの女は自分が何をしているのかぁ、全くぅ理解していないのですぅ」と唇を暗黒色に染めて祈っていた。
ふたりの目の色は呪いの色彩を帯びていた。実際はそうではなかったかも知れないが、ヤオの目にはそう見えた。そして、ささやかに膨らんでいたヤオの自信は、急速にしぼみ、伊丹に選ばれた

という幸せ感に隠されていた不安が急速に頭をもたげ始めた。
「ああ、あたしの右手が勝手に……風よっ！」
さらに悪いことに、金髪エルフの右手を乗っ取った邪気が、精霊魔法を放って、ヤオの胸に下がっている護符（五円玉）の革紐をぷちっと断ち切った。
虚空に落ちていこうとする五円玉。それを見てヤオは叫ぶ。
「ああっ！　なんてことを！」
その瞬間、ヤオは手綱を放り出すと、五円玉に飛びつこうと翼竜の背から身を投げた。
「危ない、ヤオ！」
ヤオにしがみついていた伊丹も、巻きこまれて落下しかかる。だが伊丹は両の股で翼竜の胴を締めつけて懸命にぶら下がった。
こうして二人は翼竜から逆さまにぶら下がることとなった。
なのにヤオは自分の命綱ともいえる伊丹の腕を邪魔だとばかりに引きはがそうとする。
「ヨウジ殿。放してくれ！」
「馬鹿、そんなことをしたら死んでしまうだろ！　はやく手綱をとれっ！」
「ダメだ！　あれがないと此の身は、二人の呪詛が！」
「馬鹿！　暴れるな！　滑ってるって、このままだとすっぽり抜けるっ！」
折角支えているのに暴れるものだから、ヤオの身がするすると抜けて行こうとしていた。なんと

か腰回りで止めたが、脚をバタバタとされたためヤオの身体の向きがくるりとひっくりかえり伊丹と向かいあう体勢になる。

だがこの体勢になると言うことは彼女の豊かな胸に伊丹が顔を押しつけることを意味していた。

「い、息が出来ん」

暴れるヤオと呼吸困難。二つの悪条件が重なって、伊丹の腕からヤオの腰が抜けた。辛うじて股のあたりで支えたが、伊丹は頭上を流れていく恐怖の風景とヤオを落とすかも知れないという恐怖で絶叫した。

「だあぁぁぁぁ！　手綱、手綱をとってくれっ！　ヤオっ！」

ヤオのすぐ目の前には、翼竜の手綱がぶらさがっていた。

だがヤオは五円玉を失ってしまったことに呆然とするばかりである。どうやら自分がどういう状況にあるのか気がついていないようなのだ。

「駄目だ、駄目だ、駄目だ。あの護符が無いと悪いことが起きる！　落ちる！　転ぶ、財布を落とすっ！　不幸になる！」

「馬鹿！　不幸なのは今の俺だ！」

自分の意思で飛行している翼竜達は、乗っている者が手綱をとろうがとるまいが関係なく、斜面のわずかな上を滑るように滑空して、険しい谷間を縫うようにして飛行していた。

三十分ほどすると突如開けたところに出た。

黒い霧を湖に例えるならば、畔にあたる場所に翼竜達は着地した。皆、無事に降り立つことが出来たが、伊丹とヤオの二人は放り出され立ち上がることも出来ない。伊丹などは疲労困憊して、息も絶え絶えである。だが、そんな二人を誰も振り返ろうとはしなかった。

「これです。お姉ぇさま」

養鳴と漆畑、白位の三人の学者と、栗林菜々美は目の前に広がる光景に絶句した。カメラマンはカメラを構えると、その無惨な光景を記録に留め始めた。

「こ、これは……」

それは高原の山裾や谷が、黒い霧によって覆い尽くされそうになっている姿であった。上空からも見えたが、間近で見るとその影響の酷さがよく分かる。

翼竜から降りたテュカは片膝を着くと、黒い霧……間近で見ると霧と言うより霞、あるいは煙にも近い……に触れないようにしながら植物を丹念に調べ、悲しげに呻いた。

「酷い……」

「何が起きているの？」

「死んでしまっているわ。生きとし生けるものの全てが、生の営みを止めてしまっている……」

黒い霧によって根元を覆われた植物群のことごとくが、緑の姿のまま枯死していたのだ。

葉が紅くなり落ちるならそれは自然のことである。だが落葉しない樹の葉まで緑色のままことご

とく落ちてしまっているという姿は、まさに異様であった。

あたかも黒い水のように広がる黒霧。その霞の向こう側に昆虫の死骸を見つけたテュカは、枝を二本拾って箸のようにしてつまみ上げた。それは、まるで今さっき死んだがごとく、新鮮に見えた。水気すらも残っているのだ。

「今さっき死んだばかり？　それともこの黒い霧の中では死んだ植物や虫が、腐りもしないってこと？」

つまりは腐敗菌までもが死んでいるということである。

現代科学の知識を持つ養鳴、漆畑、白位はテュカの手元を覗き込みながら、その原因を「放射線ですかね？」「いや、ガスかも知れない」など予想しあっていた。

剣呑な単語を耳にした伊丹は慌てて化学防護機材からガイガー計数計を取りだす。

あちこちに機械を向けその数値を読んで「自然の数値内です」と告げる。さらにガス検知器を取りだすと黒い霧の中にその先を突っ込んで毒性の有無を測定する。しかし検知管の色彩変化を教範と並べて確認するも、毒ガスの存在を裏付ける測定結果が出ることはなかった。

ジゼルが、雲海の沖に岩礁のように突き出す丘の頂を指差して語る。

「あたいが主上はんのご指示でここに来たのは、ひと月も前のこと……です。その時は、この霞はあのあたりまでしかなかった……んです。それが今はここまで広がっちまったんだ」

「これは、もしかしてアポクリフ……」
ロゥリィは口を押さえながら呻いた。
「アポクリフ？」
「数万、数千万、数億とも言われる年月の果てにぃ、神々が去りぃ、人々もいなくなって世界はゆっくりと虚無の霧に包まれて原初の混沌に帰っていくと言われているわぁ。その虚無の霧の名がアポクリフ」
「って、まだロゥリィたちだって居るじゃん」
「そうよぉ。だから、まだこんなものが現れるはずがないのよぉ。ずっとずっとずうっっと、将来のはずなのよぉ」
ロゥリィはそう言って打ち拉がれたようにしゃがみこんだ。
「漆畑君。これを何と見るかね？」
「一見すると、スモッグのようですが……」
漆畑は斜面を少し下ると、水面にも似た黒い霧の表面へと手を伸ばし、ジゼルに止められた。
「気をつけな。深く突っ込むと指が無くなっちまうぜ」
そう言って、ジゼルはまだ枯れていない立木から葉の茂る枝を手折ると、その先を突っ込んでかき回した。そして、引き抜いて漆畑の目の前に突きつける。
枝の先についていた青い葉っぱは、まるで液体窒素につっこんだように、軽く触るだけで砕けて

しまった。
養鳴も同じように枝を手折ると黒い霧にその先端を突っ込んだ。
水蒸気やスモッグの類であれば、ドライアイスで作った煙のように攪拌(かくはん)すればそれなりに波うったりと、反応してみせるものだ。だが、それはまるで影のように手応えがなく、その場に固定したまま動かない。
「表面から四〜五センチくらいなら、どうにか透けて見える程度の透明度じゃな」
漆畑は鞄から、コンビニの買い物袋を取り出すと、中身の焼酎やツマミの類を鞄に放り込み、レジ袋だけを掴んだ。そしてしゃがみ込むと、それであたかも水を汲むかのようにして、黒い霧を浚(さら)った。
だが、何度繰り返しても、すくい上げたビニール袋に黒い何かが溜まることはない。レジ袋を入れれば、その内部には確かに黒い霧状の何かは侵入するというのに……。
「うむ。どうもこれは気体でも液体でもないようじゃ。そればかりか『物質』とも言えん」
養鳴の言葉に、白位、漆畑の二人は「そうですね」と頷いた。
水たまりを覗き込む子供のごとく、大の大人三人がしゃがんで顔を寄せ合って黒い雲を観察している。その霧は袋を入れると、ビニール表面を透過しその中へと侵入する。そしてビニール袋を持ち上げても中に溜まらず、袋の中には何も残らないのだ。
「もしやとは思うが、これは影のようなものではないか？」

「影ですか？」
横からニュッとマイクが突きつけられた。傍らで菜々美がニコッとした笑顔で養鳴の解説を待っている。傍らにはカメラのレンズも光っていた。
そんな彼女の笑顔に、学者達は頷くとさらに解説を始めた。
「まだ、そうだとはっきりしたわけではない。だが、これは余剰次元からの影ではないだろうかと儂は思っている」
「じ、次元ですか？　ＳＦみたいですね」
「うむ。いかがわしい似非科学っぽく聞こえるだろう。儂もそう思う。だが、実際には立派な学問の研究分野だ。ジュネーブでは、大型ハドロン衝突型加速器を用いて、第五次元の存在を証明すべく実験がおこなわれておる」
「はあ、そうですか……でも、こんなふわふわってしているというか、厚みのあるものが影と言えるんですか？」
「うむ、良い質問だ。儂らの住む三次元時空に置いては、影と言えば平面すなわち二次元として認識されるものだからな」
「ええ」
「しかし、ここに立体的な、すなわち三次元の性質を有する影が存在するとすると、余剰次元の存在を示唆することとなり得るんじゃよ」

「ふ〜ん」
菜々美は合点がいったかのように頷いて見せた。養鳴教授もその反応を見て好々爺のように微笑んだ。
だが菜々美は笑顔で言った。
「わかりません」
「あ、頭の悪い奴め！　これだけ説明しても理解できないと言うかっ!!　胸にばかり栄養が行って、頭に行っとらんのじゃろ！」
こいつめこいつめと、菜々美のおでこをペシペシと叩く養鳴教授。菜々美は頭を抱えると地面を転がり回った。
「ひえぇぇぇぇぇぇぇぇ、ごめんなさい。でも、ホントに理解できないんです」
「まぁまぁ養鳴教授、抑えて抑えて。説明の真ん中を省いて理解できる学生なんて今日日いませんよ。それに三次元的性質を有する影があると、余剰次元の存在を示唆するなんて理論、わたしも初耳ですよ」
「そりゃ、そうだろう。儂が今思いついた」
二の句の継げない、漆畑と白位。
状況が理解できない栗林菜々美は教授達の顔を「なに、どうして？」ときょろきょろ見つめる。
この直後「この程度のこと、直感で理解できなくてどうする!!」という声がクナップヌイの山間

部に響くこととなった。

陽が落ちて、辺りが闇に包まれる夜。

半日にわたる調査活動を終えた一同は、晩の食事をとっていた。献立はもうお馴染みとなった戦闘糧食で、嫌いだと公言する者が滅多にいないカレーである。

雨はあがり空は星の瞬く晴天となった。だが、地面がぬかるんでいることもあって腰を下ろす場所にも事欠く有様である。そのためチヌーク機内が食堂代わりになった。

ガツガツと飯盒に盛りつけたカレーライスをかっ込むジゼル。

「美味い、美味いぜこりゃ」と瞬く間に二人前、三人前と平らげていった。

白ゴスをまとった女性が、がばっと大股開いて座り込み、ものすごい勢いで食事をしている姿は、ワイルドとかいう以前に、女性的な何かを完全に放棄しているとしか思えない。ハーディも大食らいだったが、食べる姿に品格があった。天と地ほどの差がそこにあるのだ。

容姿が素晴らしいだけにもったいないことである。そんなことを思いつつ伊丹はヤオを振り返った。

するとヤオは、目が合っただけで何も言わないうちから「はい」と腰を上げ、おかわりの支度を始める。

「こりゃ、まだ喰いそうだな。もう一人前追加して温めてやってくれ。それと、ついでだからみん

なに珈琲でも入れてやってくれ」と言おうと思っていたのに、その前にヤオが働き出したので伊丹は、ぱくぱくと口を開けたり閉じたりするだけになってしまった。

「へぇ、目と目で通じ合っちゃうなんて、凄いわね、ふ～ん」

テュカの放った皮肉混じりの言葉にヤオは「へへん」とドヤ顔で五十円玉のぶら下がる自分の胸に触れた。ロゥリィから貰った護符をなくしたと、この世の終わりのごとく嘆くものだから、伊丹が財布から取り出して「五円玉の十倍分だぞ」と言って渡してやったものだ。現金なものでヤオはそれだけで元気を取り戻した。いや、そればかりか浮かれてすらいる。

「ヨウジ殿が何を求めてらっしゃるのか、ここで感じるのだ」どうも、調子に乗っているらしい。

「あら、そう。よかったわね」

「呼び名もヨウジ殿になったみたいねぇ」

「そろそろ距離を詰めてもよい頃合いだと思ったのでそう呼ばせてもらうことにした。おおっ、感じるぞ。今宵はきっと、ヨウジ殿から夜伽（よとぎ）の誘いを受けるだろう」

皆の視線を浴びた、伊丹は「ないない、ありえない」と叫ぶ。

だがヤオはレトルトの戦闘糧食の用意を鼻歌交じりにやっている。そして伊丹をチラと見て「ヨウジ殿は照れているようだ」と宣った。

それを見たロゥリィは、テュカとレレイにぼそっと語りかけた。

「自分の願望と現実の区別がついてないみたいぃ。今夜は監視が必要ねぇ」

「そうね」
「了解した」
そんな不穏な雰囲気を払うように伊丹は話題を変えた。
「神様の使徒って仕事も大変だね」
伊丹の言葉に、ジゼルはスプーンを口に運ぶのを、一瞬止めた。
ぼそりと「お前のせいだ」と呟く。
「なんで俺？」
「龍の件さ。あの件で、主上さんにお叱りの言葉を賜っちまったのさ。罰としてお前達が来るまでここで黒い霧を見張れって……」ロウリィからの突き刺さる視線に首を竦めて「……言われました」と敬語に口調を改めた。
「もしかして飯抜き？　食糧の補給とかも無し？」
「雲の上のお人が、こっちの飯のことまで心配するかってんだ。そういうのは、それぞれの才覚でやるもんだ。最初は、喰える野草とか、動物を狩ったりしてたさ。けどよ、この辺の生き物はみんな死ぬか、逃げるかして獲物がちっともかからなくなっちまったんだ」
ジゼルはそう語ると涙ながらにそっぽを向いた。
その視線の方角では、天文学者の白位が望遠鏡やカメラなどを据えて観測と撮影をしている。
「あれは何をやってん……ですか？」

「夜空の星を記録に残そうとしているそうです」
ヤオが、カレーのお代わりを差し出しながら説明した。
栗林菜々美の相方とも言えるカメラマンも、その作業が自分の専門分野に近いことから、白位を手伝っている。もちろん報道に用いる映像を収録しながらである。
その一方で養鳴と漆畑の二人は、チヌークの荷室に並べた簡易ベッドに座って、コップになみなみと注いだ酒に舌鼓を打っていた。
菜々美は二人の会話を取材すべく、一升瓶を抱えてお酌し、ひたすらご機嫌をとりながら話に耳を傾けている。皆、今日行った調査の結果を、養鳴ら学者達がどのように考えているのかを知りたがって周りに集まっていた。
「さて、養鳴さん。今後の調査をどう進めましょうかね？」
漆畑の発言に養鳴は顎を摘んで唸った。
「うむ。まずは文科省と交渉して、本格的な調査の予算を認めさせねばならないじゃろう」
「ですが、そんな時間ありますかね？」
「そうじゃな。確かに、あのアポクリフとやらが広がっているというならば早急に手を打たねばならん。『門』の存在が原因という示唆があるなら、早い内に『門』をなんとかしてしまわんとならんだろう。そうなると、調査は来年度などと悠長なことは言ってられんからな」
「では、あのアポクリフは『門』が存在することによって、現れたものだということで良いんですね」

結論を急ぐ栗林に対し、養鳴は「儂らにそんなこと分からん！」と答えた。
「『門』という現象そのものが、儂らには理解不能なんじゃぞ？　理解不能の現象に、さらに理解不能な出来事が重なったと言うだけで、その因果関係を立証してみせることなぞ不可能じゃ」
「じゃあ、この調査には何の意味があったんでしょうか？」
「よく分からん現象が起きているということをはっきりさせただけじゃ。この現象を理解するには、さらなる調査が必要なんじゃ。それが分かったことが今回の収穫といえるじゃろう」
「でも、それだったら別に『門』を閉じる必要は無いんじゃないですか？」
「そうかもしれん。だが違うかもしれん。対応を決めるのは政治の領域じゃからな。科学的に確かなことは言えなくても、その周辺で起こっている出来事から危険を推し量って、対処を決めなければならないという事は結構あるものなんじゃよ。例えば東海地震の予知などがそうじゃろ？　何時起こるかわからんが、準備だけはしなければと言う話になっておる。こちらでも恒星の観測位置のズレやら、地震やら、あのアポクリフやらの異常が起きておる。それらの状況から見れば、何らかの手を打つことが必要なことだけは確かじゃ。確実なことは言えんが、分かってからでは手遅れということもあるんじゃ」
漆畑もこの意見に頷いて同意した。
「そうですね。だから、早急にどっかからお金を引き出す必要があります。このまま何の調査もしないで『門』を閉じることになったりしたら、それもまた大変な損失ですからね」

「おい、そこにいる狭間の部下。今回の調査は、どっから予算がでとるんだ？」
伊丹は、かつて見せられた予算書の内容を思いおこす。
「はい？　特地の資源調査特別予算を流用してますけど」
「よし、それの残りを全部こっちに寄こせ！　掻き集められる限りの機材と学者を募って、徹底的に調査じゃ！」
「ちょ、ちょっと待って下さい。俺一人に決められる事じゃありません。上官に相談しませんと」
「うるさい、なんとかしてみせい。儂は、あれの調査を推し進めると余剰次元論もだが、ダークマターの存在を議論するにも、一石を投じることとなるように思えるんじゃ。これも、特地の調査によって掘り起こされる知的資源と言えば言い訳になるじゃろう？」
伊丹は、「まぁ、言っては見ますけどね」と髪をばりばりと掻いた。
「重力としてのみ存在する『何か』の検証ですね」
漆畑が呟く。
「そうだ。もしここにあるものが余剰次元からの『影』であると考えることができるなら、ダークマターのような存在の理解にも繋げることが出来るはずじゃ」
カメラを外に据えた白位が戻ってきて「なるほど」と頷いた。
長時間露光の撮影は、機材の準備をしてシャッターを開いたら、時間が来るまでほうっておくしかない。側に立っている必要もないのだ。

「質量の存在が空間を歪ませ、それが重力という現象として観測される。しかし、もし空間が質量以外の原因で歪むなら、そこには物質の存在が無くとも重力に似た現象が発生しているはずじゃ」
「空間が歪むことが重力？　どういうこと？」
突如話しかけて来た銀髪の少女に対して、養鳴は「つまりこういうことじゃよ」と親切にも解説を始めた。
傍らにあった、ゴム製の滑り止めシートを引っ張り出すとその端を、周りにいる白位や、漆畑らに手伝わせて表面が平らになるようにピンと張らせた。
「もっとそこっ、ピンっと張らんか……そうじゃ、そうそう」
倉田達も、興味深く思ってシートの周りに集まった。カメラマンは栗林にせつかれて撮影を始めた。
「よいか？　これを空間とみなす。見てのとおり真っ平らで、なんの歪みもない状態じゃ。ところが、ここに質量のある物質が存在したとする」
そう言って養鳴は、伊丹が胸にぶら下げていた手榴弾を無造作にとりあげるとそこに載せた。手榴弾を奪われた伊丹は「あっ」と驚いたが、ピンが抜かれてないのでとりあえずはそのままにしておくことにした。
「物体の質量に従って、このゴムシートは撓むじゃろ？」
実際、手榴弾の重さの分だけゴムシートは少し凹んでいた。
「この凹みによって起こる現象が物が落ちると言うこと。凹みこそが『引力』なんじゃよ」

養鳴の解説に、栗林菜々美は首を傾げる。よくわかっていないようであった。だが、レレイは目を輝かせて何かを悟ったように頷いた。
「物が下に落ちるという現象は、この撓み……傾斜によって起こる。ならば、質量が存在すると、その多少はあれども必ず引力は発生する」
「うむ。そうじゃ」
この世界の科学者に万有引力の法則が授けられた瞬間であった。
養鳴は、ポケットからゴムシートの上にパチンコ球を放り出す。
「教授、なんでそんなもの持ち歩いてるんです？」
「パチンコは科学じゃぞ。いずれ必勝の方程式を導き出してやるつもりじゃ」
「パチンコが科学だったのは、ハンドルで弾いてチューリップを狙っていた四十年前までしょうに？　今は店側の作為で結果をどうにでもできる確率遊戯ですよ」
「ロマンの無い奴じゃなあ」
そんな漆畑との会話を余所に銀の玉はゴムシートの表面上をゆっくりと転がる。そして手榴弾が作った撓み（凹み）に引き寄せられ、最後にはその表面にカチンとぶつかった。
「物は存在すると、空間を歪ませる……では、その質量と大きさによっては、空間に穴が開いてしまうこともあり得る？」
レレイの瞳を輝かせての問いに、養鳴は微笑んだ。

漆畑は例によってレレイの観察を始め、「この娘は若いのになかなかに聡いですな。今日日の学生でもここまで物わかりの良い者はいませんよ」などと言った。
「君、君、この娘、連れて帰っていいかね？」
問われた伊丹は、「本人がいいと言ったら良いですよ。これでもこの世界の学者先生ですから。しかも魔導師です。と言っても留学手続きとかいろいろ大変でしょうから、今日明日ってわけにもいかないでしょうけど」と答えた。
「ほほう、この世界の学者でしかも魔導師とな？　儂は以前から魔法という現象には興味があったんじゃよ。ならば儂の研究室に留学するのが良かろう？」
「養鳴教授、狡いですよ。目を付けたのは私が先です」
「そんなもの早いか遅いかは関係ない。どっちの研究室がこの娘に相応しいかじゃ」
そんな会話をしつつ、養鳴はゴムシート上から手榴弾とパチンコ球を取り除いた。
「さて、何もなければ真っ平らで、なんの歪みもないのが空間の平常の姿なのじゃが。何某かの原因でこれが歪んだとする……」
そう言って養鳴はゴムシートの下に手を回し、下から摘んで引っ張った。
すると平らだったゴムシートの表面が窪んで凹面ができる。
ここに再びパチンコ球を転がす養鳴。
「見ての通りじゃ」

パチンコ玉は、皺の寄った表面で不規則な動きをしつつも一番窪んだところへと吸い寄せられていった。
「重力を発生させる質量はなくとも、重力に似た現象がここに発生したわけじゃ」
「でも、俺等はあそこに行っても重力が変だとか感じませんでしたよ」
笹川の言葉に養鳴は笑う。
「そりゃそうじゃ。ここには大質量たる大地があるからな。歪みもわずかで、ほんの少し皺が寄っていると言ってもよいぐらいに微妙で些細じゃ。差異を体感できるものではなかろう？」
そう言って養鳴は再び手榴弾を皺の寄ったゴムシート上に載せた。すると養鳴が下から手を回してつくっていた凹みは手榴弾の重さによって打ち消されてしまった。
「空間の歪みですか。わかりにくいっすよ。こんなゴム布一枚で空間がどうこうとか言われても、なんだかなぁって感じです。それとよじょう次元ってなに？　って感じです」
倉田の言葉は養鳴によって鼻息で嘲られた。
「ま、頭の悪いお前達には無理じゃろうがな、わはははははははは」
ゴムシートが片づけられ、それぞれ席に戻ったが、レレイと栗林菜々美は養鳴や漆畑相手に質疑を続けていた。
「問題は、余剰次元論のほうじゃな。まずもってその存在を認識することが難しい。儂等はどうしても横・縦・前後という三軸と、過去から未来という時間の方向軸に縛られる。そのどれでもない、

別種の『方向』など想像すらできん」
「上下左右前後、過去から未来へという時の流れ以外の『方向』って、どんな物があるんですか？」
菜々美の問いに養鳴は渋い表情となった。
「わからん、推測するのが精一杯じゃ。もちろん、これかなと思う物はある。方向軸が持っている性質の共通している要素を考えてな。だが証明しようのない憶測だ」
「共通している性質とはなんでしょう？」
菜々美が問う。
「縦、横、前後、そして時の流れ。全て数学的には任意に取った点Pから正と負の双方に向けて無限大の広がりを設定できることじゃよ。そして、それによって構成された三次元時空は、二次、一次の下位次元を内包して、時間という流れの軸を進んでおる。ならばその上位次元の要素も同様の性質を持つであろうな」
レレイは「そう。その通り」と頷いた。そして話し始めた。
「それならば私に説明が出来る」
「な、なんじゃと!?」
「そもそも魔法とは、サンジゲンの外側に働きかけて物事を為す方法」
「ちょっ、ちょっと待てよ、お嬢ちゃん。あんた、それを理解していると言うのか？」
養鳴達は一斉に身を乗り出した。

レレイは魔導師ならば必須の知識であると頷いた。
「サンジゲンの外側にはエテルが存在している」
「エテル？」
「そう呼ばれている」
レレイの説明は非常に簡単だった。
「わかった。先を続けなさい」
「はい」
レレイは語った。この世界の外側には、エテル、セテル、ケテル、フェイテル……という様々な方向軸が存在していると。
「今、外側と言ったが事実としてはそれは誤り。厳密にはサンジゲンと重なって存在している。しかし私達には、それを感知する器官がないので、外側という表現になってしまう」
「……重なっているというのか？」
「そう。だから、物を投げたら落ちる法則が支配するこのサンジゲンで、物を飛ばせ浮かすことが可能となる」
レレイは、ふよふよとチヌーク機内に置かれていたロープを浮かばせて見せた。
「この現象はサンジゲンの『現理』を切り離し、虚理の支配するセテル側に働きかけることで起こす。先ほどのゴムシートを転がした球体の例えで言えば、シートの裏から玉を摘んでいる行為に近

い。だから重力があろうとなかろうと関わりなく物体を浮かせることが可能となる」
「だが、どうやってセテルとやらに働きかけるのだ？」
「だから言った。サンジゲンとセテルは重なっている」
「だから、重なっているとして、その重なっている向こう側にどうやって働きかける？」
「セテルはここに重なり合って存在している」
レレイの説明を聞いても「肝心なことがわからん」と、養鳴は首を傾げた。
「サンジゲンは、エテル、セテル、ケテル、フェイテル……に含まれている。別の存在ではない。だからセテルもここにある。フェイテルもここにある」
「くっ、半分以上理解できんのが悔しい。どうやら、腰を据えてかかる必要性がありそうだわい。とは言えこの娘が何かを理解し、それに基づいて魔法という現象を起こしていることはわかった。第五、第六の次元軸として何を選ぶことが正しいかは儂には断定できんから、そのこともとりあえず置いておこう。だがひとつ確認しておきたい。儂は常々、『可能性』という軸があるのではないかと考えておった。それをどう思う？」
レレイは「可能性とは？」とその単語の定義を問い返した。
「そうじゃなあ……ＳＦなんぞはパラレルワールドなどと呼んでおったが、どう説明したものか……」
パラレルワールドという単語を小耳に挟んで伊丹ははりきって手を挙げた。

「それって、毛が三本足りない世界があるとか、着ている服の色が違っている世界とかですか？　冬木とか鳴海とか、猫実とか、友引町とか、日なたとかいう名の都市がある世界とか」

これを聞いてレレイは答えた。

「それは、ナゥルテルの認識。ナゥルテルでは、世界は紐のような姿をしていると考えられる」

「そ、それは……」

「スーパーストリングス理論ですかね？」

白位の言葉に養鳴は頷いた。

「そうかも知れん。違うかもしれん。決めつけるのは危険じゃ」

「その紐と言うべき存在はナゥルテル上の世界は一本ではない。根源とも言えるものから無数に分岐しながら広がっていき、それぞれに下位の次元が内包されている」

レレイは皆の目の前でロープを二本に折った状態で双方を寄せていき、中途で接触させた。伊丹達はそれがハーディによってなされた説明と一致することを思いだした。レレイは、それを自分流に説明しようとしているのだ。

「二つの紐が接した瞬間に出来るのが『門』。通常は一瞬で開いて、一瞬で消える」

その瞬間、養鳴は手を打った。

「わかった！　つまり『門』が開き続けている状態とは、二つの世界を束ねているってことなんじゃな？」

養鳴は手を伸ばして、二カ所でロープを束ねた。するとロープは両手に挟まれた部分でくっつく。
白位はロープに顔を寄せて語った。
「なるほど。『門』が開き続けるという状態は、無理矢理束ねられる形になるから、ロープにかかるテンションもどんどん強くなって、引き伸ばされて力がかかって……」
「うむ。可塑性があるとしても、どこまで伸びるかということじゃな？　世界も歪む訳じゃ……」
勝手に理解を進めていく教授連中。
ついていけない菜々美は、話を元に戻すよう要求した。
「あのお、教授。世界は本当にそんなにたくさん存在しているんですか!?」
「そうじゃな。まぁ多分、毛が三本足りないといった程度の微妙な差異は、集約されてしまうだろうがな」
「集約されるんですか？」
「例えばじゃ。コインを投げるとしよう。起こりえることを可能性だけで言うならば表か裏だけでなく、四十五度傾いた姿勢で止まることもないとは言えん。四十二度、四十度とな。だが、一般的には表か裏かのいずれかに落ち着く。それは可能性が集約されてしまうからだ……と儂は考えている。どうじゃな？」
養鳴は、「どうだ？」と確かめるように尋ね、レレイは首を振った。
「そこまでは理解していない」

申し訳ないと謝るレレイに、養鳴は気にするなと告げた。
「わからないことは罪ではないぞ。儂ら学者にとっては、わからないことの存在こそが、研究の意欲になるんじゃからな。儂はこう考えておる。地球の公転軌道と金星の公転軌道がこのような距離となるのは何故か？　何故、木星と火星の間には惑星が形作られず、小惑星帯になってしまったのか？　……これらは、それぞれの惑星が持つ重力の働きによっておこる必然なのじゃ。ならば物事の可能性にも、それと同じような働きがあるのではあるまいか？　とな。したがって可能性世界の差異とは、微妙なものではなく、はっきりとした違いとして現れるはずなんじゃ」
聞いていた伊丹と菜々美は口を揃えて理解不能だと訴えた。
「凡人は理解せんでも良い。とは言え、それが儂らの住む世界と、この『特地』の世界とがそれぞれに存在し得る理由だと儂は思う。しかしレレイと言ったな。娘！　お前のような才能ある者こそ、儂の研究室に来るべきなのだ。儂のところで科学的な思考を学ぶがよい」
養鳴はそういってレレイの肩を叩いた。
レレイは、そのまま黙考し始める。その姿は、留学してからの研究に思いを巡らせているかのように見えた。
養鳴は満足そうに頷くと、栗林を振り返った。
「よし、今度は儂の番じゃな。儂は今、大変機嫌がよいから、ここで起きている空間の歪みについて、もうちょっと分かりやすく説明してやる。これは意外と日常に転がっておるから説明が容易い

ぞ。実際には、儂らも空間の歪みを日常的に体験しておるんじゃよ？」

「そうなんですか？」

栗林菜々美が、「サルガッソーとか、バミューダートライアングルとかですか？　あれってやっぱり、異次元空間に行っちゃうんですか？」とか言い放ち、オカルト雑誌のへんてこ記事と一緒にするなっ、と養鳴におでこをペシペシと叩かれた。

「混ぜっ返すな！　そもそも異次元空間などという物は存在しない！　我々が存在するには……物質が存在して、運動するためには、三次元という時空の枠組みがなければならぬ。儂等はビッグバンによって開豁された三次元時空の内側においてのみ、その存在が認められ許されているのに過ぎないのじゃ！　もし渡ることが出来るとしても、それは儂らの世界と、この特地のように、違う可能性軸上にある別の三次元空間になるんじゃよ！」

伊丹は、手を挙げるとまた自分に理解しやすい例えをあげた。

「それはパソコンゲームのキャラクターが、パソコンの中でしか存在し得ないということと同じですかね？」

「妙な例えじゃが、その通り。パソコンの内側だけが、その登場人物が存在し認識できる世界じゃ。そしてパソコンの外側には、上位の次元が存在し、かつパソコンの内側にもその上位の次元法則がしっかりと働いておる。内部の人物が気付くことが無くともな」

伊丹はなるほどとオンラインゲームを思いおこして頷いた。

「さて、空間の歪みの話じゃな。例えばじゃ、儂らが平らだと考えてる地面はその実、地球という巨大な球体の表面であり当然の事ながら球面じゃな？　ただあまりにも巨大だから認識する上で、その歪みを無視できるだけにすぎん。ところが、メルカトル法で展開された地図で見れば、大圏コースとされる最短距離は、見事に曲線として描かれる。三次元体の球面を無理矢理二次元として表現したため、空間が歪んでしまったのじゃ。そのため最短距離が曲線として表現されたんじゃよ」

はぁ……一同はわかったようなわからないような表情となった。

「でも、半日程度の調査で、あの場所に空間の歪みが起きてるなんて、どうやって確認できたんですか？」

栗林菜々美の問いを受けて、漆畑はカメラマンに今日撮影した映像を映し出せるかと訊ねた。

カメラマンは「いいですよ」と応じて、映像を確認用の液晶モニターに写しだしていく。

養鳴と漆畑がさまざまな調査機器を扱っている姿が写しだされたが、「もうちょっと先じゃ」という声にどんどん早送りされる。そして「おっ、ここじゃここじゃ」という声で、画像が止められた。

「いろいろな方法を試みたんだけど、これが一番手っ取り早かったよ」

漆畑の説明に、みな頭を寄せて液晶画面を食い入るように見入った。

それは、巻き尺で漆畑と養鳴が黒い霞に覆われた地面の距離を測っている映像だった。何と何の距離を測っているのかは不明だが、二十五メートルほど巻き尺を繰り出している。

「これですか？」と倉田。

「わからんなぁ」と桑原。
「教えてくださいよ、教授」
菜々美の問いを無視して、養鳴はレレイに視線を向けた。
「わかるかな、お嬢さん？」
漆畑の問いに、レレイは明快に答えた。
「……二点間の距離を測るなら、計測索は直線になるように張られなければならない。だけど、この絵では計測索はたわんでいる……」
レレイはそう指摘して漆畑と養鳴に視線を向けた。実際映像では、真っ直ぐに張られているはずの巻き尺が、右に弧を描くゆるやかな曲線となっていたのである。
「その通り。儂等はこれでも真っ直ぐピンッと張ったつもりなんじゃよ。つまり、この巻き尺の示す線こそが、二点間の最短距離なんじゃ。正常の状態ならばそれは直線として表現されねばならぬ。ところが、見ての通りひん曲がって見える、それはいったい何故何じゃろうな。もちろん巻き尺が風になびいていたわけでも、何かにひっかかっているわけでもないぞ」
そう言って養鳴はニヤリと笑った。

＊　＊

レレイは、ふらふらとした足取りで割り当てられた天幕に入ると、簡易ベッドに腰を下ろした。
無意識にローブを脱いでハンガーにかけ、天幕の柱にぶら下げる。さらに、下に着込んでいた翼竜の鱗で作った鎧をはずして膝の上に載せると、Tシャツとショートパンツ姿となってどこを見ているかわからない面もちのまま、胸の中に籠もった熱気を、大きく吐き出して換気した。
「悔しいっ！　ハーディの嗤い声が聞こえてきそうぅ」
ロゥリィは神職にあるまじき雑言を吐きながら黒ゴス神官服を脱いでいった。
鳩目に紐を通して編んだり結んだりという部品の多い衣装なだけに、脱ぎ着が実に大変そうである。だがロゥリィは手慣れた感じで、あちこちの紐をゆるめると、すとっと脱ぎ落とし、肌も露わな下着姿でどっかりと座り込んだ。
「アポクリフが世界を覆い尽くす前にはぁ、『門』を閉じなければならないわぁ。問題はぁ、全ての人間がそうと考えるわけではないことよぉ」
ロゥリィは、髪にブラシをかけ始めた。
「そうね」とテュカ。タイトなジーンズから脚を引き抜きながら「アポクリフと『門』は関係がないと言う連中が出てくるでしょうね。組合のみんななんかは、『門』のお陰で食べているわけだから、きっと強く反対するわ」と答えた。
「だからぁ人間がどうするか見てみたいなんて言ったのよぉ、彼奴ぅ！」
「あれを見たら、普通はなんとかしなければと思うものではないか？」とヤオ。「此の身ならば決

断は言わずもがなだ」

ロゥリィ、テュカ、ヤオと意見の表明が終わり、皆の視線はレレイに注がれた。

だが、レレイは膝に置いた鎧を畳みながら言った。

「反対する者を説得することは不可能ではない。『門』は閉じても、再度開くことは可能」

「ホント？」とテュカとヤオは、一斉に身を乗り出した。

「冥王から報酬として授かった」と、レレイは髪の束を取りだして示した。「これを触媒として用いれば、世界を渡るための穴を穿つことは出来る」

「ちょっと待ちなさぁい！　それを使ったらレレイ、あなたはぁハーディの眷属になることになるのよぉ！」

「それの何が問題？」

合理的に物事を考えるレレイは、さらっと返した。

ハーディから力を分け与えられて眷属となったからといって、別にハーディの信徒や神官になってロゥリィと敵対するわけではないからだ。

普通の神官は、神に仕えることで異能を授かる。この場合、力を授けてくれた神に刃向かったりすることは裏切りになるのだが、レレイの場合は向こうの都合で勝手に身体を使われ、その報酬――賠償と言い換えても良いが――として力を授けられたに過ぎないのだ。従って、その力をもってハーディに刃向かったとしても、非難されるいわれはない。

とは言え、ロゥリィとしては自分の身内が、敵対している相手からもらった武器を愛用するようになるようで気分が大変良くなかった。世間的には、その武器を持つことは敵の一派を意味するからである。レレイはその力を示すことで、周囲から冥王の眷属として見なされるようになる。そう、これはロゥリィの気分の問題なのだ。

「でも、そうしたらまたアポクリフが出てくるんじゃないの？」

テュカは、ロゥリィの葛藤とは別の方向からの懸念を口にした。

ロゥリィは、そうだ、その通りとレレイに翻意を促した。だが、レレイはこれまたその懸念を一蹴した。

「解決策はすでに示唆されている。アレの発生原因は『門』を開きっぱなしにしたせい。適時開閉するくらいなら問題は少ないから、環境にも優しいと言える。要は歪みを蓄積しなければいい」

「なるほどね。じゃぁ、組合的にはアルヌスの『門』を閉めちゃうことは問題ないのね」

「大ありよぉ！　レレイは『門』を開けたり閉めたりするだけの人生をやるつもりぃ？」

テュカや、ヤオと違ってレレイは寿命の短いヒト種だ。その短い人生を『門』の管理で終わってしまうのは惜しすぎるとロゥリィは言う。

レレイもそれは嫌だと首を振る。と同時に他にも問題が山積していることを素直に認めた。

「無数にある世界からニホンのある世界を見つけだす方法がない。それがないと穴を穿つにもどこに向けたらよいか分からない。それに『門』を閉じた時に、蓄積した歪みを解消するためにナゥル

テルが荒れる。それが落ち着くまでに、どれほどの時を待たなければならないかがわからない。さらに、向こう側とこちら側の時間流には差がある。こちらで翌日開いたつもりでも、向こうで一年経っていたということも起こりえる」

「や、やっぱり駄目だわっ！　ヨウジぃが爺さんになってましたぁとかぁ、こっちがとっくに陞神（しょうしん）してましたなんてことになったらぁ、目も当てられないじゃない！」

ロゥリィが叫び、テュカとヤオがその意見に賛同した。

すると、これまでずっと黙っていたジゼルが口を開いた。

「主上様の言ったとおりだ……ですね」

「何がよ」

「主上は、人間達には決められないとおっしゃってました。この世界の行く末と、自分たちの欲得がぶつかって結論を出せないだろうって。だからこそ神が災禍をもって、結論をつきつけるのだと仰せだった……んです」

「くっ」

ロゥリィは悔しげに呻いた。

「お姉さま。何をしなければならないか、わかってらっしゃるはずです」

ふと、レレイの手が止まった。鎧の裏地に小さいながらも穴が開いてることに気が付いたからだ。

そして、しばし思考を巡らせてから重々しく語った。

「……耀司の事は問題にならない。『門』を閉める時は彼を拘束することにすればよい。『門』の再開を条件に取引を持ちかければ、日本政府も彼一人ぐらいは差し出すはず。そのためには、『門』の開閉が出来るのは当面、私だけということにしたい。皆の理解と協力は当然得られるものと期待する」

レレイは、全くの無表情のままに「くくく」と嗤った。

その姿を見たロゥリィとテュカ、そしてジゼルまでもが少しばかり身を仰け反らした。

その無表情な笑みに、背筋に氷を押し付けられたような寒気を感じたのだ。

「なに？」

なんか文句ある？　という言葉に聞こえて「な、何でもないわぁ」とロゥリィ達はぶんぶんと一斉に首を振った。

レレイの見つけた鎧の穴は、パンチで打ち抜いたような丸い穴ではなく、ボタン穴のような線で出来た穴だった。指をあてると人差し指が通る程度の大きさだ。表に返してみると、鎧の胸のあたりに並ぶ鱗に傷はない。どうしてこんな穴が開くのか、不思議だった。

とは言え、これは職人がこしらえたものではなく、アルヌスの子供達が作ってくれたものだ。しかも翼竜の鱗製とは言え、売り物にならないような、小さかったり一部が欠けたようなサイズが不均一の鱗が使われているので、身に着け方によっては微妙に隙間が出来ていたりもするのだ。

実際、裏地に出来た穴は、鱗の隙間を貫くように出来ていた。

何時出来た穴なのだろうか？　レレイは首を傾げながら荷物をがさごそとまさぐって中から糸と針の裁縫セットを取り出した。

「あの、レレイ殿？　今の話だとレレイ殿が大変危険なことになると思うのだが」

振り返ると言葉を投げてきたのはピニャであった。ハミルトンが、皇太女の赤い髪をくしけずっている。

「どうして？」

「帝国と、ニホンをとりまく様々な思惑に巻き込まれてしまうからだ。少なくともそのことがゾルザル兄様に知られれば、レレイ殿の身柄や生命は再び狙われてしまうだろう」

ゾルザルからすれば『門』を閉じるという話は、日本が『門』のこちらで得た物を放棄して、向こうに撤退することを意味するから万々歳なのだ。そして二度と開くことが無ければ、なおさら良い。当然、『門』を開く力を持つ者がいれば疎ましく思うはず。その相手が冥府の神ハーディならばどうすることも出来ないが、ヒトになれば話は違って来るのである。

「秘密にすることは不可能」

レレイはそう言って、針に糸を通して穴を繕い始めた。

ピニャは「何故……」とレレイに尋ねる。

「『門』を再び開くことが出来ること。それが、一旦『門』を閉じることを、ニホン政府やアルヌスの皆が受け容れる前提条件となるから。それがないと皆の反対に遭って、きっと議論にもならない」

ピニャは自分だけでは説得できない、誰か口添えしてくれないかと周囲を見渡した。だがテュカと、ヤオの二人は黙したまま首を振る。

ロウリィも悔しげであった。ハーディはこうなることを予見していた。だからレレイに力を授けたとも言える。レレイを台風の目にすることで、事態を引っかき回そうという底意地の悪さが感じられるのだ。

「帝国の正統政府は間違いなく反対するだろうな。『門』を後で開くことが出来たとしても父上……皇帝陛下は『門』を閉じる話にはかならず待ったをかけてくる。かつての妾でも、『門』を閉じることを強硬に反対すると思う」

「それってどうして？」

テュカの問いに、ハミルトンが顔を上げて答えた。

「イタリカの正統政府にとって、アルヌスにいるニホンの軍事力が生存のために必要だからです。例え『門』が再度開くことが保証されていても、それによって軍事力の空白が生じることになるなら絶対に駄目です。我々の死命に関わるからです。おそらく、あの粛清の嵐を体験した者は『ニホンよ、我々を見捨てないでくれ』とすがってくるでしょう」

「帝国と日本は戦争していたのではないのぉ？　いなくなって万々歳じゃない」

「状況が変わりました。それはご理解下さい」

「じゃぁ、いっそのことゾルザルをやっつけちゃう？」

その方が話は早いとばかりに、ロゥリィがハルバートを立てた。
「聖下。それをなさったら、今度は父上がレレイ殿を狙うでしょう。正統政府がニホンを必要とするのは兄様の一派が力を有するからで、それがなければ帝国にとってニホンは邪魔者。ゾルザル兄を倒せば父上が、父上を倒しても父上に成り代わった者が、必ずレレイ殿を狙います。これは立場がそうさせるのであって、兄様や父上だからというものではないのです」
「いっそのこと、モルト皇帝を退位させて、ピニャが女帝になったら？」
「勘弁して下さい。妾は、政（まつりごと）は、もうこりごりなんです。女帝なんぞになったら、妾がレレイ殿を抹殺する決断を下さねばならなくなる」
嫌だというものを無理強いするわけにもいかず、重苦しい空気が流れた。「頭の痛い話ねぇ……」というロゥリィの呟きが皆の気持ちを代表しているようであった。
「ハーディの奴ぅ。恩を仇で返してきやがったわぁ……」
ロゥリィから見ればレレイはその能力によって狙われる。その原因がハーディなのだから、ハーディから呪われたようなものだ。だがレレイは、何も困っていないかのように言った。
「何を迷う必要がある？」
「何をって……レレイ殿、今の話を聞いておられたのか？　今、御身の命に関わる話をしていたのだぞ」
「大丈夫。耀司が守ってくれる。助けてくれる」

するとテュカは嫌らしそうに笑った。
「ははあ、それが目的ね？　ロンデルで守って貰ったことに味を占めたんでしょ？」
レレイはテュカの言葉にこくりと頷いた。
「やっぱし」
「否定はしない。否定はしないけど、それだけじゃない」
「つまりは、ヨウジィを、引き留めるためねぇ？」
「お父さんが、命を狙われている自分を放り出して、向こう側に帰っちゃうかもとは、考えてないんだ」
「私は確信している。もし、耀司がわたしを助けないとすれば、きっと何かの理由があってのこと。私より大切な何かと天秤にかけての苦渋の決断」
「でも、もしよ、そんなことになったらどうするの？」
「黙って死ぬ。それが妻たる者の振る舞い」
レレイは頬をうっすらと紅色にして針仕事を始めた。
ロゥリィとテュカ、ヤオの三人は驚いたように互いに顔を見合わせ「凄い信頼」と呻いた。「レレイって重い女だったのね」というテュカの囁きが皆の耳に響く。
自覚がないのか、レレイは「重い？　私が？」と呟いた。意味もよく分かっていないようだ。
「ところでレレイ。さっきから何やっているのぉ？」

「穴を塞いでいる。穴を塞ぐことは必要」
「え⁉」
先ほどから穴の話をしていただけに、ロゥリィは、先ほどからチクチクと針を操っているレレイの手元を見ようと身を乗り出した。
そして、くわっと目を見開き、レレイの手元から胸元へと顔を寄せる。
「……な、なに？」
ロゥリィは突然手を伸ばしTシャツを捲り、レレイの腹部の中央で慎ましやかに窪む臍から、緩やかに膨らむ乳房の上、喉元近くまでの肌を一気に曝した。女性しかいない天幕内だからこその蛮行だろう。
「な、なに？　なに？　なに？」
あわててロゥリィの手を抑えて問いかけるレレイ。それは、何をするんだという抗議の問いでもあった。しかし、ロゥリィはレレイの白い肌に傷がないことを確かめるとゆっくりと指を這わせ、その後ににんまりと唇を悪魔的な弓月型に細めてほくそ笑んだ。
「少しい、増えた？」
「……え、え⁉」
レレイはそう言って胸を押さえた。
これまで感じていなかったが、もしかしたらハーディの暴飲暴食がレレイの体型に深刻な被害を

もたらしたのかも知れない。今も重い女だと言われたばかりだ。重いとはそういうことか？　だとしたらなんとしても修復しなければ。

レレイは密かにダイエットの断行を決意した。

＊　＊

さて、アポクリフの発生は伊丹達自衛官にも深刻な影響を与えていた。

対策は『門』を閉じることだと言われても、特地の住民との関係を地道な努力で築き上げて来た面々にとっては、「はいそうですか」と簡単に受け容れられることではないからだ。

「隊長。どうします？」

「どうしますって、何が？」

簡易寝台に寝そべって漫画を読んでいた伊丹は、話しかけてくる倉田を煩わしく思った。

だが、続いて耳に入った「『門』を閉じることになったら、俺もこっちに住んで良いですかねぇ？」という言葉が、そんな気分を一気に吹き飛ばした。

「な、何を突然!?」

本を取り落としそうになりながらも、身体を起こす伊丹。部下の顔を改めて見た。

「いや、その、実はペルシアと、その、いい感じなんですよ」

「おいおい、変な勘違いとかしてないだろうな？　嫌だぞ、勘違いストーカーになっちゃ」
「いや、確信できるくらいの関係には、なんとかなりました」
「女の子の中には、情に絆されて、一回だけならお相手してくれる娘もいるらしいぞ」
「大丈夫です。そんなんじゃ決してありませんから」
同じ天幕内での会話である。聞こうと思わなくても二人の会話は周囲の耳に入って、勝本、笹川が囃し立て、桑原曹長は苦笑した。
「いいなぁ、いいなぁ、ひゅーひゅーひゅー！」
「規約違反だぞ……あんまし公言してまわるなよ」
そんな負け犬の遠吠えに対して倉田は「それなりにマメに努力したからな」という言葉を返す。それは誰もが認めることであった。任務でイタリカに赴くたびに、会いに行ったり、手紙を書いたりを続けてきたのだ。
「けどさぁ、お前……女のために日本からこの特地に移住するの？　陸自辞めちゃうの？　親御さんはどうすんの？」
「辞めたくはないですよ。日本にだって未練はあります。けど、あいつと二度と会えないってのも嫌なんですよ」
「おおっ！　さすがだ、大したもんですだ！」と勝本。
「すげぇなぁ。猫耳好きもそこまで徹底すれば尊敬できますよ」と笹川が集まってきた。

だが桑原曹長は、地に足をつけた意見を語った。
「自衛隊を辞めたら、こっちでどうやって生活するんだ？　けっ……いや……男女が一緒に生活するようになれば問題は、配偶者をどうやって養っていくかだぞ？」
「今度結婚する」「今度子供が生まれる」等の単語は、第三偵察隊では禁句に指定されている。故に、みな注意して使わないようにしていた。
「フォルマル家に雇って貰うってのは駄目ですかね？　日本の知識を使えば、内政だって経済だって、軍事だって活躍できる余地がいっぱいあるって思うんですよ。ちょっとばかり知識を提供すれば開墾とか……」
伊丹は、倉田を制するよう口を挟んだ。
「ところがそうは行かない。実際にはなかなかうまく行かないんだよ」
「どうしてですか？」
「例えばだ、海外青年協力隊の隊員達や、充分に経験を積んだシニアの技術指導者が、アフリカや東南アジア、中南米の発展途上の国々で長年活躍してる。が、その成果を出すのにどれほどの歳月と労力をかけてるか知っているか？　農地の開墾だって、水路を造って、畑を作ることすら、気の遠くなるような時間をかけて説得して、地元民に少しずつ納得させて、やっとこさ出来上がるんだ。水路を引くのにただ溝を掘れば良いだなんて考えていると酷いことになるぞ。あっという間に取水口は土砂でふさがっちまう。アフガンの会なんていうボランティア団体が中東で成果を出している

が、あれだって代表者の凄まじいまでの根性と非営利だからこそのなせる技だ。投資として考えればとんでもなく非効率なんだ。ネット小説の内政ものみたいにはいかないんだ」

「た、隊長……随分と詳しいっすね」

「ま、なんだ……お前が考えるようなことは、俺も一通り考えたんだ」

「あはははは。やっぱりね」

「ちっとは調べてみたんだよ。その結果、門外漢の俺にはやっぱり無理だとわかったわけだ」

「でも、アルヌスの組合は成功しましたよね」

「あれは良い品物を安く仕入れて、高く売るという万国共通の基本に則ってる。たまたま手にした特権が役に立って手広くやれただけだ。これは特地の商売の仕方から見ても特別なことじゃないんだ。商人達も意識改革は要らなかった。だからこそ、この世界でも素直に受け容れられたんだ。為替だの相場だので一攫千金を狙った奴もいたけど、頻繁な両替を嫌がらせの類と勘違いされて長続きしなかっただろ？」

「あ、はい」

「移住を考えるならそれもいい。好きにしろ。ただ、自分の特技や才能を冷静に考えたほうがいいぞ。女に惚れたってだけで突っ走ると後悔することにもなりかねないしな。けっ……もとい、署名捺印はゴールじゃない。そこからがまた大変なんだからな。いきなり三行半つきつけられるってこともあるんだからな」

「さすが、バツ一だけあって含蓄あるお言葉で」
伊丹は「あれはショックだった」と小さくため息をついた。
「特地は遅れているから、自分だったら何でも出来るなんて考えてたら絶対に火傷すると思うぞ。そのあたり甘く見るなよ」
「わかりました。でも、隊長も考えてんですね。流石です」
「『大丈夫、まかせておいて』なんて、言っちまったからな。俺が居なくても、避難民の生活が成り立つように道筋はつけておかないとって思って、いろいろと考えたんだ」
「へ？　隊長、特地に残るんじゃないんですか？」
「どうしてそうなる？」
「だって……黒ゴスとか、金銀エルフとか、魔法少女とか……どうすんです？　最近は、皇女さまとかもいるみたいですけど。端から見ていると、彼女たちすげぇ本気に見えますよ」
「いや、ま……そうだな。考えとかないといけないな」
「考えるって……隊長、今更考える余地があると思ってます？　逃げられると思ってるんですか？」
「無理？」
「無理でしょう」
倉田達は一斉に頷いた。おやっさんこと桑原までも「無理だな」と頷いていたほどだった。
「だって俺、なんにもしてないよ。誰にも手を出したりしてないもん」

「手を出してなくったって、相手を本気にさせちゃったら駄目でしょう。相応の責任ってものがありますよ」
「責任？　何にもしてないのに⁉」
「ええ。この場合は、いわゆる無過失責任って奴ですね」
まるで交通事故のような言いようである。
「でも、俺、バツイチだし」
「それって、何か意味あるんですか？」
「だからさあ、俺の本性を知られたらすぐに駄目になっちゃうってことだよ」
自分を卑下するように言う伊丹の言葉に、勝本は驚いたように尋ねた。
「ま、まさか。未だに本性を知られてないって、本気で思っているんですか？」
これを受けて笹川が呟く。
「かなり早い内に完全理解されてるのにね。何言ってるんだろ、このリア充。さっさと溺死しろ」
「で、溺死って？　俺が？　どうして？」
「事実、女に溺れてるでしょ。そろそろブクブクって沈むべきなんですよ」
「おいおい、なんだかさらっと酷いこと言われてる気がする」
「酷いのは隊長でしょうが」
だよなぁ、と倉田達は互いに顔を見合わせて一斉に頷いた。

「どうして？」
「だって、例えば金髪エルフ。どう見ても隊長に好意を寄せてますよね？」
「助けたから惚れられてるって思うのは、『それなんていうエロゲ？』って感じで安易すぎだぞ。テュカはそんな安っぽい女じゃない。残念だけど俺とお父さんとを重ねて、和んでるんだと思うよ。うっかりその気になって迫ったりしたら折角の仲が気まずくなっちまうよ」
「じゃあ、銀髪黒エルフは？」
「ヤオは、俺に仕えるのがケジメのつもりなんだよ。でなきゃ、あんないい女が俺の相手なんかしてくれるもんか。それにつけ込むのは一種のパワハラだと思うな」
「んじゃ、魔法少女」
「レレイはウブだからな。気の迷い、麻疹みたいなもんだよ、きっと。それにつけ込むのは大人としてどうなんだろうか？　それに、あんな頭のいい娘が俺なんかに満足するわけないだろう。すぐ飽きられちまうよ」
「では、黒ゴスは？」
「ロゥリィに手を出したら犯罪じゃないか!?　日本だったら間違いなく児童福祉法違反と、青少年育成条例違反で通報される。ま、実年齢がアレだから、検察はアレ的な配慮で起訴しないだろうけど……世間体ってものを考えるとだなぁ、せめてもうちょっと年かさに見えてくれればなぁ……」
「なるほど……」倉田は頷いた。「じゃあ、隊長？　もしですよ、もし、俺達が四人の内の誰かを

口説いたらどうします？」
「ここはネタ的に、第四戦闘団に転属させてやるとでも言えばいいのか？」
「最前線送りってことっすね？」
男達は互いの顔を見合って無言の審議を開始した。
「な、なんだよおまえら」
「隊長は黙ってて下さい。ただいま審議中です」
程なく結論が出たのか、倉田から口を開き始める。
「隊長。素直になりましょうよ。はっきりしない態度が一番の罪です」
「そうそう。ここは一つ、四人全員とつきあうぐらいの根性を見せてください」と勝本。
「もうちょっと強気でいけば、ハーレムですよ。ハーレム」と笹川。
伊丹の部下達は、そんなことを言いながら戸惑う伊丹の肩を次々と叩いていった。
「そろそろ交代の時間ですわ……」
女性ということもあって早い時間帯に不寝番を設定された黒川が、第一直を終える寸前に動哨がてら次の担当者を呼びに来た。不寝番は通常二人組でおこなう。現時点での立哨は航空科の機上整備員がしている。
「お、次は俺だ」
倉田が、銃に手を伸ばして半長靴に足を通す。

場に微妙な空気が流れていることを察して、黒川は伊丹に尋ねた。
「どうしたんですか？」
「いや。ほら、『門』の件でな、ちょっといろいろと考えなければならないってことを話し合ってたんだ。うん。これから大変だよな」
まさか本当のことを言うわけにもいかず、伊丹はそう言って誤魔化すことにした。だが、黒川はいつもの表情のままこう語った。
「そうですわね。けれど、隊長？　貴方に考えるなんてことが、本気で許されると思ってらっしゃるんですか？」

04

帝都を放棄して帝国第二の都市テルタに皇太子府を移したゾルザルは、そこを拠点として精力的に帝国の統治活動に取り組んでいた。もちろん彼なりに……ではあったが。
「父、モルト皇帝は我が下で療養中である。イタリカに逃れたという噂は信じてはならない。全てはピニャと元老院講和派共が結託して流した嘘である。我が廃嫡され、代わりにピニャ・コ・ラーダが皇太女として立てられたという噂も、当然の事ながら根も葉もない嘘にすぎない。すでに承知

のことと思うが、あらためて確認しておきたい。我こそが皇帝陛下より直々に皇太子とされた者であり、帝国統治の正統は我が手にある。以上のことを忘れる事なきよう求めるものである」

ゾルザルの言葉を文章にまとめていくテューレ。

さらさらと羊皮紙の表面を走る羽ペンの筆跡は見事なまでに流麗で、出来上がった文書はそれだけでも、一つの芸術品としての体裁をなした。

とはいえ署名だけはゾルザルが手ずからするしかなく、画板を受け取ったゾルザルが、無骨な指で仮名釘にも似た形状のサインを施すと、この信書の芸術的価値は瞬く間に台無しになってしまった。

文面を読み返しインクが乾いたことを確認してから、羊皮紙をくるくると丸める。

リボンをかけ、火にあぶって溶かした封蝋をとろりと盛りつけて、上からぎゅっと封印を押し付けるのだ。

「よし、ただちにエルベ藩王国の国王デュランに届けよ！」

ゾルザルは、そう命令して傍らに控えていた伝令士に書簡を手渡した。

伝令士は小気味よい音のする、胸に拳を当てる敬礼をすると、ゾルザルの執務室から駆けだしていった。

「しかし、デュランは帝国と距離をおこうとする態度をとり続けております。果たして我らに従ってくれるものでしょうか？」

政務上の腹心といえる次期法務官のアブサンが、ゾルザルに懸念を告げた。
「なあに、我らに味方せずとも、講和派につきさえしなければそれで良い。状況が落ち着いてから俺の統治が先代モルトとは異なることを知らしめ、時間をかけて帰順を促していけば良い」
ゾルザルはそう語って、次の口述を始めた。
テューレは、新しい羊皮紙を取り出してそれを書き起こしていく。
「次は、属州カルポ総督宛だ。……ん……卿の帝国に対する忠誠は、非常に好ましく思っている。しかし、その忠誠心に対する信頼がここに来て大変揺らいでいる。臣下の忠節に疑いの念を抱くのは大変心苦しいのだが、期限を区切って命じておいたはずの兵と怪異共が、未だに到着していない。その理由の説明もない。もし手元にありながら何らかの理由で出発を遅らせているのなら、可及的速やかに出発させるように。怪異の数を揃えるのに手間取っているというだけならば、叱責を心配する必要はない、とりあえず集まった分だけでも良いので、すぐに送ってよこすように……」
「そのような文章では、こちらが困窮していることを知られてしまいます」
アブサンがゾルザルの口述した文面に異議を唱えた。
「別にかまわないではないか。事実窮しているのだからな。帝国は戦争中なのだ。こちらに余裕があると思っているから、兵を送ってよこさないのかも知れん」
「しかし、窮状をあからさまにし過ぎますと、侮りをうけて地方の離反を招くおそれがあります。やはり命令に従わない場合は、反逆罪で処刑するといった警告を臭わす一文を付け加えることをお

勧めします」
「そうか。では、そうだな……どうすればいい？」
「私の部下は……新たに配属した帝権擁護委員（オブリーチニキ）はきちんと働いているか？　と問うてはいかがかと？」
「そうだな、そうしよう」
ゾルザルはテューレの仕事を覗き込むと、「ここに今の言葉を付け加えろ」と指示し、その後悲劇を演じる舞台俳優のごとく両手で顔を覆って天を仰いだ。
「嗚呼。まさかアルヌスと、イタリカの双方を一時に相手にせねばならぬとはな……」
イタリカに正統政府を自称する講和派勢力が盤踞（ばんきょ）して以来、自衛隊相手のゲリラ戦が思うように展開できなくなっていた。
もちろん、ヘルム将軍の能力が劣っているわけではない。
住処や食糧を失った者を保護収容しようとする日本の軍に、足手まといを押し付けて、身動きがつかなくなったところを襲撃するというヘルムの戦術は、大変に効果的だったのだ。
難民に扮した帝国兵を敵の懐深くに埋伏させ、騒動を起こさせたり破壊活動をさせたりする作戦も何度も成功した。
だが講和派が活動を始めると、それに専念することができなくなった。
講和派はどれほど村落を焼こうが、どれほどの難民が出ようが全く気にしないからだ。

講和派の軍は、焦土の中で助けてくださいと手を伸ばす流民を無視し、帝都を目指して進もうとする。いくら放棄を宣言したとは言え、帝都はやはり帝都。その奪取を許してしまえば講和派の権威はいやが上にも増してしまう。それを防ぐ為にも、イタリカと帝都の間に要害を建設し、ある程度の戦力を常時配置しておく必要性ができてしまったのだ。

とは言え拠点を築き、立て籠もってしまえばそれは最早ゲリラではない。

出撃拠点が分かれば、進出ルートも展開場所も概ね予想できるからである。神出鬼没、縦横無尽という利点をこれで失った。

このため自衛隊相手の戦いも、最近では手を煩わせる以上の効果を得られなくなった。

敵に怪異の大軍を嗾けるという作戦も、最近では兵力や怪異を損耗するばかりで効果があがらない。そればかりか逆にゲリラ活動の拠点をあばかれて、どんどん失っているありさまだった。もちろん新設は進めているが、新設と失陥の速度がほぼ同じになっていて、状況は拮抗状態の横ばいで続いているのである。

「もしかすると情報がどこぞで漏れているのではあるまいな？」

ゾルザルは思わず左右を見渡した。次期侍従長のネイが自分はちがうと首を振った。

だが、この事態は敵の密偵が入り込んでいるとしか思えなかった。そうでなくてどうしてこちらのやる事なす事の悉くが、失敗したり成果が上がらなかったりするのだろうか。

せめて、敵の内情を掴むことさえ出来ればよいのだが。

一縷の望みに縋るような気分で、ゾルザルはテューレに尋ねた。
「イタリカに密偵を入れることは出来たか？　せめて混乱の一つも起こさせる事が出来れば、奴らに味方しようとする者が現れるのを妨げることも出来るのだが」
だがテューレは申し訳なさげに、頭と兎耳を力無く垂らした。
「申し訳ありません。手の者を次々と失っており成果が全く上がっておりません。どういう仕組みかわからないのですが。フォルマル家の館に入りますと、見破られてしまうのです。そればかりかイタリカ内に築いた拠点までもが、敵に襲撃されて失われていきます」
ゾルザルは頭を抱え髪をかき上げた。
「そちらもか……ここまで駄目だと、かえってサッパリするな。要するに、敵の方が一枚も二枚も上手と言うことだな」
「口惜しいことですが。しかし、アブサン様と相談して、一矢報いる準備を進めております」
話がそこまで進んだところで、執務室の戸が叩かれた。ゾルザルはテューレに話を止めさせて戸の方を振り返る。
「入っていいぞ」
執務室に顔を覗かせたのは古田であった。いつものように弁当籠を抱えている。
「おおっもうメシの時間か？　かまわんっ、こっちに来い……」
古田はいつものように、ゾルザルの机の上に運んできた弁当籠と鍋を載せる。ゾルザルは中断し

たテューレとの会話を再開した。
「ニホンから攫ってきた者を囮に使うという話だったな？　準備は済んだのか？」
次期法務官のアブサンが口を挟むようにして答えた。
「はい。一個軍団がタンスカに配置済みです」
「あそこを使うのか？　わかった、成果を期待させてもらうぞ。少なくとも良い知らせを聞かせろよ」
「だいぶ、お疲れのようですね」
古田は弁当籠を開くと、中から皿を取りだしゾルザルの前に並べ始めた。
「わかるか。実のところ、最近はよく眠れておらぬのだ」
「食事の量も若干減っておいでのようです」
「お前は、医者以上に俺の健康状態を把握しているようだな」
目の下に隈の出来た顔をしていれば誰だって調子が悪いと思うものだ。なのにゾルザルは、それを古田の特技であるかのように言った。きっと誰も、ゾルザルの顔色のことを口にしないのだろう。
「この鍋を空ける瞬間が楽しみなんだ。今日は何が入っているのかな？」
ゾルザルは鍋の蓋をとって中味を覗き込んだ。
「ちっ、なんだこれは！　まるで病人食でないか」
鍋の中味は麦と野菜を畜乳で煮たポリッジであった。肉の塊が数個浮かんでいるがゾルザルは酷くがっかりした面持ちとなる。

「病人食とお思いですか？」
「これを違うとでも言うのか？」
「お試し下さい」
皿にポリッジを盛りつける古田の言葉に従って、ゾルザルはひと掬い口に運んだ。そして舌鼓ともとれる舌打ちをして忌々しそうに歎息した。
「なんだこの味は……こんなポリッジ、喰ったことがないぞ」
「畜獣の骨を二昼夜にかけて煮込んで骨髄をたっぷりしみ出させ、それが十分の一になるまでひたすら煮込み濃縮します。そのスープに、これまた沸騰させないようにしつつ半分になるまで煮詰めた畜乳を用いて麦を煮込みました。後は、単純に岩塩のみを振りかけてあります。病人食っぽく見えますが、味の深さは料理として見てもなかなかのものだと思いますよ」
「ああ。こいつは凄い」
ゾルザルは、あっという間に皿を空けてしまった。おかわりとばかりに鍋を奪い取ってそのまま匙をつっこむ。
「あっ……テューレさんの分」
「しまった、思わず手を付けてしまったぞ。これというのも、こんな美味い物を作るフルタが悪い。どうしてくれようかこの野郎。死刑にしてやる！」
たちまち場が凍り付いた。

いくらゾルザルでも、まさか美味い料理を作ったことが悪いなどと言うとは誰も思ってなかったからだ。皆、どうなることかと言葉を詰まらせ蒼白となった。
「冗談だ。面白くなかったか？」
ゾルザルはそう言いながら周囲を見渡した。
皆、慌てて追従笑いをする。乾いた笑いが皇太子の執務室に響いた。
「き、肝が冷えました」
古田も胸を撫でて、どぎまぎした様子を見せる。
「最近では冗談も、気軽に言えぬようになってしまった」
「殿下は権力者ですからね。誰もが殿下の顔色を見て、耳心地の良いことしか言わなくなってるんですよ。顔色のことも誰にも言われませんか？」
するとゾルザルは「そんなに顔に出ているか」と顔をさする。「ちっとも言われんぞ。ま、お前に限っては随分と言いたい放題だが、それも食い物に関わることだけだ。政治やら、その他のことで口を開くような奴は俺の周りにはいない」
「まあ、食べ物については妥協しないように心がけていますので」
「お前はそれでいい。そのままでいろ」
「はいわかりました。ところでテューレさんの分ですが、厨房に用意がありますので、そちらをすぐにお持ちします」

「ああ、そうしろ。これは全て俺が喰らう。食が細くなったとは誰にも言わせん」
ゾルザルはそう言うと、ポリッジに浮かんでいる肉塊をすくい上げてかぶりついた。
「うむ、これは臓物だな。こりこりとした歯ごたえがたまらん」
そんな感想を語りながら、ゾルザルは皿を空にしていった。

皇太子執務室を出た古田は、追って来る者の気配を感じて足を止めた。
他に重要な施設がないためか厨房へと向かう廊下は、執務室から離れると途端に人気が無くなる。
そのために廊下を早足で歩いている古田も、背後からの足音に気が付くことが出来た。
振り返ってみればテューレが小走りに追って来る。
「待って！」
「どうしたんです？」
息せき切ってやってきたヴォーリアバニーに古田は尋ねた。
「殿下が、お代わりを持って来るようにとの仰せなの。あの鍋を丸ごと独り占めしておいてまだ足りないと言うのよ。とんでもない胃袋だわ」
「そうですか？　強がってらっしゃるように見えますが……ま、気に入って頂けたんならそれでも良いんですけどね」
そのまま古田は、厨房に向かおうとした。だが、言付けをして用を済ませたはずのテューレが一

向に立ち去る気配を見せないので、どうしたのだろうと気になった。
「どうしたんです？」
「途中で鍋でもひっくり返されて、お代わりが足りなくなったら殿下のご機嫌を損ねることになってしまうわ。だから、一緒に行ってあげます」
テューレはそう宣言して古田の隣に立った。
別に鍋をひっくり返す心配なんてないのだが、古田は逆らわないことにした。
しばらく無言のまま二人は肩を並べて歩く。
ふと視線を感じた古田は、テューレを振り返った。だがテューレは慌てたように目をそらして前に顔を向けてしまう。そして古田に「何よ……」などと突き放すように言ってきたりする。
「いえ、別に」
「じろじろ見ないで。イヤラシイ」
テューレはそう言って胸元を隠すように前襟の袷を整えた。
そんなつもりは毛頭無いのだが、あからさまに身構えられると、テューレの隠しているようで微妙に隠せていないバニーガール的衣装のきわどさをかえって意識してしまった。
「別に見てません」
「嘘。見てたくせに」
「いや、見ていたのはテューレさんでは？」

「馬鹿言わないで！　なんで私があんたを見なきゃいけないの？」
……見てたじゃないか！　と、さらに言い返すことも出来たが古田は肩の力を抜いて、テューレに譲ることにした。
「そう言えばそうですね。多分勘違いです。失礼しました」
「そうよ。失礼よ」
「済みません。お許し下さい」
ぺこりと頭を下げて事態の収束をはかる古田。だがテューレはそれで話を終わらせることをよしとしなかった。
「駄目よ。許さないわ」
「あの……どうしたら、許していただけるでしょうか？　前みたいに、話をお聞きすればいいんですか？」
テューレは焦った表情をすると古田に人差し指を突きつけた。
「そ、その話は忘れる約束よ！」
「そ、そうでした。忘れます。忘れました！」
実のところテューレは、古田を相手に愚痴をこぼしたことがあるのだ。
帝都を放棄してテルタへと至る道々でのことだ。移動中のことだけに他に仕事もないため、ほぼ一日かけてずうっと喋った。

テューレは、これまで誰にも話を聞いて貰えなかったこともあって、心の澱がかなり色々と溜まっていた。そして、それを何も言わずにうんうん聞く古田を得たことで、あたかも水を得た魚のごとく喋った。喋ってしまったのだ。

何故自分がここにいるのか。それは故郷の部族を救うためだった。なのに、そんな自分を同族達は裏切り者として仇敵扱いしている。理不尽だ。酷い、酷すぎる。これまで自分がどれだけ酷い目にあって来たのか。どうして他の人間ばかりが救われるのか。どうして自分には、誰も手を差し伸べてくれないのか。腹が立つ。とっても不愉快だ……等々。

勢い余って暴走した。他人に知られては真剣に不味いことは何とか隠したものの、そうでないことは……いや隠していることがあるからこそ、それ以外のことは赤面してしまいそうなことも含めてすべてを打ち明けてしまったのである。

そして翌日になって、どうしてあんなこと喋っちゃったのだろう私？　と頭を抱えて悶え、秘密を知られた以上、生かしちゃおけねぇ的な気分と、自分の話を黙って聞いてくれるような貴重な存在は簡単に失えないという、愛憎混在した複雑な感情を抱くようになってしまったのである。

以来、テューレは何かというと古田の近くにちょろちょろと出没する。

それは古田が自分のことを言いふらしているんじゃないだろうかという警戒心であったり、自分のことを知った古田がどんなふうに思っているか、本音では馬鹿にしてるんじゃないだろうかと確かめたくなる心理であったり、そしてまた話を聞いて貰いたいという依存心といった、いろいろが

ごたまぜになって、行動として現れたものなのである。
「今度は、貴方の話をしなさい。聞いてあげてもよくってよ」
そしてテューレは古田の話をやたらと聞きたがった。
「どうして、そんなことを？」
「……えと、その、あの、で、殿下よ！　そう、貴方がいずれ開くというお店に殿下が興味を持ってらっしゃるの。報告する必要があるの」
何を慌てているのだろう。古田はそう思いつつ笑った。
「それじゃ、しょうがないですよね。どこまで話しましたっけ？」
「昔、雇い主と喧嘩して店を飛び出したって話は聞いたわ。それと、あなたの夢ね。お店の間取りとか、どんなところに店を構えたいかって話だったわ。けど、もっと現実的な話はないのかしら？もっと具体的な話よ」
「具体的？」
「例えば店に、どんな従業員を置くかって話よ！」
間髪入れずに答えが返ってくる。何をそんなに力む必要があるんだろうかと古田は首を傾げた。
「はあ……」
とりあえず、廊下で立ち話をしているわけにはいかないから厨房に戻る。そしてゾルザルが要求したお代わりと、テューレ分の昼食の支度をするため鍋を火にかけた。

テューレは一歩引いた古田の背後から話をきくこととなった。
「どんな女を雇おうと思っているのかしら？」
「条件は前に言ったとおりですよ」
「聞きたいのは具体的な話よ。ここにもメルダとか、ネッティとかいるでしょ？　意中の女はいるのかしら？」
テューレは厨房周りで下働きをしているヒト種の女奴隷の名前を挙げた。
「そうですね……う～ん」
「は、早く答えなさいよ」
「やっぱり、テューレさんみたいな方ですね」
「わ、わた、わわ、わたし⁉」
「ええ。俺って和食料亭で修行したんですけど、この土地の食材と相性がいいみたいなんです。だからいっそのこと、この土地の料理ということを売りにしてみたら面白いんじゃないかって思いましてね。そうすると雰囲気を出すにはテューレさんみたいな方に来て貰うのがいいんですよね」
中華料理なら中国人、インド料理はインド人、フランス料理ならやはりフランス人のギャルソンが居た方が演出効果が見込める。そこで、特地の食材を用いた料理店を経営するなら、特地の亜人がフロアに居た方が良いと考えたのである。
ただテューレの耳には、古田の言葉が別の意味に聞こえたようだった。

突然あわあわあわ……ともじもじし始め、「わ、私がいいの!?　ダメよ、私は殿下の愛玩奴隷なのよ。そんなこと出来るわけないじゃない」と盛んに両手を振った。

「でも、テューレさんみたいな方が理想的なんですよ。仕事もてきぱきと有能だし、客あしらいも上手。と言っても、実際にテューレさんみたいな女性は高嶺の花ですよね。どこで探したもんだか……」

実際、テューレほどに有能ならば、大企業や官庁で活躍しているだろう。小さな店の仲居にはとうてい収まる器ではない。それに、バニーガールを置いたりしたら男性客ばかりの特殊な店になりそうだ。「諦めるしかないか」と古田は呟いた。

「そんなことないっ！」

だが、何がそうさせたのか、突如としてテューレは不快そうに唇を尖らせた。その勢いに驚いた古田は半歩退いた。

「な、なんですか？」

「女を欲しいと思うなら、簡単に無理だと決めつけたりせず、相手に頼み込むべきだと言いたいのよっ！　何度も何度も頭を下げて頼んだら、しょうがないわねぇ、そこまで言うなら考えてあげないこともないわとか言って、不承不承頼まれてくれるかも知れないでしょ!?」

「そうは言っても、相手にだって都合はあるでしょうし」

「こ、こ、こ、この根性なし。どうせなら、攫って逃げるぐらいの気概を見せなさいよっ！」

「なんですその掠奪婚!?　従業員雇うのに、そんな真似してどうするんです？」
「何を言っているの!?　お店は、貴方の王国なんでしょう!?　ならば女将は女王！　その女と結婚するぐらいの気迫を持たなくてどうするっていうの!?　女はね！　男が自分のためにプライドを捨ててるところを見て本気度を測るのよっ！」
接客を任せる従業員の話のつもりだったが、いつのまにか女将になっていた。
とは言え、古田が考えている店の規模なら、仲居を女将と呼んでもさしたる不都合はないので修正する必要を感じなかった。古田が持ちたいと思っている店は、料理人一人に仲居さん一人でまかなえる、小さな小さな店なのだ。
「そ、そりゃまぁ料理店は大抵夫婦でやるもんですけどねぇ」
「ふ……夫婦!?」
何故か一人で顔を赤くしているテューレに対し、古田はどこまでもマイペースである。そしてテューレに「はい」と暖まった鍋を入れた籠を手渡した。
「な、なによこれ？」
「運ぶのを手伝ってくれるのでは？」
古田も古田で、肉の入った籠を持ち上げる。肉は盛りつけた時にポリッジに放り込むのだ。
「そ、そうね。手伝ってあげてもよくってよ」
テューレは、慌てて籠を持ち上げた。

「でも、こんな話は殿下には内緒にして下さいよ」
「……そうね。確かに殿下に報告できない下世話なお話ね。それに現実的じゃないわ。所詮は夢よ。そう、これは夢なのよ」
「げ、下世話ですか……」
自分の店の話が下世話で夢かよ……古田は少し傷ついた。
皇太子執務室へと向かって廊下を戻り始める二人。途切れた話を蒸し返すこともなく、それでいて今の話題を引きずっているためか、別の話題を持ちかけようという気にもならず、お互いにずうっと黙り込んでいた。
ちらちらと視線を向けあう。そしてあの角を曲がると皇太子の執務室が見えて来るというだんになって、どちらからともなく足を止めた。
テューレはしばらく躊躇していたようだが、思い切って切り出すように口を開いた。
「ねぇ……何か、貴方の弱みになりそうな話はないの？」
「はい!?　何ですそれ？　どういう話ですか？」
「安心できないのよ。貴方は私のことを知っているのに、私は貴方のことをそんなに知らない。これってとても落ち着かないの。不安なのよ。貴方がそういう人じゃないって思いたいけど、それを信じられるほど貴方のことを知らないわ。だから、貴方が私のことをあっちこっちに言いふらしているんじゃないかって心配になるの。だからそれを知っている限り、私の秘密も守られるって信じ

られるようなことを知りたいの。何かないのかしら？」
「最近、妙に絡むと思ったら、それが理由ですか？」
「そうよ。遠回りしちゃったけど、知りたかったのはそれよ」
「でもそれって、当の相手に直接聞きますか？」
「助けて欲しい時は助けてって言えばいいって言ったのは貴方じゃない！　力になるって言ったじゃない！　助けてよ。この不安を何とかしてよ！」
テューレはそう言って古田の胸板を叩いた。
その打撃はちっとも痛くなかった。だが、痛みとは違う種類の衝撃があった。それは決して不快なものではなく、テューレが向けてくる懇願に近い表情とともに、仕方ないなぁという気持ちを古田の胸中にわき上がらせた。
「そうですね。う～ん」
古田はしばらく考えた末に、テューレの頭……兎耳に口を近づけた。
「僕がスパイ……こっちの言葉で言うと、えーと、間諜だって言ったらどうします？」
「ひっ⁉」
棒立ちになるテューレ。目を丸くして半歩後ずさった。
「あ、あり得ないわ」
古田はテューレに預けた籠を受け取ると、「それじゃあ先に行きますね」とゾルザルの執務室へ

と向かった。
一人残ったテューレは壁に背を預けると唇に手を当てる。
「テューレ様……」
どこからともなく響く声。ボウロの声だ。
「驚きましたでござりまする。到底、信じられないでござりまする」
テューレとボウロも、ゾルザルと同じように身辺にいる者を疑ったことがある。
もちろん古田も疑惑の対象となった。だが彼は日頃の言動から見ても、最初に容疑者リストから削除される存在だった。
普通、密偵とは目立たないように、そしてその組織から排除されることが無いよう極力言動に気を配る。それに対して古田は、時としてゾルザルに逆らってみせることすらあった。その態度はゾルザルの気まぐれな寛容さがなければ放り出されてもおかしくないものであり、密偵であるならば決してしないものなのだ。それに、自分から自分を密偵ですと言い出す者はいない。
「テューレ様」
「なぁに？」
「マツイフユキの移送はすでに完了しております。どういたしましょう？」
「情報は漏れたかしら？」
「あの男が自ら申しているように間諜であるならば、当然敵の知るところでありまする」

「いいわ……それならば、作戦はこのまま執り行います」
「もし、フルタが敵の間諜ならば、敵は来ない……罠と知りつつやって来るような者はいないと言うことでござりまするな？」
「それを確かめるためにも、手抜かりがあってはだめよ」
「はい。肝に銘じましてござりまする。敵がやってきたならばきっと討ち果たすか捕えることでしょう……なれど……」
「なぁに？」
「テューレ様にとっては、フルタが敵の間諜であった方が宜しいのでは？　その方が事態は面白くなりまするかと」
「そうね。ゾルザルお気に入りの料理人が敵の密偵だったなんて最高に笑える話だわ。だけどこれだけは必ず成功させる必要があります。あまり失敗が続くと私が殿下のご不興を買ってしまいますからね。それに今後のことを考えると、敵の情報を得ておく必要もあります。ですから一人か二人は捕虜をとっておきたいの」
「かしこまりました。では、フルタが嘘つきであることを祈って、朗報をお待ちあれ」
そう言ってボウロの気配は消えた。
『面白れぇ名前が出て来たな』

ゾルザルの執務室の前で、古田は骨伝導イヤホンを押さえながら喉元に装着したマイクに話しかけた。

「予想はしてましたけど、テューレさんがねぇ」

『ボウロってのは、敵の密偵組織の元締めと目されてる奴の名前なんだ。それがゾルザルの女と繋がっているって分かっただけでもお手柄だよ』

古田は不機嫌そうに顔をしかめた。柳田（やなぎだ）がテューレをゾルザルの女と呼んだことが気に入らなかったのだ。だからだろう、つい庇うように言った。

「今の会話からすると、テューレさんはゾルザルに心から従っているという訳でもないようです」

『そうかも知れないが、今回はやる気で来る。つまり待ち伏せされてるってことだな』

「そうみたいですね」

スパイだと名乗った時にテューレにとりつけた集音マイクで、テューレとボウロの会話はすべて古田に筒抜けとなっていたのだ。しかもその電波はあちこちに設置された中継所を経て、イタリカのフォルマル伯爵家の地下に置かれた特地方面派遣部隊イタリカ事務所まで送られている。

そこでは情報収集活動、および防諜、そして各種の工作作戦の実施にかかわる調整作業が行われていた。

そこの主の柳田は、「うむ」と頷いた。

「さて、どうするかだ」

拉致犠牲者救出作戦は、自衛隊にとって、日本にとって極めて重要なものとして位置づけられている。例えそれが罠であっても、今更止められるものではない。

「とは言え、なれど、さりとても……一個軍団相手ってのがきついのも確かだ」

柳田はヘッドホンを押さえながら、書類やファイルで山積みとなっている机の上から地形図の束を引き抜いた。バサバサバサと何枚もの地図が床に散らばったが、古田が報せてきたタンスカという地域を含む地形図は手に取ることが出来た。

『だったら作戦中止ですか？』

そうなれば古田はテューレから敵の間諜として認定されてしまうだろう。当然、身が危険にさらされるので任務を終了してアルヌスに逃げ帰ることになる。

正直、古田としてはそうなった方がよかった。実のところ先ほどの危うい告白も、これで任務が終わりになったらいいなぁという期待を抱きながらしたことなのだ。ところがそれがかえってテューレとボウロの繋がりや、ゾルザルに対する叛意をあぶり出すこととなった。それを見逃す柳田ではない。

「いや、これはいろいろな意味でチャンスなんだ。お前はもうしばらくそこにいてテューレとかいう女の観察を続けろ。こっちはこっちで工夫する」

『煮立った鍋に手を突っ込むつもりですか？』

「ああ。確かに奇襲にせよ強襲にせよ、事前に察知されて待ち伏せられれば、その難易度はたちま

ち高くなる。ハリウッド映画みたいにはいかねぇ。けどな、脱出の目処さえ立てばなんとかなるものなんだ。まぁいい、それはここで話すことじゃねぇからな。何かあったら連絡してくれ」

こうした特殊作戦における攻撃側の優位を構成する最大の要素は、不意を衝くことによって発生する敵の指揮、情報、行動の混乱である。それに乗じて行動の自由を確保しつつ所与の目的を完遂して脱出することで作戦は成り立つのだ。

だが、あらかじめ攻撃がある事を予想している敵は、混乱からの立ち直りが早い。

侵入や脱出の経路は、ことごとくが警戒されて罠を張られるだろう。それを力ずくで突破することも出来るが、その分、被害も大きくなる。さらに貴重な時間をも浪費することになる。

指揮系統を立て直した敵はたちまち数の優位を生かして、こちら側を押しつぶしに来る。だからこそこの手の作戦は情報管理と、現場情報の収集が重視され、実施の段階では行動の迅速さと脱出経路の確保が求められるのである。

特地と日本との間には武器や通信、移動力などに圧倒的な格差がある。だが、それだけを頼りにして作戦計画を立てるのは自分に都合良く物事が進むと決めてかかるのと同じであった。それをすれば、旧帝国陸海軍の参謀達と同じでたちまち「無能な働き者」となってしまう。齟齬と失敗と勘違いが当たり前のように起こる戦場にあっては、兵器の優劣などは、兵の効果的な運用でたちまち逆転され、状況は最悪の方向へと転がっていくのだ。

ちなみに、敵の奇襲作戦に対抗するための原則は、混乱からの速やかな回復と、巧遅よりも秒単

位の拙速を求めた作戦指揮であることは言うまでもないことである。何しろ、現場は「状況を確かめるから、ちょっと待て」などという言葉よりも「こうしろ！」という命令を求めているのだから。

古田との通信を終えた柳田は、車椅子の背もたれに身体を預けながら拉致犠牲者救出作戦をどうやって成功に導くかを考えて唸った。

当初の予定では陸路で戻ることになっていた。

だが、敵に待ち伏せられているということになると、退路は塞がれていると想定すべきであった。そして待ち伏せて此方の裏をかいたつもりでいる、敵の意表をつくような動きをしなければならないのだ。

とすれば、やはり航空機による離脱しかない。だがそれは、とある理由によって一時は断念したことであった。

カラカラと車椅子の車輪を回転させて、後進。部屋の隅にある引き出しへと手を伸ばす。

そこからチヌークの運行予定表を取り出した。

数に限りのあるヘリコプターは、ゾルザル派ゲリラの掃討作戦に連日動員されている。パイロット達は皆超過労働気味で、急に用立てようとしてもどうにかなるような状態ではなかったのだ。

拉致犠牲者救助の優先順位は確かに高いが、帝国のゲリラ相手に血みどろになって戦っている隊員達を支援することも優先順位が高いのだ。なので、当初は陸路からの脱出を計画していた。

「……行きは良い良い、帰りは怖い」

そんな小唄を口ずさみながら、柳田は電話に手を伸ばす。
「そちら空自さんですか？　こちら陸の柳田です。いつもお世話になってます。ちょっとお願いがあるんですけどね、大急ぎでファントムを飛ばして空撮して欲しい場所があるんですよ。ちょっとばかり込み入った内容なので、念入りにお願いします……ああ、それは任せておいてください。今度呑みに行きましょう。えっ、身体ですか？　大丈夫ですよ、最近は大分良いんです。それじゃあ頼みます」
電話を一旦切って、もう一度ボタンを押す。
「こちら柳田だ。チヌークを一機、どうにかしてもらえんか？　確か、整備に入る寸前なのがあったろ？　その整備をちょっとばかり先延ばししてさ……え？　もうエンジンをバラしちゃった？　そりゃ困ったなあ。どっかに暇なチヌークない？　あるわけねえか」
柳田は、電話を切りながら額に深く刻まれた皺を揉むように指先で摘んだ。
「……どっかの作戦に割り込ませて遣り繰りするしかないってか？」
改めて運行予定表を指でなぞる。すると、空白となっている部分のあるチヌークがあることに気づいた。
「なんだよこれ……現地にて待機して任務終了後帰投って、要するに飛んでねぇってことじゃねぇか。誰だこんな無駄な使い方してるのは……場所はクナップヌイ？」
柳田は地形図を探して周囲を見渡した。そして目的の物が机の下に落ちていることに気づいて手

を伸ばす。だが、車椅子の上からでは、身体をせり出しても手がなかなか届かなかった。もう一度と手を伸ばすと、柳田の肩越しに傷だらけの白い腕が伸びて地形図を拾い上げた。

「これでいいのかい？　ヤナギダの旦那」

「……なんだ、デリラか」

音もなく背後に忍び寄っていたのはデリラだった。

背中側から柳田の首に腕をまわしてふわりと抱きつく。

「声をかけてくれりゃいいのに。あたいをこき使っておくれよ」

「ふん。俺をこんな身体にしやがった奴に介護して貰おうとは思わんよ」

「あっ、ゴメンよ、ゴメンよ！　もう、そろそろ許しておくれよお」

柳田に頬ずりするデリラ。柳田は「ああっ、いちいち抱きついて来るなっ！　いいから離れろ。暑っ苦しい」と言いながら、デリラとの間に腕を入れて身体を剥がしにかかった。

デリラは恨めしそうな表情をしながらも柳田の言いつけに素直に従う。

「そんなこと言っちゃってさ、寝床じゃしつっこい癖にぃ」

親指の爪を軽く噛りながらそんなことを言うデリラに「場所柄をわきまえろって言ってるんだ！」と怒鳴ると、柳田は地図を机の上に並べた。

「なんだ、同じ方向じゃねぇか。これなら、帰りにちょこっと寄り道して貰えれば、作戦部隊を拾えるな……よし、これで帰り道の成算が立つ」

「その作戦。あたいが敵の巣穴で見つけてきた奴だよね」
「そうだ」
「そろそろあたいを褒めておくれよ。一生懸命ノッラとか言う奴と戦ったんだよ。結局は逃げられちまったけどさあ」
「いや、残念だが褒めてはやれん」
「なんで!?　もしかして、ガセネタだったのかい？」
「いや、ガセネタより始末に悪い。敵の罠だった」
「そ、そんな！　ゴメンよ、ごめん。本当にゴメンよ」
デリラは両手を合わせて頭を下げた。
「だが、囮が本物なのは確かだ。だから、罠を承知で手をつっこむことにした」
そんな柳田の言葉に、デリラも瞳を輝かせる。
「だったら、あたいにも出番をおくれよ。きっと敵をやっつけてやるからさ」
「当然だな。ちょっとばかし厳しくなるが、是が非でもやってもらうからな」
柳田はそう答えると、電話をとりあげてボタンを押した。
「狭間陸将ですか？　こちら柳田です」

＊　＊

三日間と設定された調査活動を終えた伊丹達は、宿営地を引き払うとチヌークに乗り込みクナップヌイの地をあとにした。

来た時とは違い、空は雲一つ無い青空が広がっていた。

黒い霧が立ちこめ、重苦しさの漂っていた場所からの離陸なだけに、高度が上がっていく開放感は素晴らしいものがあった。

「……と言うことで、帰り道でちょっとばかり寄り道することになりました」

そんな中、伊丹は部下や民間人達に予定の変更があることを告げた。

「儂らを乗っけたまま寄り道しようって言うのじゃから、よっぽど大事な用事なんじゃろうな？」

一番に質問をしたのは養鳴教授だった。

「ええ、まぁ」

「で、隊長。どこに行くんですか？」

桑原陸曹長の問いに伊丹は「タンスカだってさ。作戦行動中の部隊を拾えって言ってた」と他人事のように答えた。

「ってことは、戦闘になるかも知れない!?」

桑原や倉田が「聞いてないよ」「そんなの嘘だろ？」と言いたげに身を乗り出した。

「以前からの懸案となっていた拉致犠牲者の救出作戦が進行中らしい。このチヌークはその実行部

隊を乗っけてアルヌスへと帰る」
「おおっ！」
これを聞いて目の色を変えたのは栗林菜々美とカメラマンである。
「拉致犠牲者の救出作戦なんて、もしかして大スクープ!?　報道局長賞もの!?」
「そうだと良いですわね」
荷物から輸液セットを取り出して、機内のあちこちにぶら下げる作業を始めた黒川が菜々美を応援するように言った。
「殿下、ハミルトン様、お手伝いしていただけますか？」
「相手は、ゾルザル兄様の部下か？　わかった。妾達はクロカワを手伝おう」
伊丹は、場をまとめに入った。
「と言うことで、先生方には大変申し訳ありませんが、寄り道、よろしくお願いいたします」
養鳴は腕を組んで唸る。
「うーむ、救出作戦とあらば仕方あるまい。儂らも手伝おう」
「いや、特に手伝っていただかなくてはならないようなことはありませんが」
「何を言う！　同じ日本人として手を拱いて見ているわけにはいかんじゃろう？　ここは一つ、知的な戦い方という奴を見せてやるからな」
「いや、ですから戦わなくていいんですけど」

伊丹と養鳴がそんなやりとりをするのを後目に、テュカはコンパウンドボウを取りだして支度を始めた。ヤオも弓を取り出して弦を張り始める。レレイは、鞄から真鍮色に輝く漏斗の束を取り出す。

「あの……レレイちゃん。それ、何に使うの？　まさかと思うけどそれが武器とか？」

倉田はこの場での漏斗の使用目的が理解できなかったため、思わず問いかけた。

「こう使う」

レレイは小声でモノフォニーの一節を唱った。すると十数個の漏斗が宙に浮かんでレレイの周りを舞った。

「ま、まさか、それは、ファ……」

「待て倉田っ！　それはただの漏斗だ。決して英訳するな！」

伊丹は倉田の声に被せるように叫んだ。

「おお、何度見ても驚きだ！　まさに魔法じゃな」

養鳴や漆畑はレレイの引き起こした現象を見て、感嘆の声を上げていた。

ロウリイは、何故かチヌークに乗り込んで来ている冥王ハーディの使徒に、まるでいじめっ子のような表情で告げる。

「戦闘よぉ。羨ましいでしょう？　参加したい？」

実に嬉しげであった。さすが戦神の使徒。まるで楽しいパーティがこれから始まるかのようなはしゃぎっぷりを見せている。だが、ここで問われるままに「参加する」などと口にしたら、きっと

楽しみを横取りするのかと睨まれてしまうだろう。
「あ、いや、参加はしないで見るだけにしておくぜ……しておきます」
だからだろうか、ジゼルはそう答えるとぺこりと頭を下げたのだった。

＊　＊

タンスカは、セス湖に流れ込む大河の、主に河口付近部における名称である。この河は少し遡るとメッセ、さらに上流ではグエラなどの名称で呼ばれる。河口付近にはエメラ、ミューゼ、テウィン、ネッキの名で呼ばれる四つの中洲があって、それぞれは吊り橋で連絡され、浅瀬には川底に丸太を深々と打ち込んだ木柵が組まれ、水陸双方からの進入を阻む水上城塞となっている。

ただし、城塞の呼称で呼ばれていても、ここにあるのは帝国が通常建設するような石材を積み上げたものではなかった。主要な柱部分こそ石積みのしっかりとした作りでありながら、壁面は木材が用いられるという変則的な建造物なのだ。

帝国の常識では、これは城塞とは呼ばれない。城塞と呼ばれるにふさわしい構造物は、全てを石材で造る恒久的な建物でなければならないからである。

木材を用いるのは、宿営地など短期間の使用を前提とするときだ。その場合城塞ではなく、砦と

呼ばれるのが普通であった。

にもかかわらず、このタンスカは例外的に城塞の呼称が用いられていた。

その理由は、計画当初、石造りの堅牢な城塞となることが予定されていたからである。実際に工事にも着手し、多くの石材が石工達と共に運び込まれて、石を積み上げていく作業が行われた。

ところがある日、建物がその自重によって地面へと沈み込み始めた。誇張でも文学的な修辞でも無く、文字通り建物を地面が飲み込んでしまったのである。

中洲を形成する地盤がゆるいことは、もちろん最初からわかっていて、当時の帝国における土木技術の粋を結集した最高峰の基礎工事が行われている。いや、行われた「はず」であった。にもかかわらず、建造途上の建物はあたかも船が沈むが如く、地面にめり込んでいき、ほんの数日で当時の二階部分が地上階となってしまったのである。

しかも、地上に残った二階部分ですらも沈もうとしていた。

慌てた石工や帝国軍の将兵達は大急ぎで壁や階段などの建材を取り除いて建物を軽くすることを試みた。そして、やっと沈下が止まった時には、建物は屋根と柱しかないという状態に陥っていたのである。

もちろん、これでは兵舎としてはおろか、城塞としての役割も果たすことは出来ない。

そのために大きな空間となった柱と柱の間には丸木を組んだ壁をはめ、兵舎としては木造の建物が並べられるという半端な造りにせざるを得なくなったのである。

このことは、タンスカが防御施設としては重大な欠陥を抱えていることを意味していた。当然、事態は担当者の責任問題へと発展するかに思われた。ところが「この要塞に要求される機能は、タンスカ河の中洲にあって、セス湖の水上交通を掌握するための拠点となることにある。敵の侵攻を、城壁で防ぐという役割が要求される可能性も少ないため、防御施設としての欠陥は問題視する必要はない」という主張が、建造に携わった一部の貴族から強力に発せられたのである。

そこには巨費を投じて造った建物を使用することもなく廃棄するのは惜しいという判断もあったかも知れない。だが、おおかたのところは、責任回避以外の何者でもないというのが衆目の一致するところである。曲学阿世、牽強付会がまかり通るのは帝国ではさほど珍しいことで無く、その貴族の口にした「このままでも、タンスカは機能的になんら問題はない」という言い訳がそのまま通って、公的に城塞の呼称が用いられることとなってしまったのである。

「ゴダセン閣下。皇太子殿下よりの訓令です」

タンスカを中心にセス湖周辺地域の属州統治を任されているゴダセンは、テルタから到着したばかりの帝権擁護委員の差し出した手紙を受け取ると、内容にささっと目を走らせた。

「君は？」

「はっ、皇太子殿下より閣下付きを拝命いたしました、帝権擁護委員（オプリーチニキ）ダーレスです」

ダーレスは同じようなコボルトの仮面をかぶった配下を二人ほど引き連れていた。二人はゴダセ

ンに向けて自らの胸に拳を当てる敬礼をした。
「この手紙には、詳細の説明は君から受けろとあるが？」
コボルトの兜を小脇に抱えたダーレスは、ゴダセンに説明を始めた。
それは囮を用いて日本人の影戦を担う者を捕縛、あるいは殲滅し、敵戦力の漸減を図る。さらには敵組織の実態を解明しようという作戦であった。
「その話なら、以前から聞いてはいた。だが儂は反対をしていたぞ」
「存じ上げています。ですがこれは命令です」
「わかっておる。その為に殿下が虎の子の一個軍団を割いて下さったことも承知している。だがあえて火中に手を突っ込んで栗を拾う意味は何だ」
「敵の影戦を担う実行組織の実態を暴くためとご理解下さい」
「影戦か……儂は好かんぞ」
「好き嫌いで論じて良い問題ではないのでは？　表の戦いを有利にするために、裏では熾烈な影戦が繰り広げられているのです。こうしている今もです」
「それは分かっている。だが感想ぐらい言わせろ」
ゴダセンは、ダーレス委員と共に執務室を出ると「そもそもお前達は敵を甘く見すぎている」と愚痴った。
「それも感想ですか？」

暗に、皇太子を批判しているのかと訊ねており、それ以上は粛清の対象になるぞという警告の意味もあった。

「もちろんだ。別の何かに聞こえるかね？」

建物の外に出ると、日本人の入った檻がおかれていた。ゴダセンは檻を覗き込むと嫌そうな表情で鼻を鳴らす。

「……とんでもない疫病神を運び込んでくれたもんだ。この男がここにいると知れば、ニホン人共が、火がついたように怒りまくって、襲いかかって来るぞ」

「是非とも襲って来て欲しいところです。我々はそれを待っているのですから」

「その結果、何が起きても儂は知らんぞ」

ゴダセンは言い放つと日本人をミューゼの倉庫地下に運ぶように命じた。木製の檻が兵士達によって運ばれていく。

「閣下。囚を地下に隠すのは反対です。どこに隠しているか分からないと敵が来てくれないかもしれませんから」

「ならばいっそのこと中央広場のど真ん中に置いて、晒し者にしておくか？」

「それが宜しいでしょう。そして充分な見張りを立てておくのです」

「では、そうするとしよう」

うんざりした表情のゴダセンは命令を変更して、囚の入った檻をミューゼの中央広場に置くよう

指示した。
「これで何とかなればよいのだがな」
「そういえば閣下は、ニホン人と戦ったことがおありでしたね？」
「ああ。手も足も出なかった。惨敗だった」
「しかし、我らとていつまでも負けておりません。ヘルム将軍の作戦指導で状況は有利になりつつあります。さらに新しい魔法が報告されたと聞きます。大変に画期的な魔法だそうで、それを用いさえすれば連中にもきっと対抗していけるでしょう」
「君が言ってるのは、爆轟魔法のことだな。確かにロンデルで報告されて脚光を浴びているようだ。しかも炎龍撃破という実績付きだから威力の方も折り紙付きだ。だが扱いの難しい技でもある。あちこちの魔導師がその技を我が物にしようと論文を読み漁っているだろうが、身につけられる者はそうはおるまい」
「もしや閣下もご挑戦なさったのですか？」
「ああ。だがどうにも光輪を二つ以上作れなかった。実用的な威力を発揮するには最低でも五つは作れないとな」
「五つ作れるようになられましたら、ぜひ、閣下も軍の方にご復帰いただきたい」
「やめておけ。魔導師が戦う時代はとうの昔に過ぎ去った。爆轟魔法を叩きつけ合えば、戦争はこれまでとは違う恐ろしいものになるぞ」

「恐ろしくない戦争などありません」
ゴダセンは、自分が参加した直近の戦争を思って、「そうだったな」と頷いた。
「よし、直ちに全軍を警戒態勢に入らせろ！　何時、敵が襲ってくるかわからんぞ」
ゴダセンの指令を受けた、伝令達が一斉に走り出す。武装した兵士達が金具の音を立てながら城塞内を走って配置についていった。
「河に舟を巡回させて警戒を密にさせよ。敵は空から舞い降りて来ることもあるぞ。全てを警戒するのだ」
すると兵卒の一人が敬礼して声をかけて来た。
「長官閣下！　地面の下にも気を配ったほうが宜しいでしょうか？」
ゴダセンは虚を突かれたように眉を寄せたが、程なくして大きく頷いた。
「充分にあり得る話だ。気をつけろ」
すると兵士達は視線を下に下ろすと、一斉に後ずさった。
「空、地の底、水の中……全てに気を配れ！　死にたくなくば手を抜くな！」
こうして、あちこちに見張りが立ち、鳴子が河に張り巡らされ、兵士達が交代で地面に耳を当て異音が近づいてこないかを警戒する態勢がつくられていった。
「嫌だ、反対だとおっしゃっていた割には、随分と積極的ですね」
ダーレスは感心したように言った。

「個人的な感想は感想、任務は任務だからな。ここまで来れば、なすべき事をなすしかなかろう」
「大変結構です。殿下もお喜びになることでしょう」
「成功すれば、の話だがな。少なくとも儂が手を抜いたから失敗したとは言わせんつもりだ」
「これだけの戦力を集めておいて、失敗することなどあり得ると思えませんが、閣下は失敗すると考えてらっしゃるのですか？」
「さあてな。どんな作戦も、成功するという確信があるから始められるのだ。なのにいざ実行に移すと失敗したりする。ダーレス委員、いったい何故だと思うね？」
「敢闘精神に欠けるからです。勝利しようという意欲がないと失敗するのです」
「それは知らなかった。失敗は意欲のせいか」
「それ以外に何があるとおっしゃるのでしょうか？　閣下こそ、失敗の原因を何だと思っておいでですか？」
「さあな。作戦そのものとか、あるいは巡り合わせとか、運みたいなもんだろう？　あるいは作戦そのものが間違っているのかもしれん」
「二度同じ物が出てきましたが？」
「そうか？　もしかして聞き間違いではないか？」
「そうかも知れません。きっと聞き間違いでしょう。でなければ、この作戦の裁可を下された皇太子殿下に対する批判であると考えねばなりませんからな」

「なるほど。つまりは失敗の責任は常に現場にあるということか？」
「はい。だからこそ現場を監督するために我々、帝権擁護委員（オブリーチニキ）がいるのです」
ダーレスは、そう言うと一人で納得したように頷くのだった。

＊　＊

陽が落ちて夜の帳（とばり）が降りた頃。
川底に根を張り水面から背丈ほども伸びる葦に似た植物の密生する水辺では、水の跳ねる音を耳にとめた帝国兵が、音のした方角に顔を向け舟縁からじっと目を凝らしていた。
松明の光を、音の発生源にできる限り近づけようと手を伸ばしているが、群生する葦はカーテンのように広がりその奥にまでは光が届かない。
月もない夜、松明程度の灯りで浮かび上がるのは城塞を囲うように張り巡らされている柵にひっかかっている水草や草の塊だけ。これらが流されて来てあちこちに溜まっているのは、日常的な景色である。それだけに兵士はそれほど長い時間をかけて観察を続けることは出来なかった。
「ほら、もう行くぞ」
苛立ったような仲間の声に、帝国兵は「もうちょっと、まて……」と返し、舟縁からさらに身を乗り出して、暗闇の向こうを睨む。

「どうせ魚か何かがはねたんだろ？」
「それにしちゃあ、水音が大きかった」
「だから大きな魚だったんだよ。水の跳ねる音ぐらいでいちいち止まってたら、いつまでたっても巡回は終わらないぞ。それに、そのあたりは鳴子が張ってある。迂闊に触って鳴らしでもしたら、また先輩連中にお目玉を喰らっちまう」
実際、巡回の小舟が張り巡らされた鳴子に触れてしまい、兵士達はその都度、空振りの非常呼集を受けていた。一回や二回なら、仕事に熱心だからと許してもらえるかも知れないが、三度、四度と続くと、そうも言ってられなくなる。さらに今は深夜だ。心地よい眠りの中から叩き起こされた者の憤りは「鳴子に触った馬鹿野郎は、どこのどいつだ！」という罵声に現れるように、敵ではなく手近に居る味方へと向けられてしまうのである。
軍隊というのは人間関係が難しい。誰もが古参兵に睨まれることだけは避けたい。ましてや憎まれるなんてこと、絶対に勘弁して欲しいと思うのだ。
帝国兵はしばらく考えていたが、仲間の言葉に素直に頷くと顔を別の方角へと向けた。
「よし、行こう」
こうして小舟に乗った帝国兵達は、次の巡回場所に向かうため舟を先へと進めていった。
……行ったか？
剣崎（けんざき）は水面から顔の上半分を出すと、ハンドサインで前方の水草の塊に向けて意思疎通を試みた。

よく見るとその水草は、肌を深緑と緑に塗装し頭部に偽装を凝らした的射（まとい）の顔であった。暗闇の中に並ぶ二つの白目を見つけることで、やっと人間の顔だと認識できた。

的射はそっと周囲を見渡すと、肯定のサインを送ってよこした。

「危ないところだった」

剣崎は胸をなで下ろすと、柵に近づいて水中での作業に戻った。

実のところ、あちこちに張り巡らされた鳴子の無力化処理は難しくない。糸電話の音が伝わらなくなる方法を心得てさえいれば良い。つまり振動を伝播させる縄を固定してしまうのだ。

具体的には竹竿か何かを川底に突き刺し、鳴子をぶらさげた綱を結びつけてしまう。そうしておいてから、必要な部分の綱を切断するのだ。だがその作業中に手を滑らせ、縄の束を水に落としてしまった。その音を帝国軍の兵士に聞かれてしまったのである。

剣崎は、巡回の舟が充分に遠ざかったことを確認すると、柵に近づいて再びノコギリをあてた。幸い、水分をたっぷり含んだ木材はノコギリをあてたところで音などほとんど上げない。ほどなくして、柵を構成する丸太の一本を切り取ることが出来た。

だがこれで開かれた隙間は、わずかに三十センチ程度。完全装備の剣崎達が通るには、もう一本切って六十センチほどの隙間を開ける必要があった。

剣崎はさらに作業を続け、もう一本の切断に成功した。

切り取った柵の部分には薄緑の蛍光色に輝くスティックを取り付け目印とする。

すると、周囲から水を掻く音が近づいてきて、開かれた通路から隊員達が次々と内部へと潜り込んでいった。

皆、迷彩の戦闘服に水のしたたるブッシュハット。手にはＭ４カービン銃という自衛隊では普通目にする機会の無い装備を手にしている。中には、銃では無く弓矢を手にしている者の姿もあった。最後に、周囲に警戒の視線を巡らせた剣崎が、的射に合図してから内部へと入って行く。

残された的射は、その場から離れると葦の密生する中に隠したゴムボートへと戻って、うつ伏せに寝転ぶ。そしてゴムボートの縁に据え置かれた五十口径ライフルの夜間照準眼鏡を覗きこみ、剣崎らの向かった方角の様子を見守るのだった。

「見回りは厳重にしろ。わずかな兆しにも目を配れ」

帝国軍の首席百人隊長ボルホスは、薪の照らす薄明かりの中で、夜間哨戒の当番兵達を整列させると訓示をしていた。

「異音、ちょっとした異常。何でも良い、気になったことは全てをその目で直接確かめて報告するんだ。いいな？」

「魚が跳ねた水音もですか？」

「そうだ。こんな時に俺たちを騒がすような魚は、とっ捕まえて食っちまうぐらいの気構えで探せ」

それを冗談とでも思ったのか兵士達は一斉に笑った。だがボルホスは「ん？　何がおかしい？」

と大まじめな表情を崩すことなく兵士達を睨みつける。
たちまち皆の笑いが止む。すると「隊長……ちょっと気になることがあるんですが」と新兵の一人がおそるおそると言った風に手を上げた。
「どうした？」
「僕は今、巡察から戻ってきたばっかりなんですが」
「それで？　前置きはいいからはっきり言うんだ。兵卒テリー」
「見て頂きたいものがあるんです」
若い兵士が百人隊長を案内したのは、大河に張り巡らした鳴子を結びつけた杭であった。そこから何本もの縄が河にむかって伸びている。テリーはその一本に松明の炎を近づけて、これを見て欲しいとボルホスに告げた。
「これがどうしたと言うんだ？」
「一昨日、鳴子を張り巡らせた時は、鳴子が水に浸からないように、ピンッと張ったはずなんです。なのに……」
見るとその一本が弛んで、綱の先が水の中へと潜っていた。
「なるほど」
「二晩たって緩んだのかなって思ったんですけど、他の鳴子がそのままって言うのも変かなって気になってて」

「気がついたのは何時だ」
「つい、さっき戻ってきた時です」
「よし、よくやった」
ボルホスはテリーを褒めるとその肩を叩いた。
「ただちに、当番隊の兵士達を起こせ。敵が忍び込んできているぞ！　長官閣下に報せろ。大至急だ！」

中洲の岸は、水辺同様に背の高い雑草が群生している。これに身を隠しながら暗視鏡を覗き込んでいた忍野（おしの）は、背後にいる出雲（いずも）に合図して、目標の発見を報せた。
「いました……出雲三佐、あそこ。中央の広場に置かれた檻の中です」
出雲達の隠れる水辺から距離にして二百メートルほど。その広場の中央に檻は置かれていた。
出雲は暗視鏡を装着したままラミネート加工された写真を懐から取り出すと、赤外線ライトをあてて目標の人相を確認し、再び檻の方角へと目を向けた。
「ちっ、顔が見えないな」
木製の檻のなかに捕らえられた男性は力なく座り込んでいる。眠っているのか膝に顔を伏せたままのため、顔を確認することが出来ないのだ。
「どうします？」

「予定通り本人だと確認できたら強襲する。それまでは待機だ」
「でも、寝ているのだとしたら朝まで顔を上げたりなんてしませんよ。目を醒ますのを待っていたら明るくなってしまいます」
「我々の目的は拉致犠牲者の救出だ。偽物掴まされて帰るなんて恥知らずなことできるわけないだろう。チャンスはこれが一度きりと考えて、慎重に行動するんだ」
すると出雲の背後から、長身の隊員が顔を突き出した。
「隊長のダンナ。要するにあの人を起こせばいいんだろ？」
デリラだった。
迷彩服を着て顔面には部隊統一のカモフラージュを施し、ブッシュハットで耳を隠してしまうと他の隊員達とほとんど見分けがつかない。それでも辛うじて躰の線から女性だということはわかる。こんなに胸が豊かで腰の細い男はいないからだ。
「何かいい手があるのか、デリラ？」
デリラは胸の間に挟んでいた魚肉ソーセージをとりだすと包装のビニールごとひと噛りすると、何でもないことのように腰を上げた。
「あたいに任しておいておくれよ。ちょっくら行って声をかけりゃ……」
「それは駄目だって。まてまてまてって」
出雲達は、腰を上げたデリラを慌てて捕まえた。

デリラは特殊作戦群の隊員達と一緒に行動できるほどに優秀だ。身のこなしや、気配り目配り、敵を発見し追跡する能力、格闘能力などは特殊作戦群の隊員達ですら一目を置くほどのものである。扱える武器は弓矢や剣だけだが、それだってこうした場面では静寂性という点で銃よりも優れているのだ。

だが彼女は、残念なことに唯一にして致命的な欠点を抱えていた。

それはいささか考えが足りないところである。自分勝手に行動することがないので問題にはならないが、逆に言えば常に側にいて指示したり、見守ったりしてやる必要があるのだ。

「俺たちは待ち伏せされてるんだ。近づけば袋のネズミだぞ」

「そうだ。少しは自分の安全にも気を配れ」

剣崎と忍野の二人がかりで、デリラはその軽率な発想をたしなめられる。忍野の言うようにデリラは自分の安全確保をおろそかにする傾向があるのだ。だがデリラにも言い分があるようで、ソーセージを口に咥えたままぷぅと頬を膨らませた。

「けどさ、それを承知であの人を助けに来たんだろ？　ここで座り込んでちゃ何にも出来ないよ」

出雲はそんなデリラの肩を軽く叩く。

「その通りだ。だが蛮勇は一回きりだ。あれが松居氏だということがはっきりと分かった時だけ俺たちは動く。それまでは慎重に行動する。いいな」

「だからさ、あたいが行けばいいだろ？」

「何か勘違いしてないか？　俺の言う俺達には、お前も入っているんだぞ」
「そ、そうなのかい？　あたいはみんなの仲間なのかい？」
「俺達はそのつもりだったんだが、どうやら独り合点だったみたいだな？」
出雲をはじめとして剣崎達はそろって頷いた。するとデリラは「ごめんよぉ。そんなつもりはなかったんだよ」と出雲に頭を下げた。
「わかったよ。じゃあ近づかないで起こせばいいんだね？」
「そうだ。それが出来るなら、な」
するとデリラは箙から矢を引き抜くと、その先端に何やら細工を施し、弓につがえた。
「おいおい、何をする？」
「鏃は外したよ。これであの人を小突いて目を醒まさせるのさ」
自分の意図を説明しながら弓矢を引き絞るデリラ。
なるほど……やり方はいささか乱暴だが、その方法なら上手くいくかも知れない。
出雲は暗視鏡を覗き込みながらデリラに指示した。
「頭に当てるなよ。結構甲高い音がするからな」
「わかったよ。狙うのは肩か腰だね」
ヴォーリアバニーという種族は夜目が利くのか、暗視鏡無しに狙いを定めることが出来るようである。二百メートルの距離を狙える強弓を軽々と引いてみせる腕力も、戦士としては妬ましいほどだ。

やがて狙いが定まったのか、ほんの少しばかりデリラが息を呑む。するとその直後に弓弦が鳴り矢が放たれた。

布団を叩いたようなくぐもった音が響いた。

寝ていた男性が、驚いたようにぱっと顔を上げ、痛む肩を押さえながら何が起きたのかと周囲をきょろきょろと見渡している。その顔を見た出雲は断じた。

「うむ、間違いない。彼は松居冬樹(ふゆき)氏だ」

ぼさぼさの髪に、こけた頬。大分人相は変わっているが、過酷な環境におかれればこうなっているであろうという予想イラストと酷似していた。

特殊作戦群の隊員達は一斉に腰を上げた。

前進して目標を確保する。それが彼らの目的だったからだ。だがデリラが「まて」を告げるハンドサインを出して皆を止めた。

皆訝しげにしながらも再び片膝をつく。油断無く銃を構えて周囲を警戒しながら次の指示を待った。

するとほどなくしてデリラが皆を止めた理由が判明した。

松明を手にした兵士達が突如として姿を現し、檻の周囲を堅め始めたのである。

さらに少人数の捜索隊が何組も編成されて、広場の周辺の捜索を始めた。このまま座していれば、自分たちのいる川辺にも捜索の手が及ぶだろう。

「不味いな」
自分達が、追い詰められつつあると悟った出雲は呻いた。
「構うことはありません。強襲をかけましょう」
近づいてきた槍田が、低い声で意見具申した。
同じようにやってきた忍野が、「あそこにいるだけが敵のすべてではない。俺達だけで脱出するなら強襲も良いけど、拉致犠牲者もいるってことを忘れるな」と返す。
「そうだった。くそっ」と槍田。
「どうします？」剣崎と忌埜の視線が出雲に向けられた。
「少し様子を見よう。どうして急にあの連中が沸いて出てきたのか理由を確認しておきたい……デリラ。聞き耳を立ててくれ」
「あいよ」
デリラはそう言うとブッシュハットを取り去ってウサギ耳を立てると目を閉じた。
彼女の鋭い聴力は、出雲達が聞き取ることが出来ないような距離でのやりとりすら、聞き取ることが可能なのだ。
『ボルホス隊長、総員配置につきました』
『よし。それが済んだら徹底的にこのあたりの捜索をするんだ。いいな』
デリラのような鋭い視力を持たない出雲らは、暗視鏡を用いて敵の様子を窺う。

モノカラーの画像として映し出された兵士達のやりとりは、デリラによって同時通訳されたため、敵の事情をつぶさに掴むことができた。

やがて兵士達とは身なりからして違う、恰幅の良い男がやってきて隊長らしき男に話しかけた。

『こんな夜更けに何をしているのかね？　首席百人隊長』

声をかけてきたのはよっぽどの高官なのだろう。百人隊長は姿勢を正して答えた。

『はい、敵の侵入を察知いたしましたので、警戒を強化しております。ゴダセン閣下』

「閣下？」と忍野。

「司令官級の人間かも知れないな」と出雲がつぶやき返す。

『侵入を察知しただと？　君がか？』

『はっ。兵卒テリーが、鳴子の異常を察知し報告して参りました。私もそれを確認し、敵の侵入によるものだと判断いたしました』

『君は、馬鹿か？』

『何か判断を誤っているでしょうか？　私に課せられた任務は敵の侵入を警戒し、これを捕らえるか、殲滅することだったはずです』

『君は釣りをしたことがあるかね？』

『私は軍人です。釣りなどという軟弱な遊戯、したことはありません』

「お前は釣り好きの日本人、百万人くらいを敵に回したぞ」

釣りが趣味なのか忍野がぽつりとぼやいた。
『きっとそうだろうと思った。儂は釣りが好きだ。特に疑似餌を用いた釣りが大好きでな。それに魚がかかって、悔しそうにぴちぴち跳ねるところを見るのがとても好きだ。どんな疑似餌で魚たちを騙してやろうかと、いつも考えているくらいだ。それくらい、釣りに精通している。その儂が見るところ、君は素人がよくやる間違いをしている。餌を針先につけ、水に沈める。すると魚は餌をつつく。素人はそこで我慢が出来ずにすぐさま竿を立ててしまう』
『私の判断はそれに該当するということでしょうか？』
『そうだ。ここまで物々しい警戒をしては、敵が餌に食いついてくれないではないか？』
『私は、魚が池にいると分かれば網をかけた方が早いと考えます』
『それが普通の敵ならな。だが相手は網を食い破る鋭い歯を持っているぞ。君の部下達は今、大変な危機的状況に置かれているのだ』
『ではどうしろと？』
『まずは、兵士達を一旦解散させたまえ。そして、この檻の周囲から人影をなくすのだ。魚が餌に近づいて来るのを待って、敵が餌をしっかりと飲み込んだ瞬間に竿を立てるのだ。わかったら兵士達の配置を変更したまえ。今すぐだ、いいな！』
集まった兵士に解散が命じられた。
「さぁ、さっさと行け」と散らすような言い方をされ、意気込んでいた兵士達はたちまちやる気を

失って、ぶつぶつ言いながら隊舎に入って行ったり、元いた配置へと戻って行ったりする。
「ごめんよ。これ以上は騒がしくて聞き取れない」
「ああ、もういい。助かった」
出雲はそういってデリラの頭にブッシュハットを乗せるとそのまま頭を撫でてねぎらう。その乱暴な撫で方にデリラは唇こそ尖らせたが、面はゆそうな表情をして首を竦めた。
「さてと。どうしたものかな」
出雲は皆を見渡して意見を求めた。すると剣崎が答えた。
「ここは予定通り、手分けしての強襲しかないでしょう？　第二班を迂回させて陽動の攻撃をさせます。その間に第一班が目標を救出します。段取りよく行えばきっと上手くいきます」
忍野や槍田、忌埜もその意見に同意のようである。
時間の制約がある現状では、確かにそれ以外の手は無い。だが出雲には、その作戦がうまくいくとは思えなくなっていた。そう思うようになったのは、敵の現場指揮官の姿を見たせいである。あの男は手強い、きっと多数の犠牲を出すことになる。ここにいる十四人の半数近くが帰れなくなるだろう。出雲の直感がそう告げていた。
もちろん、それでかまわない、犠牲は覚悟の上だと考えることも出来た。だが出雲は、そのような犠牲を前提とした作戦を考えることは、指揮官の怠慢であると考えていた。幸運や、兵の根性や、犠牲を当て込んでの成功は成功とは呼べないのだ。

出雲は、ふと似たような状況を設定された演習で、次々と作戦に失敗して多数の犠牲を出した仲間を尻目に、唯一、人質救出を成功させた部下がいたことを思い起こした。

その部下の用いた作戦を用いれば、あるいは上手くいくかも知れない。だが……

「でも、いくらなんでもなあ……」

あの男がやったやり方をなぞるのは大変な抵抗を感じる。それは奇策というレベルを超え、卑怯の域に達する行為だからだ。少なくとも、まともな神経を持つ者のやることではない。

だが、あの指揮官を相手にするならそういう非常識なやり方こそが、この状況を打破してくれるような気がする。

成功すれば犠牲を出さずに済むかも知れない。例え失敗したとしても、常道の強襲作戦に戻れば良いのである。やってみて損は無いだろうと思った。

「一つだけ試してみたいことがある」

出雲はそう言うと皆に作戦の説明を始めた。すると予想通り、皆はとっても嫌そうな顔をしたのだった。

＊　＊

「俺は釣りが嫌いだ！」

ゴダセンから直々の命令を受け、広場から離れたところに兵士達を待機させたボルホスだったが、夜が明けて空が白み始めると、さすがに待ちきれない気分になり、いらだちを抑えることも出来ずうろうろと歩き回っては、囮の入った檻を遠望したり、熊のように歩き回ったりを繰り返していた。

それは誰が見ても「あんたには魚釣りは向かないから止めておけ」と言いたくなる気の短さである。いくら釣り糸を垂らしても、その周囲でバタバタ歩き回ったら魚が寄って来ないことは素人にもわかることだからだ。

「何が嫌いって疑似餌を使った釣りが大嫌いだ。あんな事を平気で出来る連中の気が知れん。だいたい魚達が可哀想と思わないのか!?　美味そうだな、面白そうだなと思って触ったら、それが実は中身も何もないただの抜け殻だったなんて、酷すぎる！　しかも中には釣り針まで仕込んであったりする。いったい、どれほど切なくて悲しくて悔しい気分になるか！」

まるで前世が魚であったかのごとく吐き捨てるボルホス。釣られる側の気持ちというものを、兵士達に向けて切々と語った。

「敵は暗くなってからここに侵入してきた。そうだな？」

ボルホスの言葉に兵卒のテリーは直立不動の姿勢で「はい、そうです」と頷いた。

「俺達は、餌に敵が食いつくのを待っている。そうだったな？」

「はい。そうです、隊長」

「だったらどうして敵は出てこない。夜が明けてしまえば、暗闇に紛れて逃げることすら出来なく

なってしまうぞ。そんなに敵は馬鹿なのか？　わざわざこんなところにやって来ていながら、指をくわえて餌を眺めているような臆病者ぞろいなのか!?　長官閣下もとんだ見当違いをなさったものだ！」

首席百人隊長の怒気をぶつけられた兵士達は迷惑そうな表情をしながらも黙ってることしか出来なかった。

「それは違うぞ百人隊長」

意外な方角からボルホスの怒声に答える声があった。ゴダセンである。

「敵は我々が考えるより、はるかに狡猾だったのだ」

「長官閣下!?」

見ればゴダセンが、まだら緑の服装の男達に取り囲まれてあらわれた。

その喉元には剣の切っ先が食い込むほどに突きつけられ、手は後ろ手に縛られていた。

ゴダセンは、背後から脅されているらしく、一歩一歩を頼りない足取りで歩く。

よく見れば狭い歩幅でしか歩けないよう足首同士が縄で繋がれていた。おそらくは、走れないようにするための処置なのだろう。

ボルホスは兵士達と共にその前に出ると、指先を突きつけ叫んだ。

「貴様ら、汚いぞ！」

「風呂も入ってないし、昨夜から着替えてないんでな。不潔で申し訳ない」

出雲は、そう答えると道を空けるよう要求した。
「長官閣下の命が惜しければ、檻の中にいる我が国の国民を返して貰いたい」
脅迫の言葉に思わず後ずさる帝国兵、だがボルホスは狼狽えることなく首を横に振った。
「そういうわけにいくか！」
「では長官閣下の命はない」
「ボルホス！　助けてくれ」と叫ぶゴダセン。だが百人隊長は「閣下、しばらく耐えて下さい」と返事して、「長官を殺せばお前達も八つ裂きにしてやるぞ」と脅迫し返した。それを裏打ちするかのように兵士達も一斉に弓矢を構え引き絞る。
見れば周りにいるのは剣に盾を装備した剣兵より、弓矢やボウガンといった投射武器を手にする弓兵の方が数が多かった。よく見ると投石や、槍みたいな矢を大量に発射する機械式の弩弓まであった。
帝国軍も日本を相手に戦いを続け、戦訓を積み重ねているのだろう。原始的な武器も大量に使用されると大変な脅威である。おそらく力ずくで攻めたとしても、今までのような一方的な勝利を得ることは出来ないだろう。
出雲は、かつての部下の思考や口調を極力真似て敵に話しかけた。
「八つ裂きは嫌なので命は取らないでおくことを約束する」
だが、あまり上手くいってない気がした。伊丹という男は真似るのが難しいのだ。

「後先のことを考えられる頭はあるようだな。ならば閣下を解放して降伏するがいい。そうすれば殺さずにいてやる。扱い方もそれなりにしてやるぞ」

帝国軍の指揮官の言葉にどうしても、まじめに答えたくなる。だが、そうすればたちまち交渉は決裂してしまう。相手に話し合いの余地があると思わせつつ、相手からの要求にははぐらかすような態度をとり、危機感を抱かせるという、矛盾した態度を演出しなくてはならないのだ。

こんな時、あいつならどうしていたか？　どんな風に考えて、どんな風に答えるだろうか？　緊迫した空気を、まじめな思考を引っかき回す、ふざけた態度。出雲は伊丹の言動を必死に思い起こしていた。

「困ったなぁ。いやいや。それでは俺達の任務が果たせない」

「そんな任務は諦めるんだな。このタンスカの周りには一個軍団もの兵隊が、お前達を捕らえるために配置されているんだ。こうしている間にもどんどん集まってくるぞ」

実際その通りで、あちこちから兵士達が集まりつつあった。出雲達の周囲は完全に取り囲まれている。状況は悪化の一途をたどっていた。

「さぁどうする？」

「ではこうしよう。長官閣下を少しだけ返してやる」

かつて……演習で設定された状況は、特殊作戦群の隊員五十名に守られた人質の奪還を行えというものだった。

出雲らはあらゆる工夫を凝らして救出に挑んだ。だが、演習という枠組みの中では、いつ襲うかがどうしても分かってしまう。時間的な意味で不意を突くという行為は難しかったのである。

交戦用訓練装置（バトラー）は次々と電子音を上げて隊員達の戦死を告げ、出雲らに作戦の失敗という現実を突きつけ、指揮官達は「演習なんかでホントの奇襲なんか出来るはずがない」とその原因を、状況の設定に押しつけた。ところが伊丹は、訓練の視察に訪れた特殊作戦群長に銃口を突きつけて人質とし、人質の交換を要求するという手段に出たのである。

「人質を解放しろ。さもなくばこの男の安全は保証しない」

もちろん、そんな要求を受け容れるわけにはいかない。対抗部隊の指揮官は伊丹の要求を無視することにした。どうせ訓練である。人質を傷つけると言っても実際には何も出来ないとタカをくくったのだ。

すると伊丹は、群長の乏しくなった髪を、隊員達の前で一本ずつ抜くという、残忍な振る舞いを始めた。群長が、薄くなってきた髪を気にし、高価な育毛剤を買ってきては日々の手入れに余念が無かったことは、隊員達のほぼ全員が知ることである。知っていてもなお、それに触れないのが紳士というものなのだ。

だが伊丹は、それを逆手にとった。陸上自衛隊は安全管理がことのほか厳しく、訓練の中での行動にはかなり制限がある。特殊作戦群も一般隊員であった者から選抜される以上、その意識とは無縁でいられない。これは訓練だという枠組みにとらわれていた。その思い込みに対する奇襲を伊丹

は行ったのだ。

そのあまりにも無慈悲な振る舞いには、特殊作戦群の隊員の多くが歯がみして悔しがり、可哀想にと呻いたほどだ。「はい、少しだけ返しましたよ」と数本の毛の束を渡された時、対抗部隊の指揮官はこれ以上ないというほど情けない表情をしていた。そして、ここまでするかという非情さに圧倒され、時間と共にどんどん薄くなっていく群長の髪を守るために、伊丹の要求に屈するしかなかったのである。

もちろん、統裁官の下した判定は「有効」である。これによって指揮官のみならず隊員達は徹底的な意識改革が迫られた。我々は特殊作戦群である。何をしても良いし、何をされてもおかしくないのだ、と。そしてその結果をもたらした伊丹には、群長からお褒めの言葉と同時に、恨みの念が籠もった特別待遇……どれほど辞退しても、決して脱落させてもらえない各種訓練のフルコースが強制されることとなったのである。

出雲らが置かれている状況は、そのやり方をそのまま踏襲すればよいというものではない。人質の髪を抜いたところで、たかが知れているからだ。だが、これもやりようだ。

伊丹のやり方が議論を呼びはしたものの、有効と判定されたのもそのためなのだ。

「少し？　少しだと⁉」意味を理解できず困惑するボルホス。

「どの指が良い？」

デリラはこれ見よがしな態度でゴダセンに問いかけた。驚いたゴダセンは背後から自分に剣をつ

きつけるヴォーリアバニーに「な、何をしようと言うんだ？　儂をどうするつもりだ!?」と叫んだ。
　デリラは目を据わらせて問いかけた。
「どの指なら無くしても不自由が少ないかって聞いてるのさ。早くしな。早く自分で決めないと、あたいはあんたの右手の親指を落とそうと思ってるよ」
「や、やめてくれ。頼む！」
「ニホンの人を返してもらえれば、こんなことしなくても済むんだけどね」
「ボ、ボルホス、助けてくれ！」
　首席百人隊長は苦汁を飲み干すような声で答えた。
「閣下。こらえて下さい。この者達の目論見に乗せられてはいけません！」
「我慢しろってさ。さ、どの指が良いか早く決めな」
「そ、そんな！　頼む、助けてくれ。やめてくれ、囮は返す、返すからやめて！」
「じゃあ右手の親指だね……」
　デリラはそういってゴダセンの右手に剣先をあてた。
「わ、儂は右利きだ。せめて、左手の薬指にしてくれ！」
　咄嗟の事ながら小指を選ばないのは相当に知恵の回る証拠と言えるだろう。人間は棒状の物を握る時、小指で絞めつけるからだ。小指を失うと親指、人差し指を失うことの次ぐらいに苦労することになる。

「くわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！」
激痛に涙を溢れさせ悶え苦しむゴダセン。喉を絞るような絶叫を上げた。
デリラはボルホスに向かって「ほら、少しだけ返したよ」と白くて細い物体を放り投げる。
ボルホスは中間地点に転がったそれを見て「何てことしやがる。この野郎」と怒鳴った。
「返せっていうから返してやったのさ。さあ、そこにいるニホンの人を返しておくれよ」
「野蛮人の人でなしめ！」と帝国の兵士達が口々に叫んで、出雲達に口汚い罵声を浴びせかける。
だが出雲は意にも介さないという態度で言った。
「一本じゃ足りないってことか。もう一本か二本、追加した方がいいか？」
「次は右手の薬指、左手の中指、右手の中指、その次は右の耳にしようよ。見てくれは悪くなるけど、いろいろと不自由になるよりは遥かに良いよね……」
そんな剣呑なことを出雲とデリラが言い合うと、ゴダセンはついに恐怖と苦痛で崩れるように気絶してしまった。
「あらら。自分で歩いて欲しかったのに」
「どうせ担いでいくなら、軽くするために足を切ったらどうだろう？」
そんな会話が耳に入ってしまうと、ボルホスもいよいよ追い詰められていく。が、ゴダセンの身を案じることしか出来なくなっていた。
「だったら、こっちもニホン人の指を……」

頭の回る兵卒のテリーが、ボルホスに代わって条件を提示しようとしたが、その場で剣を持つ腕を吹き飛ばされて転がることになった。

飛び散った血液を浴びた兵士達は恐怖の色を浮かべて後ろに大きく下がる。目の前に居る日本人が何もしていないことは見ていたから分かる。周囲を見渡しても、敵の姿はなく、かなり遠くから攻撃されたことしかわからなかった。

的射の狙撃である。彼は全てを把握できる後方の高台に移動して、状況をじっと見守っているのだ。

帝国兵達は剣崎の構えるM4カービン銃の銃口を向けられるのを嫌がるように道を開く。

「しかたない。長官閣下をこれ以上傷つけさせるわけにはいかん」

冷静な思考の許されない状況下での判断を強いられたボルホスは、全身にびっしょりと汗をながしながら兵士達に「こいつらを通せ」と指示するしかなかった。

特殊作戦群の隊員達はひとかたまりとなって、広場の中央に置かれた檻へと近づく。

帝国兵達は弓をつがえて構えた姿のまま、出雲らが近づいた分だけ後ろに下がった。

檻にたどり着くと剣崎と忍野が錠を壊し、中にいた男に「松居冬樹君だね？」と日本語で訊ねる。

すると「……はい、そうです」という日本語による答えがあった。

間違いなく目標である。あとは脱出だけだ。そう思ったところに、新たな声が出雲らに投げかけられた。

「さあ、ニホン人共。武器を捨てて降伏するがいい！」

帝権擁護委員（オプリーチニキ）のダーレスである。
ダーレスはコボルトの兜を隙なくかぶり威風堂々と自分こそが指揮官であると言わんばかりの態度でボルホスの前に出た。
「長官閣下は、恥を知る方だ。このままお前達の逃亡を許したと知ればきっとご自身を責められるだろう。作戦に失敗すれば自らの命を絶たれるに違いない」
「だから何だ？　それがどうしたと？」
「わからないかね、首席百人隊長。我々は、長官のご意思を酌んで差し上げねばならないのだ。閣下のご家族や郎党が、路頭に迷わないようにな。兵士達に告げる、かまわないからこの者達を捕らえよ！」
だが兵士達は行動を起こして良いものかどうか確かめるように、ボルホスの表情を伺った。
命令に従わない兵士達に苛立ったダーレスは繰り返して「この者どもを捕らえろ。聞こえないか！」と怒鳴る。
だがいくらなんでもそれはまずいだろうという兵士の思いを代弁するようにボルホスは「帝権擁護委員（オプリーチニキ）殿。長官閣下は助けてくれと私におっしゃいました」と返した。
「聞き間違いだ！」
「いいえ。そんなことはありません」
「君が、長官のご意志を酌み損なったのだ。ゴダセン閣下なら、自分のことはどうでも良いから、

この者達を倒せ、捕らえよとおっしゃるはず」
「いいえ。助けてくれとはっきりとおっしゃいました」
兵士達も、それははっきり耳にしたと、うんうん頷いた。
「では、改めて私が命令しよう。この者達を捕らえよ」
「出来ません」
「粛清されたいのか？」
「帝権擁護委員殿（オブリーチニキ）。我々は長官閣下の部下なのです」
「だが長官は人質になって冷静な判断力を失っている。今、ここにいる最高指揮官は私だ」
「長官が正常な判断力を失っておいでだったことには同意します。しかし軍の指揮権序列に、帝権擁護委員殿（オブリーチニキ）は存在しておりません。長官不在の場合は副長官、そして副長官がまだお見えにならない現状では、最先任の百人隊長たる自分が最高指揮官なのです」
突然、目の前で始まった指揮権争いに帝国軍の兵士達は戸惑いを隠すことが出来なかった。
本来ならボルホスの言うとおりなのだ。だが帝権擁護委員（オブリーチニキ）を怒らせれば粛清されてしまう恐れがある。細かいことにこだわって突っ張るより、ここは従っておく方が良いと考えるのが世慣れた人間の振る舞いと言えよう。しかし万事にまじめで頑固な首席百人隊長は、そういった融通を利かすことが出来ない。権力者に阿（おもね）るようなことを一切しない男なのだ。それは兵士達から見ると長所でもあり短所にも見えた。そしてそれ故に、彼は兵士達から多くの信望を集めていたのである。

一方、出雲はそんな言い争いが始まった隙に、剣崎と忍野の二人に拉致犠牲者を担ぐよう命じた。逃げ支度である。

それを見たボルホスが「ちょ、ちょっと待て、お前達！」と制止の声を発するが、ダーレスが、「いいから、俺の命令に従え！」と叫くため、集中することが出来ない。その間に剣崎と忍野の二人は檻から出てしまう。

「誰がお前達に逃げて良いと言った！」

「なんだ。ほっておかれたから帰って良いのかと思ったぞ」

「こっちの話をつけてからお前達の相手をしてやる。それまで大人しく待っていろ。いいな」

癖なのか、ボルホスは出雲らに人差し指を何度も何度も差し向けながら言う。もちろん出雲としては待っていなければならない義理は無いので、素気なく断った。

「いや正直、余裕が無いので失礼する。見ての通り拉致犠牲者も弱っているしな。それに長官閣下の指も出血がなかなかとまらない。早く手当てしないと命がまずいと思うぞ」

「なんだと？　どうして放っておく。さっさと止血しないか！」

「してはいるけど充分じゃ無いのさ。状況がね、この有様だろ？」

デリラは、聞く者の神経を逆なでするような口調で返した。忌々しいとばかりに盛大に舌打ちするボルホス。

「わかった、仕方ない。長官閣下をそれ以上傷つけないという約束で、城門まで行くことを許して

やろう。そこでかならず閣下を解放しろ」
「おいっ！　ボルホス！　貴様自分が何をしているのか分かっているのか？」
「帝権擁護委員殿は黙っていて下さい。地方長官閣下のお命がかかっているのです」
「城門まで？」
出雲はボルホスの提示した条件に乗るそぶりを見せた。
「そうだ。そこまでなら譲歩してやろう。お前達は城門で長官閣下を解放する。それでどうだ？」
信じられないとばかりにダーレスは首を振る。いくら地方長官を人質に取られたからと言って敵との取引に応じるなど、弱腰にしか見えない。
「仕方ない、なんとかせんと」と後方の配下へと目配せを送る。
ダーレスの配下は、一瞬驚いた表情となったものの「行くぞカクシ」と仲間の胸を叩くと手にした弓に矢を番え引き絞る。キリキリと弦に張力のかかる音をさせながら狙いを定めた先には出雲らに取り囲まれるゴタセンの姿があった。
「よし、決まりだ。ならば、城門まで道は空けてやる。おい、お前達下がれ。それと医者を起こして来い。長官閣下を引き取ったらすぐに治療を受けさせなくてはならん」
ボルホスの指示が出ると兵士達はあたかも機械人形のように一斉に動き始めた。広場から、城門まで人垣による道が瞬く間につくられる。
その統率力には出雲も感嘆の声を上げた。

「敵ながらたいしたものだ」
やはりこの男は危険な相手だった。兵士達を号令一つで自在に動かすこの統率力こそが驚異なのだ。
だが出雲がそう呟いた瞬間、二本の矢がゴダセンに向かって飛んだ。咄嗟にデリラが剣で振り払ったが、その内の一本が人質の胸に突き刺さる。
その激痛に意識を取り戻したゴダセンの苦悶の声が広場に響いた。
「くそっ！　撃て撃て撃て！」
間髪おかずに反撃を始める出雲達。放たれた擲弾が帝国軍の隊列の真ん中で爆発し人垣が吹き飛ぶ。発煙筒が四方に投げられ、周囲は瞬く間に白い帳によって覆われていった。広場は爆音と銃声の轟く乱戦に包まれた。
「下がれ、下がれ！　誰だ、勝手に矢を放ったのは!?」
ボルホスは次々と部下達が倒れていく中で、兵士達が混乱に巻き込まれないよう、声を張り上げる。兵士達は煙幕に包まれることをまるで恐れるように逃げ惑った。
一方、煙幕に隠れながら退避しようとする特殊作戦群の隊員達も無傷とはいかなかった。四方から飛来する矢は、容赦なく出雲らに降り注いでいた。
瞬く間に数名の隊員が矢を受けて膝をつく。
「不味いよ。でも、こんな時だからあたいが！」

そんな状況の中で最も早く、効果的に動いたのはデリラだった。
ゴダセンの躰を盾に抱えて、逃げるのではなく帝国兵の列に向かって飛び込んだ。
白煙の中から突然飛び出して来たヴォーリアバニーに襲いかかられた帝国兵らは、ゴダセンに矢を向けるわけにもいかず、デリラの突入を許してしまう。そして弓を剣に持ち替える暇も無いままにデリラの剣舞の前にバタバタと斃れていった。
「あの馬鹿兎！　また考え無しに突っ込みやがった！」
だが出雲は「デリラに続け！」と号令した。槍田を先頭に健在な隊員が戦列を敷き、負傷した隊員と拉致被害者を運ぶ剣崎達を、その後ろに庇うようにしながら突撃を敢行した。
出雲から馬鹿と罵倒されたデリラだったが、彼女からすれば周りは敵ばかりの方が戦いやすい。とにかく動く物に目掛けて剣を振り下ろせばよいのだ。これに対して帝国兵は大変に戦いにくい状況に陥っていた。デリラの背後には大抵味方がいるからだ。味方を傷つけないようにと思えば当然、弓の引き手も甘くなる。すると矢が当たったとしても、深手を負わすことは出来ない。結局、帝国側の被害だけがどんどん拡大していった。
しかも、特殊作戦群の隊員達がこれに加わるとさらに混乱に拍車がかかり、進退が窮まってしまう。
「戦え！　退くな！」
ダーレスは安全なところで剣を振りかざして兵士達を怒鳴り続ける。
こういった混乱に陥った時は、一旦戦闘状況から離れて、秩序を取り戻させるのが正しいのだが、

ダーレスは自分の命令を無視されることの方が気に入らないようで、退却を命じるボルホスに食ってかかり、混乱をより助長させていったのである。

その様子を遠望した出雲は無線機をとった。

「アーチャー。こちらキャスター。そこからコボルト頭が見えるか？　見えたら撃て」

無線機が短く『了解』と返答を流すとそれは起きる。

突如としてコボルトの兜をかぶったダーレスの頭がなくなったのだ。

穴が開くとか、割れるとかではなく、首から上が一瞬のうちに粉々になって吹き飛んだ。

激高したダーレスが剣を抜き、ボルホスを刺そうとした一瞬のことだけに、皆その衝撃の光景に目を奪われて動きを止めた。

対物狙撃銃の放つ十二・七㎜弾の直撃を受ければ、人間の頭部など一発でこうなってしまう。

首を失った男がどさりと音を立てて転がり顔に返り血を浴びたボルホスはしばし自失状態に陥る。

顔に浴びた血を拭い、赤く染まった掌を見て、初めて目の前で起きた出来事を理解できたようであった。

あたりを見渡す。すると、吹き出す煙が尽きかかっている発煙筒と、その傍らに倒れる帝国軍の兵士らとともにゴダセンの姿を発見した。駆け寄ってみると意識を失っているようだが、肩口に矢が刺さっているぐらいで、大きな怪我もなさそうだった。指も出血はしているが、失っているわけではない。

「ちっ。俺はペテンにはめられたということか？」
「隊長!?　敵が逃げていきます！　追わなくて良いのですか？」
周囲の兵士達からの問いかけにようやく意識を鮮明にさせたボルホスは命令を発した。
「かまわん。こんなこともあろうかと周りに兵が伏せてある。逃げ道など最初からないのだ。今は長官閣下をお助けすることが優先だ」
ボルホスは付近の兵士を捕まえてゴダセンを運ばせると、「直ちにラッパを鳴らして伏兵達に作戦の開始を報せろ。敵を袋のネズミにしてやれ」と命じた。

＊　＊

『C地点にも敵がいるぞ』
『脱出地点をDに変更する！』
『急げ！』
現場の緊迫した雰囲気が無線を通じて伝わってくる。
チヌーク機内で、ある者はそれを聞いて怖れ、ある者は焦り、そしてある者は高ぶって来る血を抑えるように黙り込んでいた。
「お姉ぇさま。大丈夫ですか？」

ロゥリィは身を震わせ、息を荒げながらジゼルの問いに頷いた。これが地の上だったならきっと走り出しているだろう。だが、ここでは待たなくては成らない。待っていた方が現場到着が早いのだ。

既にチヌークは高度を下ろしつつある。地上で行われている戦闘も目を凝らせば遠望することも可能だった。

「こちら『はやぶさ』。D地点に向かって降下中。そちらの状況を報せ！」

『はやぶさだって？　こいつは縁起が良い名前だ。何があっても必ず帰れそうだ。こちらはキャスターだ。現在D地点に移動中。敵さんがあっちこっちから湧いて来て苦労しているところだ』

伊丹はパイロットの脇から身を乗り出すとパイロットのマイクに顔を寄せて叫んだ。

「こちら、アベンジャー。キャスターに……負傷者はいるか？」

『よう、久しぶりだなアベンジャー。相変わらずそうで何よりだ。こっちは、怪我してない奴の方が少ないぐらいだ。それがどうかしたのか？』

「こんな事もあろうかと、美人の看護師を連れて来てるんですよ。こいつは怪我人が大好物な奴でしてね、死にかけてようが、首がもげてようが、患者は全部わたくしのものですわって息巻いてるんです。あてがってやらないと俺達が怪我人にさせられちまう」

『なんだか取って喰われそうな看護師だな。お前の知っている女はどうしてそんなに怖い奴ばっかりなんだ？　栗林も可愛いが、恐ろしい奴だったよな』

栗林はデートのコースにジムか道場が必ず含まれていて、相手の男に拳を用いた『お突き合い』

を要求するらしい。それに勝つととても嬉しい賞品をいただけるようなのだが、残念なことにそれを得た男はいないと言う。

「美人なら取って喰われてみたいでしょ？　全員そろっての帰還、やって見せてくださいよ」

『ああ。任せろ』

伊丹は振り返ると機内の部下と現地協力員達に告げた。

「俺達の仕事は、降着地点の確保だ。特殊作戦群の連中が乗り込んだら、間髪入れずにずらかるから、チヌークからあまり離れるなよ。黒川、聞いての通り負傷者だらけなので手当を頼む」

「わたくしは、男を喰らう鬼女ですか？」

黒川は腕を組んだ姿で伊丹を見下ろしていた。

「び、美人だって言ったろ？　駄目なのか？　駄目なのか!?」

「わかったっちゃ。覚悟してるっちゃよ」

黒川は鬼娘の口調を真似しつつ患者を心停止した時に使う携帯用ＡＥＤ（電気ショック装置）のパドルを伊丹に向けて、バチバチと電撃リンチを喰らわすフリをした。

「教授とピニャ様も負傷者の手当の方、お願いします。ロゥリィ……」

「なぁに？」

「今回は敵を全滅させるんじゃなくて、ずらかるんだからな」

引き際を間違えるなよと告げた伊丹に、ロゥリィは「わかったわぁ」と肩を竦めて見せた。

『D地点にも敵が伏せていやがった！』
『今さら、変更できない。このまま力ずくで突破するぞ』
『そんな無茶な！』
『やって見せてこその特戦だろっ！』
後部ハッチが開くと暴風にも似たローター風が吹き込んで来る。
近づいて来る地面を待っていると、帝国兵と共に怪異や亜人がわらわらと周囲に集まって来た。中には、貧弱な装備の者もいる。はした金で掻き集めた傭兵やならず者を補助兵として使っているのだろう。だが、それにしたって数の多さがやっかいであった。
「撃て！　撃ちまくれ！」
桑原曹長の号令で、倉田達が銃弾をばらまき始めた。
そんな彼らの目前で漆黒の花が咲く。
ヒトならば怪我をすると心配になるほどの高度から、スカートを翻して飛び出したロゥリィは、地に激突するや否や、ハルバートを回旋させて周囲の敵をなぎ払った。
「援護だ！　撃て撃て！」
倉田達は、敵を一掃していくロゥリィの背中を守るため、彼女の周辺に銃弾を集中させた。
その間に伊丹は、救出部隊を探す。

見れば、布担架を四人がかりで抱えて運んで来る男達がいる。
それを守るように取り囲んだ、緑や茶色のドーランで完全に顔面を迷彩塗装した十名ばかりの隊員達が、M4カービンを周囲に向けて、追いすがる帝国兵を倒していた。
負傷したためか僚友の肩を借りている者もいる。皆、疲労しているのだろう。懸命に走っているように見えるのに、早足程の速さでしか近づいて来ることができない。
ここは待っているよりは、迎えに出た方がいい。そう判断した伊丹は、機体が着陸するやいなや「よし、行くぞ！」とテュカ達に声をかけ、飛び出していった。
倉田達の援護の下でテュカとヤオがつるべ打ちに矢を放ち、飛んで来る矢はレレイが漏斗に「いけっ！」と命じ、空中で爆破しながら片っ端から射落としていった。
「教授！　何やってるんですか!?　ついて来ちゃ駄目です！」
困ったことに武器を持ってない民間人までついて来てしまった。
「何を言うか。人を年寄り扱いするな！」
養鳴と漆畑、白位の三人は担架を抱えた剣崎達から怪我人を受け取り「そりゃ、運ぶぞ！」と、まるで荷物のように抱え上げて走った。おかげで、負傷者運搬から解放された剣崎や忍野は、銃を構えて戦闘に加わることが出来た。
カメラマンが、敵に追われる特殊作戦群の隊員達の姿を撮そうとカメラを構え、菜々美がマイクに向けて叫ぶ。

「今自衛隊の特殊部隊が戻って参りました！　負傷者が多数出ている模様って、きゃぁぁぁっ！」
背後から飛んできた矢が、回転するチヌークの後部ローターに叩かれて、粉みじんになって菜々美の頭上に降り注いだのだ。
勝本が菜々美を引きずり倒して、自分の陰に隠すようにして庇った。
レレイの漏斗が再度飛んで、空中で連鎖的に爆発する。
「おやっさん！　人数のチェックを！」
転がり込むようにしてチヌークに乗り込んでいく特殊作戦群の隊員達を見て、伊丹は叫んだ。
「よし、引き揚げるぞ。皆、乗り込めっ！」
伊丹の合図でみんな一斉に駆け戻ってきた。敵中へと突っ込んでしまい戻ってこないんじゃないかという不安のあったロゥリィも、ハルバートを抱えて戻って来た。
「全員搭乗しました」
桑原が叫ぶやいなや、チヌークが再び地面から離れた。
振り返ると荷室の奥では、黒川が片っ端から負傷した隊員達の腕に点滴の針を刺していた。「はい、次！」「はい、次！」という勢いで作業を進めている。
「これはいったい、何をやっているのだ？」
隊員の腕をゴム管で縛って静脈を浮き出させる手伝いをさせられていたピニャは、黒川のしていることを理解出来ずに尋ねた。彼女の常識では手当とは、止血したり傷の手当てをしたりすること

だからだ。だが、今、黒川がしていることは、患者を針で刺しているだけのように見えた。
「ラインを確保しているんですわっ！　ハミルトン様は傷の止血を！」
事故や災害といった修羅場の救急現場では、まず輸液のための経路を確保する。出血量が増えてからでは血管が潰れて針が刺せなくなってしまうからだ。だから、まずはとりあえず生理的食塩水を点滴して血圧を維持し、失血性ショックを防ぐ。さらに薬を投与する時もこの点滴管を通じて行えるので便利なのである。
もちろん腕の静脈からでは注入できる量に限りがあるので、必要な時は胸の大血管にチューブを突き刺す。だが、今回はその必要性がある者は黒川が見たところ居なさそうだった。
「よお、伊丹。俺の下にいた時でも、そんな勤勉な姿を見せて貰ったことはなかったぞ……」
長身の男が伊丹の肩を拳で叩いてきた。
「出雲三佐、お久しぶりです。今回は民間人をごっそり引き連れてますからね。テレビ局もいるので、格好いいところ見せたいですし」
出雲の背後にいる草や泥で身を飾った特殊作戦群の隊員達が、それぞれの位置から挨拶を送って来る。その中には剣崎や的射、槍田の姿もあった。さらに忍野、忌埜。そして男とは思えないような滑らかな身体の線をもった隊員もいて飛びつくように駆け寄って来た。
いきなり腕にしがみつかれて、伊丹は何事かと思う。
「イタミのダンナっ！　久しぶりっ！」

「って、デリラ？　お、お前なんでこんなところに」
デリラだった。アルヌスの食堂で働いていたデリラが迷彩の戦闘服に身を包み、兎耳はブッシュハットの下に隠すという姿をしていたのだ。きっと、言われなければ分からなかったろう。
出雲が本人に代わって説明した。
「現地人の協力者が使えるって前例はお前が拵えたろ？　それで、柳田がこの兎女を使えって言ってきてな」
アルヌスで事件を起こしたデリラは東京地裁で裁判を受けた。そして執行猶予つきの判決が下ったのである。
あれだけのことをしておいて猶予付きとなったのだから、デリラとしても文句はない。一審判決を素直に受け容れていた。とは言え、フォルマル家にも、組合の食堂にも戻れるはずがなく、行き場を失って路頭に迷っていたデリラは、償いと称して柳田の看介護を始めたのだ。そして、柳田の現場復帰と共に、現地協力員となったのである。
「あたいを騙した連中をやっつけてやったよ！」
「って、でも身体は大丈夫なのか？」
「ダメさ、あたいの腰から尻はもう傷物だよ。もう、安くないから触るな、とは言えないね。見てみるかい？　撫でてもいいよ」
そう言っていきなりベルトをかちゃかちゃ始めたために伊丹は「待て待て待て」と止めた。

「随分と、丈夫なんだな～」
「でもないよ。お医者が凄いんだよ。腰に、骨の代わりをする『ちたん』とかいう鉄みたいなものを入れたんだってさ。歩けるようになるのに、ひと月ぐらいかかったよ」
そんな大手術を受けてひと月で、今みたいに元気に動けるのが凄いと思うのであるが、デリラは日本人の医者が凄いとしきりに褒めるだけであった。
「時々、痛いけど。でも、それで済んだんだ。ヤナギダのダンナに較べたらマシさ」
一生かけて柳田のダンナに償いをする。そう、デリラは答えた。
そんな会話が交わされている傍らでは、カメラマンが救助されてきた拉致犠牲者にレンズを向けていた。担架に横たわる男性に、菜々美はマイクを差し出して声をかける。
「お名前は、言えますか？」
ろくな食事も与えられてなかったのか、その男性は頬がこけて唇もひび割れていた。それでも喘ぐようにして口を開いた。
「松居……冬樹です」
「助かったご心境は？」
「ぼ、僕は、助かったんですか？　帰れるんですね？　ウチに、日本に帰れるんですね？　夢じゃないんですね……夢じゃないんですね」
それは菜々美が聞こうとしていたことへの答えではなかった。だが、これこそが現場の生の声で

あると思った菜々美は、松居が言うに任せることにした。そして彼の手を握ると「はい。帰れるんですよ。日本に帰れるんですよ」と語りかけ続けた。

＊　＊

「どうしてですか!?」

菜々美は報道局長に食ってかかる勢いで尋ねた。

彼女が取ってきたニュース……特地の異変、「アポクリフ」「地震」「恒星の位置がズレて観測されるようになった」という現象や「拉致犠牲者の救出」という出来事のことごとくが、全く報道されないこととなったからである。

もちろん彼女には、自分が掴んだ特ダネがどうして使われないかと尋ねる権利がある。いや、それは義務と言い換えても良かった。と言うのもこれらの取材は、彼女一人で為したことではなく、同行したカメラマンや、特殊作戦群の自衛官達、養鳴達の協力があって初めて為しえたことだからである。これらの出来事を報じないと言うことは、彼らの努力も流した汗や血すらも、無視してしまう冒涜行為と言える。

そんな認識を、報道局長が持ったかどうかは不明だが、やはり後ろめたいことがあるのか菜々美の真っ直ぐな視線を見返すことが出来ず、天井の方を見ながら、汗を拭きつつ「ああ、まぁ、その、

なんだ……」という前置きの後に言い訳を並べた。
「上の方針だよ。犠牲者の方をそうっとしておいてあげようという配慮だ。紀子さんの時に、興味本位の報道で問題になったろ。だから、本人が回復するまで待とうという配慮だ」
「だから、国民の重大な関心事を隠すっていうんですか？」
「別に隠している訳じゃないぞ。他の重大なニュースを優先しただけだ。限られた時間の中で、何を放送するかは、こちらが決める。それが報道の自由ってものだろ？」
「B級グルメ特集とか、わんにゃん特集とか流している時間はあるのにですか？」
「あれも重要なニュースだぞ。緊迫した内容だけだと見ている側の肩が凝るんだよ」
「じゃあ特地の異常現象はどうなんです？『門』の存在そのものを考えないといけない大事件のはずですし、政治的な中立を損なうことはないと思います」
「特地ね……特地か……うん、そうなんだけどね、今や特地は世界的に注目を浴びているというだけではなくて、積極的に進出していこうという機運で盛り上がっているだろ？　国際協調、特地に掛ける期待。おかげで株価も高止まり……こんな機運に冷や水を浴びせるようなニュースは流すべきじゃないと思うんだよね」
「馬鹿野郎っ！」
菜々美はくずかごを蹴飛ばした。
報道局長の目の前でそれが出来たなら、大した度胸である。だが実際には「わかりました」と言っ

て局長室を退出したあと、廊下に置かれたくずかごに憤りをぶつけたに過ぎない。なんだって廊下のこんなところにくずかごが置かれているのかと、かねてから思っていたのだが、なるほどこういう八つ当たりの為に置かれていたのかと今日初めて気がつくこととなった。

「そんなことはどうだっていい！」

折角の特ダネも、報道されなければ全くの無価値である。菜々美は「う～」と呻りながら自分の机に戻ると、椅子をお尻で潰すほどの勢いで腰を下ろした。

「こん畜生。こうなったら！」

菜々美は真向かいの席にいるカメラマンを睨みつけると「砂川君。特地で撮った絵のＵＳＢメモリをちょうだい」と手を伸ばした。

カメラマンは机からメモリスティックを取り出すと「別に良いけどさ」と菜々美に手渡す。そして「それ、どうするの？」と尋ねた。

「決まってるでしょ！　このままお蔵入りしたら悔しいじゃない！　だから画像投稿サイトにでもＵＰしてやるのよ」

「ちょっと、それまずいよ！」

カメラマンはそう言ってメモリスティックを取り戻そうと手を伸ばした。

だが菜々美は、それを人一倍大きな胸の谷間にしまい込み「なんでよ。報道しないんだから、別に良いでしょ」と言い放った。

カメラマンもさすがに手を伸ばすわけにはいかなかった。迂闊に触れたりすれば痴漢行為になる。社会人としての何もかも失うことになってしまう。だからカメラマンは、「おちついて、おちついて」と菜々美の説得を試みた。

「それを流さないって上が決めたのは、それなりの訳があってのことだろ!?　それを投稿サイトに流したりすれば、下手すると処分されちゃうよ」

「そうなったらそうなったで別にいいわよ。こんな局、辞めてやるから！」

「辞めてどうするんだよ！　折角アナウンサーになれたのに、後先考えろよ」

「考えてるわよ。テレビ局なんて斜陽産業、いずれ滅びるのよ！」

「おいおいおい。だいぶお冠の様子だな。危険な発言まで聞こえてるぞ」

言い争う二人を揶揄するかのように声をかけてきたのは古村崎だった。

「こ、こ、古村崎さん!?」

他局の人間がどうしてここに？　栗林が驚いたように尋ねた。

「つれないことを言うなよ、一緒に特地に行った仲じゃないか。お前さんが帰ってきているって聞いてな、顔を見に寄ったんだ。その様子からするといい仕事をしたみたいだな」

「でも、全くの無駄でした。放送されないことになったんです」

「ま、そうだろうな。当然って言っちゃあ当然だ」

「何でですか！　どうして何ですか!?」

「決まってる。政府批判の風潮を世論に煽って、テレビは視聴率を、新聞は発行部数を伸ばすというのが経営方針だからだ。それと特地については国際的なこととか、経済的な部分が絡んでるからな」
「そ、そんな営利目的で報道が封じられるなんて、許されると思ってるんですか？」
「許すも許さないもないだろ。売れなきゃやっていけないんだから。日本じゃ、新聞やニュース番組は、論調こそ微妙に違うけど、結局はほとんどが同じ内容、同じ色合いになるだろ？　そうなっているには、そうなる仕組みがあるからだ」
「作為が働いているってことですか？」
「そうさ」
「それをしているのは、いったい誰ですか!?」
「誰？　という問い方では、ジャーナリスト失格だぞ。例えばだ、テレビ局のお客様は誰だ？」
「視聴者」
「ブッブー。テレビ局は視聴者をお客だなんて思ってない。お客様はお金を出してくれるスポンサーさ。でも、実はスポンサーは金を出すだけで、番組の細かい内容に口を挟むことはほとんどないんだ。それを担当してるのは誰だい？」
「広告代理店」
「そう言うこと。広告代理店が『こういう内容の番組を企画してますんで、お金を出しません？』と出資者を募るんだ。だからスポンサーは広告的な利益があるかどうかだけを判断して、あんまり

内容に関与することはない」
「でも、まさか、そんな、広告代理店が……」
「新聞だって、今は広告なくしてやってられない。広告主を困らせる記事は書けないってのは誰だって想像できるがテレビはもっとそうだ。番組づくりに関わっているのは広告代理店なんだ」
「じゃあ、広告代理店の作為だってことですね？」
「今説明したろ？　誰が？　という問い方では失格だって……よし、これからそのあたりの話をしてやろう。ちょっとつきあえ」
「嫌です。わたしはこれからこれを……」
「だから、そいつを画像投稿サイトにつっこむのは俺の話を聞いてからにしろ」
ここじゃあなんだと、古村崎は周囲を見渡すと場所を変えようと言った。
「仕事中ですよ」と返した菜々美だったが、窓から外を見ればもう既に夜になっている。仕事に熱中していれば一日なんてあっという間なのだ。
腰を上げた栗林と古村崎は、近所の居酒屋へと向かうこととなった。
いらっしゃいませ。とりあえずビールと枝豆。それと適当に……というお決まりの会話を、空いている席に腰を下ろしながら店員と交わした後、栗林は言った。
「古村崎さん、お怪我はなかったんですね？　福さん、松さんは……残念でした」
みな、代表取材チームの一員として一緒に特地に行った仲である。菜々美は古村崎と同行したク

ルー達の死を悼んだ。
「ありがとう。今度線香でもあげに行ってやってくれ。彼奴らも、栗林のことは気にしてたからな。きっと喜ぶ」
古村崎はそう言って店員が持ってきたビールを一口煽ると「さてと」と大学の講師のごとく改まった口調で語り始めた。
「まずは前置きから入ろう。マスメディアの存在は、中世暗黒時代のカトリック教会に似ている。当時の教会は神と民衆の間を周旋すると称し聖書の解釈権を独占し、その権威に逆らう者を異端として処刑すらしてしまえるほどの力を持っていた。それは世俗の権力者たる皇帝の立場すら危うくさせるほどだった……カノッサの屈辱事件は歴史で勉強したな？　教会は皇帝すらひれ伏させる力を持っていたんだ。何故そんなことが出来たか？　それは民衆の精神を支配していたからだ。今の日本のメディアは政府の支持率を思うがままに操れる。報道の内容に少し味付けをして、繰り返し繰り返し流せばあっという間に、政府支持率なんてものは下落する。マスコミは神ならぬ、民意の代理人を名乗り、その意に反する者を異端として審問し、時として権力者すらその立場から放逐できるんだ。一度でも異端視された人間は、宗教裁判のごとき公開審問に答えろとメディアから迫られ、マスコミが満足するような受け答えが出来なければ、執拗に同じ質問を繰り返され、それを無視すれば、答えないことが答えとばかりに憶測によって異端の烙印を捺される。マイクを突きつけられた者は、みっともない姿を何度も何度もテレビに流され、火あぶりにも似た気分を味わわされ

るってわけだ。まさに魔女狩りだな」
「異端審問官の貴方がそれを言いますか？」
栗林は、疑わしそうな目を古村崎へと向けた。
「異端審問官とは言ってくれるじゃないか。だがそうだ、俺達はある意味で異端審問官だ」
古村崎はそう言うとビールを煽る。口の周りを泡だらけにして言った。
「だがな栗林。当時の司教達がヒステリックになったのには、実はそれなりの訳があった」
「何故ですか、それは？」
「ルネッサンスは、突然起きた訳ではないってことだ」
司教達は、民衆が知恵を持ち始めたことを肌で感じていた。
無知な子羊たちが、自分たちの意のままにならなくなったことを感じて焦り、魔女狩りに血道を上げた。教会の教えに対して疑問を抱く心そのものを罪だとなじり、叩いた。そしてそれを異端とこじつけて殺したのである。
「理由は簡単だ。民衆を恐れていたからだ。当時、信仰に基づく世界観と、現実に理解される世界観との乖離が始まっていた。ガリレオ裁判は知っているな？　裁判の結果がどうあろうとも地球は回る。まさにその通りだったわけだが、教会はそれを受け入れるわけにはいかない。民衆を教会の語る真理へと引き寄せておくために、民衆を煽って一体感を常に作り続けておく必要があったんだ」
そしてスケープゴートを非難し叩くことで、集団ヒステリー独特のあの一体感を作った。祭りの

中にいるようなあの全能感、熱狂感を信仰心の拠り所にした。そのために叩けるものを鵜の目鷹の目で探した。密告を奨励し、拷問をおこない、耐えられずに自白すれば自白故に有罪。拷問に耐えて拒否し続ければ、耐えられるのは魔女である証拠である。故に有罪という、身も蓋もない論理で処罰したのである。

「ま、結局はそれが自分達の首を絞めることになったんだがな」

菜々美は、なんとなく素行に問題のある芸能人を、これでもか、これでもかと追い回す芸能ニュース番組を思い起こした。

「それが宗教改革に繋がったと？」

「そうだ。そして今、情報の世界でもプロテスタンティズムが蠢き始めて既存のメディアを脅かしている。教会の権威は下落し、人々は精神的に解放されてルネッサンスが訪れた。それと同じように、今、誰もがネットを通じて広く意見を発信できるようになった。これによって、人々はマスコミというフィルターを介さずに意見を述べ、情報を得ることが出来るようになった。大衆は今やマスコミによる支配、マスコミが押し付けていた価値観から離れ始めた」

栗林は、ネット時代の到来を、それによる革命をまるで暗黒時代からの幕開けのごとく言う古村崎に反論した。

「情報発信源の急増は、その価値を低下させただけですよ。確かにネットは中東の独裁政府をひっくり返すのに役立ちましたけど、あれは悪い奴がいるから取り除けってタイプの古い革命です。け

ど、取り除いた後をどうするかまでは考えてない。悪い奴がいなくなれば物事はすべて良くなるという幻想は後々悲惨なことを引き起こしますよ」

古村崎は「わかってるじゃないか」と頷いた。

「なんだ？　俺は栗林のことをネット賛美派だと思っていたぞ」

「好きだからこそ、限界と危うさも理解できるんです。人は自分好みの情報に吸い寄せられ、取捨選別して吸収します。そして自己の価値観をより強固に構築し、より頑なになります。人は、自分の好みに合わない情報はその価値を値引いて受け取る傾向にあるんです」

「つまりは、異なった価値観を持つ者には、どれほど情報を発信しても届かないってことだ」

「誰にも読まれないブログがどれほどあるかわかりますか？　ツイッターも有名人ならばフォロワーはつくけど、一般人の言葉はほとんど読まれてません。精々お友達の交換日記レベルで、情報の発信というほどの力は持ってません。あんなものはただの独り言です」

「そうだな。見ず知らずの人間の耳目を引き寄せるには、権威や価値が必要なんだ。『私には夢があります』という言葉をキング牧師が口にすれば、その言葉には価値があるが、その辺の誰かが呟いただけでは、『あっそう？』と聞き流されてしまうだろ？　だからこそ、一定の権威をもった人間が発信する情報には力があるんだ」

「わたしはそこにマスメディアの役割があると思っています」

「お前さんの言うとおりだな。実際、メディアが取り上げることで情報は権威づけられる。神を見

たという少女の言葉は、普通なら戯言あつかいされてしまうが、バチカンが認定すればその瞬間から奇跡となって、目撃者は聖少女と呼ばれる。そうだろう？」

「古村崎さん。やっぱり大学の先生にでもなったらどうです？」

喋り方が説教くさいと菜々美は言った。

「実は大学の准教授にならんかという話が来ている。……いや、そうじゃなくて、俺が言いたいのは、メディアに所属する者はその力をもっと自覚的に行使しなければならないということだ。バチカンは安易に奇跡認定をしない。それがどのような結果を起こすのか、きちんと精査して決めているんだ」

「つまり、作為的に動けってことですね？」

菜々美は歎息した。その作為こそが駄目なことだと菜々美は考えているのだ。それは権力者として振る舞うことを意味しているからだ。

「ネット時代の今、情報は土砂降り的に大量に、瞬く間に発信される。しかし情報というのは公開すればいいというものではない。国家機密を暴露するサイトが作られたことで、外交問題が発生したな？　このことから一部の人間は、情報暴露を規制する動きもやむなしと考えるようになってきている。やはり情報は、目的的に取捨選択されて発信されなければならないんだ。しかし、ネットの充実はそれを難しくし始めている。規制もそれほど効果を持たないだろう。従ってマスメディアの役割は、発信された情報に対する批判と評価、解説、そして発信源の権威付けに移行していくこ

とが予想される」
「じゃあ発信する内容の取捨選択をするとして、情報を流す流さないの判断は、誰がどのようにして、何を基準にして決めるんですか？　先ほどおっしゃっていたように影の主人公が広告代理店だとして、わたし達テレビ人はそれに従っていればいいってことなんですか？」
　それが、今日の本題だと古村崎は語った。
「もちろんジャーナリストたる俺たちも、それぞれの考えや価値観で動いている。それぞれの考えや価値観で情報を拾って、加工して、流す。広告代理店が第一にもってくる価値観は大抵は経済原理だ」
「どの情報が高く売れるか、利益をもたらすかですね」
「そうだ。だからムード……言い換えれば流行に従って一斉に右にならえとなる。世の中のムードに沿った記事を書き、視聴者を煽るようなことをマイクに向けて叫ぶ。すると視聴率を稼ぐことが出来、記事が売れるというわけだ。だからこそ今は、特地に投資しようという流れに逆らうような報道は自粛しようって話になる。景気の良い話に水を差すなって事だ」
　栗林は「ちっ」と舌打ちした。
「古村崎さんは、それとは違う価値観をお持ちのようですね」
「俺が一番に考えるのは常に『怖れ』だな。物事の流れを一つの方向に一気に加速させることが怖い。だから俺は全てに対して批判的であることを基本姿勢にしている。批判するのが当たり前にし

ておくんだ。俺は常に批判的であることで中立性を確保しようとしている」
「ケースバイケースというのはないんですか？」
「確かにその方が理想だな。だが現実にはムリだった。一度でも、政府に好意的な記事を書けば、政府関係者から『よろしく』って右手を伸ばされる。官房機密費のかなりの部分がマスコミ関係者に配られているという事実を知っているか？」
「私は逆の例を知っています。報道バラエティ番組のコメンテーターの多くが、献金疑惑で騒がれている野党政治家の資金団体から講演料と称して、私たちの月給以上の金額を一度のお喋りで受け取ってます。そのコメンテーター達、その政治家を擁護する発言を繰り返してますよね」
古村崎はそれを否定せず鼻で笑った。
「それだけじゃないぞ。某国や某国の関連団体からもお金が出てる」
「ぼ、某国っていったいどこです？」
「いろんな国だ。一国だけだと思っていると見誤るぞ。アメリカ、中国、ロシア、韓国、北朝鮮……いろいろだ。こうしたところから貰える金、それといろいろな配慮や便宜、そんなものを受け取れるという居心地の良い状況は一度でも嵌まったらなかなか抜けられないってことだ。そしてそうなった人間が、時の流れと共に番組の内容を決める役職に就いた。いまや、日本のメディアはそういった連中に支配されている」
かつての仲間がどんどんそんな魑魅魍魎になっていったと古村崎は言った。

「実を言えばこの俺もそうだ。こうしてお前を説得するように頼まれてここに来ている」
「世も末ですね。どうりで何も話してないのにいろいろ知っているわけだ」
「ふっ。これが世の中の仕組みって奴さ。俺の准教授にならないかという話も、そういった流れと関わりがあったりする。ところがだ、俺たちの思惑を飛び越えて伝わっちまう情報もある」
「それはなんですか？」
「お前さんがとってきたようなスクープだ。中国漁船が巡視船に体当たりをかましてきた時の映像なんかもそうだな。人々の物の見方、考え方に途轍もない影響を与える。それまで中国の驚異を口にするような人間は、影で冷笑されていた。だが、体当たり映像の公開以降はどうだ？　みんなが中国の驚異って奴を実感した。ああした映像は、世の中のムードを決める力があるんだ。そうなると魑魅魍魎共にも状況をコントロールできなくなる」
「だから、私のスクープは差し止められたんですか？」
古村崎は「ああ、そうだ」と頷いた。
「あの体当たり映像も、ネットで公開される前に実はマスコミにたれ込まれていた。それをその放送局は無視した。だから彼はネットで公開するより他、無かったんだ。送られてきた放送局の担当者は、ＵＳＢメモリの中を見ないで棄てたと言っていたが信じるか？」
「無理です。送られてきたものが特ダネかと思えば、見ないで棄てるなんて絶対出来ません。私なら必ず見ます」

「だろう？　あれは流したら不味いという配慮が働いたんだと俺は考えている。問題は、誰が、どんな、何に対する配慮をしたかってことだ。そしてその配慮を無駄にされたから、連中は犯人捜しに躍起になったんだ」

菜々美は開いた口を塞ぐことが出来なかった。

「同じように今回の拉致犠牲者の救出成功なんてのも不味いと考えた人間がいるってことだ。戦争の勝利、拉致被害者の奪還。あれを今のタイミングで公開すれば、すぐに政府の支持率が上がってしまうからな。今までの地道な努力がパーになっちまうだろ？」

「だから私の特ダネも差し止められたんですね？」

古村崎は大きく頷くと「おねぇさん、お代わり頂戴」と追加の注文をした。

「上の人たちは政権は交代することが正しいと信じて、野党に肩入れしてるようですけど、その野党に政権担当能力がなかったらその責任をどうとるんですか？」

「ああ。連中の判断基準は正しいかどうかじゃない。自分に都合が良いか悪いかだ。今言ったろ？いろいろなところと関わっているって。その中には、どの党をと言うより、日本の力そのものを弱めようという目的のものもある。そういった連中には、政権担当能力がない者が日本のトップになるのは大変にありがたい」

「そんな！　それじゃあわたし達は何のために……古村崎さんはそれを知ってて何をしてるんですか？」

「俺は常に一貫した態度をとってるぞ。例え相手が誰だろうと批判をする。どうだ、俺の態度はブレがないだろう？」

自嘲的に嗤う古村崎。菜々美は呆れたように言った。

「批判ばかりするヒトって、結局、自分が責任をとることは絶対ないですよね」

「そうだな。全面批判は、全面肯定とベクトルが違うだけであって立つ場所は同じ無責任だから、その指摘は正鵠を射ている。戦前の大政翼賛マスコミと本質的に同じだ……」

古村崎はそう言ってジョッキを呷った。

「今の野党で名を知られている者の多くも、何かを為して名を揚げたわけじゃない。他人の失敗をあげつらうことで名を高めてきた連中だ。そんな思考形態の奴らが、実際に責任を負う立場になれば、やっても思った通りにならない現実に苛立って、誰かのせいにすることだけだろう。ホシュガー、カンリョウガー、これまでのヨトウノ失政ガーという言い訳が今から聞こえて来るぐらいだ。知っているか？　そういった連中が最後に憎悪するのは、国民なんだ。俺は悪くない、国民のせいでこうなったとな。ポルポトがそうだった。自分こそが正しいと思っている奴らは国民を自分好みに教育する道を選ぶ。逆らう奴は皆殺しという方法でな」

「それでも古村崎さんは批判するんですか？　国民は批判ばかりを聞かされているうちに、信頼できるものなんてどこにもないって思うようになって来てますよ。何もかも駄目。完璧でないから駄目という風潮に対してどんな責任をとるんですか？」

「分かってるさ。だから俺たちそのものが今、信頼されなくなってきている」
古村崎の悔しげな嘆息に、菜々美は「自業自得です」と呟き、ビールをがぶがぶと飲むことで応えた。
「俺がお前に言いたいのは、世の中に伝えたいことがあっても、こうした力学の中でそれが妨げられていくってことだ。広告代理店、担当上司、記者クラブ、外国からの働きかけ……さまざまな方面の、様々な力学が複雑に作用している。俺たち自身が思ったように動けないんだ」
「私に、それを知ってどうしろと？」
「俺はそんな力学の中で、様々な思惑から自由になるために批判という方法を選んだ。事の善し悪しはともかくその方法しかなかったんだ。だがお前はこれからなんだろう？　だから考えろ。お前には、俺と同じ轍を踏むか、それとも違った道を行くかの選択肢が、まだまだある」
「私に、マルティン・ルッターになれと？」
「お前がそんな偉大な存在になれるはずがないだろう。だが、まあルッターの賛同者にはなれるだろうけどな？」
古村崎はそういって、菜々美に小さな紙切れを出した。
「なんですか、これ？」
そこにはＵＲＬが書いてあった。
「ここを見てみろ。おもしろいぞ」
顔を上げるともう既に、古村崎の姿はなかった。

周囲を見渡してみても古村崎の姿はない。背後で戸の閉じる音がして振り返ると、古村崎の背中だけが縄のれんの向こう側にちらと見えた。

「ちょ、ちょっと……食い逃げ？　ここはあたしが払うんですか!?」

残された伝票を見た菜々美は、そこに「授業料だよ」と書いてあるように見えて、呪いの言葉を吐かずにいられなかった。

古村崎が菜々美に渡したＵＲＬは、特地の情報をまとめたブログであった。作成者のハンドルネームはメガネ娘。なんと紀子である。

「これって、すごい」

自宅に帰ってパソコンを起動し、ネットに接続した菜々美は、モニターをにらんで呻いた。

そこにあることの多くは、マスコミが報じないような、特地の出来事や特地に住まう者の生の声である。だが惜しむらくは訪れる者も少なく、カウンターも回っていない。

そこには明らかに素人がとったであろう特地の亜人達を写したビデオ映像もあった。

一生懸命、事実を、マスコミが伝えていないことを、伝えようとして書いているのだ。だが、面白さを際立たせる加工がなされていないため、大衆の耳目を引き寄せることができないのだ。

週刊誌などでいろいろ書き立てられた紀子が、実名で書くのなら、それなりの注目を浴びることが出来るかも知れないが、そういうことで注目を浴びるのが嫌なのか、彼女はハンドルネームで書

いている。

これを見た菜々美は自分がしようと思ったことを先取りされたような気がした。と、同時に自分がしようと思ったことをそのまま行っても、うまくいかないということを悟った。

ふと、古村崎が口にした、報道という場に働く様々な力学を吹っ飛ばす方法に思い当たる。

「映像だ。センセーショナルな映像こそが力を持つんだ。だけど、そうでない映像をみんなに見てもらうには工夫がいる。どうしたらいいんだろう」

菜々美は、やらせや偽装に手を染めてしまうジャーナリストが現れる理由がわかったような気がした。そして、やらせや偽装に至らなくとも、編集や、構成で、大げさに誇張したり、印象を操作したりするために様々な手法が日常的に駆使されている理由も理解した。

だが、それはやってはならない。やりたくはなかった。

「事実だ。ここは、事実を淡々と流すべきなんだ」

菜々美は携帯電話を手にするとおもむろに電話をかける。もう深夜で、相手も寝ている頃だろうが気にしない。

「あ、紀子さん。お久しぶりです」

数日後、紀子のブログがテレビ局の生活情報バラエティで紹介された。

「特地のちょっとした面白い出来事なんかを紹介してるんですよ」

菜々美の説明をうけた報道局長も「へえ、いいんじゃない」と紹介を許可した。

特ダネを握りつぶした罪悪感からか、彼女を懐柔しようという気持ちもそこにはあったのかもしれない。実際、紀子のブログの情報はたいしたことのない、特地の文化や習俗を紹介しているものに過ぎないと思えたからでもある。

だが、人々の耳目が充分に集まったところで、黒い霧が大地を覆い尽くそうとしている悲惨な画像が紀子のブログで紹介された。

それを見た人々は衝撃を受け、どうしてこんな大切なことが報道されないのかと声を上げた。

慌てて報道を始めるテレビ局、新聞社。後追いの記事では、全ての情報が、紀子のブログからの転載という形をとるしかなかった。そうしなければ、知っていたにもかかわらず黙っていたことになってしまうからだ。

こうして人々は、世界各地で様々な異変が起きているということを、ようやく知ることとなったのである。

05

クリーニング屋から請け出したばかりの皺一つ無い制服で身を包み、直立不動の姿勢をとる伊丹耀司（ようじ）。内襟につけられたクリーニング屋の番号札を取り損なったのか、先ほどからうなじが妙にむ

ず痒かった。だが、身じろぎひとつできない雰囲気があたりに満ちている。伊丹の前には、陸上自衛隊高級幹部の錚々たるメンバーが並び座っているからだ。

陸上自衛隊の初級幹部に過ぎない伊丹にとっては、そのほとんどが口も利いたことのない存在で、面と向かって立つだけで大変に肩が凝る。さらに、彼の立たされているこの場所が、これまた良くなかった。なにしろ硬い革靴の踵が半分も埋まるような感触の赤絨毯が敷き詰められた首相官邸の応接室なのだから。

重厚感漂う木製のドアの向こうから、がやがやと声が近づいて来る。

案の定というか、当たり前というか、入ってきたのは内閣総理大臣の森田、官房長官の木檜、外務大臣の嘉納、防衛大臣の夏目達であった。

「待たせたね」

総理の森田はそう言って、ソファーに腰を下ろした。

それを囲むようにして嘉納や夏目、木檜が席に着いていった。森田が伊丹に視線を向けながら問いかける。

「君が、この報告書を書いたんですね」

「はい。そうですが……何か不味かったですか？」

森田は黒縁の眼鏡のずれを直しつつ、手にした書類の表紙を捲った。

政治家達が一斉にため息をつく。視線が飛び交って、外務大臣の嘉納に集約した。

それは、伊丹にとって唯一気心の知れた相手であった。だがそんな嘉納ですら困ったような表情をして、伊丹に向けて重苦しい口を開いた。

「不味いって言えば、不味いんだが……お前さんの報告書には良い報せと悪い報せの両方がてんこ盛りでな。俺達としてもどう反応して良いかわからねぇってのが正直なところなんだ。その上で、いろいろと話しあわなけりゃならないことが、山ほど出てきてな。それで、お前さんと直に話をしたくって、わざわざ足を運んでもらったって次第だ」

「はあ」

嘉納は手にしている資料を捲った。

「まず、話しやすい話題から行こう。特地の資源調査はご苦労だった。とんでもない規模の油田があって、資源のほうも持ち帰って貰ったサンプルを見た学者が、一目で大笑いしたぐらいに凄い代物だった。下手すると今後は『レア』だなんて言葉をつけて呼べなくなっちまうそうだ。我が国にとっては嬉しい報せで、いい仕事だった」

「ありがとうございます」

「次は、ネットで暴露されて以来、問題となった黒い霧……アポなんとかについてだ。養鳴先生に話を聞いても結局の所よく分からんかった」

「自分も、よく分かりませんでした」

「そして、そのなんだかよく分からないものが、特地のクナップタイって場所で広がっているとい

う件なんだが、当初無視していたテレビや新聞も、流石に無視しきれなくなったようでな、いろいろと騒ぎ始めた」

「クナップヌイです。確かにあれが広がると『特地』は相当に、住み心地のよくないところになっちゃうような気がしますね」

皆は伊丹の控えめな表現に眉を寄せた。住み心地が悪くなるどころか、生き物は全く住めなくなるだろうという予想が報告書に記されていたからだ。

「だが、『門』との関連性は不明だ」

官房長官の木檜はそう言って報告書の写しを机の上に放り投げた。

「『門』があるから、起こっている現象だと説明されたんですけど。それじゃぁ駄目なんですか？」

答えたのは首相の森田だった。

「駄目に決まってます。特地の人間が、我々を追い返すために、たまたま発生した災害と『門』を関連づけて言っているだけとも考えられるじゃないですか？」

なるほど、確かにそう言う見方も出来るかと伊丹は感心した。

「言ったのはヒトじゃなくて神様なんですけどね」

「神様という表現はやめたまえよ。正大党が邪宗だのなんだのと煩いんだ。それに宗教が強い国の外交筋からも、国家が生きて言葉を交わせられる相手を神様と呼称してしまうのはどうかと、遠回しに言って来ている」

「それってもしかして、俺が国会に招致された時の話ですか？　随分と世知辛いんですね」
「唯一絶対の神様を信仰している人達にとっては、異教徒が知らないところで偶像を礼拝している分には見て見ぬ振りはできるが、口の利ける相手を公式に神様と呼称してしまうのは、かんに障るらしいんだ。それは神ではない、正しい神とは『これだ』とお節介を焼きたくなるようだ」
「ここは日本ですよね？」
「外交上の都合ってことで納得してくんな。神様がいるとかいないとかの論争に火をつけることになっちまうからな、『仏、ほっとけ、神かまうな』て言うだろう？」
　嘉納はそう説明した。
「でも、なんて呼称しましょうか？」
「特殊能力者は？」
「はぁ……では、特殊能力者ということで。で、その特殊能力者からの説明でして」
　すると夏目は頭を抱えるように言った。
「なんだか、その表現だといかがわしさが増したような気がしません？　オカルトを使った行方不明者捜索の特集番組みたいですよ」
「じゃあ、超人類」
「子供向けのＳＦアニメですか？」
「予言者」

「ますます駄目でしょう。いかがわしさがさらに増しましたよ」
「精霊」
「ファンタジーっぽいですね」
「じゃあ神様で」
「……なんだかそれが一番しっくり来ますね」
「結局はそこに落ち着くんですか？」
「話が進まないから、とりあえず、この場ではその表現で行こう。国会での答弁や公文書に残す時に官僚に作文させればいい」
炎龍を特地甲種害獣、通称を『ドラゴン』とした官僚の命名センスに期待することとなった。
「はい。じゃあそう言うことで話を進めます」と官房長官の木檜は場をまとめ、言葉を続けた。
「どこまで話したかな。そう、つまりだこれまではアメリカやらＥＵの多国籍企業が開発を始めるために多額の金と人を動かしていたんだ。ところが、異常現象の報告が暴露されてから、それがピタッと停まっちまった」
「お陰で株価は急転直下の大暴落です。企業に押されて特地開発を急かしていた族議員の連中も、とまどいを隠せないようです」
森田総理が言葉を継いだ。
「なんでそんなことに？」

問う伊丹に木檜官房長官はそんなことも分からないのかという顔をした。
「簡単だよ。特地に投資してもそれが回収できるかどうかが怪しくなってしまったからだ。『門』を閉じなければならないとなれば、その時点で多額の投資が無駄になってしまうだろ？　どれほど魅力的なところであっても、投資家の腰が引けるのも当然のことだ」
「なるほど……」
「もちろん、皆が皆同じように受け取っているわけじゃない。今回の事を我々の謀略だなんて言い出す連中もいやがるんだ。我が国が利権の独占をはかろうとしているとか言ってな。連中は、『門』と今回の異常との関係性を示す証拠がないって言っている。我が国が何ら公式見解を発表してないにもかかわらずだ」
伊丹はそれについては頷くしかなかった。
「……どうだろう？　君は、自分が帝国の謀略に引っかかっているとは思わんのかね？」
木檜の問いかけに伊丹は首を振った。
「それはないでしょう。報告されたような生命に対する致死性の高い現象を意図的に引き起こすことが出来るとするなら、あんな場所で起こす必要はないはずですから。アルヌスに一発で充分でしょう」
もし、あれが特殊武器（核・生物・化学）の類ならば攻撃目標はアルヌスのはずだと伊丹は考えた。
「しかし、アルヌスは彼らにとって『聖地』なのだろ？　そのような手段で汚すことが出来ないと考えているだけかも知れない」

官房長官の木檜は、アポクリフの発生を帝国による威嚇と考えているようだった。
だが伊丹には、その考え方はナンセンスなように思えた。威嚇とは、威嚇であることがはっきり理解できるような形でなされなければ意味がないからだ。それに、もし人為的に起こすことの出来る現象なら、特地に配備されている自衛隊は戦い方を根本から考え直す必要がある。場合によっては全面撤退も考えなければならなくなる。万が一、自衛隊の展開地域であれを引き起こされたら目も当てられなくなるのだ。
居並ぶ制服組からその指摘がなされると、木檜も「偶発的に起きた自然現象に乗じただけとも考えられる」と訂正した。
「しかし、星の配列が微妙に変化しつつあるという現象はこちらでも起きてます。最近、浅間山が再び活動を始めましたし、もしかするとアポクリフも、こちら側のどこかで広がっているかも知れない。『門』が関係ないと言い切ってしまうのは大変に危険です。例え確かなことではなかろうとも、何らかの手を打つ必要性があることは認めていただきたい」
首相、官房長官、陸将達が互いに言葉を投げ合って議論が沸騰した。
それに参加していなかった嘉納が、伊丹に話しかける。
「……とまぁ、こんな具合に政府内でも様々な意見が飛び交っちまうんだ」
「頭の痛くなる話ですね」
「そうだ。そして、さらに頭を痛くしてくれる申し出が、アルヌスの協同生活組合からあった」

「えっ」
組合にかかわる話だというのに、伊丹は初耳だった。
これまでは日本側に出す要望に関しては、必ず前もって相談があっただけに疎外感というか心外感が急速に湧いてきた。
「どんな申し出です？」
いつの間にかこの場の全員が、黙ったまま伊丹に視線を注いでいる。身を乗り出してすらいる。みんな、それとわかる作り笑いを顔に貼り付けていて大変に気味が悪かった。
首相の森田は重々しそうに言った。
「国会の参考人として来たこともあるレレイ・ラ・レレーナ嬢、彼女が『門』に関わる重要な技術を入手したらしいんですよ。そしていくつかの条件を呑めば、『門』の再開通に協力してもよいと言ってきました」
伊丹は驚いたように口をぽかんと開けた。
「は、初耳です。それに条件って何です？」
「まずは、『門』の閉鎖を受け容れること。まあ、扉ってのは開けるからには閉まっているものですから。それは良いでしょう」
「次が、こちら側の技術や学術情報が無制限に特地に流入することを防止して欲しいそうです。特地には、独自の価値観や考え方があり、それが急激に変化するのは良くないということですね」

「なるほど」
「そして、次です」
「そう。これが問題だぜ」と嘉納が口を挟んだ。
「そ、それって何なんですか？」
「つまりだ、日本国陸上自衛隊幹部、伊丹耀司二等陸尉の身柄を引き渡せというんです」
「えっ……俺ですか？」
「そう、お前」
嘉納が追い打ちするように頷いたことで、伊丹は凍り付くこととなった。

＊　＊

中華人民共和国　北京・中南海

「と、薹主席。ご報告申し上げます」
劉の声は調子はずれで、嗄れていた。
声ばかりではない。背筋を過度なまでに伸ばし、手足は厳寒に曝されているかのごとく震えている。汗が滝のように流れ、スーツの襟や脇などはそれによって色が変わってしまっていた。

実に暑苦しく見苦しい。本人すらも我が身の姿を情けなく思う。だがそれもこの場では仕方がないことであった。何しろここは特別な場所なのだから。

劉の所属する共産党国家戦略企画局は、世界中に広がる中国人を支配する共産党のなかでも重要な組織である。だが彼の目の前に列ぶのは、その彼から見ても雲の上の存在とも言える党の重鎮達六人であった。その威厳が放つ空気の重さは、身体や手足が普段の何倍も重く感じるほどであった。

「報告を聞こう」

ひな壇の中央に座す蔓徳愁（とくしゅう）国家主席は、劉の姿を確認すると威厳漂う重々しい口調で語りかけた。

「は、はい。では資料をご覧下さい」

劉は報告書を開くと、資料を見るように並み居る重鎮達に促した。

皆の視線が下を向いてさえくれれば、この緊張も少しは和らぐかと思ったのだ。だが蔓主席をはじめとする長老達は、劉から視線をそらすことはなかった。部下からの報告を聞くとき、彼らは資料を読みながら聞くということをしない。発言する人間を注視することに専念するのだ。紙に印刷された文字を目で追うよりも、その方が人物に対する理解が深まると考えるからである。

もちろん発言者には、拷問にも似た緊張を強いることになる。だがこれによって漫然としたいい加減な発言は許されない雰囲気が出てくる。発言者の緊張は会議の質を嫌でも高めるのだ。

劉は、本題に入る前に喉を潤そうと口内の水分を集めた。だが口内は砂漠のように乾いており、舌は水分の抜けたスポンジのように干からびて水分の供給を拒む。結局、粘性の高い糊にも似た唾

液を喉に塗り込むことになり、あたかも砂を飲み込んだような気分に陥ってしまった。

「に、日本では『門』の存在によって、さまざまな異変が起こっていると報道されています。マスコミ各社は当初この情報を抑えようといたしましたが、今では公式な対応を発表しない森田内閣に対する批判の記事を載せ……」

「新聞を読めば理解できるような報告など我々は求めていない。君の任務は情報の収集ではなく、工作である。この状況変化に対してどのような活動計画をたてるのか。その目算を説明したまえ」

臺主席の厳しい指摘が飛んだ。その容赦のなさに劉局長は叫ぶように答えた。

「日本は、異変を口実にして、特地の独占を企図していると思われます。ですので、私は異変の原因が『門』にあるという意見に強く反対いたします。そして『門』の平和的な、国際協調に基づく利用こそが、日本人の利益と名誉に繋がるという世論を形成するようにマスコミ各社に働きかけます。これに合わせるように、融和路線を展開して働きかければ、日本の世論は我が国に対して友好的なものとなるでしょう」

「言葉は正しく使いたまえ。国家と国家の間に『友好』など決してあり得ない。敵に友好などという幻想を信じさせる努力はしても、我々がそれに頼るようなことはあってはならない」

「て、訂正します。我が国の権益を脅かすような行動は手控えるでしょう」

その為にこそ、中国は企業を誘致し、資源を供給し、市場を開放してきたのである。中国で活動する企業、中国で働く日本人。これら全てが人質となって日本の思考、行動、選択の自由を縛るの

である。

「マスメディア工作の状況はどうかね？　今回も我々の希望通り動いてくれるかね？」

「記者交換協定が有効に働いてます。我が国に対する不利益な報道は、概ね自粛されております。反中勢力の台頭を印象づける報道は手控えることが習慣化されており、東京で行われた我が国への抗議デモは四千人を超える規模となったにもかかわらず、そのような出来事はなかったかのごとく無視されました。望ましい状態と言えるでしょう。さらに、ニュース番組、情報バラエティのスポンサードを行っている企業のトップに、我が国についての情報の取り扱いについて注意を喚起しました。我が国で円滑的な事業を行っていきたければ友好的な態度を常に示し続けて欲しいと、厳重に要望しております」

「うむ、大変結構だ。それが君たちの努力の成果であることは認めよう。しかし、いささか消極的に過ぎるな。状況をドラスティックに動かすような行動計画を読ませて貰いたかった」

「し、しかし、そのような提案は、私の権限に反します」

「わかっている。大きな動きは、これまでの努力を覆してしまう可能性があるからな。とは言え、権益確保のためにここは動くべき時だという提案が欲しかったのだ」

「そ、それはつまり、いよいよ日本に対する実力行使が行われると言うことでしょうか？」

さすがに、武力行使のような出来事を引き起こせば、日本のマスコミも反中国的な色合いの報道をせざるを得ない。例えば巡視船に対する漁船の体当たりなどという出来事があったとして、これ

を報じなかったりすれば、報道機関の流す情報そのものが、日本国民から信じられなくなってしまうからだ。

これまでは何か事件が起きると、中国政府をバッシングする報道そのものには手を付けず、早々に過去の出来事としてしまうように工作をした。

例えば毒ギョウザの時などは、報道の熱が退き始めた頃に、日本と中国間に立つ子供、女性、あるいはスポーツなどを引き合いにしつつ、友好、融和色を高める記事を新聞に載せさせ反感を薄める方向に報道を展開させた。そして大きな出来事の隙間に挟み込む形で、犯人らしき人間を捕らえた、処罰したという情報をなんとなくリークして、なんとなくその人間に全ての責任を押しつけて幕引きをはかるのである。その後、パンダなどをレンタルして友好気分を盛りあげればいい。

そうすれば中国の警察当局が牽強付会な実験結果を公表したこととか、日本に全ての責任があるなどと批判したことについての謝罪やら、被害企業と被害者への賠償もしないで済ませられるのである。対日問題では自分側の失態は誤魔化して終わりにする。それが中国の基本姿勢なのだ。

だがそれにも限界がある。例えば武力行使レベルの大事件を引き起こせば、日本人と言えども反中感情を沸騰させてしまうからだ。国際的な評価もこれを受けて徹底的に下落してしまう。そうなれば小手先の工作などは一切通用しなくなり取り返すのにさらなる時間を必要とするだろう。劉はそれを心配していた。

「君の言う実力行使が武力の行使を意味しているならば、それは違うな。武力の行使など前世紀の

遺物だ。我々は、新しい実力行使を展開して、特地における権益を獲得しようと試みる」
「そ、それはいったい？」
部屋の壁際に控えていた秘書の女性が無言のまま進み出てきて、劉に書類の束を手渡した。
劉は、素早くその題字に目を走らせる。
「『銀座紅旗計画』と我々は呼んでいる」
薹徳愁国家主席はそう言ってほくそ笑んだ。
劉はその内容を斜め読みして愕然とした。
「し、しかし、こんな事をアメリカや、各国が認めるとは思えませんが……それにリスクが高すぎます」
「大丈夫、それを君が気にする必要はない。なぜなら国際社会に正義などないからだ。あるのは、それぞれの国の都合だけだ。その都合に合いさえすれば、どんな無法をしようと許されるのが現実なのだ……さ、来たまえ、君をゲストに引き合わせよう。君には彼らと一緒に仕事をしてもらわなくてはならないのだからね」
「彼ら？」
薹徳愁は「そうだ」と席から腰を上げると劉を隣に案内した。隣室には様々な人種の男達が集まっていた。
「こちらはロシア大統領府から来たバラノフ氏だ。そしてこちらがフランスのルクレー氏。そして

イギリスのブラジス氏。朝鮮からは黄（ファン）氏。韓国からは金（キム）氏。そして最後がアメリカ合衆国大統領補佐官のブレミー氏だ」

蔓に紹介された各国の要人達とそれぞれに握手を取り交わしながらも、劉は信じられない様子で言った。

「あ、アメリカまでですか⁉」

緊張のあまり自身の声が裏返っていることにすら気づいてないようである。

「そう、我々はここに利益の一致を見た。ならば協力し合うことも不思議ではあるまい？」

「は、はい。確かにそうです」

「もちろん、強固な協力関係というわけにはいかない。それぞれの都合で寄り集まった限りは、それぞれの都合で霧散する。それだけに協力関係を維持する条件は厳しい。慎重かつ大胆に事を運ぶ必要がある」

「はい。その通りだと思います」

「この計画の指揮運営は一人の優秀な指揮官の下に集中されなくてはならない。そこで君には計画の主導者役をはたして欲しいのだ。やってくれるね？」

劉の立場では断るという選択肢はない。しっかりと頷く。それを見た蔓徳愁は満足げに微笑んだ。

「かくして日本は、四面楚歌となったわけだ」

＊　＊

茨城県霞ヶ浦。

伊丹は湖畔に広がる平原の真ん中に立って、ところどころに巨大な雲の浮かぶ大空を見上げていた。

青空に白い点が見える。遠方から聞こえるエンジン音。双眼鏡に目を当てると、それは民間のプロペラ機であることがわかった。

「おっ」

民間機から、こぼれるようにして白だの赤だののカラフルな点が青い空に向けて飛び出していくのが双眼鏡で確認出来た。

それは伊丹が立っているところに向けてまっすぐに落ちてこようとしている。

落下速度があまりにも速いため高倍率の双眼鏡で追いつづけることは難しく、伊丹は双眼鏡から目を離して、肉眼で見ることが出来るようになるのを待つことにした。

しばらくすると、次々と凧にも似た方形のパラシュートが花開いた。そして、ゆったりとした速度で近づいてくる。

伊丹は斜め後ろに立つヤオに、振り返りもしないで語りかけた。

「見上げて待っていると、こっから先が長いんだ。別に一緒に居てくれなくてもいいんだぞ」

「いや。此の身は御身の傍らにありたい」

ヤオの言い草に伊丹はこそばゆさを感じ「そっかぁ」と後ろ頭を掻きむしった。なんだか、一生側に居ると宣言されたようにも受け取れるからだ。

「ま、大仰な言い回しをしているだけなんだろうけどな」

寿命の長いヤオにとって、伊丹の生涯につきあうことはさほどのことでも無いのだろう。もしかすると一年か二年程度くらいにしか感じないのかも知れない。

伊丹がそんな事を考えているとヤオは伺うように言った。

「もしかして迷惑だろうか？　此の身は気が回らないので、独りになりたかったら、言って欲しい」

「そんなことはないぞ」

「よかった……しかし、皆はよくぞ空を飛べるな」

ヤオは空を仰ぎ見ると、寒気でも感じたかのように背筋をプルプルッと震わせた。

「此の身は、らっかさんとやらが開かなかったらどうしようとか、途中で紐が切れたりしないかとか、風で流されて湖に落ちてしまうのではとか、いろいろ考えてしまう」

此の身は運が悪いから。ヤオはそういって伊丹から貰った五十円玉を握りしめた。

「いや。確かにそれは頭によぎるぞ。ちっとも変なことじゃない」

伊丹は、ヤオの言い分をよく分かると頷いた。

「みんな、何が楽しいのだろう」

「そう思うのが普通だよな。こうして見てもつまらないしな」

実際、スカイダイビングに見ている側が楽しむ要素は少ない。これがプロが行う空中での鮮やかな曲芸の数々があるなら話は別なのだが、ただ降りて来るのをじっと待つだけだから退屈なのだ。

とは言え、それも皆の姿が肉眼で識別できない間だけである。

プロのインストラクターに後ろから抱えて貰うスタイルで降りてくるピニャは、伊丹の姿を見つけると両手を盛んに振っていた。

「イタミ殿！」

滑り込むようにしてランディング。地に降りたピニャはもう、子供がはしゃいでいるかのごとき満面の笑みで駆け寄ってきた。

「凄い凄いぞ、イタミ殿！　こんな素晴らしいことが、この世にあったなんて！」

「で、殿下……この世ではありません」

共に降りてきたハミルトンが、インストラクターに礼を言ってから、ふらふらっとした足取りでやってきて突っ込みを入れた。

「そうだ。異世界だった……ああ、この世界には素晴らしいものが多すぎる。どうして妾はこの世界に生まれなかったのだろう！　雲を突き抜ける一瞬が素晴らし過ぎだ！」

続いて、ロウリィや、テュカ、レレイ達が降りて来た。

パラシュートをまとめているインストラクター達を後目に、彼女たちは空の散歩がどれほどに素晴らしく楽しいものであったかを口々に語った。寡黙なレレイですら瞳をきらきらと輝かせること

で、その歓びを表明していたぐらいである。
「イタミ殿はスカイダイビングをしないのか？」
「いや、俺は良いんです」
「まさか緑の人としてその名も高いイタミ殿とあろう者が、怖じ気づいてるのではあるまいな？　……ハミルトンも、空に上がるまではガタガタと震えておったが、空に上がったらもう楽しんでおったぞ」
「……声も出ないぐらいに脅えていたとは思っていただけないのですね？」
「では、つまらなかったのか？」
「いえ。素晴らしい体験でした」
ハミルトンもその感動を反芻するかのように胸に手を当てた。
「ただ飛び降りるまでがやはり、あの鉄の塊がどうして浮くのか未だに信じられません……」
どうやら今回も怖いだなんだのとハミルトンが泣き叫んだらしい。「なぁなぁイタミ殿、今度はイタミ殿も一緒に飛ぼう。なぁ、駄目か？」
伊丹は、ピニャがもう一回飛びたいと強請っているのだと気づいた。
「折角のお誘いですが、遠慮しておきます」
スカイダイビングの体験料がどれほどの金額となるかを、金銭に無頓着な皇太女様に教えてやりたい伊丹であった。

「何故だ？　妾と一緒は嫌か？」
「……正直、俺はこれのどこが楽しいかわからない方の部類でして」
言い訳する伊丹の背後ではヤオが「くくくくっ」と含み笑いをしている。
「何か知っているの？」
風の精霊と踊ったとかなんとか言って喜んでいたテュカが、白状しろとヤオに迫る。ロウリィ、レレイの三人がかりで迫られると、ヤオも「大きな声では言えないので、では小さな声で」とそっと語った。
「実はヨウジ殿は、高いところが苦手なのだ」
「ああっ！　内緒だって約束したじゃないか！　お前だって高いところダメなくせに！」
するとヤオは堂々と胸を張った。
「確かに此の身も高いところは苦手だ。だがそれは、此の身は運が悪いので事故が起こると思うからだ！　決して御身のように怖がっているわけではないのだ」
「言っておくが俺だって、へりにも輸送機にも乗れるぞ。懸垂降下だってこなす。それに空挺降下もやったことがあるぞ。ただ翼竜が怖かっただけだ」
「ほう、本当だろうか？　此の身にしがみついて叫んでいたのは誰だ？」
「いや、確かにヤオにしがみついちゃったりしたけど、怖かったのは翼竜であって……」
「じゃあ、何故、すかいだいびんぐをしないの？」

ロウリィとテュカに訊ねられて、伊丹は「そ、それは、その……あの」と口ごもった。
「怪しいわねぇ」
「落下傘降下をやったのって嘘とか？　お父さん、白状しなさい」
すると嘘ではないと、伊丹は切々と自らの黒歴史を語った。
「一応、降下はしたんだ。本当だぞ。ただ降下すんのやだって、降下長にしがみついちゃったりしたけどな。さっさと逝けって降下長と副降下長の二人がかりで蹴落とされちゃったんだ」
高所に感じる恐怖には様々な種類がある。伊丹の場合は、自分の身体を何かに依託できない状況が恐ろしい。ロープでも何でも良いが、掴まることができる物さえあれば大丈夫なのである。だが、そういったものがない状態になると恐怖感が沸き立ってしまう。
それでまあ、よくぞ空挺徽章を得られたと思うところだが、そこにはちゃんとした理由というかタネがあった。
実は特殊作戦群に属しているような奴が、空挺徽章ぐらい持ってなくて許されるか！　と、五回にわたって突き落とされ、無理矢理にとらされたのである。もちろんこの問答無用の処置には、伊丹に恨みの念を抱いた特殊作戦群長の存在があった。
嫌だと逃げまわると胸の徽章を指差され、「お前、レンジャーじゃないか!?　特戦だろうが!?」と叱責された。それでも伊丹が逃げようとすると上官達は言った。伊丹の上司だった者から、伊丹の操作方法についてちゃんと申し送りが来ているのだ。

「未来永劫、永久に休暇はやらん。年末年始と夏は特にダメだ！」
「ええ！　そんな！」
「それが嫌だったら胸の徽章にふさわしく振る舞え！」
そう。こんな経験をしたが故に、伊丹は決して空挺徽章に始まる各種徽章を胸に縫いつけようとしないのである。
もし、銀座事件が起きなければ、伊丹は自由降下課程に進まされたはずで、真剣に転属の願い出を出そうかと思っていた。
だがそんな伊丹の性質も興奮冷めやらぬ女性達にとっては格好のからかいの対象だ。
彼女たちは、空がどれほど素晴らしいか理解できない伊丹を揶揄しつづけ、なかなか動こうとしなかった。
ついには音を上げた伊丹が「早く着替えて、マイクロバスに乗ってくれえ。時間が押してるんだ」と急かす事態になった。
これから防衛省の科学技術研究所へと向かうのである。
霞ヶ浦飛行場を出た途端、マイクロバスはどこのＶＩＰが乗っているんだと問いたくなるほどに、その前後を黒塗りの乗用車によって囲まれた。
その光景に、ロウリィはぽつりと呟いた。
「前に、こっちに来た時を思い出すわぁ」

レレイとテュカが頷いた。ピニャもである。
「あの時は情報が駄々漏れで、行く先々で狙われたもんなぁ……」
そんな伊丹の言葉に、助手席にいた黒服の男が「駄々漏れで、悪かったな」と言って振り返った。
久しぶりだなと声をかけてくる男に、伊丹は「誰でしたっけ？」と尋ねた。
「わからねぇか？　俺も大分痩せたからな」
死神博士と呼びかけたくなるような風貌の男は、駒門（こまかど）だと名乗った。伊丹が最初に皆をつれて東京に来た時、案内と警備指揮を担当した男である。
「おおっ！　久しぶりですね。その後、腰の具合はどう？」
「ま、なんだ、杖が手放せなくなっちまった」
駒門はロウリィが手にしているハルバートに恨めしげな視線を向けた。見た目、幼い少女が軽々と持ち歩いているから、張りぼての類と勘違いした駒門は、ロウリィのハルバートを何の気構えもなく持ち上げようとして腰椎捻挫、椎間板ヘルニアを負ったあげく、救急車で搬送されてしまったのである。
「ま、あの件は忘れてくれや」
「ええ。まぁ、わかりました。けど、今回の警備は警察の仕切りだって聞いてますよ。なんで情報本部の駒門さんがここに？」
「ああ。出向が終わってな、今は公安部門の某所で課長職に就いている」

「おおっ！　それはご栄転ですね。おめでとうございます」
「いや、お前のおかげで手柄を立てさせて貰ったからな。銀座で外国の工作員を一網打尽……」
「そうなんですか？」
「そうなんだよ。お前が気が付いてないんなら、別に良いんだけどな」
駒門はそう言って低い声で笑った。この男が笑うと、何故か知らないが悪党がほくそ笑んでいるように見えてしまう。まだ太っていた時の方が愛嬌があった。風貌が損をさせているのだ。
窓の外には、葦原の生い茂る霞ヶ浦湖畔の風景が見えていた。もう少し県道を進むと、科学技術研究所である。駒門は、会話を一旦止めるとデジタル無線機を引き寄せた。
「状況を報告せよ」
『こちら県道交差点。異常なし』
各所から次々と報告が帰ってくる。先の経験から、情報漏洩に対する警戒を厳重にしているようであった。それらを確認してから駒門は伊丹に視線を向けた。
「今回の警備は以前と段違いに厳重だぞ。女性警官にここにいるお嬢さん方のコスプレさせて、お前のそっくりさんと一緒に、秋葉原や永田町のあたりをうろうろさせてたりするぐらいだ。こっちでももう二台、マイクロバスを用意した」
駒門はそう言って後ろを指差す。
「お前さん達が何しに来たのか、俺ですら知らされてないんだ。いったい、何しに来た？」

「『門』を開く実験」
知らされてないという者に教えて良いのかと伊丹は一瞬迷った。「君にはそれを知る資格がない」というもったいぶったセリフを、一度でも口にしてみたかったというのもある。だが、傍らに鎮座しているレレイは、そんな伊丹の野望を無視していとも簡単に答えた。
「『門』を開く実験だと!?　異世界に行き来できる穴を人為的に作れるってのか!?」
「出来る」
駒門は酷く驚いた表情をして唸った。
「こいつは、たまげた……」
『特地』の有用性は世界中が認めている。もし特地への出入り口を人為的に開く方法が存在すると知られたら世間を騒がせている異変騒動も吹っ飛び、全世界が手を伸ばしてくること必至なのだ。
「こいつは、気合いをいれなきゃならんな。おい、わかってるな？」
駒門は運転をしている警官に告げた。
「わ、わかってます」
「親兄弟、恋人、同僚、直属の上司、ありとあらゆる他人に口外禁止だ」
「わかっています！」
運転手の警官は怒鳴るように答えた。
「よし。予定通り、疑似餌を銀座に向かわせる」

駒門の命令で、後続のマイクロバスが警備の車列のほとんどを引き連れて、東京方面へと左折していった。追跡して来ている者がいたとしても、長い車列がブラインドになって、一台だけ直進したマイクロバスには気づくことも出来なかっただろう。

「これで監視が付いていたとしても、今回特地から来たＶＩＰはスカイダイビングに興じた後、そのまま銀座に帰りましたということになる」

「そうなるといいわねぇ」

ロウリィが揶揄するように嘯いたが、駒門も負けじとニヤリと笑い返した。

「案外、これでどうにか出来るもんなんだぜ。ここは見通しの悪い一車線だからな」

実際、前後を固めていた警備の車両がいなくなってしまったため、前も後ろもぽっかりと空間が開いている。対向車以外は車の姿が見えないくらいである。田舎の県道なんて、通勤時間でもない限りこんなものなのだ。

やがて防衛省の科学技術研究所が見えてきた。広大な敷地の向こうに白い建物の群れがある。周囲が開けているために錯覚してしまうが、かなり巨大な建物が列んでいた。

マイクロバスは正門には向かわず、あぜ道にも似た未舗装の狭い道路へと入り、通用門からその敷地へとはいる。それまで気を張っていたのだろう、通用門が閉じられた瞬間、駒門は大きく息を吐いた。

「ふぅ……今回は何もなかったな」

やはり緊張していたのだ。
マイクロバスは建物によって周囲を囲われた場所へと入った。
そこでは、黒服の男達がたむろしており、伊丹達の到着を待ち構えていた。
「待っていましたよ、レレイさん。皆さん、スカイ・レジャーは楽しんで貰えたかな？」
首相の森田や、官房長官の木檜などが出てきて次々と、レレイの手を握る。
レレイも「ありがとう。おかげで楽しむことができた」と礼儀正しくお礼を言った。今回の遊興費は首相のポケットマネーからの支払いということを聞かされていたからだ。実際には、多分、おそらく官房機密費からなのだろうが、これによってレレイ達の抱く印象が大違いだということを計算してのものだろう。せこいやり方である。
テュカが、おごってもらった事に感謝の言葉を述べ、その負担を心配してみせると森田は相好を崩した。
「なあにその程度のこと、貴女方の重要度に較べて大したことありませんよ。あははは」
笑い声が妙に乾いていた。もしかして、ホントに自腹を切ったのかなと伊丹は思った。
嘉納が近づいてきて「どうだった彼女たちは？　楽しんだか？」と尋ねて来た。
「ええ。かなり楽しんでました」
「こういう楽しみも、日本との繋がりがあってのことだと思って貰えれば、大成功だな。『門』を開こうという動機になる。お前のこともそうだ」

「……あの嘉納さん。本気なんですか？」
「お前さんを引き渡すってことか？　まだ決めてない。『門』をどうするかを決めてからだ」
伊丹はホッと胸をなで下ろした。
「もし、『門』を閉じるとなれば、特地に残って現地情報を収集せよという内容の命令を出そうと思っている。あのレレイって娘っ子の護衛も兼ねてな」
「俺に、小野田少尉になれと？」
太平洋戦争の末期、旧日本陸軍退却時にルバング島で残置諜者とされた情報将校小野田寛郎氏は、終戦の後も孤独な戦いを続けた。彼の太平洋戦争は、任務の終了を告げる命令書を手渡されるまで三十年間にわたって続いたのである。
……『門』は閉ざされた。特地に派遣されていた自衛官達はもういない。しかし伊丹は独り特地に残ってサバイバル生活を続けた。そして再び『門』が開かれて東京に帰ると、既に日本では数十年の時が流れていた。
そんな未来図を思い浮かべた伊丹はげんなりとしてしまった。
「ここは、ＳＦ的に考えて欲しいところなんだがな。よくある話だろ？　帰ってきた宇宙飛行士が、浦島効果でえらい年月が流れていたなんてのは。それでも主人公は旅立つ。人類のために」
嘉納ならオカエリナサイの文字で迎えてくれそうである。それはそれでネタを楽しめそうだ。オタクであるならば、ネタのために人生をかけるのも本懐かも知れない。

「俺の意志はどうなってるんでしょう？」
「これは命令だと言わなかったか？」
「嘉納さんは、ただいま外務大臣ですよね」
「わかった。その時には内閣総理大臣発効の命令書を届けてやる。必要なら防衛大臣の夏目と、統合幕僚長の直筆署名もつけてやる。それとも、お前の直属の上官に至るまでずらっと署名が入った書類にしようか？」
「退職願を書いていいですか？」
「お前さんは辞退も退職もしないよ」
「高く評価していただけているようで嬉しいんですが、それは買いかぶりという物です。俺にとって仕事とは、遊びのためにすることで、同人誌即売会に参加できなくなるようなリスクは是が非でも避けたいんですよね」
だが、嘉納はそんな伊丹の言葉を無視して続けた。
「実はな、同人誌即売会の主催団体から、出展サークルから集めた見本誌がかなり溜まっているので、これを国立国会図書館に寄贈したいという話が出ているんだ。だが内容が内容だからな、ものによっては扱い方を考えなきゃならん。そこで、これまでに作られたアニメやマンガといった我が国の貴重な文化財産を収蔵する施設を作ってはどうかと考えている」
「またぞろそんな箱物を……マンガの殿堂のおつもりでしょうけど、神経症的潔癖主義の人達から

国営マンガ喫茶って批判されますよ。それで……それがどうしたっていうんですか？」
「要するにだ、特地との連絡が途切れている間のことを心配しているなら、安心しろと言いたいんだ。その間に発行された同人誌はそこに収蔵されて読めるようになる。一気に何年分も読めるかも知れないぞ」
「本当ですかっ!?　……あ、いや」
つい声が大きくなってしまい、周囲の視線が集まった。おほんと咳払いを一つして、伊丹は声のトーンを下げた。
「嘉納さん。直接会場に行かなくなったから忘れたんでしょう。あの長い行列に加わり、熱気と汗の臭い渦巻く雑踏をかき分け、サークルのブース前をそぞろ歩きしながら、『どうぞ手にとって見ていってください』と声をかけられたりして、頁をめくったり、コスプレ姿の麗しき女性達を愛でるという楽しみの存在を」
「何を言ってるんだお前は？　俺の目には『特地』こそが、永遠に終わることのない同人誌即売会場に見えるぜ。あの熱気が特地には、アルヌスって場所にはあるんじゃないのか？」
「……え!?」
「お前もわかってるんだろ？　向こうでの生活のほうが居心地良いんじゃねぇのか？」
「そ、そんなことは……」
無いと言いかけた伊丹だったが、最後まで言い切ることは出来なかった。

嘉納に乗せられつつあるなと思っても、それが間違いだとも思わなかったのだ。少なくとも、悩むぐらいには特地と行き来できなくなることを恐れている自分がここに居た。

もし、同人誌即売会が特地で開かれるなら、倉田同様に移住を考えたかも知れない。

「お前を大事に思ってる彼女達は、お前のためになんとか日本との繋がりを保とうとするだろう。時空嵐だか地震とかが落ち着くのに時間がかかるってのは、歪みが蓄積している今回だけで、その後の開閉は、微少で済むという説明も理解できる話だ」

嘉納はそう言って廊下を歩くレレイ達に向けて顎をしゃくった。

「でも、不味くないんですか？」

「正直、不味い。だが仕方ないだろう。このまんまじゃ特地に投資できないんだからよぉ。だから問題が明らかになったのが今の内でよかったと考えることにした」

「でも、『門』の再開通が上手くいくかどうかは……」

「そうだな。全てはそれが前提となる。だから、そいつをこれから実験で確認しようってわけだ。他にも検討したり話し合ったりしなきゃならんことがいっぱいある。何をどこまで秘密にするかも考えなきゃならん。アメリカや中国あたりに知られたら、俺の所に『門』を置けって言われる恐れもあるしな。そのことを考えると、レレイって娘っ子の存在は防衛機密だ。けど、秘密にしたまんま、『門』を閉じますなんて言ったら、大反対を喰らっちまう。そうなると、同盟国あたりには再開通できることを仄めかしておく必要はあるだろう。このあたりのさじ加減がえらい微妙だ」

「そうですね」
「だがよ、良いこともある。もしかしたら特地ではない別の世界との行き来までも出来るようになる可能性があるんだからな。もちろん、黒ゴスのお嬢ちゃんから突きつけられた、こっちの技術や学術情報を厳重に管理して、特地に持ち込ませるなって条件をどうやって形にするか考えなきゃならん。欧米の植民地支配が、その土地の文化や習俗を破壊しちまったという歴史を見れば頷ける話だしな……」
そんな説明を聞かされながら伊丹達は巨大な格納庫にも似た場所へと出た。
そこは天井がビルの四階か五階に相当するぐらいに高く、窓のない巨大な空間だった。伊丹はこれと似たような雰囲気の場所を知っていた。東京ビッグサイトである。
だが、そこに並べられているのは折り畳み式のテーブルではなかった。
「あ、『心神』がある」
実験用に作られたステルス機のモックアップやら、中距離弾道ミサイル迎撃用のキネティック弾頭が並べられていた。
そんな実験場の一角で、白衣を着た技術者やら、繋ぎを着た連中が、中央に据えた台を取り囲むように、テレビカメラや様々な機器を並べていた。
床には白いテープが格子状に貼られている。
また空中にも、ジャングルジムのごとく白いロープが縦横上下に向けて格子状に張られていた。

そんな台の中央に、レレイが案内されて立つ。周囲を取り囲む研究員達の中には見知った顔ぶれもあった。

「あ、養鳴教授」

「おおっ、来たな。『門』を開く実験と聞いて、居ても立っても居られずに駆けつけてしまったぞ。極秘だとか、誓約書とかややこしい話じゃったが、要するに黙っておればよいのであろう？」

見れば漆畑や白位の姿もあって手を振っていた。

一方、レレイの頭部や身体の各所に女性研究員の手でいろいろな計測器が取り付けられようとしていた。

レレイも嫌がることなく、逆に興味があるのか、それがどのような用途を持つものなのかを尋ねて、説明を受けながらうんうんと頷いていたりする。

こうして準備を進めていると、首相の森田を始めとした政府の閣僚達も集まって来た。

「皆さん、わざわざこんなところに集まって大変ですね」

新聞やテレビでしか見たことのないそうそうたる顔ぶれを生で見て、伊丹は呟いた。

「馬鹿。それだけ、この実験は重要だってことだ」

嘉納のセリフを継いで、夏目防衛大臣は語った。

「『門』の扱いは間違いなく日本の行く末を決めます。『門』を保持するべきか、それとも一旦閉じるべきか。野党は選挙の争点にこれを仕掛けてくるでしょう」

すると森田がさらっとこぼした。
「いっそのこと彼女の存在を明かしちゃったらどうです？　説得が楽になりますよ」
「やめてくださいよ総理！　それをやったら、本当に大変なことになってしまいますからね」
「いえ、公式発表しようって言うんじゃないんです。噂という形で流します。そうですね、『門』を開く技術が手に入った……ぐらいにしておきます」
「で、公式には知らぬ存ぜぬを決めようって言うのか」
「そうです」
それでもかなり危ない事態になりそうである。様々な憶測を呼んで、かえって拗れてしまう可能性もあるからだ。皆は危なっかしさを感じさせる首相のことを黙したまま睨み付けた。
『これより、実証実験を開始します。各員、観測機器の位置へ。五、四、三……』
皆は、固唾を呑んでレレイを見守った。
レレイは目を閉じて鳩笛にも似た独特の響きの呪文を唱えた。
「見てください、被験者の脳波が凄いことになってます」
「振幅が大きすぎて計測不能だ。まるで大発作を起こしているかのようだ……よく意識を保つことが出来るな」
「この脳波の発生部位が、大脳の一部に限局されているからだろう」
見ると脳波グラフは、全ての線が激しく波打ってるわけではなかった。部位によっては全く変化

がない場所もあった。
「……二、一、コンタクト！」
レレイは実にあっけなく、異世界へと繋がる『門』を皆の前に開いて見せた。

それは空中に垂直に浮かんだ水たまりのようなものであった。
向こう側はそのまんまこちらの世界の風景が透けて見えた。近づいて見てようやく表面に何かがあるのがわかる。つまりはガラス窓のようなものだ。その表面は軽く波打って揺らいでいる。ガラスと違って柔らかさを感じさせた。
「これが『門』？　銀座にあるのとはだいぶ違うようだが。サイズも小さいし」
「石で出来ているあれは、『門』を安定させ固定するために建造されたもの。『門』の実体はこれ。私の力だけでは維持し続けるのが難しいので、この大きさが精一杯……」
レレイの説明に研究員達は「なるほど……」と頷くとその表面に近づいて、顔を寄せて観察を始めた。
息を吹きかけたりして、表面が揺らぐか確かめようとする者もあった。だが、反応はなく、その表面が揺らいでいるのは空気の動きとは別のものによるらしいと理解された。
早速、養鳴が長い棒を持ってきた。
「どれどれ……む」

棒の尖端を揺らぎの表面に押し当てる。そして少し押し込む。すると棒は何の抵抗もなく揺らぎの中に消えていった。引き戻してみると棒の長さはもとのまま、何の変化もない。
何度も刺したり抜いたりして、さらにかき回したりする。
「なるほど……」
だが、誰一人としてその表面に触ったり、向こう側を覗き込んだりするものはいなかった。今度は、カメラを取り付けた棒が用意されて中に突っ込まれる。
だが、向こう側の湿度が高いのか、モニターに映された映像は白くぼやけてしまい、はっきりと映らない。
「ちょっと待ってな」
職員の一人が、レンズにスプレーをかけて、曇らない加工を施してから改めてその先を突っ込む。だがやはり同じ結果になった。
「もしかすると、霧とか靄に包まれてるのかも知れないな」
こうなると、誰かが中を覗いてみる必要があった。
お前行けよ、いやだなぁ一番は譲りますよという無言の会話が取り交わされた。
そんな白衣の群れの後ろで伊丹は、レレイに歩み寄った。
「レレイ。どこに繋いだんだ?」
「わからない。適当に手近な世界に繋いだ」

「特地……レレイ達の世界とは違うのか？」
「同じ世界とは複数の穴を開くことは出来ない」
円と円の接点は常に一カ所であるという言い方でレレイは説明した。
「そうか、この方法で特地と俺たちの世界を繋ぎ直すわけか」
「ただし、いくつもある世界の中の一つを見つけるための目印が必要……」
すると養鳴教授が言った。
「その手配はこちらで引き受けておる。混ざり物のない単一素材の結晶体。珍しければ珍しいほどよく、しかも長い年月を過ぎているもの。ま、なにがしかの鉱物が良かろうな」
なるほどね……伊丹はそう答えると、無造作に『門』に近づいて「どれどれ」と中に顔を突っ込んだ。それは人体から頭だけがなくなるという風景であり、見ている側にとってとても気分の良くないものだった。断面……こちら側に残っている頸部が、切断された人体標本のごとく見えるから尚更である。女性の研究員などは、突然見せつけられたスプラッタな風景に、吐き気を催したのか口を押さえて実験場の隅へと走り去った。
「医学検査の技術が凄いことになりそうだ」
誰かがそんなことを呟いた。
「いや、そんなもんじゃ済まないでしょう。外科手術がとんでもないことになりますよ」
自分の体の中を覗かれていることに気が付かない伊丹は「ん、何だここ」と呟きながら、一歩踏

み込んで、皆の前から姿を消した。
やがて、血相を変えて戻って来た伊丹は転げるようにして大声で叫いた。
「レレイ！　すぐにこの『門』を閉じろ。急げ、早くっ速くっ！　この世界は無茶苦茶ヤバイッ！」
「いったいどうしたって言うんだ？」
離れていたところで遠巻きにしている政治家達を代表して嘉納が尋ねた。
「これぐらいの卵が……卵がずらっと列んでいて、俺が近づいた瞬間、花びらみたいにパカッと……」
伊丹は人の頭ぐらいのサイズの卵が、ねとねとベトベトした場所にずらっと列んでいたと告げた。
それを聞いた瞬間、研究員達と政治家達は伊丹が考えたのと同じＳＦ映画を思いおこし、血相を変えた。
「実験中止っ！　レレイさん、『門』を閉じてくださいっ！」
「警備！　直ちに第四実験場に集合！　間に合わないかも！　急いで！　早くっ！」
「遅いっ！　建物の出入り口を直ちに封鎖しなさいっ！　皆さん、日本を守るためです、覚悟を決めて下さい。そして外に連絡なさい。もし、中との連絡が途絶えて二十四時間を経過したら、この建物ごと焼き払いなさいと。これは防衛大臣としての命令です」
夏目の叱声が轟く中、レレイは首を傾げながらも言われるままに穴の維持をやめた。
目の前にあった透明な膜は、一瞬にして消えた。
その瞬間、突如として地震が研究所を襲った。震度は2ぐらいだろうか。さして大きい揺れでは

なかったから伊丹は気にもとめずレレイに声をかけた。
「……はぁ、はぁ、はぁ……レレイ、とりあえず別の世界に繋ぐのはやめてくれ。特に今の世界は今後も将来にわたって永久に繋ぐなよ。こっちが滅びる」
見知らぬ異世界に、むやみやたらと繋ぐものではないということを皆が知った一瞬であった。
とりあえず無事に済んだようで皆、胸をなで下ろしたが、やはりこれで終わりというわけにはいかなかった。
「お、おい、なんだよ!?」
突然、伊丹は両脇から屈強な黒服に抱えられてしまった。両手両足を四人がかりで取り押さえられてしまう。
周囲を振り返ると、大勢の白衣や黒服連中が取り囲むように列んでいた。皆の無表情にして機械的、人間味を少しも感じさせない所作が恐ろしかった。
夏目が冷厳に言う。
「直ちに検査です。身体に寄生してるものがないか、徹底的に調べなさい！」
廊下を引きずられていく伊丹。
「だ、大丈夫だからっ！　何もくっついてないからっ！　ホントだって、俺は、俺はっ、無実だあああっ！」
懸命に声を張り上げる伊丹。だがそれは皆に首を傾げさせるものであった。

「なんで無実？」
夏目が首を傾げ、嘉納が答えた。
「ああ。あれこそが、お約束って言う奴なんだ」

＊　＊

シェリーがその情報を耳にしたのは、ミュイと共に皇帝の側で遊んでいた時のことであった。
彼女がフォルマル家の幼い当主と知り合ったのは、「年齢も近いことだし、仲良くするがよい」と皇帝に引き合わされたからである。
年老いた皇帝はミュイやシェリーが自分のところに遊びに来ることをたいそう喜んだ。
病がちになり、ほぼ毎日を寝台に横たわって過ごすようになった皇帝は、自分が動けない代償のように、元気に遊ぶ少女達の姿を眺めて和むようになったのである。
幼くして両親を亡くしたミュイもまた、自分の祖父のような皇帝のそばで遊ぶことを好んだ。そのため皇帝の寝室に毎日のように訪れては、物語を読んだり詩の朗読に興じたりしていた。もちろんこんな好機を漫然と過ごすシェリーではない。政治に強い好奇心を示す幼い子供という態度で皇帝を相手に質問をしたり意見を述べたりしながら、どうやって自分の目論見を実現するか、その方法を探っていた。

「陛下。正統政府がゾルザル様と対抗して行くには、ニホンと協力していくしかないように思われますが」
「余もそう考えている。だが、ニホン側としても我々の側としても、おいそれと手を結ぶことは出来ぬ。その理由は分かるな？」
「はい。昨日の敵は、今日の友という訳にはいかないということですね？」
「そうだ。そのためにはまず講和を締結しなければならぬ」
「では、早々に講和をまとめてしまってはいかがでしょう？」
「それもまた現状では難しいな。我らは正統政府を名乗っているが、実際に支配しているのは、帝国全土の一部でしかないからだ。ニホンが求めている賠償を支払おうにも、我らにはその力がない」
「その為にはゾルザル様が邪魔。けれどゾルザル様を取り除くにはニホンの手助けが必要……金庫の中の鍵ですわね」
「その通りだな」
「ニホン側は、講和の条件をおまけしてくださらないのでしょうか？」
「無理であろう。ニホンの使節団はどうも調子に乗っているように見える。あの者どもに譲歩させるには頭を冷やさせるきっかけが必要だ」
「ニホンでなされる選挙は、そのきっかけにはなりませんか？」
「難しかろうな。候補者は国民の支持を得るために、威勢の良いことを言うものだ。弱腰と見られ

ればそれだけ当選しにくくなる。それだけに、選挙の後は逆に条件が厳しくなる恐れもある。これでは我が帝国が譲歩したら譲歩した以上に要求が厳しくなるだけだ」

「ですが、戦争を終結に導いたという功績は、国民受けするのではありませんか？」

「その場合も問題となるのは、どんな条件で戦争を終わらせたかなのだ」

「つまり、問題は使節団の方々に、帝国がお譲りできる範囲で、納得していただけるようにすることなのですね？　では、勝ちを演出してさしあげるというのはいかがでしょう？　わたくし達には与える実がありませんから、名を与えてさしあげるのです」

「ふむ、なるほど。大勝利の演出か。だが帝国の威信が低下することをどうする？」

「ゾルザル様を倒すことでは、威信の回復は出来ませんか？」

その時、皇帝の寝室の戸が叩かれた。

シェリーとミュイは慌てて皇帝が横たわる寝台の下へと飛び込む。

実は、二人が皇帝の寝室に入り浸っていることは周囲には内緒だったのだ。以前、マルクス伯に見つかった時などは、「病身の陛下のご負担になる」と烈火のごとく怒られてしまった。皇帝自身が良いと言っているのだから良さそうなものなのだが、子供嫌いの侍医が自分がそう感じるのだから皇帝もそうに違いないという偏見を元にして指図したのが原因のようである。

そのため、誰かの気配が近付いて来るたびに、二人は身を隠す。しかしそれがまた悪戯をしているような気分になれて楽しい。皇帝も彼女たちを隠すことを楽しんでいるようであった。

だが、今回皇帝の寝室を訪れたのはマルクス伯爵とフォルマル家のメイド長だった。
「陛下。至急、お耳にお入れしたき報せが届きました」
二人は動転しているのか皇帝が横たわる寝台前まで進み出ると、間髪入れずに報告の口上を述べ始めた。
それは、アルヌスで情報収集をしているパナシュからのもので、内容は、『アポクリフと称される異変が起きていることが確認された』というものであった。
日本では、各地で起きている異変と『門』との関係が取りざたされ、アポクリフの広がりを防ぐため、『門』を閉じるべきだ、いや閉じるべきではないという論争になっていると言う。
だが皇帝は「相手にすることはない」と一笑に付した。
聞き耳を立てていたシェリーも、同じように考えた。何故なら、日本は帝国からまだ何も得ていないからである。万が一、『門』を閉じるという結論になったとしても、それは帝国が日本に賠償を与えてからになる。
「ピニャも何も言って来ないではないか。いちいち報告するに及ばないと考えたからであろう」
「ところが、さらに気になる情報がございました。これはハミルトン殿がパナシュ様に宛てた私信でございます」
今度はメイド長が口を開いた。
「ハミルトン？　……確かピニャの秘書官をしていたな」

その私信を、どうしてメイド長が知っているのか大いに気になるところである。
「どのような方法でそれを得たかは、問わぬ方が良さそうだな？」
メイド長は「恐れ入ります」と恐縮顔で一礼した。
「それによりますれば、ピニャ殿下が政（まつりごと）に対する意欲をすっかりと無くされているそうです。そのために、重要なはずの情報までも手元に留めおかれているとか」
「それは、どういうことか？」
「例えば、アルヌスに滞在しているとある魔導師が、冥王ハーディより、『門』を開く力を授かったとのよし」
「なに!?」
枕に背を預けていた皇帝も、この話には身を起こした。二人の助けを得ながら横たえていた身体を起こし、聞き間違いでないことを確認する。
「もし、本当ならばゆゆしき事態かと」
シェリーもまた、不味い事が起きたと考えた。
この事態、帝国正統政府にとって大変に都合が悪いのだ。更に言えば、自分自身にとっても。
これはイタリカの正統政府にとって、かなり高度な機密事項だ。つまり、知っているとヤバイ。
もちろん、ミュイも一緒なのだから、フォルマル伯爵家の当主の生命をどうこうということは起きないだろう。けれど秘密を守るためとして、かなり長い期間、不自由な場所に閉じこめられても

おかしくないのだ。
それは菅原と引き離されることを意味しており、避けたい事態である。シェリーにとって、それは生死に匹敵する問題なのだ。
「どうしたのですか？」
事態を全く理解していないミュイに、シェリーは人差し指を立てて静かにするように告げた。そしてメイド長とマルクス伯爵に気づかれないよう、皇帝用の巨大な寝台から這い出ることにした。寝室から出て、菅原の元に駆け込んでしまえば、少なくとも彼と引き離される心配だけはしないで済むだろうから。
だが、寝台から這い出たところで、モルト皇帝の手がシェリーの肩にポンと乗せられた。
「しばし待つがよい」
マルクス伯とメイド長は、シェリーの姿を認め、しまったと顔を引きつらせた。瞳に暗い輝きをひらめかせ、口封じに後ろ暗い方法を考えたであろうことがわかった。だが続いてミュイが顔を覗かせたことでメイド長の顔色が真っ青となる。シェリーにしようと思ったことを、ミュイにすると、彼女は主殺しの罪を犯すことになるからだ。
「まぁまて」
そんなメイド長の思考を読みとったのか、皇帝は指を立てて「早まるでない」と制した。
「その魔導師が、どこの誰かはわかっておるのか？　早急に身柄を抑えることが可能か？」

メイド長は浮かない面持ちで答えた。
「いいえ、残念ながら所在も名前もわかっておりません。ただ、ピニャ殿下ならばご存じかと……」
マルクス伯は告げた。
「陛下。ニホン人の思考の傾向から察しますと、『門』を自在に開くことが叶うならば、災いを未然に回避しようとするほうに傾くおそれもございます」
「早急にニホン側と協議して釘を刺しておかねばならぬな。我らがこの地にて安穏としていることが出来るのも、ニホンという存在があってこそなのだから。それで、この情報を知る者は、このイタリカでは誰と誰かな？」
マルクス伯爵とメイド長は、ミュイとシェリーに目を向けた。
そこで皇帝はシェリーに、きちんと立つように命じた。
「途中で退出しようとした所を見ると、事の重要性を理解しているようだな」
「……はい」
シェリーは悪戯を叱られている子供のように首を竦めた。
「どのように重要か、申して見るがよい」
ここで隠してみても始まらない。シェリーは問われるままに自分の見解を語った。
帝国正統政府は、自衛隊が存在しているからこそ、ゾルザル派と対抗できている。これがなくなるようなことになれば、軍事的に劣勢な正統政府はゾルザル派軍の手によって叩きつぶされ、今こ

こにいる講和派はことごとくが、帝都での粛清を再体験することとなる。
もし、この事態を講和派貴族達が知ったらどうなるか。
「外国に亡命するか、我が身の安全を確保しようとして雪崩を打ってゾルザル様の下に走ることでしょう。早晩、正統政府は瓦解いたしますわ」
「うむ。わかってるようだな」
皇帝は頷いた。
「ならば、しばらく誰にも会わずどこかで閉じこもっていることも出来よう？」
そんな言葉が皇帝の口から出てくると思ったシェリーは、機先を制して皇帝が口を開く前に指を立てた。
「解決策はありますわ」
皇帝は意外そうに問い返した。
「ほう？　解決策とは何かな？」
「早急にニホン側と講和し、ゾルザル派を倒してくださいとお願いするのです。こうなったら、賠償は帝都を奪還後にお渡しいたしますと空手形を切るしかございません。もちろん、賠償金をおまけしていただく必要がありますが、代わりに鉱山や領地の権利をお譲りすれば、きっと応じて下さることでしょう。もしかすると『門』を閉じるということもしないかも知れません。あるいは『門』を閉じるとしても、こちらに軍隊を残して下さるかも」

「ほう、何故そう思うのかな？」
「例え『門』を再度開くことが出来ると言っても、ニホンの方々にとってこれは紛れもなく賭けだからです。『門』を閉じたらそのまま、こちら側とは永久に縁が切れてしまうかもと必ず思うはずです」
実はシェリーも同様の怖れを感じていた。だからこそ菅原と離れたくない一心で、思考を巡らせているのだ。もちろん、他に手が無いとなれば、菅原にしがみついて日本に行ってしまうつもりだが、それは最後の方法なのだ。
「持って帰れるお金ではなく、領土や利権。それが多ければ多いほど、捨てるのは惜しいと思うのが人情というもの。そしてその権利を確たるものにするため、共に手を携えてゾルザル様をやっつけてしまうことにも同意して下さるでしょう」
シェリーの必死な言葉に皇帝は「なるほどな」と大きく頷いた。どこか機嫌が良さそうにも見えた。
「だが、帝国にとってニホンは驚異。それがいつまでも残ることになるぞ。それをどう考える？」
「別によいのではありませんか？　もう、戦争をされるおつもりはないのでしょう？」
「確かにそうだが」
「ニホンとは敵対するのではなくその力を利用するのです。諸外国の方々や、亜人部族の方々との関係で帝国の舵取りはこれからとても難しくなりますわ。でもニホンという国と仲良くしていれば、心強い味方となって下さることでしょう。陛下にとってはお気に召さないことかも知れませんが、帝国の国力が再び高まるまでは、そうしておくことをお勧めします」

「なるほどな……その歳でそれだけ考えられれば、たいした物と言えるだろう」
皇帝が頷き、マルクス伯爵も褒めた。
「幼いのに政治的なセンスは素晴らしいものがありますな。将来が楽しみです」
「だが、ニホン贔屓があからさまに過ぎるところもある。もう少し帝国の利益を中心に据えるよう発言するべきだ。余はそれがゾルザル憎しの想いからだと理解できるが、知らぬ者には国を損ねようとしていると見られるおそれもある」
皇帝の論評を受けたシェリーは冷や汗を流しながら頭を垂れた。
「心がけます」
「だが、そなたの言にも一理ある。あれもこれもと欲をかいては、かえって何も得られなくなる。いっそそれぐらいに、求める物を明確にしてしまった方が上手く行くであろう」
「わたくしもそう思いますわ」
「ふむ、その交渉。使節としてそなたを任じてみたら面白かろうな」
「へ、陛下。それはいかがなものでしょうか？」
さすがのマルクス伯も皇帝の言葉に異議を唱えないわけにはいかないようである。シェリーが優秀なのは確かだが、外交交渉はそれほど単純なものではないのだ。
シェリーも目論見以上、と言うよりは効果が有り過ぎて手に余ってしまう結論に慌てた。
「わ、わ、わたくしは、ニホン外交官の妻となることになっておりまして」

「つまりは、まだ帝国の貴族ということだ。ならば問題なかろう？　なぁに、辛気くさい政治家共の中に、そなたのような稚い者がまざっておるのも一興だ」
「あの、でも、わたくしごときに交渉ごとを上手く運べるとは思いませんけれど」
「うむ。もちろんだ。だから実務の方は年寄り共に任せ、そなたは使節代表として振る舞えばよい。ニホンの外交使節どもの頭を冷やすよい冷や水となれるだろう。子供相手に厳しい要求を突きつける姿は、誰が見ても美しいとは思えぬものだからな。マルクス伯、無理は承知で申しつける。適切な名目を考えよ」
　いくら皇帝の言葉であろうとも、反対の立場であるマルクス伯は答えるのに逡巡した。だが皇帝からここまで言われれば重い口も開かざるを得なかった。
「ではまず、シェリー嬢に門地の相続を認めテュエリ子爵夫人といたしましょう。例え幼くても一家の当主となれば、軽々しい扱いを受けることもございますまい。さらに陞爵させて伯の位とし家格を引き揚げましょう。さすれば陛下より直々特使に任じられるに値する者となります」
　すると皇帝はシェリーに視線を向けた。
「そなたは家財も家族も失っておったな。それでは嫁入りするにも持参金がなくて肩身も狭かろう。ならば、せめて押し出しだけでも良くしてやらんとな」
「はぁ……ありがとうございます」
　持参金の代わりに爵位なんかを貰っても、菅原が喜ぶとはとても思えないが、シェリーはうやう

やしく頭を下げてこの事態を受け容れることにした。
皇帝の特使という任務はやっかいだが、状況を思った方向に導いて行くには大変に都合がよいと言うことに気づいたからである。うまくいかなくて元々、恥をかくのも自分ではない。なるようになれという気持ちで皇帝の命令を受けることにしたのだった。

06

自衛隊中央病院。その感染症病棟に伊丹は収容されていた。
扱う疾患の性質上、建物の窓は全て密閉されている。さらにその内部の空気圧は外気に対して常に低く保たれ、空気中に浮遊している細菌・ウィルスの類を、外部に放散させないようになっていた。
そんな病棟であるが故に、当然の事ながら出入りの管理は厳重である。特に伊丹の待遇は監禁と呼ぶべき物に近く、警務隊の屈強な隊員が付き従って、四六時中監視していた。
その警務の隊員が、何故正規の装備にはないイサカの散弾銃なんぞ手にしているのかとか、何故、病院に防染装備一式と携帯放射機（火炎放射器）なんぞが持ち込まれているのかといった問いを、声を大にして投げかけたいところである。だが、当の伊丹は、のほほんと寝台に横たわって、南米密林の名称を冠した通販書店からとりよせたマンガやら小説、あるいは別ルートで入手した同人誌

なんぞを読みふける毎日を過ごしていた。

「でぇ、なんだってこんな屈強そうなのがつっ立っているのぉ？」

ロゥリィは丸椅子に腰を下ろすと、傍らの大男にちらと視線を走らせた。

制服に「警務・ＭＰ」と書かれた黒腕章をつけて、壁際に直立不動無言のまま、あたかも置物のように立っている。

「いや、実はな、ちょっとばっかり退屈しのぎに冗談をやっちまったんだ」

廊下を歩いている最中に、腹を抱えてのたうち回り「うがっ、畜生！　来やがった！　くそっ、ぐわっ！」と叫くような真似をしたらどうなるか試してみたくて、ついついやっちゃったのである。もちろん大騒動になった。当然のことだが、怒られた。すっごく怒られた。だから反省している。ただし後悔はしていない。理由は、充分に楽しめたからである。

しかしながらこの手の悪戯は、一度やらかしてしまうと取り返しがつかない。この病院における伊丹という男の評価は決まったも同然であった。看護師達からは白い目で見られ、医師達は苦痛を伴う検査をするのに遠慮とか気配りと言う物を一切しなくなった。

今は、「やり直しが出来る社会」「再挑戦」といったことが声高（こわだか）に叫ばれている時代だが、人生においてはどうあってもリセットの効かない、取り返しの付かないことがあるということを、伊丹は身をもって知ることになった。

さらに言うと、今回の伊丹の悪戯は、通常の警備態勢では想定された緊急事態に対処できないと

いう事実を明らかにした。
みな慌てただけで、有効な対処を施すことが出来なかったのだ。冗談と知って怒りもしたが、同時に、「よかった」と胸をなで下ろしたのも確かなのだ。そして、これに危機感を抱いた管理責任者は、寄生生物モノのSF映画を何本も繰り返し観て、保安態勢の強化を打ち出したのである。
その結果がこれであった。
伊丹に付き従う警務隊員は、防弾防刃のボディアーマーで身を固め、手にした散弾銃には鹿撃ち用の散弾を装填してほんのわずかな変調すらも見逃すまいとしている。おかげで二週間にわたる検査漬けの日々も、伊丹は孤独とは無縁に過ごした。何しろトイレに行くのだって、風呂に入るのだってついて来て、ずっと扉の前で待っているのである。
「目標、ただいまトイレに到着」
扉の外でそうやって報告する声が漏れ聞こえると何ともいたたまれない気持ちになる。
五分、同じ所にいると必ず報告するのだ。しかもである。いくら話しかけてもこの警務官は一言も答えてくれない。何かあった時に、撃ち殺すことになっている相手と馴れ合うつもりはないという態度が明白であった。
「ふ～ん……じゃあ置物だと思えばいいのかしらぁ？」
「それはそれで何気に扱いが酷い気がする」
「でも、本当に無反応でいられるものかしらぁ」

「いろいろやったけど駄目だったぜ」
目の前で踊ってみせたり、冗談を聞かせたりは既に実践済みだと伊丹は告げた。この男も相当に暇だったようである。
「ふ～ん」
するとロゥリィはチラリと警務科の隊員に悪戯そうな色を湛えた視線を向けると、突如として伊丹に迫るように身を寄せて口づけた。
「あっ……」
流石の警務もこれには顔色を変えていた。驚愕の表情をしている。
「ふふぅん……」
ロゥリィはやりこめてやったと言わんばかりにほくそ笑む。
伊丹も、唇を押さえながら今起こった出来事を反芻していたりするが、ロゥリィは追い打ちをかけるように抱きつき、しなだれかかり、呼吸を荒くしながらベッドへの登攀を始めた。
「ねえ、いったいいつまでぇここに居るのぉ？　わたしぃ、ご無沙汰でぇもぅそろそろ我慢ができなくなっちゃったんだけどぉ」
甘い声で、熱い吐息を伊丹の耳に吹きかける。
警務の隊員は、伊丹に向ける視線を、犯罪者を見るようなものへと変えた。そりゃそうだ、実年齢は九百を超えているとは言え、ロゥリィは見た目だけなら十二～十三歳。この年代の少女との淫

らな振る舞いは、たとえ本人の同意があったとしても、刑法犯になりかねないのだ。そんな犯罪行為が、いままさに現行犯で進行しているのだから、自衛隊内の警察であるところの警務隊員が、顔色を変えないはずがない。

「な、何がご無沙汰なのかわからないなぁ。君と僕との間にそんないかがわしいことは、なかったと思うけどなあ」

「なぁに誤魔化してるのよぉ。今さらでしょお？」

ちらちら警務隊員の様子を窺う伊丹。

警務科の隊員は頬を紅潮させて、苦虫を噛みつぶしたような表情をして一心に余所の方角に視線を定めていた。ぐびっと唾を飲み込む様子が見て取れ、何かを必死に考えている様子だ。良識と任務の狭間で葛藤しているのだろう。

「あ、いや、ほら、人目もあることだしね。ロゥリィさん」

「見てないわよぉ」

ロゥリィは伊丹に跨ると、獲物を前に舌なめずりする肉食獣のような目つきで伊丹の目を覗き込んだ。

「で、でも、聞こえてたりするし」

「聞かせてあげればぁいいわぁ。いつもはあ、レレイとかテュカとか、ヤオとかがいて甘えられないんだものぉ。二人っきりになれた時ぐらいい、ねぇ、いいでしょぉ」

「だから二人っきりじゃないでしょ」
「ここには誰もいないわぁ」
「いや、いるし」
「ふたりっきりなのぉ」
そんな理屈にもならないことを言いながら伊丹の首筋に舌を這わせるロゥリィ。
ついに警務の隊員が動いた。いたたまれなくなったのか、靴音を鳴らして逃げるように廊下へと飛び出していってしまった。
病室の扉がバタンと閉められた。足音は廊下の向こうへと消えていった。
「よしっ、勝った！」
伊丹はレレイと、「よっしゃ！」とハイタッチをした。
そして、ひとしきり喜んだ後に我に返って、自分たちがどのような体勢にあるかに気づく。
ロゥリィは伊丹の大腿に跨って、身体を起こした男の首に腕を回しているという対面座位の体勢なのだ。掛け布団一枚を挟んでいるからさほど大事に至らないが、心理的にはこれ以上はないというぐらいに密着状態である。
うろたえて顔を真っ赤にしたロゥリィは俯いた。
「あ、いや……ほら、そろそろ、降りたら？」
「腕ぇ……」

「なに？」
「腕を放して貰えないとぉ……降りられない」
いつの間にかロゥリィの背中に腕がまわっていた。伊丹はばっと手を離して降参とばかりに両手をあげた。
すると、ロゥリィは再び伊丹の唇に自らの唇を押し当てた。先ほどのちょっと触れる程度のものと違って、まるで貪るような強烈な口づけだった。
しかし伊丹の腕が、再びロゥリィの背中に廻ろうとしたその瞬間、ロゥリィはぱっと離れてベッドから降りた。
まくれ上がったスカートをパンパンと軽く整え、衣服の乱れや髪を瞬く間に直す。その後にはまるで何事もなかったかのような態度となっていた。「なんかあった？」と尋ねたら「何もないわぁ」と言われそうな程の変わり身の速さだ。
これがロゥリィの手練手管である。そうとわかっていても、伊丹はうらめしい気分になってしまうことを防ぐことは出来なかった。
「さてぇ……頼まれた物はこれよぉ」
何喰わぬ顔をしたロゥリィが、手提げ袋を伊丹の膝の上に載せた。
……くっ。
伊丹も負けじと何事もなかったという顔をして膝の上の袋を覗き込んだ。

「ありがとう、助かった。上手く真っ二つに割れたか？」
「正確には無理よぉ。無理矢理叩き割ったわぁ」
「それで充分だ。助かった」
伊丹はそう言うと、宅配便の伝票を取り出して手提げ袋に貼り付けた。
「その金剛石ぃ、どうするのぉ？」
「これから俺もどんなことになるかわからないからな。お袋の後見人に送っておこうと思ってる。なにしろ、政治取引の具にされて、誰かに引き渡されかねない立場だからな？」
伊丹としては嫌味を口にしたつもりである。だがロゥリィは、それを綺麗に無視した。
「後見人って何？」
「判断力が低下したりした時に、財産を管理してくれる人だ。病院の支払いとか、その他諸々の支払いもしてくれる」
「へぇ……便利なのねぇ」
「これだけあれば、お袋がのんびり暮らすのに困ることもないだろ？」
おつりの方が多いぐらいよ、とロゥリィは言った。
「で、いつまでぇここにいるのぉ？」
「俺としてはずうっここにいたって構わないと思ってるんだ。何しろ、未知の病原菌だとか危険な寄生生物とかにとりつかれているかも知れないだろ？　その危険を避けるためなら、検査に協力す

るのは自衛官としての義務だと思うんだよ。はっはっはっ」
「とは言いつつぅ、これ幸いと怠けているように見えるんだけどぉ」
ロウリィはそう言うと周囲を見渡した。伊丹の枕元や床頭台には同人誌、マンガ、小説が山積みとなっているのだ。さらにペットボトルと菓子類が見える。結構、優雅に暮らしているようだった。
「でも、ここで勤勉になれって言われてもなあ。することもないし」
実際、ここで伊丹が出来ることは、検査を受けるぐらいでしかない。
血算、生化学、CT、レントゲン、PET、細胞片を収集しての各種培養等々。それらも一通り済んで、あとは経過観察の毎日である。これで給料を貰えるのだから、伊丹としても嬉しい限りなのだ。
ロウリィは、そんな伊丹の有り様に歎息しつつ自分の左腕を軽くさすった。
先ほどやって来た看護師が、伊丹の腕にぶっとい針を突き刺して血を抜いていったのだ。その一部始終を見ていたロウリィは、自分まで痛そうに顔をしかめていた。その感覚が残っているのかも知れない。
「ところでそっちの方はどうなんだ？　みんなはどうしてる？」
「んー。レレイは魔法の実証実験よぉ。テュカとヤオはぁ、アルヌスにもどって組合のみんなに事情説明をしている真っ最中ぅ」
「ピニャとかは、どうしてるんだ？」

「遊び回っているわぁ。ここのところぉ、リサァのところに通い詰めてるみたい」
……リサァ？　ああ、梨紗のことかと伊丹は理解するのにスイッチを入れて、蛍光灯が点灯する程度の時間を必要とした。
「本気で、政治に関わる気を無くしちゃったのかな？」
「今はぁ、芸術だけでおなか一杯とか言ってるぅ」
「で、『門』の扱いはどうなった？　みんなに『門』を閉じることを賛成してもらえそうか？」
ロウリィは、伊丹の問いに物憂げに嘆息して見せた。
「正直、レレイのことを秘密にしたままでは難しいかなぁ。ニホン側も態度を決めかねてるみたいぃ。結局は『門』を閉じるしかないはずなんだけど、踏ん切りがつかないみたい」
「ま、分かりきったことでも簡単にできないのが政治なんだろ。簡単に選べるなら、苦労はないだろうしな」
確かに『門』を開く実験には成功した。だがそれは、特定の世界同士の恒久的な連絡を保証するものではない。よく分かっていない『門』という現象を操ること自体、人類史上初めての試みなのである。実績のないことに皆が尻込みするのは当然と言えた。
「だけど、放置も出来ないしな。『門』を閉じるように説得するしかないよ」
どこか他人事めいた物言いをする伊丹に、ロウリィは不満を表すように唇を尖らせた。
この男はどうも、この事態を自分とは関係ないと思っている節がある。

ロウリィはなんだか突き放されているようで寂しかった。相談もしないで伊丹の身柄を取引の具にしたのは確かに自分達だが、それだって理由があってのこと、分かってくれたって良いんじゃないかと思うのだ。それが、甘えであることは分かっているが、それでもと思うのが乙女心なのである。

そしてその気持ちは、伊丹が『門』の開閉や管理をレレイ一人に託すことだけは心配して見せるので、さらに強くなるのだ。

「俺としては、レレイが『門』の開閉機械扱いされるのはイヤだぞ」

膨らませた頬を伊丹にプニプニとつつかれたロウリィは、「う〜ん」これって話して良いのかしらぁ的に悩んでみせつつ、伊丹に説明を始めた。

「まぁ、そのことは気にしないでいいと思うわぁ」

「どうして？　レレイの一生が縛り付けられることになっちまわないか？」

特地と日本を繋ぐ『門』の開閉を担う門番という人生が、レレイに相応しいとは伊丹にはとても思えないのだ。

「その件についてはレレイと話し合ったわぁ。最終的には何とかなるという結論になったわぁ」

「本当か？」

ロウリィはこくりと頷いた。

「ベルナーゴ神殿と交渉して、『門』の開閉管理をさせる形で収めるつもりよぉ」

「それって、どういうこと？　ハーディの宝具って、レレイじゃなきゃ扱えないんじゃないのか？」

「『門』に関わる力はハーディの管轄よぉ。だからこそ、その力を分け与えられた者は冥王の眷属となるのぉ。だけどレレイは部外者にして外様よぉ。これは神殿の神官達から見るととても異常な事なのよぉ」
「ふむふむ」
「異常を正常に戻すにはぁ、レレイを取り込むのが一番でしょ？」
「でも、レレイはハーディを嫌がってるぞ。まさか無理矢理……」
ハーディに躰を乗っ取られたレレイは、未だにダイエットを強いられている。良い感情を抱くはずがない。
「無理矢理なんてことをぉわたしぃが許すはずないでしょぉ。だからこそ、ここで取引ができるわけぇ。『門』の開閉運営を引き受けさせるかわりにぃ、宝具とその使用権をベルナーゴの神殿に譲りわたすわけぇ……」
なるほど譲渡することは可能なのか、と伊丹は手を打った。
「そうすればレレイは『門』の管理から解放されるな」
ロゥリィは歎息した。
「そしてハーディの神殿は、お布施名目の通行料で潤うってわけよぉ」
事態を見守るためと称してクナップヌイから同行してきたジゼルが、アルヌスでうろうろしているので、彼女を巻き込んでいけばよいとロゥリィは語った。

「まぁ、逆に言えばぁ、その程度のことを我慢すればぁレレイが『門』に縛り付けられる心配はなくなるのよぉ」
「そうか。不自由な立場になるとか、そう言うことはないんだな？」
ロゥリィは軽く微笑んで頷いた。
「けどさぁ、それだったら最初からベルナーゴ神殿で『門』の運営管理をしてもらうってわけにはいかないのかな？　今の話だとハーディの宝具って、レレイじゃなくても扱えるってことだろ？」
するとロゥリィは考えが甘いと言った。
「無理ねえ。今の話はぁ、あくまでもレレイが『門』の運営管理を始めてからのことだからぁ。この話はハーディにとってはぁ不本意なことのはずぅ。だから最初からは絶対に手を貸さないわぁ」
「……なんだか妙な話だな？」
「神殿の神官のプライドって相当な物なのよぉ。便利使いされるのはもの凄く嫌がるものぉ。しかも相手は、あのハーディに仕える連中よぉ」
あのハーディ……伊丹もその一言には納得せざるを得なかった。
「そっか、でもそれなら『門』は問題ないよな。あとは、みんなを説得するだけだ」
だがロゥリィは情けなさそうな表情をして、布団の上に……伊丹の膝の上に突っ伏した。
「それ、すっごくやりにくいのよぉ」
「どうして？」ロゥリィは再度嘆息して、定まらない視線を伊丹に向けた。

「いの一番にヨウジぃ確保に走ったわたしたちぃが、生活の糧を捨てろって言っても説得力があるわけないでしょぉ」

アルヌスの組合は自衛隊を相手に商売し、日本からの品物を特地で売りさばいて利益を上げている。つまり、みんな『門』のおかげで生活をしているのだ。その『門』を奪うのは、生活の糧を奪うのと同じだ。

生活に困らず、さらに自分の欲しいものだけは早々に確保した者が、どの面下げて「生活の糧を捨てよう」と皆を説得できるのかとロウリィは嘆いているのだ。

「じゃぁ、俺の引き渡し要求を取り消せばいい」

「それはぁイヤ！」

ロウリィは可能とか、不可能とかではなく、イヤだと自分の気持ちを語った。

「どうしてまた、そんな」

「どうしてもよぉ」とロウリィは怒ったみたいに言う。「朴念仁、馬鹿ぁ！」と伊丹は叩かれた。

「なぁ、俺なんかのどこがいいんだ？」

「誰かを好きになるのに理由なんて要らない。理由のある想いは、理由が失せれば消えてしまうものよぉ……強いからぁ？　格好良いからぁ？　強さなんてのも結局は一時的。格好の良さも時と共に褪せ、抜群の知能を誇った男も老いにその冴えを失っていったわぁ。そんな理由で人を好きになるとぉ、必ず幻滅の想いを抱くようになるのよぉ」

「けど、俺がお前みたいな女にふさわしいとは思えないんだよな」
するとロゥリィは、透き通った笑みを浮かべると伊丹に顔を寄せ、ささやくように告げた。
「幼い頃はみんな好きという気持ちに素直に従えるわぁ。余計なことを考えないからよぉ、だけどそれは長じると共に失われてしまうのぉ。本当に大切なことは相手の魂を見て、何を感じるかなのに、それがわからなくなってしまう。ねぇ、この奇跡を信じてよぉ」
「奇跡？」
ロゥリィは伊丹の胸もとを指さして「そう」と言った。
「こんな魂、世界の何処を探してもなかったものぉ、すごくまったのよぉ」と。
さすがに伊丹も照れずにいられない。軽口を返すことも出来なかった。
「すっごく嬉しいけどさ、今は返事できない。もしかすると俺、テュカとかレレイとか、ヤオとか切ること出来そうもないし。このままっぽい」
「それを相手に求めたら愛の神を目指す者としては失格よぉ。それは、こちらの問題だから気にしないでぇ」
愛する者は必ず手元に置く。決して手放すな、決して逃すな、が、ロゥリィ教の教義らしい。要するに闘え、勝ち取れと言うことだ。レレイやテュカやヤオにも、そのように在れとロゥリィは常日頃から勧めていると言うことである。
「銀河鉄道９９９という物語に使われている歌に、『別れも愛の一つ』という台詞があってな」

するとロウリィは顔を起こすと、ギンッと伊丹を睨みつけた。
「人生は舞台芝居じゃないわぁ。身を退いて相手の幸せを祈るぅ？　それは馬鹿のすることよぉ。カーテンコールの後も続くのよぉ。ううん、その後にこそ人生はあるのぉ！」
そこまで言ってロウリィは伊丹の膝に再度突っ伏して頭をかかえた。
「こんな愛欲まみれなこと言ってるあたしぃが、他人を欲深いなんて批判できるはずないわぁ」
話は、どうやら組合の従業員をどう説得するかに戻ったようである。
日本人も、組合の従業員達も『門』を閉めることの必要性は理解できるはずだ。だが、その破綻点がいつ訪れるか分からないから危機感がない。そうなるとどうしても、今日明日の生活を維持することの方が優先される。それが人情というものなのだ。
「だからこそ、『門』の再開通だろ？」
だからこそ、レレイは日本の研究につきあっている。それは『門』を開く技術の信頼性を高め、皆の不安を解消するためなのだ。
「ニホン政府はそれで説得できるけどぉ、みんなにまで知らせることは出来ないわぁ。それとなくほのめかしているけどぉ、皆を納得させられるほどはっきりしたことは言えないのよぉ」
「……そうだった」
レレイのことを知られれば、彼女が狙われてしまう。本当ならば、ほのめかすだけでも論外なのである。だがそれくらいしないと説得工作は無理だ。

つまりは、八方ふさがりなのだ。
「ねぇ……どうしたらいい？」
珍しいことにロウリィが弱気だった。伊丹は膝の上に乗っている少女の頭を撫でながら励ました。
「大丈夫だから。なんとかなるよ」
「それをみんなに納得させて欲しいなぁ」
「俺が？　嫌だよぉ、痛てっ！」
頭を撫でる手を滑らせて、鼻を摘む悪戯をしたら指を甘噛みされてしまう。
ロウリィはのっそりと身体を起こすと、期待にちっとも応えようとしてくれない男に不満そうな視線を向け、「むー」と唸った。
「どうやって追い込んでやろうかしらぁ」
「何？　誰を？　何に？」
逃げ腰の態度をとり続ける伊丹にロウリィは「やっぱりぃ、あれしかないかしらぁ」と唇を尖らせながら思わせぶりに告げた。
「帝国の正統政府がニホン政府宛に、『門』を閉じてもいいけどゾルザルを片づけてからにして欲しいって言ってきたそうよぉ。どこで嗅ぎつけたのかしらねぇ？」
テュカが組合の職員相手に状況説明をしたというから、そのあたりから話が広まったのだろう。
それにしたって情報の伝播が早すぎる気もするが、イタリカのフォルマル家がアルヌスに諜報員を

入れているのは公然の秘密なので、そのあたりから伝わったと考えるべきだろう。
さすがの伊丹も、これには敏感に反応した。
「ゾルザルの奴をなんとかしてくれ……か。まさか、レレイのことまでは漏れてないよな？」
レレイが狙われて、あちこち逃げ回ったのはついこの間のことだけにさすがに思い当たったようだ。
その姿を見たロゥリィはしめしめとほくそ笑み、さらに危機感を煽る。
「一応、レレイにはわたしぃが護衛についてあげるわぁ。けど、情報は漏れるものよぉ」
土浦での実験以来、レレイはずうっと日本側にいる。魔法や『門』についての研究協力やその協議のためだ。彼女の重要性を考えて日本側も警護を増強しているが、今の日本の防諜態勢ではそれがためにかえって諸外国の関心を引き寄せることになる。そのため、あまり力を入れることも出来ずに痛し痒しの状態であった。今頃、駒門も苦心しているだろう。
「レレイとしてはヨウジィに護衛して欲しそうだけどぉ」
「問題はアルヌスだな。わかった。俺も、出来るだけ早く戻るようにするから、その間……」
伊丹は「頼む」と言ってロゥリィの手を取った。
「どうにも胸騒ぎがするんだ。すぐにでもここから逃げ出したくなるぐらいの。逃げないと無茶苦茶やばいことになるような気がするぞ。あ、ほら鳥肌が立ってきた……」
そんな伊丹をロゥリィは見つめ、伊丹もロゥリィを見つめる。二人は手を取り合って見つめ合った。
その時である。突然、ガラッと病室のドアが開けられた。外には屈強な警務の隊員達がずらっと

列んでいる。
「な、なんだ!?」
「伊丹耀司二等陸尉！　児童に対する淫行の容疑だ。話を聞かせて貰うぞ！」
「なんで？　俺、何もしてないよ！」
「やってるじゃないか！」
ロゥリィの手を握っている伊丹の手に、警務隊員達の人差し指が十数本、つきつけられた。この手が犯罪だ！　と警務隊員達は声高らかに叫んだ。
「ろ、ロゥリィは児童じゃないぞ！」
伊丹は叫んだ。ちなみに児童福祉法では十八歳未満が児童である。
「そうよぉ、わたしぃは子供じゃないわぁ！」
ロゥリィも声を揃えて叫んだ。
「大丈夫よ。怖かったでしょ？」
だが、女性の警務隊員がロゥリィを抱きすくめて保護、瞬く間に病室から連れ出してしまった。被虐待児保護の行動としては満点級の素早さである。しかも、そこには純然たる善意しか無かったから、ロゥリィも力ずくの抵抗をすることがはばかられた。
「お、お前ら、ニュースとか見てないのかよ！」
ロゥリィが九百歳を超えているという話は、国会への参考人招致の一件で、結構有名になったは

ずである。だが、そういったことには関心を払わない人種も世の中には少なくない。また、そういった堅物が多いのが警務隊というところかも知れない。

「そんなの知らん！」

口を揃えて答える警務隊員達。

「俺は、無実だぁ!!」

今度はさすがにネタではなかった。警務隊の隊員達は大まじめだったからである。

伊丹は、別室に連行されると過酷な取り調べを受けることとなった。

＊　＊

「なんだと？」

部屋の過半を占領するような巨大な寝台に躰を横たわらせるディアボ。その胸板を枕にして同衾するパナシュは、白い裸体を絡めたままの姿で、帝国正統政府から密使が派遣されてくるという情報を語った。

「なるほどな。事態はそんなことになっていたのか……面白いことだぞそれは」

ほくそ笑むディアボ。

「陛下は、ニホン側にゾルザル討伐の支援を求めておられます」

「そうきたか。だが当然とも言える。ジエイタイとやらが存在しなければ、イタリカの正統政府などゾルザルの手で赤子の手をひねるよりも簡単に潰されてしまうのだからな。ニホン側の反応は、当然渋いものであろう？」

「ところが、ニホン側も交渉がだらだらと続いていることにうんざりしているようで、講和の締結を条件にするならばと比較的前向きな構えです」

「そうか。すると問題は条件の摺り合わせだな……今の正統政府には金がないからな。今できることは空手形を乱発することだけだ。国庫を取り戻して金貨・銀貨を掻き集めたとしても、不足する。領土の割譲、不可侵の誓約。鉱山の権益といった部分で多くの譲歩を強いられることとなるだろう」

「そうです、ディアボさま。ですから、ここでお力を発揮なされれば、正統政府で重い地位を占めることも叶うかと存じます」

「それは冗談のつもりか？　とても笑えないぞ。そんなことをしていては俺はいつまでたってもピニャの後塵を拝したままではないか。嫌だぞ俺は！」

「しかし、今ここにいる貴方様に、何が出来ましょう？」

ディアボは、アルヌスに来て以来、パナシュの部屋に隠れ住む毎日を送っていた。

彼が支配するのはこの部屋の中だけ。ここだけが彼の王国なのだ。

従う者はパナシュと侍従のメトメスの二人。小間使いのメイド達はそれに含めることは到底出来ないし、さらに言えばパナシュはまだ忠誠心の半分以上をピニャに残している。

ディアボは、男と女の関係にさえなってしまえば、女を従わせることが出来ると思っているようだが、パナシュは自分をそういう女ではないと思っていた。もちろん心身共に女だが、考え方や感じ方をかなり男的に磨いてきたつもりなのだ。

「なあに、俺には秘策がある」

「それはどんな？」

ディアボも女を征服しきれていないことを薄々悟っているのか、思案の全てを示すようなことはしない。もったいぶった言い方で、ほんの少しずつ、ちらちらと手品のように見せつける。

「まずは、この事態をゾルザルに教えてやることにしよう」

「そ、そんなことをして宜しいのですか？」

「まあ、黙ってみてろ」

パナシュとしては、ディアボには野心を収めてほしい。

正統政府でしかるべき地位を得て安穏な生活を送って欲しいのだ。こんな関係になってしまったからというだけではない。自分とディアボの二人でならば、女帝となったピニャを支え、その下で栄達していくことも出来ると信じているのだ。もちろん、ピニャの義姉という立場になるのも悪い気がしないという気持ちもちょっぴりある。

だが、男の野心はあくまで頂点を狙っている。それがパナシュの不安をかき立てる。

こんな状況から起死回生できるような策は、毒性の強い劇薬に決まっているからだ。直感的にそ

れを察したパナシュは、湧き上がる不安をどうにも抑えきれなかった。
自分では、この男の重しになれないのだろうか？
この男を現実的にさせることは出来ないのか？
破滅へとひた走ろうとしている男を正道に立ち返らせることの出来ないもどかしさに、絶望的な気持ちになった女は、男の胸に顔を埋めた。
「殿下。どうぞ自重してください。お願いです」
思わず口を衝いて出たのは、パナシュがこれまで嫌悪しつづけてきた情に縋る言葉であった。
「心配することはない。これから状況は激しく動く。危険ではあるが、荒波だからこそ舵取り一つでいっきに高みに登ることもまた可能なのだ。俺はそれに賭ける」
だが、舵取りをわずかでも誤れば、波に飲み込まれ二度と浮かび上がることも出来なくなってしまうではないか。パナシュはディアボに向けてそう言ってきかせたかった。
その心配そうな表情を哀れに思ったのか、ディアボは目論見の一つを明かした。
「なぁに、心配はいらぬ。ゾルザルの奴は、その魔導師の娘とやらをつけ狙うだろう。ニホンもそれを防ごうとするだろうが、第三、第四者の介入があったらどうなると思う？　これによって状況は入り乱れて大きく荒れよう。そうなった時、最終的には娘を確保した者こそが状況の主導権を得ることになる」
「お、おやめ下さい！」

パナシュはそう叫んで止めたかった。だが、燃え上がる野心に突き動かされる男は思いついた名案にほくそ笑むばかりで、自分のことなど少しも見ていない。

こうして肌を合わせているのに、自分の言葉がその心底に届かないことに、パナシュはどうしようもない無力感を味わうこととなった。

＊　＊

さて、任期の満了も間近に迫った衆議院の予算委員会では、ネットに暴露される形で報じられ、ついにはマスコミを賑わすまでに至った異変の集中討議が行われていた。

「総理にお尋ねします。政府としては、特地で起きているという、アポクリフですか？　この問題に対して、どのような対処を検討されているのでしょうか？　巷では、『門』を閉じる閉じないといった議論が沸騰しているようですが、異変の解決は『門』の閉鎖以外ではありえないのでしょうか？『門』と、アポクリフとの関係が何ら確認されていない現状で、簡単に物事を決めてしまうのは問題だと言わざるを得ません。せっかく得た異世界との交流の機会です。それを失うことの損失はあまりにも大きいと思います。どうか、慎重に検討していただきたいと思います」

野党・社会主義者党の党首、船本（ふなもと）みたまの質問から議論は始まった。

委員長に指名されて、答弁に立つのは総理の森田であった。

「えー、お答えいたします。特地で起きている異常現象はどのような仕組みのもとで起きているか未だに理解されていません。しかしながら……えっと、問題を放置していてはいけないのもまた確かでしてね。それが『門』の存在によって起こっている可能性が高いのであれば、『門』を閉じるという方法を含めて、対策を検討するのは当然のことと考えています」

下を向いて答弁書を朗読する総理の答弁は、当然の事ながら精彩というものに欠けていた。

船本は再び腰を上げた。

「しかしながら先の銀座事件の賠償だってまだ得ていないではありませんか。それでは何のために膨大な予算と人命を危険にさらして特地に踏み入ったのですか？　それに『門』の存在はすでに日本一国の問題とは言えない状況にあります。そんな重要な問題を、国民に問わずして決めてしまってよいものなんでしょうか？」

「まず賠償問題ですが、しかるべき交渉の最中だとお答えいたします。また、『門』の具体的な扱いについても、危機管理の見地から問題に対処し、その結果をご覧頂いてから国民からの審判を受けることにしたいと思います」

それはおかしい、物事を決めてからの選挙はおかしいと野党の議員達がいっせいに声を上げた。与党の議員達からも声があがった。

ヤジが収まると、質問者の船本は再び問いかけた。

「『門』を閉じてしまえば、特地との交流は持てなくなるんですよ。国内的にも国際的にも重大な

損失でしょう。この問題をどう考えているんですか？」

総理の森田に代わって、防衛大臣の夏目が答弁に立った。

「こういう問題は、異変を放置しておいたら起こるかも知れない危機的状況を想像する必要があると思うのです。『門』が原因なのではと思われる異変は、特地だけで起きているわけではありません。我が国でもここ数日、微細ながら地震の回数が増えたり、浅間山の活動が活性化したり、さらには一部天文学者からも恒星の位置が、通常有るべき場所から、ずれて観測されているという報告が上がり始めています。これは、実際に恒星の位置が動いているのではなく、地球とその周辺の空間が歪んできていることによって起こっている重力レンズ現象に類似したものではないかと言われています。もしそうならば、これが進行した場合、全世界的な災禍を招く怖れもあるやも知れません。その場合『門』を事実上掌握している我が国の責任が強く問われることとなると思います」

船本は食い下がった。

「確かにその通りでしょう。けれど、何も起きなかったとしたら、それで失ったものに対する責任はどうなるのですか？」

「何もなかったら、それでよいんじゃないでしょうか？　そもそも危機管理とは、事が起きるかも知れないという予測に備えることを意味します。それは掛け捨ての保険みたいな物で、結果として事が起きなかった場合、かけたお金が無駄だったと悔やむのではなく、よかった何も起きなかったと胸をなで下ろすための必要経費なんです」

「私は、その掛け捨ての保険額が大きすぎるのではありませんかと問うているんです。特地に対する期待は国民、いや、国の枠を超えて全世界的に大きくなっているんです！」

「かけた費用が大きすぎた、あるいは小さすぎたという結果は、後知恵でしか判断できないことでしょう？　予知能力がない以上、丁度良いコストというのは算出できるはずがないんです。最近の例で言えば、新型インフルエンザが発生した時の対処で、ワクチンの購入量がいささか多すぎたという批判が一部から為されました。けれど私は、危機管理はやりすぎぐらいで丁度良いと考えています。準備した量に過不足がなかったというのは、一見して無駄がなかったかのように見えますが、偶然の要素の強い有事という状況では、万が一の要素が加わるだけで事態は悪化し対処できなくなります。『丁度良い』は救えたはずの命を、場合によっては見捨てなければならなかったということを意味していると思うからです」

ここで船本に割り当てられた質問時間が終了した。他党の議員が手ぐすね引いて待っている。とっとと終われ、早く終われと言うヤジまで飛びだした。

船本は「『門』の扱いについては、来るべき選挙で国民の判断を仰いでからなされるべきだ」と言い残してから質問席を後にした。

結局の所、この国会の場で交わされた議論こそが、世論の縮図であった。

世論は、『門』を閉じるべきだという閉門派と、異変と『門』の関係は何ら証明されてないのだから、

軽率に振る舞うべきではないという存置派の二つに分かれた。

この論争には、マスコミや文化人、学者なども参戦。それぞれの陣営に分かれ、理論的正当性を訴え、情緒的な賛同を得るための言論戦、宣伝戦を展開したのである。

だが、マスコミの多くは、政府を批判する視点からか、あるいは隠そうとして問題を暴露されたことへの腹いせからか、存置派に与する形での報道を展開した。つまり、『門』を閉めるのは国益に反する、早計だという論調を展開したのである。

そのため、はっきりとした意見を持たない中間派はマスコミに強く誘導されることとなった。

こうして圧倒的多数の存置派と少数の閉門派という構造が出来上がった。

テレビの討論番組などでも、反対意見の集中砲火を浴びた養鳴教授が、対立する意見の持ち主と罵倒しあい、その挙げ句つかみ合いの乱闘に至るという事態も起きてしまった。

さらに、直接行動を起こしてまで『門』の維持を主張した存在があった。

国際的に協力して特地への移民、開発を推し進めるべきだという主張をする団体である。彼らは銀座に押し掛けると『門』を閉ざすなというプラカードを掲げて銀座駐屯地の周りを練り歩いた。手を繋いで完全に包囲する人の輪なる行動まで起こそうとしたが、これは通行の邪魔になるので警察によって排除されている。

マイクを向けられた彼らは語る。「日本には侵略者としての歴史がある。これに対して新興国の多くは侵略の被害を受けたことがあり、それ故このような時にどのように振る舞うべきかをわきま

えている。従って日本は特地に対しては独善的に動くことなく、新興国の意見を汲むべきだ」と。

これに歩調を合わせるように中国政府も声明を発表した。

「日本が帝国に対して銀座事件の際の損害について賠償を請求する権利を持つのと同様に、我が国も、帝国に対して賠償請求をする権利を有している。銀座事件の際に、我が中国国民も観光客として銀座に滞在していたからである。我が国も帝国政府と直接交渉してその賠償を得たい。これは中国人民にとっての核心的利益であり、この請求権の行使を妨害する行為に我が政府は断固反対する。もし、日本政府が『門』を閉じて帝国との交渉を妨害するのならば、日本政府が帝国に代わって、賠償支払いの義務を負うものと考える」

当然の事ながら、日本政府の答えは「おといきやがれ」というものであった。

正確には「我が国は中国政府が、帝国政府と交渉することを妨害する意志はない。だが、それを仲介する義務もない。交渉をしたければすればいいし、帝国に戦争を仕掛けたければ仕掛ければいい。ただし日本を経由せずに、直接どうぞ。『門』の問題は完全にこちらの国内問題である」と答えた。

「どうやって直接交渉しろと？」

テレビ番組に出演した中国人ジャーナリスト達は言葉激しく叫んだ。

日本人コメンテーターは応じて語る。

「北京から、大声で叫んでみたらどう？　次元の壁を超えて伝わるかもよ。少なくとも、行き来するために日本が通路を貸すことはないし、手助けをする義務もないよね」

このように議論が百出する中で、不可思議なことに財界は沈黙を保っていた。
最も強行に、閉門反対の声を上げると思われたのに、事態を静観する態度を示したのである。
そしてこの態度は、欧米諸国が示した態度と同じであった。そのため、兜町周辺では「日本政府は『門』を開く方法を知っているのだ。それをほのめかされたからこそ、各国や、各企業のトップは反対の声を上げないのだ」という噂が流れ、その度に株価は乱高下を繰り返すこととなった。
記者達は噂の真偽を確かめようと大臣や総理にマイクを向けた。
「総理！　日本政府が『門』を開く技術を手に入れたというのは本当でしょうか？」
森田はニヤリと笑うと唇をゆがめて答えた。
「もし、本当にそんな技術が日本の手に入ったなら、すごいことですよね。そうなったらいいと思いますよ」
「では、その噂は嘘ですか？」
「残念だけど、日本にはまだそんな技術はありません。ホントですよ」
確かに、森田は嘘を吐いてはいない。
『門』を開く方法を手に入れたのはレレイであって日本政府ではないからだ。もし、記者が「『門』を開く能力のある者を知っているか？」あるいは「それと協力関係にあるか？」と問うたなら、腹芸の苦手な森田は答えを詰まらせるか、嘘を付く羽目になって馬脚を現したはずだ。だがそんな質問は、真実を知っていて初めて出来ることだ。だからこそ、森田は余裕を持って記者の追及を躱す

ことが出来たのである。

「では、ミスターカノウ……特地への『門』を開く技術を日本が得たという情報は、嘘に過ぎないと言うのだね？」

「そうです、デュレル大統領閣下。それは技術と呼ぶにはいささか語弊があります。これは奇跡か、あるいは個人の持つ特殊な能力と呼ぶべきモノです。今の段階では誰にでも出来るというものではありません。我々に出来ることは、能力の持ち主に力を貸して欲しいと頼むことだけです」

「どういうことかね？　もう少し説明して欲しい」

「特地にはもともと『門』を開く能力の持ち主がおりました。だからこそ、我が国は……銀座は襲われたのです。もちろん『門』を開けたその存在は、帝国に日本を攻めさせるつもりはなかったのでしょうけれど。要するに、帝国がそれを利用したのです。我が国は、あちこちで発生している異変が災害に至るのを防ぐために『門』を一旦閉じたいと考えています。これも『門』の仕組みを理解して閉じると言うよりは、『門』を維持するために帝国によって作られた維持装置を破壊するだけです」

「当然、その『門』を開く能力の持ち主を紹介してくれるんだろうね？　特殊な能力を、誰にでも仕える技術へと高めるため研究を始めるべきだ」

「銀座に通じる『門』を開いたのは、ハーディという名の神様だそうですよ」

嘉納は、事実を語った。ただし全てではない。

「神？　気をつけたまえ、合衆国大統領たる私が、神という呼称を用いて呼びかけて良いのは『主』のみだ」

ちなみにイスラム教の神様もまた大統領が神様と呼ぶ相手と、同一人物である。名前が異なるだけだ。

「そうでした。大統領閣下は、就任式の際に聖書に手を置いて、唯一絶対の神に向けて宣誓されるのでしたな？」

「そうだ。我が国は信仰の自由を保障してこそいるが、何事にも建前と本音というモノがある。それを無視して、神という呼称を安易に用いられては対処に困る」

アメリカでは、キリスト教会の勢力は政治的に無視することが出来ないほどに強い。学校では進化論でなく、旧約聖書に描かれた天地創造を教えろと言う非科学的な意見がまかり通り裁判が起こされるほどなのだ。

「ですが、そうなりますといささか困ったことになりませんか？　実際に、ハーディという神は特地におわすのですから。その存在を認めないと公言しながら、好意を得ようというのはいささか難しいと思われます。特に相手は女神だそうですから、女性というのは機嫌をそこねるとなにかと大変です」

「君は私に棄教しろとでも言うのかね？」

「それは閣下のご自由かと……我が国は八百万柱の神々が住まう国です。正月は神社に参拝し、葬式には坊さんを呼び、結婚式では神父の前で愛を誓い、最近ではハロウィンも祭りとして楽しむ無節操な……もとい、信仰に寛容な人間達の集まりです。どこのどんな神様だろうとその存在を神として認めることができるのです。特地にどんな神様がいようと、いっこうに構いません。もしかすると、我が国に『門』が開かれたのはそんなことが理由かも知れませんね」

「カノウ。確か君は、キリスト教徒だったのではないかね？」

「とは言え、日本人ですから」

「ふうっ……ちなみにそのハーディという存在は、黒いフリルまみれの衣装をまとったあの九百歳過ぎを自称する少女と同じように、姿があって口が利けるのかね？」

「いいえ。すでに姿は見えず、言葉を交わすには仲介者を立てる必要のある存在となっているようです。ご自慢の特殊部隊を特地に入れても誘拐……いやいや、強引にご招待するというのは無理だと思いますよ」

返事が返ってくるのに三十秒近くかかった。そこに大統領の本音が現れている。

「忌々しい話だな。まぁいい、このままではリスクが高すぎて投資できないし、一度『門』を閉じれば、アポ何とかも、空間の歪みも治まるのだろ？　わかった、日本が独り占めするわけではないと言うのなら、我慢できる。欲に駆られて世界を危機に陥れたと言われるわけにはいかないからな。特地からギンザへの『門』が再度開かれる時が来るのを気長に待つことにしよう」

「ご理解いただけて幸いです」
「ああ。君が総理になる時を待っているよ、カノウ」
こうしてホワイトハウスとの電話は切られた。
嘉納は、深々としたため息をつくと、心底疲労した様子で机に突っ伏した。そんな外務大臣に秘書官がおそるおそる声をかける。
「ディレル大統領は納得しましたか？」
「んなわきゃないだろ？　物わかりの良いふりしてこっちの懐に手を突っ込んでくるに決まってるぜ。警戒を厳重にさせなきゃならん」
「大臣……インドの首相からも、お電話が入っていますが」
「今度はインドかよ。普通は総理の森田にかけるんじゃないのか？」
「総理は総理で、あちこちから電話がかかってきて説明に追われているようです。主に財界からで」
「……そう言うことか。しょうがねぇなぁ……繋いでくれ」
そういうと嘉納はうんざりした表情で受話器をとった。

特地問題対策担当の副大臣、白百合（しらゆり）は目の前に現れた帝国正統政府の使節を見て、眩暈を感じた。口を開けたまましばらく閉じることも出来なかったほどである。
「こ、皇帝陛下はいったい何を考えてらっしゃるのでしょうか？」

失礼とは承知しながらも、思わず尋ねずにいられない。

もちろん、当の相手から「失礼な！」と抗議されかねない発言である。だが、皇帝の信任状をもって現れた使節とその一行は、白百合の失礼を咎めることもなく、「お気持ちは理解できますわ。だって、わたくしも自分の置かれている状況を受け容れがたく思っているんですもの」と答えた。

「それで、いったい何があったのですか？　シェリーさん」

「実は、このたびテュエリ家の家督の相続が正式に認められました」

「それは、おめでとうございます……と申し上げても良いのかしら？」

家督相続は、シェリーの両親に起きた不幸が前提なので白百合も気を遣った。

「もちろんですわ。お祝いの言葉、ありがとうございます。帝都のお屋敷も、何もかも一切合切を失ってしまい、継ぐべき家財など実質的には何もないのですが、一応我が家も伝統有る帝国貴族に名を連ねておりますので、その名跡が失われてしまうのも勿体ないとの陛下のお言葉を賜りまして、このような仕儀となりました」

「仕儀」という単語は、普通は思わしくない、良くない方面に事態が進んだ時に用いられる。これを聞いた白百合は、菅原が教え間違ったかなと考えた。だが、使節として現れた相手の言葉を、安易に訂正してしまうのも憚られる。それにこれはシェリー流の諧謔（かいぎゃく）かも知れないのだ。

「さらに、陛下は我が家を伯爵位に陞爵（しょうしゃく）させて下さりました。嫁入りの持参金代わりだそうですわ」

シェリーは物憂げにため息をついて見せた。

「じ、持参金ですか？」

「はい、名前ばっかりで実質のない爵位など、スガワラ様が果たして喜んで下さるかどうかはわかりませんけれど。ですが、こうなってしまいますと帝国正統政府内での序列と申しますか、立場みたいなものの入れ替わりが起きてしまいました。しかも、使節の格式なども考えると、伯爵位くらいないと相応しくないとかいろいろな都合とか思惑とかの関係から……子供にはわからない複雑怪奇ないろいろが作用いたしまして、とりあえずこの度の交渉における、名目上の代表をわたくしがお引き受けしなければならなくなってしまったのですわ」

要するに、いろいろあったということである。

白百合はため息混じりに「大変ですね」と頷いた。そして、大変なのは子供と交渉しなければならない自分だと思い返した。

「もう、めまぐるしいばかりで正直参っております。わたくしは非才にして若輩ですので、実務はこうして一緒に来て下さっている、キケロ様や、プルコニウス様達にお任せしたいと思います。なので、シラユリ閣下もわたくしをそのように扱ってくださいませ」

シェリーはそう言って、左右にずらっと列ぶ帝国正統政府の議員達に顔を向けた。

皆、講和派の有力貴族達で外交分野に実力を認められている。これまでの講和会議にも出席していたから、そのほとんどが顔見知りだ。

「そうですか。かしこまりましたわ、伯爵夫人閣下。賢くていらっしゃいますね」

シェリーは、白百合からそう言われて顔を耳まで真っ赤にした。
「そんな持ち上げないでくださいませ。お恥ずかしいですわ」
「わかりました。それで、ご用件はなんでしょう？」
白百合は、シェリーの隣にいたプルコニウスに向けて尋ねた。わかっていても、それをこちらから切り出したりしないのが外交上の戦術である。誰が答えるかで実質的な責任者を見つけようという意図もそこにはある。
だが、予想に反して口を開いて答えたのはシェリーだった。
「先だって、スガワラ様を通じてお願い申し上げましたゾルザル派討伐の件ですわ。ニホン政府のご協力をいただけますでしょうか？」
「ご、ご協力するのは吝かではありませんが、それが出来るのは講和を締結してからとなります。それで交渉の方はどうなりますか？　この場で進めてもよろしいのですか？」
「はい。講和交渉もずいぶんと長くやって、お互いの言い分も、条件もほぼ出尽くしたと聞き及んでいます。懸案となっている、どうやってそれを実現するかを話し合って、そろそろ講和を締結してしまいましょう」
あまりにも簡単に言うので、白百合は我が耳を疑った。
「……シェ、シェリーさん？」
「何でしょうかシラユリ閣下」

「貴女は今し方、ご自分は名目上の代表だから、交渉の実務は周りの方にお任せになるとおっしゃって……」

「はい、その通りのしがない名目上の代表ですわ。とは言え、公式の場で何も喋らなかったとなりますと、何を遊んでいるのかと冥府の父からお叱りを被ってしまいますから、あらかじめお話することをお稽古して参りましたのです」

そう言ってシェリーはまた左右を省みた。するとキケロは皮肉そうに頬を引きつらせた。折角の活躍の場が奪われたという気持ちがそのまま顔に出ている。それを口にしては大人げないと思われるので、今は我慢しているという様子である。

「……なるほど。では、シェリーさんのお言葉は、ここに来てらっしゃる皆さんと打ち合わせ済みのことで、正式なものだと理解してよろしいのですね？」

「はい、そうですわ……わたくしは、いま、帝国正統政府の、全権を委任された者として、ここにいるのです」

シェリーは、そう念を押すようにしながら白百合を見た。

その瞬間、白百合の目には小さなはずの少女が、まるで巨大な何かのように感じられた。

疲れてるのかしらと目を軽く擦って、目の前に座っているのが小さな少女であることを確認する。

「わたくしが間違いを口にしたら、きっとここにいる方々が即座に訂正して下さるでしょう」

「そうですか。ならば話し合いを進めましょう」

白百合は、もっと自分の直感を信じるべきだったかも知れない。あるいはイタリカに送った菅原を呼び戻して、ここに同席させるべきだった。

目の前にいる者が、小さな子供の姿をしながらも、以前とは違う何かに変貌していることを理解しているのは菅原だけだったからである。白百合達では外見に惑わされて、自分の本能が盛んに鳴らす警鐘を素直に受け止められない。少女に見据えられて流れる、背筋の冷たい汗の理由を最後まで理解できなかったのである。

結局、その後の交渉は皇帝が予想したような形になった。

白百合や、手練れの外交官達も、シェリーを相手に強い要求をすることが出来なかったのだ。

「ニホン国の皆さんに見捨てられたら、わたくし達はゾルザル様に皆殺しにされてしまいます。わたくし達ばかりでなく、付き従ってくれた民や多くの方々が、帝都で起きたあの暴風に曝されることを考えると、わたくしはみなさまのご厚情にお縋りするしかありません。お願いです、どうぞ『門』を閉じないで下さいませ」

こんな風に可憐な少女から両手を合わせられ縋るような目を向けられて、突き放すことが出来る者など果たしているのだろうか？

こうして、ゾルザル討伐の協力を早々に約束させられてしまう。そしてその後、口をひらいたキケロやプルコニウスから、「そのためにも講和条約の締結が必要だ」という論法で話が進められ、実現させるのが難しい条件の緩和を求められてしまったのである。

日本側が鋭く突っ込んだ時などは、シェリーが前に出てきて「それは、予習してませんでした」と申し訳なさげに返答の先延ばしを請い、さらに賠償の支払いについても「今の正統政府にはお金がありません。賠償金のお支払いはしますが、帝国を取り戻すまでどうぞご猶予を下さいませ」と泣きそうな顔をして言い、「その代わりとして、ご要望の有りました資源の利権や、アルヌス周辺の割譲は、異存有りませんのでどうぞお納め下さい」と、今初めて譲歩したかのごとく言うのだから反則だと叫びたくなる。

日本人は和を重んじる。これは皆がまとまるためなら、少しのことなら我慢する、我慢させるという性格として表れる。そして身内には「事を荒立たせるな」という態度をとり、譲る態度を度量が深いともてはやす。だが、それは外交交渉においては、握手の時につま先を踏まれると、一歩でも二歩でも退いてしまうという弱点となってしまう。そしてその少しの譲歩が累積して、最終的には大きな損を押しつけられるという事態になってしまうのである。

日本側が求めた、皇帝が来日して謝罪し、戦争責任を取るということについても、「モルト陛下は、すでに病床の寝たきりのおじいちゃまですわ。ニホンどころか、このアルヌスに参りますのも難しいと思います」と憂鬱げな表情で言われてしまえば無理も言えない。

「なので講和条約締結の際に皇太女殿下がニホンに伺って、遺憾の意を表明する形ではいかがでしょうか？」と現実的なところで落ち着くこととなった。

そして事態が収束したら速やかにピニャに譲位することで、皇帝は責任をとったものとすることとされた。

とは言え日本側も一方的に譲歩を強いられたわけではない。条件を上積みしようとしていたのを挫かれただけで日本側は得るべき物を充分に得ていた。従って講和の内容は充分に納得の行くものと言える。ただ、直接交渉に携わった者にとっては、どうにも釈然とできない「やられてしまった」という気分が残ったのだ。

なんとなしに少女の存在が不愉快であった。さらに少女は、追い打ちをかけるようにこんなことを言ったからなおさらである。

「拉致されていた方も、この度、無事に戻られたと伺っております。ゾルザル様ってホントに悪い方ですわ。是非、こてんぱんにやっつけちゃって下さいまし」

それでいて「これでいいですか？」と、まるで教師の講評を待つ生徒のような顔つきで首を竦めるのだから、白百合達は悪感情を抱くことも出来なかったのである。

＊　＊

さて、その頃。

ピニャはどさくさ紛れに日本に滞在し芸術に耽溺する日々を送っていた。

「素晴らしい！」
ページの一枚一枚を捲るたびに、感嘆の声を上げる。
好きこそ物の哀れなりとも言う。日本のアニメやマンガを読みたいからと、日本語を習得してしまう外国人青少年が数多いるように、ピニャもまた同人誌を読みたいばかりに、日本語の文章をかなりの部分まで読解できるようになった一人であった。ただし会話は片言でしかない。
「くっ……ここでこう来るか。漢同士の愛とは斯くあるべきよな」
「お～い、ピニャさん。手を休めないでよ～」
梨紗の家に滞在して既に二週間になっている。ここでは間近に迫った同人誌フリーマーケットに備え、梨紗とその友人達が原稿の仕上げ、印刷発注、そしてコピー本の製本作業に追われていた。その多忙さは居合わせた客に過ぎないピニャですら、当然のように使役されてしまう程で、帝国の皇女は期せずして「彼女が言うところの芸術」制作の一端を、身をもって体験することとなった。
「こ、このメルクリウス、フェルナン×クーはけしからん、大変にけしからん！」
製本作業を再開したピニャは、そろそろ規制されそうな表現に嬌声を上げた。
「黙れ！（笑）」
「煩い！（笑）」
「好き者め！（笑）」
カリカリとケント紙を削るような音を立ててペンを走らせている腐女子達は、顔を上げることも

ないままに笑いの成分を含んだ罵声を飛ばした。萌え上がった読者の嬌声を耳にして、心をくすぐられるような感覚を得ない作者はどこにもいないのだ。

だがピニャは、傷ついたかのように口を開けたり閉じたりした。微妙なニュアンスを含んだやりとりは未だに難しくて、耳に入った言葉をそのままに受け取ってしまうのである。

ペンタブレットを握った梨紗は、モニターに押し付けてるんじゃないかと言うほどに、顔を近づけている。そして、そのままの姿で皆がした発言の本旨を翻訳した。

「どこまで好きなのよ、ピニャさんは」

「そうそう」

「いっそのこと、こっちに住んじゃいなよ」

「そうそう、そうしなよ」

三日連続の徹夜の果てに眠っている腐女子の一人が、墓穴から這い出るゾンビのごとく布団の中から腕を、続いて顔を出して賛同の声を上げた。髪は寝癖でモサモサ、まだ眠りから覚めきっていないのか、その表情は未だに夢魔にとりつかれていた。

するとピニャは言い返した。

「いやいや、妾こそ皆を招請したい。帝国に移住されてはいかがか？」

「え～～！」

「誘いは嬉しいけど、考えちゃうよね」

「うん。特地には行ってみたいって思うけど、住むとなるとね……『門』って閉じないといけなくなるんでしょ？」
「帰って来れないっていうのはちょっとねぇ」
皆の言葉が、この時点での世間一般の理解を現していた。マスコミは、『門』を閉じる必要はない。各地で起きている異変は『門』が原因ではないという宣伝をことあるごとに繰り広げているが、一旦広まった『門』に原因があるという説は、根強く人々に信じられているのだ。
するとピニャはこれは秘密なのだがと言って声を潜めた。
「実は、『門』は閉ざしたとしても、また開くことは可能なのだ」
「えっ、その噂もホントだったの？」
「なら……行っても良いかもね」
「ただ、時間的なズレが生じてしまうのは確からしい……向こうで翌日のつもりでも、『門』を開いたらこちらでは一年たっていたとか、下手すると十年くらい時間が進んでいるということもあるらしい」
「そ、そうなの？」
腐女子達は一斉に手を止めた。
「十年単位の時間のズレが生じれば、こちらに残した家族とは生き別れも同然だ。皆ともこうして気安く語り合える仲になれたが、待っていてくれと願うには大きすぎる時の流れでもあるな」

「そ、そうよねぇ」
十年という時の流れはそれほどに大きいのだ。皆の間にやっぱり無理だという雰囲気が満ちた。
「だが逆に考えれば皆の作品を十年分、一気に楽しむことが出来ることが期待できるな。そう考えると有りがたいことかも知れない」
「そっ……それって羨ましいかも」
そんなやりとりをしていると、突然ドアが叩かれて、返事も待たずにがばっと開けられた。
「殿下はここにおいでか⁉」
忙しげに呼びかけてきたのはハミルトンである。その背後には黒服をまとった男達の姿も見える。たぶん警護の私服警官だろう。
「またハミルトン、お前か」
ピニャは、呆れたような声を上げた。だが彼女の秘書官は懇願するように言った。
「殿下。お願いです、お戻り下さい」
「妾は嫌だと言ったはずだ。面倒くさい」
「ですが、殿下は皇太女であられますから」
「嫌だ。それに妾は、皇太女などという面倒な役柄を引き受けておらぬ」
「ですが陛下より任ぜられました……」
「ああ、煩い！　妾は今忙しいのだ。見ろ、そなたのせいで皆が手を止めてしまったではないか。

イタリカには、妾抜きでなんとかしろと申し伝えるがよい」
「で、殿下」
忠功著しいハミルトンの懇願だったが、ピニャの態度は冷たかった。
「妾は、政治にはもう関わらない。妾が政に関わって、良いことがあった試しがない。妾にも、帝国にもな」
「しかし、実際に皇太女たる殿下がこうしてここにおわすのに、講和条約の締結の席にお出にならないとなりますとニホン側も、侮辱と受け取るかも知れません……」
「妾の知ったことではないわ」
すると、ハミルトンの背後から声をかける者がいた。
「ハミルトン様、道をあけてくださいまし。ピニャ様とは、わたくしが直接お話をいたします」
「はい」と答えたハミルトンは、狭いアパートの玄関から一度出ると声の主に道を譲った。
「おや、そなたは？」
ピニャは突然現れた童女を見て眉を寄せた。この娘は確かテュエリ家の令嬢。それがなんで今、日本にいるのか？
「皇太女殿下。お久しぶりにお目もじ申し上げます。シェリーでございます」
「久しいな。だが、何故そなたがここに？　騎士団の入団希望なら、イタリカにいるボーゼスに話を通すがよい」

「入団希望ではございません」
「では、妾に何の用か？」
「今日は、殿下にお戻り願うためにまかり越しました」
「何故そなたのような子供がそのようなことを？」
「折角講和の条件がまとまりましたのに、殿下の我が儘のために調印できないからですわ」
「まるで、そなたが話をまとめたような物言いだな」
「殿下。実はその通りなのです」
ハミルトンが横から言葉を差し挟んだ。
「なんだと？」
「こちらのシェリー嬢、いえ、テュエリ伯爵夫人がニホン側と話をまとめたのです」
「そうか……」ピニャはそれを聞いてふっと鼻で笑った。「父上も、いよいよなりふり構ってられなくなったということだな。譲歩しまくれば、どんなに難しい交渉でもまとまるからな。そして子供の言ったことだからと後で難癖を付けて約束を反故にする、そんなつもりなのだろう。阿漕なやり方だ」
だがシェリーはお腹を抱えてころころと笑った。
「陛下がわたくしを使節に選んだのは、話し合いの難しいところはほぼ済んでいたからでしかありませんわ。もちろん、ピニャ様がお考えになっているような意図が、陛下の胸中にないとは申せま

せんが、おそらくそうはならないでしょう」
「子供の使いという言葉を体現したようなそなたに何がわかる？」
「例え子供とはいえ、わたくしも陛下から正式な委嘱を受けた使節ですわ。ニホン側との交渉の結果が、帝国にとって悪いものでなければ、陛下も無碍にはなさらないはず。なので頑張ってみました」
ハミルトンが補足した。
「殿下。帝国にとって、かなりの好条件で話がまとまりました。現在は、ゾルザル殿下排除のための軍事行動についての実務協議に入っています」
「あ、兄様に対してニホンと共同で戦うというのか？」
イタリカを見てみれば、今でも共同作戦を行っていると言える状況である。
フォルマル伯爵家という存在を挟むことによってそれは実現されていた。だが逆に言えばそれが精一杯であった。公式には交戦中である日本と帝国が、手を携えて戦うということはあり得ないのだ。それだけに、ゾルザルと戦うために軍事行動を共同して起こすということは、昨日の敵は今日の友という格言を実現して見せる行為なだけに、ピニャにも想像できない事態だった。
「そのための講和ですわ」
シェリーの言葉にピニャは驚きを隠そうとしなかった。
「驚いたな……ニホンが本気になれば、兄様とてひとたまりもあるまい」
イタリカを守って盗賊と戦っていた時に見た、地獄にも似た殺戮の風景がピニャの目に思い浮か

んだ。ゾルザル派とは言え、皆、帝国軍の兵士達なのだ。それがあの蹂躙とも呼ぶべき攻撃を受けることになる。反撃の余地すら与えられない、あの一方的で、容赦のない絶望的な攻撃を。

ピニャは、みぞおちのあたりに胃の縮まるような苦痛を感じた。帝国の将来を憂う時に、決まって感じる、既に慣れ親しんだ感触だ。

「いかがでしょうか殿下。お戻りいただけますか？」

顔色を窺うようなハミルトンの言葉。だが、ピニャは「いや、妾は政にはかかわらぬと決めたのだ」と顔を背けた。

ハミルトンが叫ぶ。

「いったい何故!?　殿下が女帝として帝国をその手に掌握なさる好機ではありませんか！」

するとピニャは、キッと睨むような視線を秘書官に返した。

「妾は帝国を欲してなどおらぬっ！」

「な、何を今さらおっしゃるのですか？」

「なぁハミルトン、この戦争が始まってから、妾ほど帝国のことを考えて走り回った者はそうはおらぬと自負しているが、間違っているか？」

「いえ。おそらく殿下がもっとも頑張られたはずです」

「であろ？　妾は、必死になって帝国のために働いた。帝国を守ろうとして、悩んで、苦しんで、状況を打開するために這いずりまわるようにして頑張った。恥辱も屈辱も堪え忍んだ。なのに、そ

れが駄目だと否定されたのだ。皆が妾を吊し上げ、思い通りにならない苛立ちを浴びせたのだ。妾はもう、ほとほと嫌になった。あんな思いをするぐらいなら、おつむの中身が空っぽのふりして、政略結婚の具となって辺境の王室にでも嫁入りしてた方がマシだった！」

「で、殿下……」

「なぁ、ハミルトン。あの時、妾を守ってくれたのはそなただけだった。そなたは、苦しくなかったのか？　切なくならなかったか？」

「あの時の私は、殿下をお守りしたい一心だけでした」

「妾も帝国を守りたい一心で頑張った。なのに、その帝国が妾を要らないと言ったのだぞ！　あの時の妾の気持ちがわかるか？　妾を庇って言葉の矢を総身で受け止めてくれたそなたなら、庇っていたはずの相手から罵倒されたらどんな気持ちになるか想像できるであろう？　妾は後ろから刺されたような気分だったぞ」

「元老院議員の全員がそのように思っているわけではありません。主戦論派の議員達だけがそう言っていただけです。講和派は殿下を要らないなどとは思っていません」

「だが残りの半分はどうか？　例え政治的に意見が異なろうとも、妾の努力や気持ちぐらいは理解してくれると思っていたのに」

例え政敵であろうとも、献身と努力は認めてくれてもいいはずだとピニャは言う。それはピニャの理想主義的な側面が言わせる甘えに近いものかもしれない。芝居を見て騎士団設立を思いついて

しまうような彼女だからこそのものだろう。だが、そうであるが故に、裏切られたときの挫折感や、絶望も大きくなってしまうのだ。

ピニャは美しい紅髪を掻き上げると額を押さえるように抱えた。

「妾は皆から見捨てられてしまった。ディアボ兄様に見捨てられ、空を去っていくボーゼスを仰ぎ見た時、どんな気持ちになったと思う？　あの牢獄のような皇宮から妾達を救い出してくれたのは誰だった？　妾に手を差し伸べてくれたのは、結局のところイタミ殿だけだったではないか！」

「殿下。あの時、みんな自分の命を守るだけで精一杯だったのです」

「それで納得せよと？　だから実の兄との殺し合いの先頭に立てと？　嫌だ、もう嫌だ！　なあハミルトン、妾はもう充分に戦ったと思わぬか？　妾が戦っていた時、皆はのほほんと遊んでいたではないか。ならば今度は、妾が遊んでもいいではないか!?」

こう言われてしまうとハミルトンも返す言葉を見つけることは出来なかった。

守ろうとした相手から非難されたり、否定されたりすることこそ、傷つきながら戦っている者の気持ちをすり減らすものはないからである。

戦う者に、日々味わう辛さや苦しさを乗り越えさせるのは、湧き上がって来る「何のためにこんな思いをしているのか」という疑問をねじ伏せる明確な回答である。誰かのために。あるいは自分のために……それが幼稚なものであっても、下卑た欲望からでもいい。浅薄な見栄からでもよい。とにかく自分を支える何かが必要なのだ。

だが、背後からの非難侮辱はそれを揺らがせる。意欲そのものを奪うのだ。
裏切られ、傷ついた自分にはもう戦う義務はない。皇族としての義理はもう充分に果たした。だから後は栄華に浸る。それの何が悪い？　というピニャの言い分は、ハミルトンには理解できてしまった。それだけの説得力があったのだ。
理解してしまった以上、ハミルトンにピニャを戦場に引き出すような説得はできなかった。
だが、ここにいるのはハミルトンだけではない。
小さな女の子が一歩前に進んだ。
「殿下お一人だけが、辛い思いをなさっていたような事を言わないで下さいまし」
不幸較べの開始にも等しい論駁を受けたピニャは、「何だと？」とステロタイプな反応を示した。もっと酷い目にあった者がいる、というお定まりの発言を予想して、それを反射的にねじ伏せるつもりで心理的に身構えたのだ。
だが、少女の言葉はピニャが身構えた方向の斜め上を行った。
「殿下が味わわれた苦しみと比較しようとは思いませんが、あの時は皆が酷い目にあって、多くのものをなくしたことはお認めください」
ピニャは振りかざした矛の下ろし場所を奪われたような気分となった。そして「それがどうしたと言うのか？」とシェリーの言葉を耳に入れる姿勢を見せた。それこそがシェリーの狙いだと、気が付くこともなく。

戦いとは、自分の立場や我が方の考えの正当性を相手に理解させ、納得させる行為である。言葉だけで理解させるか、問答無用に力ずくで不承不承理解させるかの違いはあるが、「相手の立場を理解した側が、屈服する」のだ。

太平洋戦争に負けた日本人は、勝った側の理屈を押し付けられその正しさを理解することを強いられた。こちらが主張した正義は『帝国主義』と『侵略』というフィルターを被せられて、そのことごとくが悪であると否定された。もちろん帝国主義や侵略が今の価値観に照らし合わせて非道であることは述べるまでもないことだ。だが、それによって他のことまで全て、ありとあらゆることの全てが非の色によって染められたのだ。

言葉による戦いの要諦は、相手にこちらの言葉をどうやって聞かせるかにある。情に訴え理を尽くすにも、言葉を聞かせないことには始まらない。

ピニャも騎士団の創設者である。戦闘の専門家とも言える立場であるが、言葉による戦いだけは不得手だった。いや、戦闘の専門家であったが故に、言葉による戦いを軽んじていた。戦闘とは形を変えた外交、つまり政治の一部であることは学んでいたが、政治も外交も、結局の所、相手にこちらの立場を理解させる『交渉』だということを、全く理解していなかった。

故に、この場での戦いはピニャにとって最初から不利な形で展開することとなった。

「その様子ではご存じないようですわね？　ボーゼス様はピニャ様をお救いするために、皇城に向かって単騎で突撃なされたそうですわ」

シェリーのピニャ攻略は、頑なな態度の根拠となる出来事を否定するところから始まった。
ピニャが耳にして、態度を改めないわけにはいかない話題をきっかけにするという狡猾さだった。
ピニャは「なんだと、本当か？」と事実を確かめるためにハミルトンに顔を向ける。彼女の秘書官は無言でこれに頷いた。
「何故、報告しなかった？」
「ボーゼスは、失敗したけど努力はいたしましたなどという言い訳をする女ではありません。実際、殿下にまで手が届かなかった以上、見捨てたも同然。故に顔も見せられないと恥じ入って……」
ピニャは深いため息をついた。
「そうだったのか。あの時のボーゼスは……そう言うことだったのか」
あれ以来、ピニャはボーゼス達と顔を合わせていない。
ピニャがイタリカにいるのは寸刻も耐えられないと、正統政府を飛び出してしまったからだ。
負傷したボーゼスやヴィフィータの二人が、治療がおわって現場に復帰した時には、すでにピニャはイタリカにいなかったのだ。
「わたくしのお父様やお母様はいなくなってしまいました。それもこれもみんな、殿下のお兄様のせいです」
「妾の……か？」
ゾルザルはピニャ「の」兄である。とは言え、「の」を強調しないで欲しいとピニャは思う。そ

う言われると、まるでゾルザルのしたことは、自分にも責任があるかのような錯覚に陥るからだ。しかし、ここまで来ればシェリーの話の展開方向は見える。ゾルザルが、ピニャの兄ということを強調して責任感を沸き立たせ、条約締結の儀式に参列しろと言いたいに違いない。

所詮は子供の浅知恵。その手に乗ってやるものかとピニャは身構えた。

「言って置くが、妾は兄様とは無関係だぞ」

すると、シェリーはくすくすと笑い、「そうですか、では安心いたしましたわ」と安堵の表情を見せた。これまた予想とは異なった反応だったため、ピニャは混乱した。

「な、何故か？」

「わたくしは、ゾルザルさまに復讐を誓っているのですわ。あの方には死んでいただこうと思っています」

シェリーの率直な言いようにピニャは「な……」と言葉に詰まった。

それは帝国貴族ならば口にすることも憚られるものだった。講和派の者達がピニャを旗印に押し立てようとするのも、皇族殺しの罪をピニャに押し付けるためと言い換えても良いくらいなのである。

「たった今、関係がないとおっしゃったのですから、別に構わないですわよね、ピニャ殿下？」

三日月型に唇をゆがめるシェリーの相貌は「ほほほ」と言うより、「ケケケ」という笑い声が漏れ聞こえそうな、ぞっとする笑みに彩られていた。

ピニャは、思わず仰け反った。

「だ……だが、どうやって兄様を討つ？」
「もちろん、強い者には、より強い者をぶつけますわ」
「だから講和条約ということか」
「はい、ニホンの手を借りますわ。そのように話を進めております」
「し、しかし、それでは……」
「ピニャ様。騎士団の方々は、掃除夫のみなさんとの戦いでいっぱい亡くなりました。あの方達は翡翠宮に逃れたわたくしを守るために戦って傷ついて、斃れていかれたのです。それをゾルザル様は帝国に対する反逆だとおっしゃいました。このままゾルザル様が勝つようなことになれば、ピニャ様の命令に従って、命を落としていった方々は、みんな反逆者にされてしまいます。ピニャ様は、ご自身の騎士や兵士の名誉が貶められて、何とも思われないのですか？」
「いや……何とも思わぬはずがなかろう」
ピニャは苦しげに唇を噛んだ。
「あの方のせいで、まとまる講和もまとまらなくなり、未だに戦争が続いています。あの方は、罪もない方達を巻き添えにする戦い方をして帝国の名誉は地に落ちています。それを殿下は、本当に何とも思わないのですか？」
やはりこみ上げてくるものがあるのか、ピニャは拳をぐっと握り込む。
「……何とも思わぬはずないだろう！」

「ではその思いは、どの方角に向かってらっしゃるのですか？」
「わ、妾は、どこにも向けない。兄様は……妾の兄なのだぞ！」
「ゾルザル様とは無関係だったのではないのですか？」
「お前も妾に、兄様と殺し合えと言うのか？」
結局の所、ピニャは兄と戦うことに抵抗を感じているのだ。
歴史を振り返ってみれば、権力の座を巡って親兄弟が殺し合うなど珍しいことでも何でもないのだが、ピニャはそれを当然とは思っていない。ある意味で、彼女はもっとも普通な感覚を有しているのかも知れない。
「別に殿下に剣をとってお兄様と戦ってくれとは申しません。それは、ニホンの方々にやっていただくことにしますから。あの方達はゾルザル様のやりように、怒り心頭に発してらっしゃいます。でも、政治的な都合があるから我慢してらっしゃるのです。わたくしは、その我慢の枷を取り払ってさしあげます。そうすれば、わたくし達を帝都より救ったあの勢いで、ゾルザル様を退治してくださるでしょう」
「……し、シェリー。お前はいったい……」
何者なのだという問いをピニャは口にする勇気が持てなかった。迂闊に問いかければ、とんでもない答えを耳にすることになりそうで恐ろしかったからだ。
「殿下には多くを望んだりいたしません。いえ、出来れば何もなさらないで下さいませ。儀式の場

で、頭がからっぽな政略結婚用の駒を演じて愛想良く座っていて下さいまし。あとのことは、みいんなわたくしがいたしますので。それならば殿下もよろしいのでしょう？」

二の句の継げないピニャ。蛇に睨まれた蛙がごとくシェリーの迫力に圧倒されていた。

「……」

「では、ピニャ様。参りましょう、どうぞこちらへ」

ピニャはシェリーの差し伸べた手を拒絶することが出来なかった。

07

有職故実という言葉がある。

宮廷や宗教などの堅苦しい儀礼に関わる、いにしえからのしきたりを意味し、多くの場合過去の出来事、すなわち故実を基として発生している。長い年月を経て、実際にどんな出来事があったのかは忘れ去られ、形骸化した儀礼だけがルールや習慣として残るのである。

我々が現在当たり前に常識とみなしていることの多くが、年月の積み重ねによって自然発生的に形を持った。それが権力者なり何かによって採用されたものなのだ。

例えば道路の通行。日本やイギリスでは左側に、アメリカやその他の地域では右側通行となって

いる。それはいったい何故か？

その起源を騎士や武士が主に左側に帯剣していたことを理由とする説がある。すれ違う時に、鞘がぶつからないように、とか、咄嗟に剣を抜く時の手は右手だから、接敵に対応しやすいように道路の左側を進んだなどと言う。

いずれにせよ、法というものがまだ整備されていなかった時代、人々が思考や行動の基準を求めたのは前例、すなわち過去の出来事である。

「昔、こういうことがあったから、こうする」という説明は、多くの人間を納得させる力があり、それは時として国の最高権力者すら縛る力を持っていた。だからこそ、その過去の出来事から遠く離れた今現在でも、「何でこんな事を?」と問いたくなるような儀式や作法が、残っているのである。時には「作法通りに儀式が行われていないから、その取り決めや契約は無効だ」という宣言がまかり通ってしまうほどだ。

それは帝国でも同じであった。

講和条約の締結も文書に署名捺印して終わりというわけにはいかない。そこに至るまでの詳細な作法が取り決められていた。他国に赴いて調印するとなればなおさらで、これに従った進行が効力の発生には必須とされている。

まず、煌びやかな装いをした騎士の集団に警護される馬車の列が街道を進む。

アルヌスの丘をその視界におさめるまでに近づいたのは夕刻近くである。朱に染まった空の下、

太陽に向けて進むことと定められていた。
皇帝の名代を乗せる、細かな彫刻が施された馬車をその傍らで守るのは、白馬に騎乗する女性騎士パナシュ。その装いは、男装の麗人よろしく凛々しさと美しさを兼ね備え、一流の美術家の手による彫刻のような風格があった。
おそらく、その手の趣味が無い女性でも、彼女を見たら胸をときめかせるだろう。警備を指揮する彼女にはそれほどの魅力があるのだ。
パナシュは、馬車に馬を寄せると、そっと語りかけた。
「殿下。いよいよアルヌスが見えて参りました」
「うむ。先触れの使者は誰がよいか？」
「ヴィフィータがよろしいかと」
「では、そのように……」
元々ピニャの騎士団は、実戦よりは典礼儀仗用とみなされる部隊だ。
高雅な雰囲気を纏わせたら比類する集団は他にはない。そんな中から、先触れの使者として選ばれたのがヴィフィータであった。
右手に金糸で織り上げた旗を捧げ、白馬を走らせる彼女の姿は皆を瞠目させる程に美麗である。
普段から放埒で、男の粗野な部分を真似たような言動を好み、めんどくさいといって化粧すらしない彼女からはとても想像できない姿であった。

それだけ、この儀式に真剣に挑んでいるのだ。だが周囲の目には、この儀式に別の勝負を重ね合わせている彼女の意気込みが見えていた。

実のところ、最初この先駆け役に指名されたのはニコラシカである。

このアルヌスに滞在した経験もあるから土地勘があり、日本語も話せる。名誉ある一騎駆けをそつなくこなすには適材であると考えられた。だが、ヴィフィータがそれに異議を唱えた。

準備が進み、日本側からケングンという名をもった男が出てくると知った途端、彼女はそわそわと落ち着きをなくし、あたりを見回したり、訳のわからない言動を乱発させたりしたあげく「このような大役は、隊長級の人間でなければならない」という主張を始めたのである。

「ニコラシカが不足ということではないのだ。ただそのなんだ、格式というか、いろいろが、だな……ケングンと釣り合わないというか……」

豹変とも言える彼女の態度に、周囲は驚きを感じつつも、その心底にある動機を速やかに洞察した。言葉の通じない状況下なのに、期待せずに投げかけた「待っていてくれ」の一言に応えてくれた自衛隊の指揮官に、彼女が一目惚れしたらしいという噂は、すでに騎士団内に広まっていたのだ。

名誉ある任務を奪われる形になるニコラシカも、ヴィフィータにもついに春が来たようですねと、快く任務を譲った。

「ヴィフィータが気にしてるのは、格式じゃなくてもっと別のものなんじゃないの？」

「そうそう。はっきりと自分がやりたいとおっしゃればいいのに」

こうして、くすくすと含み笑いをこぼす皆の後押しを受けて、ヴィフィータは名誉ある先駆けの任に選出されたのである。

隊列から一人離れて先行したヴィフィータは、陸上自衛隊の引いた警戒線で誰何されるたびに、手綱をたくみに操りながら馬の首を巡らせて「我は、皇帝陛下のご名代の到来を告げる者。宜しくお支度あれっ！」と、意味を解さないまま丸暗記した日本語の台詞を暗唱した。

元より、自衛隊側もその到着日時は前もって知らされていて、ピニャ達の出迎え態勢に遺漏はない。実のところ、自衛官による誰何と、それに答える彼女の掛け合いも儀式の一部なのだ。

念入りな打ち合わせとリハーサルが行われ、普段なら完璧な偽装をほどこして、ぱっと見ただけではわからないぐらいに隠蔽している自衛官達も、今日ばかりはクリーニングを終えたばかりで皺一つ無い戦闘服に身を包んで、普通科の隊員であることを示す紅いマフラーを纏うという姿で、これを迎えたのである。

ヴィフィータの白馬は、アルヌスの街に入った。

ここで彼女の前に列んでいたのは、街の住民達である。滅多にない見物とばかりに、仕事の手を止めて道沿いに列んでいた。

組合に隊商護衛として雇われている傭兵達も、可能な限り武具を整えた姿で隊伍を組んで、皇帝の名代を出迎えた。

倉庫、職員用の宿舎がならぶ間を抜けると、いよいよアルヌスの丘を駆け上る。帝国軍や連合諸

王国軍の兵士達が、無謀な突撃で次々と散華した斜面である。
ヴィフィータは、あちこちに残っている戦いの痕を見やりながら、陸上自衛隊特地派遣部隊の隊員達全員が整列して待ち構える丘の頂へと駆け抜けて行った。

「ふん。たかが負けを認めるだけなのに大仰なことだ」
皇帝の名代を見物するために客や接客のウェイトレスが出払って、閑散としている食堂内で、ディアボは杯を傾けながら呟いた。
「負けを認める立場だからこそ、もったいぶりたくなるのが人情と言えるのではありませんか」
ディアボの前に座る侍従のメトメスは、ディアボの独白に応えた。
「うむ。卓見だな」
食堂内では料理長だけが一人残ってカウンターの向こうで皿を磨いていた。
料理長は皆が外に出ているというのに、客席に残っている二人組の男を不思議に思ってか、訝しげな視線をちらちらと向けていた。やがて、堪えきれなくなったのかついに口を開いた。
「お客さんは、見物なさらないんで？」
「下らないことだ。お前はどうなんだ？　どうして見に行かない？」
「嬉しくないからでさあ。みんなだって喜んでるわけじゃありやせんぜ」
「じゃあどうして見に行く？」

店の前では人垣が出来ている。
さらに馬車や馬蹄の音が響いていて、ちょうど目の前をピニャの乗った馬車が通過するところであった。
「みんな不安なんですわ。ほら、『門』を閉じるって話が出ているでしょう？　講和の話がまとまれば、次は『門』をどうするかってことになるんじゃないかって思っているんですよ」
「『門』は、また開くことが出来るんだろ？　そう説明されたって聞いているぞ」
「確かにそうなんですが、実際はどうなんでしょうね？」
「なんだと？　疑っているのか？」
「また開くことが出来るなら、何故、誰がどうやるのかを話さないんですかね？」
「言えない理由があるんだろ？　あれだけの代物を神ならぬ身の上で自在に扱えるようになったとなれば、つけ狙われることもあるだろう。特に、帝国のゾルザルあたりは、なんとかしたいと考えるんじゃないか？」
「だから秘密にするって話はわかります。けどね、それってつまり、そのお方が狙われてどうにかなっちまったら、『門』はもう、どうしようもなくなるって事じゃないんですか？」
「……そうだな？　その通りかも知れない」
「俺は、それが気に入らないんですよ。昔、自分の店をもってたことがあるんですが、店を構える時に不動産屋にここなら客が入るとか、さんざん耳心地の良いことを言って聞かされたもんです。

そのつもりでこっちも有り金はたいて店を開いたんだが、その店が実は厄種でしてね、全く客が寄りつかなかったんですよ。お陰で多額の借金は拵えるわ、女房には逃げられるわ……」
「なるほど。痛い思いをしたことがあるということだな」
「地揺れとか、アポクリフがこれ以上広がらないようにっていう理由もわからないことはありません。けどね、それって今日とか明日に起きる話じゃないでしょう？　もう少しいろいろなことが分かってからで良いはずだ。何しろ、物事ってのは決して思惑通りには進まないもんですからね」
　店を潰してしまったことのある料理長が口にすると、妙に説得力があった。
　ディアボも我が身を振り返って思うことがあるのか「そうだ。その通りだ」と頷いた。
「『門』をどうにか出来るお方に何かあったら、それでもうこのアルヌスの街は終わりになっちまう。俺達は生活できなくなって路頭に迷っちまうんですよ。そして秘密なんてのは漏れるもんだ。俺達ですら誰なのかうすうす分かっている」
「ほう、分かっているのか？」
「ベルナーゴの神殿に行ったお人達のなかで組合と関係があるのは、聖下、テュカさんに、レレイさん、そしてヤオの五人だけだからでさあ。聖下はハーディとは犬猿の仲。ヤオもハーディに三行半を突きつけると言ってたから除外。残りはたった二人です。そのどっちかだ」
「う～む、見事な推論だ」
「組合の上の方々は、もともとコダ村からの避難民だ。万が一のことがあったとしても村に戻れば

そこそこの暮らしはしていけるでしょう。商い部門の連中だって別の場所に行ったって贅沢言わなきゃ、やっていけるはずだ。けどね、このアルヌスだからこそやっていける俺達には、そういう潰しは効かないんです。給仕をやってる亜人連中なんかは、ここがダメならどうなるんでしょうかねぇ？」

「別の街で店を始めるってのはどうなんた？　そこで雇ってやったら？」

「馬鹿言っちゃいけません。こんな良い立地条件は、どこを探したってないんですぜ。ここでさせてもらってるような商売は、他の場所じゃぁ全く望めません」

「なるほどな……だから反対ってことか」

「ええ。だから俺らは不安なんですよ。せめて俺らに何がどうなっているか分かればいいんですが、『門』をどうするかって話すらも、俺たちの手の届かないところで動いている。それが受け容れがたいんです」

ディアボはそれを聞くと料理長に片手を伸ばした。

「よし、わかった。ならば俺を手伝え」

料理長は伸ばされた手を見て眉根を寄せた。

「何をですか？」

「実は、俺も『門』を閉じることに反対の立場なんだ。なぁに悪いようにはしない。なぁそうだろディアボ殿下」

ディアボは、相席している侍従のメトメスを振り返った。ディアボを演じているメトメスは、静かに、威厳を感じさせるよう重々しげに頷いた。

「デ……ディアボ殿下って、帝国の皇子のですか？」

「そうだ。こちらは帝国のディアボ殿下だ。俺は、侍従のメトメス。帝都で起きた騒ぎは知っているな？　俺達はそれから逃れるためにここにやってきたのだ。ここならば帝国軍の者の手は届かないからな」

どう見ても侍従と名乗った者の方が偉そうな態度である。しかし互いの立場を取り替えたディアボは、自分をそのように紹介した。

「俺の調べたところ、ここの組合の幹部連中も日本政府もペテンにひっかかっている。地揺れや、アポクリフと『門』の関係を結びつけたのはゾルザルの陰謀らしい。『門』を自分達の手で閉じさせようとしているのだ。そして『門』を開く力を手に入れたという……確かレレイっていったか？」

メトメスが静かに頷く。

「そのレレイという娘を拐かすか、殺すかしてしまおうと考えているらしいんだ。そうすれば、後はゾルザルの思うがままだ」

「で、でも……ベルナーゴ神殿で、ハーディ自らが降臨して説明したって聞いてますよ」

「問題はそれだ。ハーディという神が真実を語っていると思うか？」

「……神様が嘘を？」

「神様だって嘘をついたっておかしくないだろう？　元々、『門』を開いたのはハーディだ。その理由もなんだかわからん。ただ我々がそれを利用するために魔法装置を設置しただけだ。自分の作った物をヒトに好き勝手されて忌々しく思ったハーディが、『門』を人間の手で閉めさせるために、少しばかり嘘をついたとしても、おかしくも何ともない。違うか？」

否定する材料がないためか料理長は「そうですね」と頷いた。

「『門』を扱う力を授かったのは、本当にレレイさんの方なんですか？」

「そうだ。疑うなら確かめて見るがいい」

カマをかけて見るなどやり方はいろいろあるだろ？　という唆し（そそのか）を受けた料理長は考え込みながら「ええ」と頷いた。

「そうすれば俺が言っていることが、全部正しいって事が分かる」

「そうか……レレイさんが、殺し屋からつけ狙われたって噂があったけど、なるほど、そういうことだったのか」

「つまりそういうことらしい。でだ、俺達はゾルザルと対立しているから意趣返しをしたい。その為には彼奴の目論見をぶっ潰してやるのが一番だと考えている」

ディアボが語ったのは、非常に分かりやすい単純な構図で、それだけに料理長も受け容れやすかった。

「わかりました。レレイさんの件は俺なりに確かめてみます。それが本当だってわかったら手伝わせてもらいやす」

料理長は差しのばされたままになっていたディアボの手を握った。
「その時は頼むぞ。それまでは我々は独自に行動する」
「でも、具体的にはどうやって『門』を閉じるのを防ぐんですか？」
「なあに、組合やニホンや、正統政府が騙されているって言うなら、別の国に真実を告げて手伝って貰えば良いんだ。一時は騒ぎになったり、争いごとに発展したりするだろうが、後で誤解が解ければ、かえって感謝される。お前に頼みたいのもその手伝いだ。レレイという娘を守るには、誰も知らないような安全な場所に隠すのが一番だ。敵を欺くにはまず味方からということで、これは組合の幹部連中にも内緒だ。やり方は手荒かも知れないが、その分だけ意表を突けるから効果的なはずだ」
料理長は、納得したように頷いた。
「ところで、手伝って貰う国ってのは、どこなんですか？」
「『門』の向こうにある国の一つでな」ディアボは再びメトメスを振り返った。「確か、ちゅごくとか言ったか？」
「チュウゴクです。いや、チュウゴクであるぞ、メトメス。使う言葉こそ違うが、ニホンという国と同じ肌の色をしたヒト種が住まうそうだぞ」
侍従メトメスの言葉はどこか浮世離れしていた。だが、それがかえって皇子としての風格を料理長に感じさせた。

アルヌスの丘を登りきったヴィフィータは、自衛隊の隊伍の前で馬の首を巡らせると、「ご名代到着をお知らせするっ!!」と叫んでドサッと落馬した。

死力を尽くして駆け抜け、そのまま力つきて倒れたという風である。が、ここまでがいわゆる儀式で、お芝居であった。今より数百年ほど前にあった、歴史的な出来事をそのまま儀式として再現しているのである。

ヴィフィータを迎えたのは、第四戦闘団団長、健軍(けんぐん)一等陸佐その人だ。

作法に従って、健軍は先触れの使者の傍らに右膝を着いて、ヴィフィータに息があることを確認した。

ちなみに昼間のリハーサルの時、健軍は深々とため息をついて見せた。

「何だって、俺がこんなことをしなきゃならんのだ?」

「それが様式美というものだからです。さあ、駆け寄って」

細かな所作の一部始終を説明するパナシュの言葉に、横たわって意識のないフリをしたヴィフィータは、被せるようにして「オ、オレを抱き上げるのが、嫌だって言うのかよ?」と泣きそうな顔をしながら凄んだ。

ここんところに右膝をついて下さい。左じゃなくて右膝です! ……という指示を受けつつ膝をおろした健軍は「別に嫌だとは言ってないが……何故泣く?」と首を傾げた。「どっか痛めたのか?」

「うるせぇ！　四の五の言わずオレを抱きやがれ！」
思わず、パナシュが通訳に困ってしまう発言をしたヴィフィータは、真っ赤な顔をして慌てて訂正した。
「あ、いや、オレを抱き上げろ！　パナシュ、今の言い間違いだから、絶対に通訳するなよ」
慌てるヴィフィータを見て、意地悪そうに笑むパナシュ。健軍の耳元に口を寄せ、いやらしそうな表情で何やら囁いていた。
健軍の頬と耳とかが急に赤くなる。
「だから、やめろ！　通訳するな。待てケングン！　俺に触るな！」
「触らなきゃ、抱えられないだろう？　儀式なんだ、我慢しろ」
抱き上げられたヴィフィータは、真っ赤な顔で拒否するようにして手足を振り回して暴れた。だが健軍の剛腕は彼女のそんなじたばたですら、その中に包み込んで揺るがない。
ちなみに故実では、運ばれたのは男性、運んだのもその好敵手であった将帥の男だったとか。
「で、この後はどこへ？」
振り返ってどこに運べばいいかと尋ねる健軍に、パナシュは「その先は決まってませんのでどうぞお好きに。もし良かったらケングン殿のベッドにでも、持っていってもかまいません」などと放言して、健軍を大いに困らせた。
「そんな訳にはいかんだろ？」

「そうですね、本番前にこの色ぼけ女が使い物にならなくなっても困りますからね。ベッドに連れて行くのは夜まで待ってもらうとして……」
「だから、それは不味いと言ってるだろ？」
「いっそのこと、そう言うしきたりなんですとか言った方がよいかな？」
パナシュは肩を竦めた。
それ、何ていう名前の十八歳未満禁止のアドベンチャーゲームですか？　と伊丹が聞いていたら尋ねたかも知れない。だが良識の塊である健軍は叫んだ。
「嫌だぞ、しきたりとかそう言うのは。こういうことは自由恋愛でなければいかん！」
「だ……だったら、オレとつきあってくれよ！」
勢いに任せてなのか、ヴィフィータは健軍の襟首を掴むとぐいっと引っ張って衆人環視のなかそう怒鳴った。
「今の言葉、訳すか？」
パナシュはヴィフィータにあえて尋ねる。
余計なことは頼まなくても翻訳する癖に、肝心なことは頼まないと翻訳してくれないパナシュの意地悪さ加減にヴィフィータは泣きたくなった。
「……頼む」
こうしてパナシュは、ふふふと笑いながらヴィフィータの発言のその背景にある心情を、懇切丁

寧に、慈愛心をもって健軍に語って聞かせることとなったのである。
もちろん、本番の今はそんなやりとりはない。そんなやりとりがあったことすら忘れたかのように二人は、ぎこちなくこちこちになっていた。
気を失ったフリをするヴィフィータを抱き上げた健軍は、隊員達の列ぶ隊伍の後ろまで運んでヴィフィータを降ろす。
だが、何故かヴィフィータの腕が、健軍の首にしっかりと回されていた。そのため健軍が隊列に復帰するのには些少の時間を必要とすることとなった。
「返事を聞かせろ」
屈辱と羞恥心と、さまざまな感情の混在したものを強引にねじ伏せたヴィフィータが健軍の耳元でささやいた。だがそれは、言葉の壁によって阻まれてしまう。
「……何を言っているのか、ちっともわからん」
健軍が首を傾げ、それ見たヴィフィータは拳を振るわせる。
「くそっ……もどかしいぜ」
こうなれば、彼女に残されたものは力業しかない。そう、それしかないのだ。
幸いにして皆の視線は、前に向けられ固定し、後ろを振り向く者はいない。
慌てた様子で健軍が戻ったのは、ピニャを代表とする使節団を載せた馬車十数台の列が見えてきたその時である。

「捧げ、つつっ！」

一個戦闘団が一糸乱れぬ敬礼を、帝国の使節団に対して贈った。

銃剣の林の間を使節団の馬車の列と、護衛の騎士達の代表数名が通り抜けていく。

馬車の中から健軍の顔を見たピニャはくすりと笑って「どうやら上手くいったみたいだ」と独白した。

健軍の唇には誰の者かはわからない真っ赤な口紅が移っていたのである。もちろん有職故実の作法に、そんなものはないから何かのハプニングが起きたことは間違いなかった。

＊　＊

その夜、日本と帝国の間で講和条約が調印されたことが全世界に報じられた。

日本側代表として内閣総理大臣の森田、帝国側代表としては皇太女ピニャ・コ・ラーダ。

担当者が文章の内容をそれぞれ確認し、森田が筆を用いて、ピニャはペンを持って、それぞれ二通の文書に署名と書判（花押）を記し、互いに一通ずつを手に取った。

日本では国会、帝国正統政府ならば元老院がこの条約内容を批准すれば、帝国と日本国間の戦争状態は形の上では終結することとなる。もちろんゾルザル派との戦いは続くが、講和条約の締結によって両国間の平和への道筋が開かれることとなったのである。

講和の条件を大雑把にまとめると以下の通りであった。

・帝国は、銀座事件の宣戦布告なき攻撃の非を認め謝意を公表する。（帝国では、事前の布告なく戦争を仕掛ける行為は罪とは考えない。そのため、何故謝罪の必要があるのか理解できなかった。これによって民間人に多数の犠牲が出たことも、日本側の油断に過ぎないという考え方なのである。だがこの講和によって、帝国は戦争の開始には少なくとも宣戦の布告が必要となるという価値観を受け容れることとなった）

・皇帝モルトはこの責任を負って条約発効後、帝国暦で二年以内に退位する。

・帝国は賠償として総額一億五二〇〇万スワニーを支払う。ただし二二〇〇万スワニーは一括で、残りを帝国暦で二十カ年に分けて支払う。また、賠償の支払いは帝国正統政府が、帝都を奪還してから開始される。

・日本側は、賠償の受け取りに当たって、特地内に経済的混乱を起こさないよう配慮する。従って帝国政府も貨幣の金含有量引き下げなどの対応を、協議無しに行わない。

・帝国は、アルヌスの丘を中心に半径百リーグ（百六十キロ）の領土から、フォルマル伯爵家、また他の部族・領主等が治める地域を除いた直轄地を日本国に割譲する。双方共に新たに敷かれた国境線を侵犯しないことを誓約する。

・帝国はその直轄地内の、アルヌスから半径千リーグ以内における貨幣金属以外の鉱山資源等の

調査試掘権、採掘権を日本政府に譲渡する。（ただし日本側はこれらの採掘及び輸送に当たっては、これに従事する帝国臣民の労働環境、並びに自然環境の破壊防止に最大限の配慮を払わなければならない）

・帝国と日本は、管理貿易を行う。

・帝国はその勢力下にある属国、藩王国、領主・部族の外交権を認め、日本と独自の外交関係を結ぶことを認める。

その他にも、細かな内容がつらつらと並ぶが、全般的に見ると、帝国の片務的恵国待遇とか関税の自主権がないとか、日本人に対する裁判権の行使は認められても、処罰には一定の制限が課されるなど、不平等条約に近い内容が見受けられた。

しかし、これも帝国では、諸侯や地方領主が独自に裁判権や徴税権を有している現状への対策であった。当面の間にしても、ある程度制限する必要があると相互に認めてのことであって、相手の無知に付け込んだ一方的な不平等条約とは異なるのだ。そのため条約文の末にも附則として、帝国側の司法制度が整ったら、直ちにこれらを見直す旨も記されている。

記者達は配られた資料を食い入るように読み込み、報道のための記事をつくりあげていったが、多くの者がすぐに気がついた。

この条約文を見る限り、日本側は少なくとも二十年は帝国との縁を切るつもりがないということ

を。そしてそれは異変対策として『門』を閉じる必要性があるかも知れないと公言している現政府の姿勢と相反するものなのである。

当然、これについて記者達からの質問が飛んだ。噂されているように『門』を再び開く方法があるということなのか。それとも『門』を閉じないと決めたのか。どっちなのかと。

すると森田はこう答えた。

「『門』を閉じるか閉じないかは、とても重要な問題です。というのも『門』は日本の国土間を連絡する重要な通路だからです。この連絡をどうやって維持していくか。一部で報道されているように様々な異常現象が起きていることは確かです。ですが悩ましいことに、これが『門』と関係して起きている出来事だとは現在の科学では完全に立証できません。それ故、われわれは確かではないけれど、どうするべきかを決めなくてはならないという問題を抱えることになったのです。我々は近いうちに大きな決断を迫られると思います。今は、その為に必要な情報を収集している段階であるのだとご理解下さい」

この期に及んでまだ決めていないと言うのか。

記者達はそんな気分になって質問を重ねた。だが、総理は「まだです。条約の内容が『門』が開いていることを前提としているとしても、それはどのような選択肢をとっても、良いようにと言うものでしかありません」と答えるばかりで最後の最後まで記者達の尋ねたことに対する言質を与えることはなかったのである。

条約への調印を済ませた両国首脳と随員達は、日本政府主催の晩餐会を前にして迎賓館「羽衣の間」でしばし休息の時間をとった。大仕事を終えた解放感に一時浸りながら、ティーカップを傾けつつ、立食パーティ風に雑談を交わすのだ。だが、ここで出てくる話題も特地や『門』に関連した問題で占められることとなった。

内閣官房長官の木檜や国土交通大臣らは窓際で、新たに日本国土となるアルヌス州の扱いに頭を悩ませていた。

講和条約の締結によって多くの物を得ることになったために、心情的にそれらを簡単に放棄することが出来なくなっていたからである。

「派閥間のバランスを考えると、特地開発庁長官は野本がよいでしょう。問題は現地の行政長官をどうするかだ」

条約の批准と同時に「特別地域管理行政特別法」が国会で可決される。これにより政府には特地開発庁と担当長官、そして現地にはアルヌス州行政局と行政長官がおかれる。州行政長官は、普通選挙が導入され州庁が発足するまで特地行政組織の構築を担うことなる。イメージとしては総督のような存在と考えればよいかも知れない。

問題はどちらも利権色が非常に強い職務であることだった。特地の開発計画、予算の配分、具体的な事業の実施までその一切を周旋するのがこれらの仕事となるからだ。保守党議員達はその椅子、

特に特地開発庁長官の椅子を狙った猟官運動を繰り広げた。だが、実際に特地に赴任する行政長官の椅子となると、及び腰になった。

『門』を閉じることになれば、離れ小島のような特地に残され、下手をすると長期にわたって日本との連絡がとれなくなってしまうからだ。

「やっぱり、『門』を閉じるのは無しだ。今日明日、どうこうなるものでないのなら、先送りすればいい」

利権人事の有利を得るために、こんな風に主張そのものを変えてしまう者までいた。だが今のままでは財界からの投資は望めないという現実には、『門』を開けておこうという意見も力を失う。利益を得るための鉱山開発にしても、工場建設にしても、最初は多額の投資が必要だからである。お金をつぎ込んだあげく、各地の異変が拡大し、それによって『門』を閉じることとなったのでは大損になるのだ。

「特地に投資するなら、安定した連絡が将来にわたって確保されるという保証がないとね」

「そのためには、とにかく一度『門』を閉じて、異変が解消される必要がある」

「そしてその間に特地で得た何もかもを失ってしまうのか？」

国家に良心などない。今回のように帝国から割譲された領土や権利なども、自分の物として実効支配を続けていなければ、他国からかすめ取られてしまうことだって起こり得る。

「それに『門』の開閉管理を特定個人に頼らなくてはならないことにだって不安があるぞ。あの娘だって何かの拍子に気が変わるってこともあるだろう？」

「いっそのこと、自衛隊を現地に残せばいいのでは？　要するに監視させるんだ」
「そんなことできるか！　ほとんどの隊員たちはこっちに家族がいるんだぞ。下手をすれば生き別れになるかも知れないのに、隊員や家族が納得するわきゃないだろう」
「だから、現地に残りたいという希望者を募るんだ。帝国との戦争だって終わるんだ。今ほどの戦力はいらないだろう」
「家族ぐるみでの移住希望者の募集か。条件さえ考えれば意外と出てくるかもしれないな。いっそのこと自衛隊に限らず広く国民から募ってみるか」
「だがそうなると、やはり現地に派遣する行政長官をなんとかしないとならんぞ。軍政ってわけにはいかないんだ」
「比例区出身の議員から選んではどうだろうか？　当選確実が期待できる名簿の三位か、四位あたりを指定席として約束すればいい」
「すると松坂、江元、片桐……か」
「いやいやいや、片桐は安全保障に疎過ぎる。内政、外交の双方をこなせる人材でなければ」
「いっそのこと首相経験者が行ってくれないかな。これが最後のご奉公ということで……」
「だが年齢が問題になるぞ。健康とか体力面が心配だ」
「こうなると、森田総理が誰を指名するかだな」
「しかし総理も薄氷を踏む思いでしょうな。とりあえず講和条約締結の成果で抑え込んでますけど、

『門』を開けておくか占めておくか、どっちを選んでも一機に政局になだれ込みかねないデリケートな状況ですからね」

「問題は世論だよ。野党が『門』の問題を選挙の争点に仕掛けてくることは目に見えている。マスコミが『門』を閉じる必要がないという論調でキャンペーンを繰り広げているからな。かなりがそっちに流れている。何を根拠に安全だ、問題ないって言ってるんだろうか？」

「とにかく、『門』の問題は選挙の争点にはしたくない。選挙前に片付けてしまいたい」

「あの、よろしいでしょうか？」

木檜達は突然、声をかけられて驚き振り返った。

だが、声の主が見つからなかった。周囲を見回して、「わたくし、シェリー・ノール・テュエリと申します」という声をもう一度聞いて、初めて視線を下げることに思いあたった。

そこにいたのはこの迎賓館という場所に立つのが似つかわしくない少女であった。

「き、君は？」

「ああ、この子は帝国の使節ですよ」

国交大臣の言葉に木檜達は、合点がいったように頷いた。

「君が帝国からの特使だね……あ、いや、……ですね？　と言わねばならんな。失礼いたしました、伯爵夫人閣下。噂は聞いてますよ。なかなかにやり手だとか」

「お気になさらないで下さい。ご覧のとおりわたくしは子供ですから、どうぞ目下の者に向けたお

言葉でお話し下さい」
「そうなのかね？　特地には見た目と年齢が一致しない女性が多いからなぁ」
木檜達は、最近、交渉のために顔を合わせる機会の増えた特地の女性達を思い浮かべた。
見た目は若いのに自分の母親よりも年上と聞けば、ロウリィやテュカ、ヤオに対する言葉遣いもどうしようかと戸惑ってしまう。そして実際に若年であるレレイを相手にする時も、その能力の重要度からして、やはり気を遣うのだ。
「女性にこんな質問をするのも失礼とは思うが、失礼ついでだ、お歳を伺わせてもらえるかね？」
「わたくしは、十二歳になりますわ」
「じゅうに……？」
「ただし、帝国の暦は一年が三百八十九日なので、ニホンの暦では十三歳ということになりますけれど」
「なるほど。年齢で言えば中学一～二年生か……だが、それにしても大人びているね。そう言われないかね？」
「最近は何かと言われるようになりましたわ。ついでに、生意気だという陰口もついてまわりますけれど」
シェリーはそう言うといかにも子供っぽく唇を尖らせ不満を露わにした。
「それは仕方がないと諦めた方がいい。経験や年齢に劣る者に活躍されると、それしか誇るべき物

がない大人にとっては、鬱陶しく思えてくるものだからね。粗も探すし、若さそのものを誹謗の対象にもする」

「要するにだ、羨ましがられていると思えばいいのだよ、お嬢さん」

木檜達はそういって憂い顔を見せる少女を慰めた。

「ところで、今、選挙のお話が耳に入ったのですが」

「選挙に興味があるのかね？」

「はい。帝国もかつて民主制だった時期がございました。ただ国が大きくなるに連れて、うまく機能しなくなり、その結果今の帝政におちついたのです。どうやってニホンという国では、民主制を上手く機能させているのか、それに興味がありますわ」

「なるほどね。古代アテネや、古代ローマみたいな政体だったと思えばいいのかな？」

「だろうな。危機管理という意味では中央集権、独裁政治のほうがやりやすいのも確かだからな。それで民主制から独裁制に移行したのだろう」

「独裁制は独善に陥りやすい。独裁は安全装置が機能しにくくなるんだ」

勝手に話を進めてしまう木檜に、シェリーは「あの、その……」と、困ったように口を挟んだ。

「選挙前に、『門』について決めてしまいたいとのお言葉が耳に入ったのですが」

「ああ。今、日本では異変をどうやって解決するかが議論になっているんだ。危機感のないマスコミが民衆を扇動して、『門』を閉じるなと頑張っているのだが、国の安全に責任を持つ我らとしては、

当然そんな意見を受け容れるわけにはいかないんだ」
「民衆に不人気なことでも、必要とあらばあえてなさるご英断に胸がすく思いですわ。かつての我が帝国で、民主制が崩壊した理由は、為政者が人気取りに走ったからですもの。当時の政治家達に、皆様の爪の垢でも煎じて呑ませたいぐらいですわ」
「爪の垢とは……使い古された言葉だけど、外国の方から耳にすると新鮮に聞こえるね」
「はい。いっぱい勉強しました」
「しかし、民主制が独裁制に移行した理由が民衆の人気取りに走ったからだという意見は、耳の痛い話だね。我々の中にも人気を得ることばかり考えている者が少なくないんだ。利権政治をやっつけろ。既得権益にしがみつく官僚をやっつけろ。敵を作って反感をあおり、威勢の良いことを言ってそれを打倒すれば全てはうまくいくと言って国民を騙すというやり方だ」
「帝国では戦争が人気取りの具になりました。それによって民主制の崩壊が始まったというのが歴史の先生のお話でした」
「どの国の国民も、勝利が好きだからね」
「はい。勝ちさえすれば民衆に選ばれる……そんな風に考える風潮が広がってしまいました」
「勝てば選挙に勝てる、か」
木檜はシェリーの言葉を味わうように呟いた。そんな木檜にシェリーが話を持ちかける。
「そう言えば、帝国の内乱も早いうちに治めてしまいたいのですが、ニホンにはご協力いただけま

せんでしょうか？」
「うむ。ゾルザル派を倒さなければ戦争が終わったとは言えないからね。万が一、ゾルザルが帝国を制するようになれば、講和の成果もなくなってしまう。それに誰かさんのせいで、賠償金の支払いも帝都を取り戻すまでは開始されないことになってしまったしね」
「お恥ずかしゅうございます。あまりいじめないで下さいまし」
シェリーは恥ずかしげにうつむいた。
「なあに、良いんだよ。実のところ君が出てきてくれて助かったんだ」
「と、申しますと？」
「正直言って、特地での戦いでは日本は有利に事を進めすぎた。そのせいか交渉の担当者達も強気一点張りで、要求を帝国に突きつけるだけで退くことが出来ないでいた。適当なところで止めておくという加減が出来なかったんだな。自分が退いたがために得られるべき物が得られなかったと批判されるのが嫌だったからだと思う。つまり、白百合達は張り切り過ぎてたんだ」
「……張り切り過ぎてらした」
「そう。帝国の外交官を言葉でやり込めることに酔っていたと言い換えても良いかな？　ところが君が出て来ただろう？　白百合達も調子がくるった。あまり強気に出られなくなって、退くべきところで退いた。そうしたら話がすんなりと決まったというわけさ」
「わたくしの力で話がまとまったわけではないから、増長するなというご教示ですね。ありがとう

ございます」
「いやいや、そんな強いことを言うつもりはなかったんだよ。ただ、こちらにもそういう事情があったということを知っておくと、君のこれからにとって、為になると思ったんだ」
「ありがとうございます。肝に銘じておきますわ」
「そうして欲しい。これからも帝国とは交渉しなければならないことはいっぱいあるからね。その時はよろしく頼むよ」
「あの、でも、実のところわたくしはスガワラ様の下にお嫁入りするつもりですので、帝国の使節として皆様とお話しすることはもうそれほどないかと思います」
「菅原？　……菅原って誰？」
木檜に外務省の次官が耳打ちした。
「ああ、あの男か。でも、それはもったいないな」
政治家達は一斉に「もったいない」を繰り返した。
「陰険漫才みたいな政治の場で、君みたいな少女と話をするのは清涼剤だからね。いなくなられると寂しいよ」
「ですが、その、あの」
「仕方ないね。でも、十三歳ならまだ、三年は帝国で活躍できるはずだ」
「でも……」

「どうしたのかね？」
「ニホンの方々は、『門』をどうなさるおつもりですか？」
「うん。我々は、『門』を閉じるべきだと考えている。ゾルザルを倒して、帝国との関係を正常化して、『門』を閉じている間のアルヌスの治め方をきちんと方向付けてからね」
「そうですか。そうなるとスガワラ様はニホンにお戻りになるんでしょうか？」
「彼は外務省の役人だから、帝国駐在の大使にでも任じられない限りは日本に引き揚げることになるよ。たぶん」
正直それが問題であった。今の彼らを悩ませているのは、もしかすると永遠の別れになってしまう特地に何を、誰をどれくらい残すかなのである。
「そうですか。わかりました、それに合わせて身の処し方を考えることにいたしますわ」
「君は本当にあの男が好きなんだね」
「はい！」
シェリーが弾むような声で明るく返事した物だから、木檜達は途端にやってられねえよといった気分になった。
「ところで参考までに訪ねておきたいのだが、ゾルザルが居なくなると帝国は内憂がなくなるだろう？　正統政府が今回の講和を受け容れたのもゾルザル派の排除に日本の助力を得たいからだ。それが片づけば、帝国にとっての憂いの種は日本ということになるんじゃないかね」

「そうだな。帝国はアルヌスを割譲したが、内心では快く思っていないはずだ。そう考えると、『門』を閉じる時に、残す戦力を多めにしないといけなくなる」

国交大臣が補足した。使節のシェリーを前にして本音を語りまくるという無警戒さだった。

「確かにそうですわね。ですけれどそれはあんまり心配される必要はないと思いますわ」

男達は少女の話に「どうしてかね？」と身を乗り出した。

「確かに帝国とニホンの二カ国だけで考えますと、皆様のご心配も当然でしょう。ですが帝国だけでなくその周囲の情勢にまで目を向けますと帝国がニホンを必要としていることに気がつくのです。ゾルザル様を倒したあとも、帝国正統政府は、ニホンと友好関係を維持するでしょう」

「そのあたりの情勢分析は耳にしている。大陸における帝国の求心力はそこまで低下しているのかね？」

「身内の恥を申し上げるようで躊躇いを感じるのですが、連合諸王国軍を招集した際の不手際を恨みに考えてらっしゃる国々が多く、帝国はかつてのように強権的に振るまうことが難しくなっているのです。おかげでゾルザル様にもつかず、皇帝陛下にもつかずという日和見を決めてらっしゃる方達が大変に多うございます。この内乱が治まれば、表向きの態度は変わるかも知れませんが、本心を変えて下さることはないでしょう」

「帝国が統一を取り戻したら、帝国はその権勢を取り戻せるのでは？」

「残念ながらそれを妨げる不安定要因がございます」

「それは？」
「これまで、帝国はヒト種のヒト種によるヒト種のための国家でした。ですが、この内乱で皇帝陛下は亜人部族にご助力を求めました。そのため、今後は亜人種の方々が台頭することが予想されます」
「民族問題か……」
「はい。だからこそ、ゾルザル様の討伐で、ニホンがお力を示されるべきなのです。そうすれば諸外国は帝国に表向きなびきつつも、ニホンという国の存在を常に意識するようになるでしょう。アルヌスに注目している亜人部族の方々も、ニホンに対する好意を高めるでしょう。帝国もニホンと対立するよりは、逆に周辺諸国を威圧するためにも、ニホンとの関係強化をはかることでしょう。そうすることで、アルヌスの安全や利権は守られると言えるのです」
「なるほどね……なるほどなるほど、そう言うことか。ならば残置する戦力はそんなに多くなくて済むな」
官房長官の木檜は合点がいったかのように手のひらを擦り合わせ何度も何度も頷いた。
そわそわと周囲を見渡して何かを探す。やがて、「ちょっと失礼」と言って、ピニャと談笑している総理の森田の下へと走っていった。
「あいつ、他人から聞いた話を、自分の考えみたく言う癖があるよなぁ」
国交大臣がぼやき、周囲がそれに頷いた。
「そうなのですか？」

シェリーは、空々しくもよくわからないとばかりに首を傾げると、他人にみられない素早さで、ぺろっと舌を出した。

＊　＊

「機は熟した、全面攻勢だ！」

閣議の席で官房長官の木檜は握り拳を震わせて力説した。

嘉納が「当然だな」と重々しく頷き、夏目もこれを支持する発言をする。他の閣僚も反対することはなく、木檜の提案は全員一致で可決された。こうして帝国正統政府軍と連携し、ゾルザル派に対する攻勢に出ることとなったのである。

これは当然のことながら、日本の国益を追い求めてのことである。とは言え、帝国との講和とゾルザルに対する勝利という二つの成果で、支持率の回復と、総選挙でも相応の議席を確保しようという私欲の追求も含まれていた。

事が金銭を浪費するばかりでなく人命を蕩尽する戦争であるだけに、これを理由に非難する声も出てくるだろう。だが、人間は欲得ずくで動くどうしようもない存在である。それが営利事業ならばあたりまえだが、例え福祉活動であろうとも、無私の慈善のように見えつつも、その内側には私益の追求が動機として含まれているものなのだ。

ただ、そこで得るべきものが、金銭のような物質的な物か、あるいは充実感、満足感といった精神的な物かの違いでしかない。これを偽善と呼んで批判することは容易い。だが、私益の追求が含まれない行為など存在しないのであれば、それを理由として是非を語ることは全くの無意味なのである。

これを批判するのは、あたかも動植物の命を奪うと言って食べることを批判し、汚物を出すからと言って、トイレに行くことを断罪するようなものなのだ。

真に問題とすべきは、私益と公益が対立した時にどちらを優先したかなのだ。

これが対立することなく同じ方角を向いている限りは、問題はない。もちろん「公益」とは何かということはしっかりと考えられなければならないが、問題はそれを損なうような私益の追求の場合だ。これを、あたかも公益の追求であるかのように偽装する行為こそが非難されるべきなのだ。

その一つが、現実を無視して個人的な理想の実現を無謀にも追い求める行為である。

結果として公益を損ねるような指導者の登場は、国家国民にとって不幸以外の何ものでもない。

「それが何であれ、最初は良かれと思ってなされる」とは、独裁者になることを目指したユリウス・カエサルの言葉だが、ヒトラーやポルポト、スターリンですらも、最初から人々に不幸をまき散らすつもりで権力の座を目指したわけではないだろう。

ただ、よかれと言う思いが強すぎた。自分の理想と、現実の乖離に耐えられず、極端に走った結果が国民に不幸を強いる結果となったのだ。

その意味では、森田内閣に属する者達はみんな俗物であり、小者であった。
理想は抱きつつも、極端にそれを追い求めることもなく、私益の追求に過ぎない行為を、公益の追求と偽って平然としていられる厚顔さも持ち合わせていない。
私益と、公益の追求とを重ね合わせて誤魔化して、「これでいい？」と周囲の反応をうかがいつつ、それが受け容れられるやホッと胸をなで下ろすような小心者ばかりだったのである。そしてそれがゆえに、動くと決めた時の行動は大胆で、力強いものとなる。
閣議決定は防衛省を通じてただちに特地方面派遣部隊へと伝達された。
アルヌスの自衛官達は一斉に湧き上がった。
「畜生！　こいつを待ってたんだ！」
「やっつけてやるぜ」
アルヌスの周辺を守るだけという消極的な戦い方は、自衛官達にとっても不満の残るものだった。受け身にまわっている限り、どうしたって対応が後手に回った。現地住民に犠牲が出ることを防ぐこともかなわず、多くの苦汁を舐めさせられて来たのだ。だが、全面攻勢となれば話は変わる。主導権は自衛隊のものだ。
これまで我慢を強いられてきた分を一気に叩きつけてやる。
隊員達の士気は急激に高まり、普段の立ち居振る舞いの隅々にまで、活気が満ちるようになったのである。

帝国正統政府もまた活気づいていた。

「ニホン国との和平成る。平和の敵ゾルザル派を討て！　功のあった者は重く用いる。出身種族、民族、前歴を問わない論功行賞を約束する」という檄文を各地に送ったところ、講和派貴族のみならず、これまで何かと理由をつけて返事を渋っていた諸外国や諸侯までもが、正統政府への助力を表明して援軍を送ると約束して来たからである。

すると勝ち目ありと見たのか、これまで声をかけても見向きもしなかったような傭兵や元盗賊といった者達までも募兵に応じて来るようになった。

こうして正統政府軍も、ゾルザル派に見劣りしないだけの陣容を整えることが出来たのである。

「これを帝国の貴族共が、己の力と誤解せねば良いのだがな。まぁよかろうて、大陸の盟主が実質的には誰であるか、皆が思い知るであろうからな」

エルベ藩王国国王デュランは、玉座でそう呟きながら軍の進発を命じた。

「お願いだ！　ゾルザル討伐の軍は、イタリカから進発して下され！」

自衛隊との合同会議の席で、正統政府軍の将帥達は机に額をこすりつけた。

ゾルザル派追討の主力が自衛隊であることは最早、隠しようのない事実である。だが、せめて外見ぐらいは正統政府の軍が主力で自衛隊が支援という形にしないと、戦後の統治に差し障りが出て来てしまうと彼らは主張した。

それは、純軍事的な観点に立てばあきらかに無駄なことであった。しかし、その後の帝国統治を

考えるならば、彼らの主張にも一理あり、耳を傾けないわけにはいかなかった。帝国が無用な混乱に陥れば、講和の条件である賠償の支払いや、資源の採掘と輸送に支障を来すからである。

その為、イタリカから進発する合同部隊こそがゾルザル討伐の主力と位置づけられることとなった。これで帝国正統政府軍がゾルザル派を討伐したと主張できる。そして自衛隊は、主力を支援するために他の地域（主にアルヌス）から行動を起こすという形で話はまとまったのである。

「イタリカから進発する部隊は、第四戦闘団とする」

狭間の指示で、正統政府軍と行動する自衛隊部隊は、健軍一等陸佐率いる第四戦闘団となった。

「陸将！　正統政府軍との共同を強いられては、我が隊の機動力が生かせません」

移動方法が騎馬であったり徒歩だったりする部隊との共同をすることとなったら、折角の空中機動力が無駄になってしまう。健軍は会議の席でそう主張して異議を唱えた。だが狭間は「第四戦闘団は、これまでの戦闘で充分に戦った。休息も兼ねて、今回は他の隊に活躍の場を譲れ。ヘリは一番の長く険しい道を進むこととなる合同軍の物資輸送等で必要となるはずだ」と取り合わなかった。

それは、狭間からのありがたい配慮と受け取ることも出来なくもなかった。だが、武闘派の健軍に言わせれば理不尽以外の何ものでもない。これまで最前線で苦労して来たのは彼の部下なのだから。それなのに、いよいよの大舞台で一番美味しい役どころを奪われたら、これまでの苦労はいったい何だったかという気持ちになるのだ。

そのため健軍は、自分の指揮下に入ることとなった帝国正統政府軍の将軍達を集めると、皆を睨

み付けた上で宣言した。
「最初に言っておくが、これは競争だ」
自分たちこそがゾルザル討伐の主力、自衛隊はその支援。そんな役割分担を信じて、出陣準備に励んでいた正統政府の貴族達は、同時通訳をするシャンディーの言葉が耳にはいると騒然となった。
「し、しかし、それでは約束が……」
「約束とは何の話だ？」
「我々こそがゾルザル派討伐の主力ということで、話がまとまったのではないか？」
「そうだ！　だからこそ、歴戦のケングン殿率いる第四戦闘団が自分たちと行動を共にしてくれるのではないか？」
将軍達は口々に言った。
「そうだ。そして自衛隊は支援のための行動を起こす。ただしこの場合の支援とは、ゾルザル派の殲滅までも含んでいる。このままでは、我々はただ帝都に向かって派手なパレードをするだけという役どころに陥ってしまうだろう。今回の取り決めは裏を返してみれば、そのようにも解釈できるものなのだ」
「そ、それでは我々の面子はどうなる!?」
「だから、今説明した。これは競争なのだと」
健軍は睨むように周囲を見渡した。正統政府軍の将帥達はそれを受けて黙り込み水を打ったよう

に静まりかえった。
「一度状況が開始されれば、他の連中は俺達のことなど待ってはくれん」
「し、しかし、それでは約束が、我々の面子が……」
同じ事しか言わない帝国の貴族達に健軍は言い聞かせるように語った。
「戦争は相手があってするものだ。そんなもので味方を拘束すれば、かえって隊員達を危険に晒す。後れを取ったなら、それはこちらの不手際と考えるべきだろう？」
すると隣に座っていたシェリーから肘鉄の合図を受けたピニャが、不承不承といった体で立ち上がった。やる気なさげに見えるピニャだが、思考力までサボタージュを起こしているわけではないので、指揮鞭を床一面に広がる地図に向けながら、「だからこそ、卿らは懸命に走らねばならぬのだ」と諸将に言い渡した。
ピニャの鞭がイタリカから帝都、そしてテルタへと向かう街道をなぞる。
その途中には正統政府軍の進撃を妨げるためにゾルザルが築かせたマレ、フゥエ、レッキなどの城塞群がある。
「卿らの進むべき道は長く、そして立ちはだかる敵は手強い。ケングン殿がおっしゃるようにこの戦いが競争ならば最初から不利な立場にあると言える」
帝都までの距離は、イタリカよりアルヌスのほうが近い。にもかかわらず同じ日に行動を起こすのである。途上に築かれた城塞を一つずつ抜きながら進んでは、機械力と圧倒的な破壊力をもって

進撃する他の戦闘団に追いつけるはずがない。
将軍達も、自分たちが踏破しなければならない距離を思って息を呑んだ。
その中の一人が、ピニャの口振りを疑問に思ったのか、話を少し脱線させた。
「しかし、殿下のお話を聞きますと、まるでこの戦いに参加する気がないかのようなおっしゃりようですな」
ピニャは頷いた。
「妾は皇帝の名代なのであろう？　ならばこのイタリカで留守番をさせてもらおうと思っている。吉報を待っているぞ」
すると将軍達は身を乗り出して賛成した。
「それは結構なことです。殿下なら、我こそが一番槍とばかりに抜け駆けを考えられるかと思いましたからな」
「最早、妾はそのような我が儘が出来る立場ではないのであろう？」
将軍達は一斉に頷いた。隣に座っているシェリーもしきりに首肯している。
「だからこそ、卿らにはケンゲン殿の作戦に従ってもらわなければならないのだ。しっかりと頼むぞ」
「しかしですな、我らにまで馬から下りて戦えとは」
「そうだ、雑兵共と入り乱れては満足に指揮することもかないませんぞ。状況もよく見えなくなるし、そもそもこのような戦い方は前例がない」

「前例のあることばかりやりたがるのは戦術家としては二流と言えよう。船に乗って戦うならば、誰しも馬を下りて戦うではないか？　此度もそれと同じに考えるが良い。面子を拾いたいのであればやって見せるが良い」

ピニャの突き放したような物言いを受けて、将軍達は悔しそうに歯がみした。

だが、確かに彼女の指摘したとおりで嫌と言える立場ではない。

今作戦で帝国正統政府軍は、輸送、兵站（へいたん）、通信と多くの部分で自衛隊に依存する。自衛隊の指揮下に入ることを拒めば、「ならば好きにしろ」と置いてきぼりにされてしまう立場なのだ。

ピニャは正統政府を代表して健軍に向き直って頭を下げた。

「ケングン殿、この者達をよろしく頼む」

健軍もこれに応えて頭を下げた。

「了解いたしました、殿下。では、これより作戦説明を行います。この説明によって諸氏が今抱いている疑問の多くは解消されるはずだ。されなければ困る。それはこの場の目的が、全員が、自らの役割を遺漏無く把握することだからである。合同での作戦行動は、些細な不手際や考えの不一致から瓦解してしまう。従って質問は随時受けるし、その都度説明もする。だから疑問に思ったことや意見はことごとくこの場で口にしていただきたい」

健軍は全員を見渡した後に「では、お手元の資料を開いていただきたい」と告げた。それを受けて騎士団のシャンディーが通訳に立つことで説明は始まった。

＊　＊

「状況開始せよ」
狭間陸将の命令が、特地派遣部隊の各隊に伝達された。
『白、黒、抹茶、ゆず、小豆、梅、桃、桜、桜！』
作戦開始を伝える符丁を受けとった各隊が行動を開始する。
「よし。前進だ！」
土煙を巻き上げながら陸を埋め尽くすようにして戦闘車両の群れが、空を覆い尽くすようにヘリコプターの編隊が、それぞれの割り振られた目標へと向けて驀進を始めた。
まずは、航空自衛隊のファントムが各地に設けられたゾルザル派の支配域、奥深くに侵入。投下された爆弾が城塞の防御設備を粉砕し、進撃路以外の橋梁を破壊し、ナパーム弾の劫火をもって兵舎を押し潰す。
六機のファントムでは、明らかに手が足りないが、綿密に練られたスケジュールに従って各機はフル回転で、交通、通信の遮断と、制空権の確保の出撃を繰り返した。
兵舎に起居していた帝国兵達は、戦いが始まったことに気づくことすらないままに、建材の石や材木、そして降り注ぐ炎によって息絶え、補給を絶たれ、孤立していった。

続いての攻撃は、空気を切り裂く音とともに飛来した特科部隊の榴砲弾である。
地面が激しく揺すぶられ、土砂が舞い上がる。城壁が抉られ、兵士達は安全な場所を探して逃げ惑った。
これらの攻撃を受けて、不幸にも即死を免れた者は、大地を押し寄せる鋼鉄の戦象の姿を遠望することとなった。
「な、何だアレは……」
七四式戦車を先頭に押し立てて迫り寄せる自衛隊の威容が、戦う前から損害を負っていた兵士達の戦意を急激に削り取っていった。逃げ出すという選択肢が彼らの脳裏を駆け巡る。
「何をしているか！　逃げるな、戦え！」
だが、コボルトを象った兜（かたど）を被る帝権擁護委員（オプリーチニキ）が、逃げようとする者の背後で凶刃を振りかざし、怒声を浴びせると、生命を失う危機感が、兵士達の枯渇しかけていた戦意を回復させた。
すり切れた勇気を必死になって掻き集め、剣や槍、あるいはささやかな戦闘魔法を武器にしてこれに立ち向かおうと立ち上がった。
「進め、進め！」
矢を放ち、槍を構えて突き進んで行く。
しかしそれは、確固たる戦意と理性の導き出した戦術に基づく反撃ではなかった。自暴自棄に等しい混迷の中での特攻であり、怒濤にも似た敵の奔流を防ぐ効果は、薄板一枚ほどもなく、あたる

と同当に砕かれてしまったのである。
慌てふためいて戦場へと出撃してきた帝国軍の指揮官は、無人の野を進むがごとく向かってくる敵の様子を一望して絶望的な表情となった。何をどうすれば、あの勢いを堰き止めることが出来るのか全く思いつかなかったからだ。
「隊長！　我らの前にいたはずの味方はどうなったのでしょう？」
「敵が我らの目の前にいる以上、当然敗れたに決まっている」
「まさか!?　そんな！」
何の報いもないままに味方が敗れたなど、到底信じられることではない。
「最早、そのようなことを論ずるべき時ではない。我らに出来ることは進んで戦うことだけである。お前達は後方にある味方に敵の来襲を報せよ。我らがここで少しでも敵を拘束することに成功すれば、後方の味方は、我々よりマシな状態で戦うことも出来ようからな。いくぞ！」
守備隊長は伝令の兵を送り出すと、部下を率いて突き進んだ。
だが、馬をあおって、手綱を引き絞って長槍を構えた突撃で挑んでも、車載機銃の弾雨に阻まれて近付くことすら出来ない。
味方の犠牲の果てにどうにか槍をつけるまでに肉薄したとしても、堅牢な装甲に阻まれ、槍の柄は鈍い音と共にいとも簡単に折れてしまう。
その尖った断端（だんたん）によってかえって騎兵の方が傷つけられてしまった。

騎兵達は馬から投げ出され、次々と地面に叩きつけられる。そして、泥まみれとなって地を這いずる彼らに、鋼鉄の巨体とキャタピラが覆い被さるように迫った。

「こんなの戦いと言えるか！」

こんなものは戦いなどではない。ただの屈辱だと、とある帝国兵は叫んだ。

俺達は蛮族だろうと亜人だろうと滅ぼす以上はちゃんと戦った。きちんと返り血を浴びながら剣で切り、槍で刺し、矢を射た。女は姦し、家には火を放ち、財貨は奪った。互いの顔を見ながら剣を合わせ、盾をぶつけ合った。どんな相手だったのか今でも思いだせる。

だが、こいつらはそれすらしてくれないのだ。存在を無視するかのように、路傍の石のごとく俺達を焼いて、打ち砕いて、淡々と繰り返す作業のごとく、踏みつぶしていくだけなのだ。

「くそぉっ！」

全く敵わない。全く相手にして貰えない。その暴力的な理不尽さに、帝国の将兵は怒り、歯がみして悔しがった。これこそが敗北の味であった。

彼らにはまだいくつかの選択肢が残っていた。

例えば、体勢を立て直すために撤退するという方法である。損害を出さないように後退し、各地に散っている部隊を糾合して、粘り強く敵の前進を阻むという方法もあったはずだ。

だが、最近になって隊長の身辺に配置されたコボルトの兜をかぶった連中が、それを許さなかった。帝権擁護委員達（オプリーチニキ）は、目の前に現れた敵に挑み、戦って、勝利することを帝国の兵士達に強要した。

「それは、俺達に死ねと言っているのか？」
「まさか。戦って勝ちさえすれば、当然のことながら生き残ることが出来るだろう。勝てばよいのだよ、勝てばな！」
「くそっ！　重装オーガーを出せ！　翼竜弓騎兵、空から狙え！」
分厚い鎧と楯で身を固めたジャイアントオーガーが隊伍を組んで進んでいく。
一歩踏み進むごとに、くるぶしまで埋まる重量感。仰ぎ見るような巨体が兵士達にとっては実に頼もしかった。
帝国兵達はジャイアントオーガーの抱える城壁にも似た楯が、敵の銃弾すら防ぐことを知ると、それまで野獣と呼んで馬鹿にしていたことも忘れ、その背中に隠れるようにして進んだ。
さらに竜騎兵に弓を持たせ、遠距離から矢を降り注がせる戦術も目に見える効果があった。
日本の兵達は、矢を射かけると地を走る鉄の箱へと逃げ込んだのである。
「よし今だ！　取り囲んでしまえば袋の鼠だぞ！」
「ひっくりかえしてやれ」
「火を付けろ！　岩をなげろ！」
「行け！　行け！」
重装オーガーは帝国兵の期待に応えるように棍棒や巨石を投擲した。
棍棒が凄まじい轟音とともに大地を抉り、戦車に直撃した巨石はその衝撃でバラバラとなって、

あたかも爆発したかのような粉塵を周囲にまき散らす。
「おおっ！」
「これなら行ける！　勝てるかも知れん！」
「よし、敵の足を止めるぞ！　攻城鎚隊、前へ！」
後方から攻城鎚が引き出され、先頭へと押し出されていく。
それは、尖端を鋭く尖らせた大木を台車に乗せ、その衝突力で城壁を砕き、穴を穿つための兵器であった。これを動く城塞とも言える戦車にぶつけ擱座させようというのだ。さらに台車の上には柴や油などがうずたかく積まれて火がつけられている。
兵達が群がって懸命に押し出して行く。
「よし、つっこめ！」
最初はゆっくりと。だが、次第に追いつけなくなった兵達が転んでしまうまでに加速された攻城鎚は、火の粉を周囲にまき散らしながら凄まじい勢いで突き進んだ。
反撃の弾雨を受け、怪異や兵達がばらけるように倒れていく。
それでも一度ついた勢いはそんなことで削がれるはずもなく、攻城鎚は下りの斜面でさらに加速して、わずかな地面の凹凸にも踊るように跳ねながら突き進んだ。
あまりの速度と振動に耐えきれず、車輪が吹き飛び崩壊する攻城鎚もあった。
火の粉をまき散らし、鎚たる大木が地面を転がって、それを押していた兵達は次々と巻き込まれ

下敷きとなりあるいは火だるまになった。
だが、無数に放たれた攻城鎚の一つが、ついに七四式戦車の側面へと激突する。
その衝撃の凄まじさで、攻城鎚はばらばらとなった。大木だけが残って、周囲には木片と油と炎とが飛び散った。
戦車の車体はその衝撃で激しく揺すられて、油と柴の炎によって包み込まれてしまう。
「やったぞ!!」
燃え上がる戦車を見て、帝国兵らは歓呼の雄叫びをあげた。
無敵とも思えた敵に対して、ダメージを与えたことが嬉しくて拳をかかげ喜色に包まれた。
だが、その歓声もしばらくすると落胆の沈黙にとって代わられる。
炎に包まれていたはずの戦車が、何事もなかったかのように動き出したからである。
「なんだと?」
映画などを研究し、対策を立てていた自衛隊側には隙はない。車体に施した樹木の偽装とともに、側面にはあらかじめ丸太がぶら下げられていたのだ。
転輪の間につきささり、その動きを止めるはずだった攻城鎚の尖端はこれによって防がれていた。
そして炎と一緒にこれらを切り捨てた戦車は、攻城鎚の残骸を踏みにじりながら再び前進を始めたのである。
「くっ……次だ! 重装オーガー隊を突っ込ませろ!」

帝国軍はジャイアントオーガーを先頭に押し立てて突撃を敢行した。剣と槍の距離にまで距離を詰めさえすれば、肉弾戦にまで引きずり込めば勝ち目はある。そう考えたのだ。

「亀甲隊形！」

降り注ぐ弾雨を防ぐため身を寄せて楯を正面、そして上と左右に並べる重装オーガー達。怪異使いと帝国兵達は、その内側に庇われるようにして隠れた。だが彼らはそこで見ることとなった。分厚く重い楯に穴が次々と開いていく恐怖の光景を。

夜の空を飾る星のように、暗い空間内に光の差し込む小さな穴が次々とあいていく。

ジャイアントオーガーでなければ持ち上げることすら難しい鋼板の楯ですら、重機関銃から放たれる十二・七㎜の徹甲弾は防げないのだ。

それでも同じ厚さの鎧で身を固めるオーガー達はまだ良い方と言えた。盾が破られても鎧が身を守ってくれるからだ。だが、薄っぺらな鎧をまとっただけの帝国兵達には堪らないことになった。弾丸の破片が暗い空間内で跳びはねて、兵達は顔を押さえ、鮮血をまき散らしながら呻き、跪き次々と脱落していった。

百人が五十人にまで減るほどの犠牲を出しながら進み、ようやく敵に近づく。

突撃のホイッスルが吹かれ、重装オーガー達の亀甲隊形が解かれる。その中から飛び出した帝国兵達は戦車に飛びつき群がろうと肉薄した。重装オーガー達が、その棍棒を戦車の装甲にたたきつけようと振りかぶる。……だが。

居並ぶ鋼鉄の戦象が、その突き出た鼻から一斉に火を放った。
撃ち出されたのは五十一口径百五㎜ライフル砲Ｌ７Ａ１。弾種は筒付翼安定徹甲弾。
至近距離からこの直撃を喰らっては、さしもの重装オーガーも耐えることは出来ない。その胴には巨大な穴があき、オーガー達は将棋倒しのように倒れた。
雷鳴にも似た衝撃が兵士達をはじき飛ばし、その後に嘘のような静寂が続く。
次弾の装填を終える七十四式戦車。
「撃て！」
耳を劈く発射音と、全身を殴りつける強烈な衝撃波に、帝国兵達は吹き飛ばされまいと頭を下げ、地にしがみつくので精一杯であった。
戦車砲の直撃を受けた巨楯が、木の葉のように空を舞い、地に引かれて落ちてくる。逃げ切れずに巻き込まれた帝国兵達は、落下してきた鉄の塊に巻き込まれ押しつぶされた。
帝国軍の組織的な抵抗は、この瞬間をもって潰えた。
背後の帝国兵達を巻き込んで、仰向けに倒れた重装オーガーは、その激痛に身もだえる。
楯もろともに腕を引きちぎられて転げ回るオーガーによって、帝国兵達は逃げる暇もなく、その七転八倒に巻き込まれ、弾き飛ばされていく。
最早、敵味方の区別はなかった。
狂乱状態となったオーガーは、視界に入るものはことごとくが敵だとばかりに棍棒を振るい、足

下にいた帝国兵達をなぎ倒していったのである。

空では、翼竜騎兵が束ねた槍を投げ下ろすという慣れ親しんだ戦術とともに、翼竜に岩や油の入った壺を抱えさせて、高高度から敵目掛けて投下するという方法が試みられていた。

だがそれは、苦労が多い割に利益が少なかった。直撃させることがまず難しい上に、仮に命中したとしても戦車が相手では外装を傷つけるのが精一杯で、その動きを止めるには至らなかったからである。

もちろん、その中には高機動車などのボンネットに直撃し、何両かの車両を撃破することに成功する者もいたが、戦況に影響を与えるほどの効果は得られなかった。

「こ、こんなの相手に勝てるわけがないだろっ!?」

例え戦う意欲があろうとも、勝利を渇望してようとも、その為の方法がなくては、兵士達も後ろを向いて走りだすしかない。

帝権擁護委員（オプリーチニキ）の振りかざす恐怖の刃も、その勢いを堰（せ）き止めることは出来なくなっていた。

役に立たない防具をかなぐり捨てて、剣は投げ捨て、息の続く限り全力疾走する。

こうして帝国軍は四散し、戦闘組織としての体裁を失った。

それは、柱を失った建築物がその自重で崩壊するようなものであった。まさに、全面崩壊であった。

統制を失った兵士達は生き残ることだけを考えて、地に身を伏せ、隙を見つけて走る。

だが、どこまで走っても彼らが安息を得ることはない。敵は、武器を棄てて身軽になって逃げる彼らを、まるで獲物に襲いかかる猟犬のように追い立てて来たからだ。

帝国兵達は瞬く間に包囲されて、四方から銃剣をつきつけられる形で降伏を迫られることとなった。もちろん、全員が捕虜となれたわけではない。不幸にも逃亡に成功してしまった者もあった。

そんな彼らを待ち構えていたのは、付近住民の憎悪に満ちた視線だ。自衛隊に対抗するためとは言え、ヘルム将軍らが徹底的に行った焦土戦術。集落を襲い、家と畑を焼き、女を姦し男は殺して追い立てるという手法が、帝国兵に対する憎しみを植え付け、弱った敗残兵に復讐の刃を向けさせることとなったのである。

こうして農民達の農具が彼らを追い回し引き裂くこととなった。

どこに行っても逃れようがないことを悟った帝国兵達は、進んで自衛隊の捕虜になることを望むようになった。そして、そんな捕虜の武装を解除し後送する手間こそが、最も自衛隊の前進速度を鈍らせ、足止めを強いることとなったのだから、皮肉と言えるかも知れない。

＊　＊

イタリカを進発した健軍率いる合同軍もまた、帝都へと向かう道をひた走っていた。

立ちはだかる城塞マレには空からの襲撃が敢行された。

戦闘ヘリのロケット弾攻撃で大混乱に陥った敵の頭上を素通りし、城壁や城門を飛び越えていきなり城塞の深奥部たる尖塔に、兵らを降ろしたのである。

ゾルザル派の兵士から見れば、最も守りの堅い城の最深部がいきなり攻撃に晒され、指揮系統を分断され前後からの挟撃に晒される形となった。

さらに「鉄のトンボ」が舞い降りて来て、右往左往するゾルザル派兵に弾雨を浴びせ、正統政府軍の歩兵達を続々と降ろしてくるのだ。

これでは、目の前の敵に対応するのが精一杯で、敵の隙を見て進んだり、一時的に退いたりして、敵を地形的に優位な場所へ誘い込むといった戦術的な抵抗を展開することも出来ない。

前からも後ろからも敵がやって来て、ゾルザル派の兵達はあっという間に取り囲まれ、逃げ場と抵抗力を奪われてしまったのである。

それでもトーチカに似た設備に立て籠もって、抗戦を続けようとする者もあった。

人間が一人、やっと通れるような狭い通路の奥に多連装弓銃が据えられているため、誰も近づくことが出来ない。その奥には何人もの城兵が籠もっているらしい。正統政府軍の戦死者達がその隘路を埋めるようにして斃れていた。

兵士達は壁に身を隠しながら声をかけた。

「悪あがきを止めて出てこい！　捕虜として扱ってやる」

「うるさい売国奴共め！　帝国軍人の心意気というものを見せてやる」

まだ息のある負傷者を隘路から引きずり出そうとしていた正統政府軍の兵士が、奥から飛来した矢を受けて斃れた。
「くそっ！」
「よし、俺がいく」
息のある仲間を救うために、勇敢な兵士達が次々と傷ついていき、状況は膠着状態に陥るかと思われた。
「こっちです。この奥です！」
だが、自衛官達が遠巻きに囲む雑兵達を掻き分けて現れると事態は急速に動いた。
降伏の呼びかけに対して返ってくる罵倒混じりの拒絶。だが陸曹の一人は「あっそう。がんばってね」と肩を竦め、閃光音響筒を銃眼めがけて放り込んだ。
狭い空間での閃光と爆音は、立て籠もる兵達の脳髄を激烈な衝撃で揺さぶり、しばしの間昏倒させてしまう。
正統政府の兵士達がその隙に一斉に飛び込み、ゾルザル派の兵は瞬く間に捕縛されていった。
「はい、お終い。次行くよ」
こうして、ゾルザル派は抵抗虚しく制圧されていった。
城攻めの戦闘は、通常は城外からはじまって城壁に穴をあけ、あるいは乗り越えることで城内の一点に向けて絞られていく。だが、常道に反する形で始まったこの戦いは、戦場が城内の全てに広

がり、逃亡兵が城外へと散っていった。そのためやるべき事が山積してしまった。
残敵を追い詰めて掃討し、捕虜を収容して必要なら尋問をする。食糧や武器、資金などの収まった倉庫は抑えて厳重に管理をする。さらに負傷者には手当を施して、休養や後送の手配をし部隊を戦力として再編成するといったようなことを一時にしなければならないのだ。
「予想以上にマレの守備兵は数が少ないようだが」
健軍は用賀(ようが)二佐に問いかけた。
「確かに。城外に逃走したにしても、少なすぎます」
「情報の間違いか、それとも城外に出ているのか？　問題だな」
「調査させますか？」
「うむ。捕虜から聞き取り調査をするよう頼んでおいてくれ」
だが、そんなことでいちいち足を止めていては後れを取ってしまう。健軍は直ちに次の段階へと作戦を進めた。
「では、事後処理はマイモール閣下にお任せする。デュラン陛下の第二梯団、搭乗！　これよりフウエに向かいます！」
「おう！　いよいよ儂らの出番じゃな」
燃料・弾薬の補給と簡単な整備を済ませたヘリコプターに、戦うことなく後方で控えていたエルベ藩王国の兵士らが鎧の金具音を立てながらぞくぞくと乗り込んでいった。

「急げ急げ！」
重そうな鎧で身を固め、片足に義足をつけた国王が兵達の手を借りてＵＨ－１ヘリに乗り込む。シートの中央にどっかりと座り左右を見渡しながら「うむ。久しぶりじゃが、つい昨日のようにも感じるな」と感想を語った。
「陛下はこれに乗られたことがあるんですか？」
雑兵の一人がおそるおそるといった体で声をかけながら梨を国王に差し出す。
デュランは、呵々大笑してこれを受け取るとがぶりと噛みついて「うむ、美味い」と頷いた。そして緊張している若い兵士の肩を叩いた。
「どうした、怖いか？」
「はい。空を飛ぶのは初めてで」
「儂は、これで二度目じゃ。なあに、小舟で流れの激しい川に漕ぎ出すようなものだと思えばよい。ちっとは揺れるが、腹をしっかりと据えてかかればたいしたことはない」
デュランはそう語って兵士の肩をもう一度叩いた。
「戦場に出れば尊貴の別なく皆戦友じゃからな。背中は儂に任せて安心して戦うが良い」
「はっ、がんばります」
「おおっ、がんばれがんばれ！」
「では、離陸します！　掴まってください」

パイロットの合図で機体は離陸し、兵士らは「おおっ、おぅ！」と激しく動揺する機体に驚きの声を上げた。それを見てデュランは「わはははははっ！」と悪戯を成功させた子供のように笑った。

こうして次の城塞フゥエに襲いかかるべく、ヘリの群れは空を駆けた。

08

実を言えばゾルザルは、帝国正統政府軍が大規模な軍事行動を準備しているという情報を、かなり早い段階からつかんでいた。

檄文などというものをあちこちに送りつければ当然のことと言える。だが、それがなかったとしても兵の集まり方や準備の状況から、作戦の規模、発動時期などを、ほぼ正確につかむことが出来たのだ。

もちろん、ボウロが率いる密偵組織の功績である。

だがそれは最初から狙って得たというものではなかった。強いて言うなら怪我の功名に近いだろう。

それというのもフォルマル伯爵家の屋敷は、忍び込もうとしただけで発見され捕らえられてしまうからだ。しかも、そこから芋蔓式に市内外の潜伏拠点を暴かれ、苦心惨憺しながら築いた諜報網をあっという間に潰されてしまう。ボウロからそのことを報告されたテューレは、優秀な人材の喪

失と補充に悩むこととなった。

この手の影仕事は、金さえ出せばいくらでも人間を雇えると思われがちだが、実は違う。陽の当たらない仕事であるが故に、いい加減な性格の者、ならず者、そして性格的に拗ねた者などが、正業からあぶれてこの世界に入って来ることが多いからである。

情報源にしても、貴重な情報を漏らすという裏切り行為をやれる性格の者なのだ。と言うことは、当然のことながら集まって来る情報も、玉石混淆が当たり前となる。

いや、「玉」など、ほとんど入っていない。単なる噂話や、脳内情報源からの憶測が、あたかも敵中枢の金庫から命がけで盗み出された情報であるかのように送られて来るからだ。

従って対価を支払う情報組織の統括者は、厳しくあらねばならない。

信賞必罰傾向を高め、嘘や裏切りには厳しく、残忍で、脅迫的で、人の弱みにつけ込む血も涙もない冷血漢として振る舞うしかないのだ。

情報の重要さを知る者ほどこの傾向は強くなる。当たり障りのない、酒場で耳にできるような情報を送ってきて、「仕事はした。金をくれ」と言って来るような者に、「さぁ、虎穴を覗き込んでこい」と要求するためには、弱みを握って脅迫するなどの非情な手段を講じるのも、当然のことなのだ。

自分の情報活動のいい加減さや裏切り行為を棚に上げ、その後ろめたさに耐えきれなくなった者が、組織の厳しさや冷徹さ、非人道的な態度を誇大に語って自己を正当化する。そしてそれが諜報組織の性格として一般に流布し、諜報活動に携わる者が世間から白眼視されるようになるのである。

諜報組織という存在に陰湿かつ、非人道的な印象を抱く者は、どうしてそのような性格として伝わって来るのか、その分野に携わる人間の性格から考察する必要がある。

そんな中で、信用のおける密偵は珠玉的存在だ。それが優秀な者ともなればなおさらだった。

信用のおける人材とは、情報活動の重要さを認識し、真摯に拾い集めた情報を送ってくる者である。そういった者は大抵が自分の属する社会や共同体に対して強い帰属意識をもつ。共同体の利益のため、家族や友人のために、いい加減な仕事でお茶を濁すようなことをしない。

そして優秀な者とは、ここでは敵中奥深く忍び込んで、隠されているものを覗き込んでくる技術、能力のある者を意味していた。

ボウロは、そういった人材の供給源としてハリョという部族を利用していた。

とは言え、ハリョ族という亜人部族は実のところ存在しない。その実態も、一般には知られていない。ハリョとは、様々な亜人種が混在するこの世界特有の混血部族のことを意味するのだ。

通常はエルフならエルフ、ヒト種ならヒト種という同種の集まりでこの世界の部族社会は形成される。だが、互いに交配可能であるが故に、様々な組み合わせでの混血種も誕生していた。その子供は父母どちらかの部族に属して成長するものなのだが、そこから飛び出して「はぐれ」となる者も少なからずあった。

原因は様々だが、多くが異なる外見による偏見や、寿命などの違いから生活しづらくなるといったことが多い。そうしたはぐれた者同士が集まって次第に同族意識を抱くようになり、やがて自ら

をハリョと名乗るようになったのである。

彼らはこう考える。エルフもヒト種、ドワーフ、ヴォーリアバニーも、この世界の元からの住人ではない。外からやってきた外来種である。だが自分たちは違う。この世界で誕生した独自の種族であり、真の意味でこの世界の原種だ。つまりこの世界の主人は、自分達であるべきなのだと。

誰が提唱した思想なのかは今となってはわからないが、「はぐれ」であるが故に日々の暮らしにも困り、あえいでいた彼らは「自分達こそが優越者である」とするこの思想に飛びついた。それが彼らが抱く、周囲の全てに対する抱く憤りや、反感、そして虚栄心を正当化させてくれたからである。

こうした負の感情に駆られた人間には、悪所の住民達のように現実を認めて開き直る道と、虚栄にしがみつく二つの道がある。

ハリョを名乗るのは、自我を支えるためにゆがんだ選民意識、つまり虚栄に縋った者達である。だが虚栄とは、その文字が表すがごとく虚しいものだ。無い物をあると言い張り、あるものを無いと言い張り続けなくてはならないからである。

その根底にあるものを要約すると、「全ては他人が悪い」となる。自分が幸せになれないのは、他人が、社会が、世界が悪く、本来自分に与えられてしかるべきものが、不当にも誰かの手によってかすめ取られている……搾取されているという考え方である。しかしその考え方は憎悪しか生み出さない。暗いところから明るいところにいる人間を恨みがましい目で見るような生き方は、後ろ暗い感情を増殖させるだけである。怒りと憎悪を滾らせながら、ハリョ達は日々膨れあがっていく

感情のもって行き場を求めた。そんな彼らに、この間違った状態を解消するための具体的な行動指針を与えたのがボウロなのである。

「まず、影の部分で帝国に食い込みまする。そして我々の地位を向上させ、やがて内側から帝国を蚕食していくのでございまする」

誇大妄想とも言えるような目標だが、ハリョ達は帝国を内部から蚕食するという陰湿なやり方にとりつかれた。彼らはボウロの下に結集し、地下組織をつくり資金を集め、若者達を訓練し、密偵としての活動を始めたのである。

そしてその野望の第一歩こそがゾルザルへの接近であった。

ボウロはゾルザルの影を担う位置を占めることに成功した。やがて非公式ながら、皇太子府の密偵機関にまでに成り上がったのである。

だが、ここに来ての人材の大量喪失である。この事態はハリョ達の力を低下させるばかりではなく、その存在意義をも揺るがすものとなりかねなかった。

この状況を打破するために計画されたのが、拉致犠牲者を囮にした作戦だった。

だが、これにも失敗してしまった。

罠に嵌めたはずが、罠その物を食い破られ、折角の囮すらも奪われてしまった。

敵を侮ったわけではない。敵を翼獅子や、剣虎の群れぐらいに想定し、偏執狂とも思えるほどの罠を用意した。だが実際にやってきた敵は、それをはるかに超える古代龍級だったのだ。

さすがのボウロも、テューレを前にして頭を床に擦りつけるしかなかった。テューレもゾルザルの前で額を床にこすりつける羽目に陥った。

「……それほどの強敵だったと思うべきなのだろうな」

ゾルザルは、皇帝や、講和派貴族達の日本に対する態度を負け犬根性と考えていた。だが、今やそれを批難できない自分に気づいていた。

ここまで負けが続くと、悔しいとも感じなくなる。負け癖か、あるいは諦念とも言うべき感覚に近いかも知れない。

「いや。俺は負けに慣れてなどおらぬ。この失敗を元に、どうやったら対抗できるか、どうやったら勝つことができるかを考えている限り、一時の負けは負けではないのだ」

そう独白して自らを鼓舞するゾルザルは、テューレを通じてハリョに諜報活動の継続を命じた。

だが、人材が払底しかかってる現状では、闇に隠れ気配を消して、虎穴を覗き込むような潜入工作は続けられない。そのため、信用はできても能力の低さ故に手伝い仕事しかさせられなかった者を商人に偽装させて、実際に品物を売買しながら品物の値動きを見たり、外側から観察させたりするという方法をとらせたのである。

それは、たいした効果もないだろうが、やらないよりはマシという感じの選択だった。要するに時間稼ぎである。その間に人材の確保とこれと見込んだ者の訓練を急ぐつもりだったのだ。

ところがである。何故かこれが幸いした。

自衛隊とフォルマル伯爵家が築いた防諜網も、強行突破をはかってくる密偵への対処にその力を傾けすぎたのかも知れない。商人として通常の商売をしている限り、密偵達は怪しまれることもなくイタリカ城市に出入りすることが出来たのだ。

兵士らが垂らした太いロープに飛びついて滑り降りていく訓練の見物をして……「何やってるんです、あれ？」と尋ねたら「ああ、新しい城攻めのやり方の練習だ」と、隠そうともせず教えてくれたと言う。

これに加えて、兵糧や兵器の購入量、納品の期日といった商人の間で飛び交う通常の情報などを総合することで、正統政府軍の行動計画も推し量ることができた。

帝国正統政府軍が手配した食糧量は、全体の規模の割には少なかった。これはつまり敵の予定している作戦期間が短いこと、短期で作戦を終了しようとしていることが分かるのである。

さらに馬糧の多さが、作戦に投入される馬の数を知る手がかりとなった。

「ここから敵は、速度を重視した作戦計画を立てているということが分かるのです」

テューレが報告書を読み上げるとゾルザルは、怒気とともに言い放った。

「売国奴共め、俺と戦うのに外国の軍を引き入れるとは、その本性を隠す程のことすらも、出来なくなったようだ！」

皇太子府に居並ぶ議員達も続々と怒りの声を発した。

ウッディ伯爵が言う。

「殿下！　彼奴らの罪状に、ついに外患誘致が加わりましたぞ」
クレイトン男爵が続けた。
「彼奴らがそんなにも破滅を求めているなら、応えてやろうではありませんか！」
つづいて次期法務官のアブサンが檄文の写しを取り出して議員達に披露した。
「皆さん、これをご覧あれ！　売国奴共は蛮族にまで兵を出してくれと媚びているのです。元老院議員、帝国貴族としてどころか、ヒト種としての誇りまでも投げ捨ててるとしかとうてい思えぬ内容です！」
議員達はその内容を食い入るように読んで、そして嘲笑った。
「連中はそこまで困っているのか？　ならば戦おうなどと思わなければよいだろうに」
「情けない奴らめ」
「要するに、その程度の者だったということだ。国も売って、誇りも売って、自分の懐を暖かくすることしか考えておらぬのだ」
「そんな連中と、議場で肩を並べていたと思うだけで悔しくなって来るわい」
ひとしきり文句を言い合ったあと、議員達はゾルザルを振り返った。
「殿下、戦うのは当然としても、どのような手はずといたしましょうか？」
「うむ。総力を挙げて敵を迎え撃つ。皆にも、兵を率いてもらうぞ」
その言葉を予想していたのか軍歴のある議員達は勇んだ表情で頷いた。

「戦い方については今更言うまでもないことだ。この日のために議論を重ねてきたのだからな。帝国の興廃はこれよりの戦にある。有効と思われることごとくを行え」

ゾルザルの合図で廷臣達が床一面を埋め尽くすほどの巨大な地図を広げた。ゾルザルの傍に控えていたヘルム、ミュドラ、カラスタの三将軍の内、ヘルムが指揮杖を片手に進み出てそれを踏んだ。

「敵は、アルヌスとイタリカの二方向から進んで来るでしょう。マレ、フゥエ、レッキの城塞群は残念ですが、敵に取らせるしかありません」

「捨て石と言うことか？　だが勝つためならば致し方あるまい」

議員達から投げかけられる問いに、ヘルムは指揮杖の先で城塞群を示しながら頷いた。そして、杖の先を帝都へと近づけていく。

「もちろん、敵の戦力を漸減させるために極力抵抗させます。マレには歩兵、フゥエには翼竜部隊を増強して迎撃にあたらせましょう。しかし主力は我ら。初戦の勝利で調子づいた敵が勢いにのって、我が国土深くに入り込んで来たところで諸将の出番となります」

するとゾルザルも立ち上がって言った。

「皆もよく聞け。俺には必勝の策がある。直々に兵を率いてそれを行うであろう」

「おおっ、殿下がおいで下さるなら兵達の士気も天を衝くほどに上がることでしょう」

「だがそれを行うにはいささか時間がかかる。俺がそなた達に期待するのは、それぞれの部署にて皆が少しでも長く敵の足を止めることだ」

ヘルムは、地図に茶や緑で山や森が描かれた部分を指さした。そこは山は険しく、森は深く、道の狭い土地だ。

「敵を防ぐ絶対防衛線はここ。マーレスとその周辺といたします」

主戦論派議員達が、戦いの支度をするため皇太子府から勇んで飛び出していく。

人の流れに逆らうように進んだ古田は謁見室を覗き込んだ。すでにゾルザルも側近とともに執務室へと立ち去っており、謁見室は廷吏達が地図を丸めて後片付けをしていた。

古田は、謁見室の片隅に常備されている果物が傷んでいないか調べるふりをしながら、何気なく地図を覗き込んだ。古田が求めるＥＥＩ（Essential Element of Infomation／情報主要素）は、ゾルザルが何をしようとしているかである。このテルタに居残るのか？　あるいは出撃するのか？出撃するとしたらどの方面へと向かうのか？

この戦いはゾルザルを打倒しなければ終わらない。従ってゾルザルの居場所を常に把握しておく必要があるのだ。

だがいささか遅かった。地図は片付けられてしまい、廷吏達はそれを担ぎ出していった。一人残った古田は、熟れ過ぎで触るだけでつぶれてしまいそうな果物を回収しながらつぶやいた。

「いっそのことゾルザルを暗殺したほうが手っ取り早いんじゃないのか？」

直接刺し殺せとか、食べ物に毒を入れろと指示されるのは困るが、この謁見室の椅子にゾルザル

一人を吹き飛ばす分の爆弾をしかけたりすることには然程抵抗がない。戦闘で多くの犠牲を出すよりは遥かに良いことに思えるからだ。

「そう言うわけにはいかないのよ」

だが古田の考えは背後からの女の声によって否定された。

「殿下の暗殺では何も解決しないわ。政敵を暗殺で倒しても、その後の統治は成功することはないわ。かえって不安定の原因になるでしょう。きっと殿下に成り代わる誰かが台頭してくるわ。それにあの男を殺すのはわたしよ。その役は誰にも譲るつもりはないわ」

振り返ると立っていたのはテューレだった。

「テューレさん!?」

「マーレスよ」

「マーレス？」

「そう。殿下はマーレスに出撃なさるわ。なんでも必勝の策があるらしいわ」

「いいんですか？」

敵方のスパイだと名乗った男にそんなことを教えて良いのか。古田は言外にそんな意味を込めて尋ねた。

「いいのよ。もうわたしが殿下に叛意を抱いていることは知っているのでしょ？」

テューレはそう言って小さなボタン状のものを古田に放った。それは古田がテューレに仕掛けた

盗聴器だった。
「どういう仕組みかよくわからないけど、それって相手が何を考えているか分かるような道具なのではなくて？　そんなものをわたしに仕掛けたんだもの、タンスカの作戦も罠だと知っていてわざと強行したんじゃない？」
「……」
正しくは無いが、正解に近い洞察である。古田は肩を竦めた。
「貴方は知らなかったんでしょうけど、わたしは自分が身につける物は自分で洗濯しているの。亜人の、しかも愛玩奴隷の衣服を洗うような者はこの皇太子府にはいないわ。だから洗濯女を手懐けたとしても無駄だったというわけ」
古田は参ったとばかりに両手を挙げた。そして左右に人気が無いことを確認してから訊ねる。
「ボウロとか言うヒトは？」
するとテューレはそんなことまで知っているのかと目を丸くした。
「あの男には、用を言いつけたわ。だからここにいるのは今はわたしと貴方だけよ。それと、言っておきますけどボウロはヒト種じゃないわよ」
「ああ。亜人種の方ですか」
詳しい説明は面倒に感じたのか、テューレはそのことに深い説明をしようとはしなかった。
「でもどうして教えてくれるんですか？」

「あの男に敗北を味わわせるためよ。自分がやろうとすることのことごとくが失敗する。必勝の策も、何もかもがうまくいかなければきっと無力感に苛まれるわ。そして自分自身がいかに無能かを悟って絶望をする。それを嘲り、嗤って、その上で抉ってやりたいのよ」

うわっ……テューレの抱く憎悪はどれだけ根深いのか。

どん引きした古田は、危うく呻き声をもらしそうになった。情の深い女性だとは思っていたがそこまでとは。とはいえ、彼女がそうなるまでの経緯のほとんどを聞いていたこともあり、古田はそれもまた当然に思えた。愛する親兄弟や親しい友人を殺されたら、犯人に対して憎しみや強い怒りの感情をいだくのは普通のことだからだ。

「わかりました。その役柄はテューレさんに譲りますよ」

「そ、ありがとう。でも、貴方もずいぶんと優秀な間諜なのね」

「優秀ですか？　俺が？」

古田には優秀と言われるような自覚は全く無かったので、照れ隠しに頭を掻いた。

「ええ。だって間諜とはとても思えなかったもの。ボウロなんていまだに貴方が間諜なはずが無いって言い張っているわ。それぐらい真に迫った演技だったってこと」

「演技って何がです？」

「誤魔化さなくっていいわ。いろいろと話してくれたけど、フルタって本当に役者よね」

テューレの物言いには嫌みというか、どことなく古田を詰る気配があった。

その理由が分からないので古田は、何故、どうして？　という意味合いも込めて尋ねた。
「役者!?　僕がですか？」
「そうよ。だってそうでなきゃあんな嘘を……もしかして、貴方って素であああいうことが口に出来るヒトなの？　だとしたら間諜になるために生まれてきたような男ね」
「ちょっと待って下さい。何かこう、そこはかとなく罵倒されている感じが」
「そう感じさせちゃったらごめんなさい。でも、わたしが馬鹿だったわ」
一瞬でも、貴方っていいなって思ったのが間違いだったとは、口に出来なかった。
「どうしたんです？」
古田の語る夢に、自分の夢も重ね合わせてしまったとはとても言えなくて、「いいの。わたしが間抜けだっただけよ」と結論だけを口にした。
「だからどうしてそういうことになるんですか？」
「だって、お店を開くって話も嘘なんでしょ？　すっかり騙されちゃったわ」
すると古田は憮然とした表情で言い放った。
「失礼な！　随分なことを言ってくれますね！」
古田は言った。自分は根っからの料理人だと。そしてたまたまゾルザルに気に入られたから、間諜をやれと言われただけだと。
「この仕事を真剣にやっている人に失礼だとは思うけど、あえて言わせて貰います。僕は誰かを騙

すつもりで店の話をしたわけじゃないっ！」

テューレは古田の逆鱗に触れたことを悟って慌てて両手を振った。

「ごめんなさい！」

「ごめんなさいじゃないっ！　勝手に人を嘘つき呼ばわりして、勝手に自分を馬鹿だとか言って、勝手に自分が悪かったことにして自己完結ですか!?　いい加減になさい！　僕はここに来て、嘘を口にしたことは一度もない！　敵か密偵かと問われたことがないだけです！」

古田は腹立ち紛れにテューレを怒鳴りつけた。

奴隷に身を落としていても、誇り高いテューレにとって、しがない料理人に怒鳴られるなど許容できることではない。だがテューレは、怒るどころか恐縮していた。古田の言いようを聞いて、なるほどなと理解できてしまったからである。

嘘を全くついてないからこそ、この男には密偵らしさというか、怪しげな雰囲気がなかったのである。本当のことしか口にしていないからこそ、ボウロのような嗅覚の鋭い男が古田を絶対に密偵じゃないと言い張り、ゾルザルもまた信用したのである。

お前は間諜か？　敵の回し者か？　と尋ねていたら話は違ったかも知れない。だが、それを面と向かって問いかけるのも間抜けな話である。

「じゃ、じゃあ、お店を開くとか、話してくれたいろいろは本当の、本心ってこと？」

「そうですよ。この任務のおかげで手当がついたので、すぐにでも店を開けます。その時には是非

テューレさんに手伝って貰おうと、攫ってでも連れて帰ろうと思っていたけど、がっかりしました」
「えっ!?」
「テューレなんか、そうやって他人を疑って、自分を疑ってればいいんだ！」
言い放った古田は、テューレを邪魔だとばかりに押しのけて立ち去っていった。
呆然と立ち尽くすテューレ。
しばらくすると影から「テューレ様、戻りましてござりまする。……どうなされたのでござりますか？」とボウロの声が響く。
するとテューレは陶然とした表情のまま答えた。
「黙りなさい。今は、この余韻に浸らせておいてください」
「余韻って何でござりまするか？　何があったので？」
「嬉しいことに決まっているでしょう」
テューレはそう呟いた。

＊　＊

「売国奴共が動き出す前に準備の全てを済ませよ！　急げ！」
ゾルザルより帝国軍最高司令官に任じられたヘルムは、準備を強引に進めた。

ミュドラは武器や食糧、カラスタは資金を付近の属州や商人達から力ずくで徴発し、各地から集めた兵力を惜しむことなくマーレスに向けて送り出した。

さらに、時を同じくしてイタリカや、アルヌス周辺でゲリラ活動を活発化させた。各国の部隊や隊商を襲撃して物資の調達妨害を試みる作戦である。

「では、俺たちもそろそろ参ろうか」

そしてゾルザルはヘルムらと共に選び抜いた精鋭のみの一万を率いてテルタを出発したのである。

「こんな馬車まで用意させたのですか？」

ゾルザルに同行するテューレが、内装を見渡しながら驚嘆していた。

「うむ。前に、帝都に乗り込んできた不埒者が、荷馬車に偽装した乗り物を用いていたそうだ。衛兵共はまんまと誤魔化されてしまったが、考えてみれば使える策なのでな、用意させてみた」

それは外見的には柴や飼い葉を積んだ荷馬車だが、その実、中身は貴人用の馬車というものであった。

「おまえはこれを使え。俺も時々はこれを使う。どれ、ひとつ乗り心地を試してみるか」

ゾルザルはそう言ってテューレを押し倒した。

「試されるのは馬車の乗り心地ですか？　それともわたくしの乗り心地でしょうか？」

「両方だ」

実際、その偽装車は窓からの見晴らしこそ悪いが、乗ってみると案外に悪い乗り心地ではなかった。見晴らしの悪さも、外から覗き込まれる心配がないと思えば欠点ではない。

問題があるとすれば遮音性だろう。テューレの嬌声が外に丸聞こえなのだ。

ほんのわずかに開いた隙間から見える外には、農夫や商人に身をやつした兵士達の姿があるが、ちらちらと視線を向けて来るところからすると、若い兵士達にはかなり迷惑なことになっているようだ。これから戦場で血みどろの戦いに挑むことになる彼らにとっては、気の毒としか言いようがないことである。

列をつくって進むケンタウロスなどの亜人達も、聞き耳を立てているのかしわぶき一つたてず妙に大人しくしていた。

兵士達は陽が沈み暗くなってから少人数のグループに分散する。

闇夜を夜目の利く怪異達の先導を受けながら、地元の人間でなければ使うことのないような森道や山道ばかりを進むのである。

偽装馬車の乗り心地を確かめ終えたゾルザルが去り、一人残されたテューレは身繕いをしながら独り言のように呼びかけた。

「ボウロ……ついてきていますか？」

「はいでござりまする」

さすがに床下からというわけにもいかず、ボウロは御者台から声をかけてきた。どうやってかは知らないが御者と入れ替わっていたようだ。

「いよいよ帝国が二つに分かれて血みどろの殺し合いをすることになりました。これまでの苦労が

報われたというものです」
「親子兄弟の殺し合い。どちらが勝っても、帝国はかつてのような隆盛を取り戻すことは難しいことでありまする」
「混乱が長引き、犠牲者が増えるようにもう一押ししたいところですね。ゾルザルの秘策とやらが気になります。調べることは出来ますか？」
「調べてどうなさるおつもりで？」
「フルタに教えます」
「料理人のフルタですか？　何のためでございまするか？」
「殿下の動きを敵に伝えるためです。あの男は敵方の間諜なのです。あの男もそう告白していたではありませんか？」
「テューレ様。何度も申しまするが、フルタは敵の間諜などではございません。テューレ様をたぶらかすために、嘘をついてるのでございまするよ」
「ほほほほほ。私をたぶらかして何の意味があると言うのです？」
「フルタめはテューレ様に懸想しておりまする。だから意味ありげなことを語って、テューレ様の気を引こうとしているのでする」
「本当にそう思いますか!?　あの人がわたしに懸想しているなんてこと……でも、例えそうだったとして……でも、そう、それが何だというのです？　気にする必要なんてないじゃありませんか？」

「ですが、テューレ様もあの料理人にはお心を許してらっしゃる。あの者は嘘つきの夢語り。料理の腕前こそ確かでしょうが、実のあることは何一つ語ったことはございませぬる。いずれ開くという店ですら、氷がなくとも食べ物を冷やせる氷室を置くとか、看板に昼間のように明るい灯火を用いるとか夢のようなことばかり並べておりまする」

「あの人は嘘なんかついてません！」

「……」

「あの男は正直者なのです。貴方のような男にはわからないのです」

「お気を確かにテューレ様。正直な密偵などいるはずがありませぬ。ここ最近のテューレ様は、あの者の偽りに、毒されているかのように見えまする」

「わかりました。気をつけることにします。ですがボウロは殿下の秘策とやらを探るのです。わかりましたね？」

「容易いことでございまする。ですが、此度はお側を離れまするると、戻ることがいささか難しくなりまするがよろしいのですか？」

実のところゾルザルがどの道を進もうとしているのかは、付き従っている兵士達ですらわかっていないのである。

それぞれの部隊でも、厳重に封緘を施した暗号命令書を手渡され、定められた期日に、暗号を解くためのキーワードを教えられている兵士が名乗り出るまでは、指揮官ですら目的地がわからない

という処置が執られている。
　さらに、道々に出会う土地の住民や、旅人などは片っ端から殺してしまうという残忍な防諜体制が敷かれていた。これによってゾルザル率いる本隊は味方からすらも、どこにいるかわからなくなっているのだ。
「どの道を通ったとしても、最終的な目的地はマーレスのはずです。そこで合流しなさい」
「それまでテューレ様をお一人にしてしまうことになりまするが……」
「構いません。ここでゾルザルの秘策とやらを暴けば、あの男の絶望する顔が見られるでしょう」
「……殿下が絶望されると？」
「そうです。あの男ががっかりするところを見たいのです。いけませんか？」
「いいえ。ですが、テューレ様はその後のことを考えておいでございまするか？」
「何を考える必要があるのです？」
「……確かにテューレ様におかれましては必要のないことでするな。かしこまりましてございまする。ただちに仰せにしたがいまする」
　ボウロは、この言葉を残して気配を消した。
　ゾルザル率いる主力が移動を開始したのは、丁度イタリカからの檄文に応える諸侯達が兵力を移動させ始めた時に重なる。
　さらに自衛隊は、活動を活性化させたゲリラへの対応に追われて偵察力の大部分をゲリラが活動

する地域へと集中させていた。そのため、遙か後方を移動するゾルザル軍の姿を偵察機のカメラが捕らえることもなかったのである。

峻険な山々と奥深い森の広がるマーレス。

久瀬（くぜ）一等陸佐率いる第一戦闘団はこれまで快調な進撃を続けてきたが、この森で頑強な敵の抵抗に遭遇することとなった。

遠くから銃声や砲声が響き渡る中、久瀬は八二式指揮通信車の上部ハッチから顔を出すと双眼鏡に目を当てて音のする方向へと向けた。

「やはり道路がふさがれていたか」

『はい。鹿砦（ろくさい）を排除しようとしたところ、「眼鏡犬（スコープドッグ）」が五体、襲撃をかけてきました』

最前線の指揮官の声が無線を通じて送られてきた。

「眼鏡犬」とは、重装オーガーの自衛隊内での通称である。テレビアニメに出てくる人型陸戦兵器に外見が類似していたため、その名で呼ばれるようになったのである。

「で、状況は？」

『はい、キャリバー（重機関銃）で応射したところ敵は森の中に逃げ込みました』

「わかってるな？　隊員達に深追いさせるなよ」

待ち伏せ、罠への誘い込みは、これまでも多用されて来た戦術である。というより、ゾルザル派

に許された戦術はこれより他にないとすら言えた。従って、この地域で敵と接触した場合、主力はベッサに迂回して進むことになっている。この戦いの目的はゾルザルを討つことにあり、敵と戦って撃滅するのは、そのための手段に過ぎないのだ。

だが、だからといってこの森に隠れている敵を放置してよいわけでもない。組織的な抵抗ができないよう、待ち伏せする敵をあぶり出し、撃破しておく必要があった。

「敵が来たぞ。気合いを入れろ。へまするな！」

これまで第一戦闘団隷下の各中隊は戦闘車両を先頭に押し立てて、散発的な敵の反撃を押しつぶすように前進して来た。だが、見通しが悪く、足場もしっかりしない山岳地域や森林内では、そうした装備が力を発揮しにくい。動きが悪くなったところで人海戦術をかけられれば、陸上自衛隊でも苦戦を強いられてしまうだろう。しかも「眼鏡犬」の身につける鎧は分厚い鉄の塊だ。五十口径級の火器でなければ倒せない。六四小銃を主装備とする普通科の隊員にとっては相当に危険な相手なのだ。では、どうしたら良いか。敵の隠蔽を引っ剥がすのが一番である。さっさと姿を現してもらう。これは、そのための威力偵察なのである。

あちこちで、迫撃砲の発射音と着弾音がこだまし始めた。偵察ヘリのＯＨ－１ヘリからの誘導で着弾が調整されていく。

「一佐。各中隊は敵と接触、戦闘状態に入っています」

「うむ。連絡路の確保には特に気を配れ」

人間の目は前にしかついていない。敵味方が前後に入り乱れて混戦に陥るのが、もっとも危険だった。その為には敵の浸透を許してはいけない。とはいえ、どれほど機械が発達し、装備が新鋭化してもゲリラ対策に妙手はない。

敵の攻撃を払いのけ、逃げる敵を追って居場所をつきとめ、砲弾の雨を降らせて組織的な抵抗力を粉砕し、バラバラとなった残敵を掃討する。比喩表現に「虱潰し」という言葉があるが、それに似た地道な作業だけが対ゲリラ・コマンド戦を勝利へと導くことができるのである。

普通科の隊員達は、銃を構えた姿で森の木々の間をゆっくりと進む。

「『眼鏡犬』が出てるらしい。擲弾の用意をしておけよ」

小隊長の命令を受けて、擲弾を引っ張り出す作業に気をとられた隊員に、空気を切り裂く音と共に矢が飛来する。

隊員が倒れ、ただちに反撃の銃火が浴びせられた。すると木の上から帝国兵が落ちてくる。

それを合図に、地に伏せて体に木の葉をまとって隠れていた帝国兵達が、一斉に姿を現して獰猛な殺意を顔に貼り付けて向かって来た。

指呼の距離での近接戦。

犠牲も顧みずに襲ってくる敵に、隊員達は根気強く銃撃を浴びせかけた。

機関銃の掃射が放たれ、その弾雨が敵をなぎ払うと同時に、大木の樹皮をあたかもチェーンソーのごとく削り取っておがくずをまき散らした。

巨大な鋼鉄の鎧をまとったジャイアントオーガーが姿を現す。巨大な棍棒を振りかざしながら数頭の巨人が隊員達に近づいた。

「『眼鏡犬』の足は速くない！　慌てず、ゆっくりと下がれ！　擲弾！」

隊員達は一斉に後退した。用意を終えていた隊員達は「撃て」の号令で小銃擲弾を放った。

そのすべてが命中したわけではない。だが、四方八方から放たれる弾頭の爆煙に包まれながら、一発の直撃を受けた重装オーガーが倒れた。

もちろん、すべての戦いが、このようにうまく運ばれたわけではない。

敵の待ち構えている中に踏み込んでしまい、前後左右からの痛烈な襲撃を受け、オーガーの振りまわす棍棒に叩き潰される隊員も出てしまった。だが、全般的には丁寧に包囲して、じわじわと追い立てるという戦いによって帝国軍の組織的な反撃は封じられていった。

久瀬は振り返ると地図を覗き込んでいる幕僚に問いかけた。

「敵の位置は特定できたか？」

「はい。敵は逃げ散らずに一カ所に向かっています。左前方の一番手前の高地から、二番目の高地のあたりですね。我々をそこまで引き込もうという企図なのでしょう」

退却を始めた敵の移動方向を地図で線引きすると、「一番高地」と「二番高地」の谷間で交点が出来る。敵の移動速度を勘案すると……。

久瀬は「五～六分後には砲爆撃を加えたいところだな」と指先で地図を叩いた。

「もう少し範囲を絞った方が効果的です。今、上からOH-1（ニンジャ）が確認しています」
上空をOH-1ヘリが舞っている。その指示で砲撃の目標が定められていく。
「砲撃開始！」
後方に控えた特科の七五式百五十五㎜自走榴弾砲が火を放ち、一発あたり約七キログラムのTNTを炸薬として充填された砲弾が谷間へと降り注ぐ。その爆発によって森は炎に包まれ、その衝撃波は大地を構成する土砂を、あたかも混ぜ返すようにひっくり返した。
巻き込まれた帝国兵達の多くが命を落とした。そして奇跡的に助かった者もこんどこそ本当の壊走を始めた。それは敵を誘い込むための組織的な退却ではなく、自分が生き残るための逃亡であった。

「ウッディ伯爵、敵が参りましたぞ」
息を切らせたクレイトン男爵が、斥候の兵士とともにベッサの丘を登ってきた。
「ああ。鉄トンボも舞っている」
見上げれば偵察ヘリ（ニンジャ）が、弓や投石機では決して届かない高度から見下ろしている。
丘の頂にいるのは伯爵と兵士達数人だけである。
空からはここがどう見えるだろうか？　自分達がいるのが見えているのだろうか？　見えているとしたらその目にどんな風に映っているのだろうか？　と、ウッディ伯爵は思った。
「敵のほとんどは、鋼の箱車に乗っております」

この地にあるのは石ころと、その隙間から生えている雑草だけだ。その荒野を縦断するかのように一本道が開かれていて、敵はこの道をやって来る。

「うむ。今見えた」

ウッディの居る場所からも、近づいてくる敵を遠望することが出来た。

斥候の報告を確認したウッディ伯爵は、「予想通りである。手はず通りにせよ」と命じた。

このベッサはマーレスから南に向かって馬で一日ほどの距離にある。

敵が難所とも言えるマーレスを迂回するなら、必ず通らなければならない交通上の要所であった。

ウッディは傍らに立つ兵士を伝令として走らせた。

「よいか。急いては事をし損じるぞ。かならず命令を待てと、兵らに繰り返して伝えよ」

兵士は、鎧の金具の擦れ合う音を立てながら坂道を駆け下りていく。石ころや砂礫を蹴って、土埃をあげながら走り、突然地面に倒れるようにして伏せると、地面に向けて声をかけた。

「急いて事をし損じるな。命令を待て」

そして、立ち上がってまた別の場所へと走る。

よく見ると、その地面には裂け目があった。そしてその薄暗い空間を覗き込むと、いくつもの目が光っていた。

「命令を待て！」

ここはマーレスと違い、身を隠せるような森がない。だがそのかわりに大きな岩が転がり、地面

は起伏に富んでいる。ウッディはそれを武器にすることにしていた。

ゴブリンやトロルを使役して、待ち伏せのための壕を掘らせ、空からの偵察にも耐えるように掩蓋を被せ分厚く土を盛り上げた。そしてその中に兵達を隠し、ぎりぎりまで敵を引きつけて襲いかかるように指示したのである。

もちろん一カ所や二カ所の話ではない。ベッサの至る所にこうした塹壕が築かれ、およそ一万人もの兵と怪異達が身を隠している。

こうして重層的な陣地の奥深くに、敵が入り込んだところで一斉に襲いかかり、敵味方合い乱れる混戦へと巻き込もうというのが彼の目論見であった。

だが、ウッディが予想だにしない事態が起こった。

帝国兵が鋼の箱車と呼称している敵の兵器が、道から外れて塹壕に向かってまっすぐ突き進んだのである。

そしてその一両が掩蓋を踏み抜いた。要するに中へと落ちたのだ。

敵を落とし穴にひっかけた。それが最初から狙っていたことならば作戦成功と誇れるところである。だが敵が塹壕に落ちてくるとは思っていなかったため、中に隠れていた帝国兵達も、一瞬どうしたら良いかと反応に困ってしまった。軽率に動くな、合図を待て、と念を押されていたこともあり、一瞬のお見合い現象が起きた。

陸自の隊員達からすれば、落とし穴におっこちて、「どうした！　何があった!?」と八七式偵察警戒車(RCV)

から降りてみれば、そこに敵がぎっしりと詰まっていたのだからびっくりである。
「あ……」
「あ」
第二次世界大戦での出来事である。米兵が友軍だと思って近づいたところ、実は相手がドイツ兵だったということがあった。この両者は互いに戦うことなくそのまま離れた。互いに相手を味方だと思っていたため、互いの顔や服装を見て敵だと気づいた時には、どうしていいかわからないまでに近づいていたのだ。彼らに出来たことは互いに顔を前に向けて進み、すれ違うことだけだった。
それに似た現象が、塹壕の中に隠れていた帝国兵と自衛官達の間で起きた。
隊員の一人が、思わず「あ、ども」と手を上げたりした。すると帝国兵も「あ、ああ」と戸惑いながら手を上げて返したのだから互いに相当混乱していたに違いない。
だが「何をやってる?」と軽装甲機動車がやってきて、中から指揮官が声をかけたことで、そのとぼけた雰囲気が破られた。
「馬鹿！　敵だっ、撃て撃てっ！」
号令に我に返った隊員達が引き金を引く。そしてその発砲音を合図にして、周囲に隠れていた帝国兵達が一斉に姿を現すという遭遇戦が始まってしまった。
丘の頂でウッディ伯爵は歯がみして悔しがった。
「くそっ！」

「どうしますか伯爵」
「この期に及んで躊躇っている余地などない！　戦え、戦うのだ」
ウッディ伯爵の命令によって、あちこちに伏せていた帝国兵が一斉に飛び出した。完全に取り囲むという目論見こそ駄目になったが、敵に肉薄して白兵戦に持ち込むという計画そのものはまだ失敗に終わったわけではないのだ。
「進め！　進め！」
弾雨が降り注ぐ中で、あちこちに転がる岩に偽装した張りぼての中から、攻城槌が引き出される。柴を積み上げた荷車に火が放たれ、坂の上から一斉に押し出された。さらに戦象や犀に似た恐獣が引き出され、地面を叩くような足音を轟かせながらものすごい勢いで進み始めた。
火の車、そして攻城槌。さらには恐獣の群れ。そして湧き出てくる怪異達。

ゴブリンやトロルが七四式戦車に蟻のように群がってよじ登り、主砲にまたがる。そして砲弾をはじき返す頑強な装甲に、剣を何度も何度もたたきつけ甲高い音をさせ、破壊可能なライトなどの装備を破壊していった。
『右も左も敵ばっかりだ！』
『た、助けてくれ。反撃の方法がない！』
とりつかれてしまえば対抗手段のない戦車からの悲鳴が無線機に流れた。敵兵を振り払おうとし

ているのか、あちこちを暴走する戦車もあった。実際それではじき飛ばされる敵兵もあったが、隊列を崩し、敵中にかえって飲み込まれる結果となった。

突然目の前にあふれ出した敵兵に自衛官達は驚きを禁じ得なかった。目に入る敵を相手に遮二無二発砲することしか出来なかった。

「慌てるな。落ち着いて対処しろ。無理に振り払おうとするな。味方に取り除いてもらうのを待て！」

冷静な指揮官の声に次第に隊員達は落ち着きを取り戻しつつあった。

だが次々と押し寄せてくる攻城槌や戦象や犀部隊がそれを許さない。それらは装甲車の側面にすさまじい勢いで激突し車体を大きく揺らした。装甲を激しくへこませ搭乗していた隊員達は放り出されてしまう。隊員達は急いで方陣を組んで近づこうとする敵を振り払った。

六〇式自走無反動砲が火を放ち、その直撃弾を受けた犀があたかも蹴飛ばされたかのように転がって息絶える。

七四式戦車の主砲が咆哮し、群がりしがみついていたゴブリン達は、その衝撃で数メートルもはじき飛ばされてしまった。

だがそれでも帝国軍は数の暴力によって、自衛隊を包み込む勢いを見せていた。

「よしっ！　進め進め、兵達を進ませよ！　ゾルザル殿下がおいでになるまでなんとしても、ここを死守するのだ」

ゾルザルは必勝の策があると言った。ウッディらにできることはそれを信じて少しでも長く敵を

この地に釘付けにすることだけだったのである。

狭隘な谷を形作る崖の側面をえぐって造られた洞穴の内部。その暗がりの奥に無数の翼竜がとまっていた。

どの翼竜にも鞍がおかれ竜騎士達が跨がって指揮官の命令を、息を呑んで待ち続けている。

指揮官のポダワンはその禿頭ににじむ汗をしきりと拭きながら、洞窟の開口部に身を潜めるようにして地平線の彼方をじっと見つめていた。

敵の偵察兵はめざとい。どうやってか知らないがほんの少しでもその躰を曝すと見つけ出して攻撃を加えてくる。そのためポダワン達は自身と、翼竜に泥を塗りたくった。顔に泥を塗るという言葉があるように、それは誇り高い竜騎士達にとっては屈辱的なことである。だが、勝つため、そのためだけに全てをこらえ、敵を待ち続けていた。

空の向こう、かなり高い高度には偵察の翼竜が単騎で飛び続けている。

敵の偵察に発見され、空中で盛んに旋回し、上昇と急降下を繰り返している。

「見つかってしまったようじゃ」

翼竜が墜落していく。だが地に激突するまでのわずかな合間を利用して、偵察兵から、太陽光を手鏡で反射させての信号が送られて来る。帝都防空での経験から編み出された通信方法である。

「ポダワン伯爵。四回点滅、間を置いてさらに四回です」

「うむ、敵が近づいて参ったという報せだな……死に瀕してもなお任務を遂行しようとする心意気は真にあっぱれ。皆もよく聞け。おそらくここが我らにとっては最後の戦いの場となるであろう。ここを抜かれれば後は無い。そう心得て奮起するのだ、いいな！　では参ろうぞ！」

翼竜達は一斉に翼を広げた。

「陛下。もうそろそろフゥエ城塞が見えて参ります」

副操縦士がデュランの耳に口を寄せて言った。

第四戦闘団のヘリの群れは平原地帯から、深い森と険しい山に囲まれた山岳地域へと入った。険しい山間を縫うように進んでいく。この谷を塞ぐようにして城塞が立ちはだかっているはずであった。

兵士達は身を乗り出すようにして眼下を流れる緑の森を見て「すげぇ」とその速さに驚嘆している。高い視点からの雄大な景色に慣れた分、匍匐飛行の迫力はいっそうに引き立つのだ。

デュランもその勇壮さに気分の昂揚を抑えることが出来なかった。

「さぁ、帝国の奴らに、目に物みせてやるかの」

剣の柄を握る拳にも思わず力が入った。

「ん、なんだ？」

だが、どこに隠れていたのか、突然、丘陵の稜線を超えて翼竜の群れが横切った。

「あぶない！」

上空から鎖をつないだ網が次々と投下される。そのほとんどが見当違いの方角に投げられたのだが、数機のヘリがローターを絡め取られた。たちまちヘリコプターは揚力と安定を失い、独楽のように激しく回転しながら急速に高度を下げる。

「何事だっ!?」

はげしく揺すられる機内で、振り飛ばされないように掴まるのが精一杯の兵士達。その一人が敵の姿を認めて怒鳴るように声を上げた。

「ゾルザル派の竜騎兵だ！」

周囲では射撃が始められ、空中からの襲撃を躱すべく機体は激しい旋回を繰り返す。

「へ、陛下！　こ、こ、これは大丈夫なんでしょうか!?」

投げ出されまいとシートにつかまった兵士が声を張り上げる。

「んなこと、儂が知るか！　喋るな、舌を噛むぞ！」

ちょっと揺れるどころではない事態に、デュランも声を張り上げることしか出来なかった。

「よし、奇襲に成功！」

ポダワンの「一気に落とせ！」という号令と共に、竜騎兵達は一斉にヘリコプターの集団に襲いかかった。

＊　＊

ゾルザル麾下の帝国軍一万は集結を済ませると軍装を整え、武器を配り、隊列を組んだ正規の軍としての体裁を整えての行軍を始めた。

最初は長蛇の列を作って進んでいたが、街道が平原にさしかかると洪水が堤防を越えて溢れるように、兵士達も道から平原に出て横幅を広げ始めた。

「横隊！　右向け前へ」

部隊長の「すすめ！」の号令で、兵士達はあたかも精巧な機械仕掛けのように方角を変え、隊列を作り替えて、長蛇を四角い隊形へと転換する。それぞれの隊旗を先頭に押し立てて、槍先を並べ、楯をそろえて、あたかも一頭の生き物のように歩調を整えていった。

「陣形を整えよ！」

ミュドラ将軍の号令で、それらの方陣は市松模様のように互い違いに並んだ。

ゾルザルの本陣では、彼に従うヘルム、ミュドラ、カラスタの三将軍、そして幕僚達の馬が続き、帝国国旗、帝国軍軍旗、皇太子軍旗など様々な色彩の旗を掲げた旗手がその後を追っていた。さらに命令を伝達し戦意を沸き立たせるための鼓笛隊が続く。

テューレが乗っていた偽装馬車も、偽装を解かれて通常の貴人用馬車としてゾルザルの隣を進んでいた。

「ゾルザル様。ここは本当にマーレスなのですか？」
テューレは首をかしげながらゾルザルに尋ねた。
険しい山と深い森が広がる難所へと向かっていたはずなのに、たどり着いたこの地は、なだらかで緑豊かな平原が広がっている。不思議に思うのも当然と言えた。
だが、ゾルザルは意外そうに答えた。
「誰が、マーレスに向かうと申した？」
「はい？」
「俺は、必勝の策があると申しただけで、マーレスに向かうとは一言も告げておらぬ」
マーレスでは、主戦論派の将軍達や兵士達がゾルザルの来援を信じて必死に戦っているはずである。なのにいったいどうして。テューレは戸惑いを隠すことが出来ず、狼狽えるように尋ねた。
「……ではここは？」
「フォルマル伯爵領のイタリカだ。見ろ」
ゾルザルの軍は陣列を組んだまま丘の稜線を超える。
すると突然視界が開け、緩やかな下り坂の向こうにイタリカの城市が見えて来た。
「まさに敵の急所だ。敵の中枢を陥とし皇帝の身柄を押さえれば、俺たちの勝利だ。これが、俺の必勝の策だ」
「敵の意表を突くことが出来ました。獅子や龍の目鼻は大変に鋭いですが、獲物に襲いかかる時だ

けは前しか見えなくなるもの。その時こそがつけ込む隙なのです」
幕僚の一人が言い、ヘルムがゾルザルに語りかけた。
「今のイタリカは全くの無防備です。かなり楽が出来ましょう」
イタリカの正統政府軍が防御態勢を整える前に、襲いかかることが出来れば理想的だとヘルムは語った。城門が閉じられないうちに城内に突入できればなおよいが、いくらなんでもそれは都合の良すぎる展開で期待は出来ない。敵とて木偶ではないからだ。
なので行うべきは強襲ということになる。敵が混乱している内に迅速に城壁にとりつくことに成功すれば、多少の被害は出るだろうが短時間で陥落させられるに違いない。
「手間がかかるようなことはしたくないぞ」
「はい。時間をかけ過ぎると敵の本隊が戻って来てしまいます」
じっくり時間をかけていられない理由がそれだ。ヘルムは限られた時間内に敵の城を陥落させるという難題に挑まなければならない。
もちろんゾルザルもヘルム一人に全てを押しつけるつもりはない。正攻法に併せて奇策を併用することで、勝利の確率を上げようと努力している。
「ボウロ……皇帝の身柄確保は任せたぞ」
テューレの馬車を操っていた御者が、振り返る。
「は、くひひひひ。この度の戦いは我らにとっても決戦。ハリョの全戦力を、根こそぎつぎ込み

まする」
「ボ、ボウロ！　貴方なぜここに」
ボウロがここにいるはずがない。「答えなさいボウロ。貴方が何故ここに居るのですか？」というテューレの問いかけに、ボウロは首を竦め、ゾルザルやヘルムが嗤った。
「テューレ。ボウロがここにいて何か不都合でもあるのか？」
ゾルザルに問われてテューレは怯えた。
「い、いえ」
「お前はボウロとの連絡役に過ぎない。俺はこれまでそう言ってきた。連絡役を飛び越して俺が直接命令を下したとして、何か不都合でもあるのか？」
テューレは首をぷるぷると振った。
「ボウロがここに居るはずがないと思うのは、何かを探らせるつもりだったからではないのか？」
「い、いえ、それは。そんなことは」
「隠さなくていいんだぞ。お前が俺を裏切っていたと聞いた時、俺もショックだった。眠れぬ日々が続き、腹立ち紛れに八つ当たりを奴隷にしてしまい、何人も殺してしまったほどだ」
ゾルザルの言葉は語れば語るほど、どんどん力と怒りが込められていく。
「かわいそうなことをしてしまった。そうは思わないか？　かわいそうだよな。かわいそうな奴隷達。俺は女達を皆殺しにしてしまった。それぐらいに腹が立ったんだ」

テューレは息をのんだ。
ゾルザルは馬を下りると、ゆっくりとテューレの乗る馬車へと歩み寄る。
テューレは竦んで動けなくなっている。ゾルザルは腕を伸ばすとその腕力でテューレを引きずり下ろす。
「で、殿下、違うのです」
「いわなくて良い。しずかに、黙れ、口を閉じろ」
「ああ、殿下、信じて下さい」
「黙れと言っているっ！」
ゾルザルの怒声にテューレは身を竦ませて口を閉じた。するとゾルザルは満足そうに微笑む。
「考えてみれば、俺もお前を裏切っている。お前の部族を助けて欲しいという願いを聞きとげることなく、滅ぼしてしまったのだからな。お前の仲間を、一族を捕らえ、奴隷として売りさばいたのは俺だ。しかもそれをずうっと黙っていた。何時気づくだろうか、気づいた時、お前がどんな顔をするだろうか、悲しみに嘆くだろうか、怒りに駆られて俺をなじるだろうかとその姿を想像して胸を躍らせていたのだ。寝ている間に俺を刺し殺そうと、刃物を懐に忍ばせて近づいてくるんじゃないかと、そんなことになることを期待していたんだ」
「そ、そんなことを」
「ところがお前はいつまでたっても、何の反応も見せない。あまりにも知らぬ顔を続けているもの

だから、お前の部族がどうなったかが分かるような書類を目につくように置いたりもした。兎が何羽売れましたといった報告書をな。読んだであろう。読んだはずだ？　違うか？」

「ひっ……」

「それでもお前は態度を変えなかった。だから俺は騙されてしまった。お前が俺のことを愛しているものだと思った。恨みも辛みもすっかり水に流したと思った。随分と冷たい情の薄い女だと思った。正直言えば非常にがっかりさせられた。だが、その代わり便利な女奴隷が出来たと思えばそれはそれで許せた。お前は俺が傷ついた時、励ましてくれたし、元気づけてもくれたからな。俺を喜ばせるためなら何でもしてくれた。あれはとても嬉しかった。それらを本心だと思って、俺はお前をすっかり信頼して、多くの仕事を任せてしまった。それをお前は裏切った。いったいどうしてくれようか？」

「そんなものは信頼とは言わないわ。それはタカをくくると言うのよ。応えてやる義理はないわ」

窮鼠が猫を咬むようにテューレはゾルザルに腕を振り上げた。だがゾルザルの太い腕に遮られ、逆に押さえ込まれてしまう。

「そうだ、それでいい。お前には俺を恨む権利がある。復讐の刃を向ける権利がな。お前の怒りは正当なものだ。だがそれの示し方が良くない。裏切りっぱなしだ。最初に俺の期待を裏切り、次に俺の信頼を裏切った。そして今も、俺を裏切ろうとしてる。この体たらくはいったいどうしたというのだテューレ。お前ほどの女なら裏切りがバレたら命乞いなどせずに潔いところを見せるべきな

んじゃないのか？　命乞いをして、それがダメなら罵倒するなんて、あまりにも無様すぎるぞ」
「どうして、あんたの都合に合わせてやらなきゃいけないの？」
「あん？　もう一度言ってみろ」
「だから、どうしてあんたなんかの思った通りに振る舞ってやらなきゃなんないの!?」
テューレは全身の力を込めて叫んだ。せめて、ゾルザルの鼓膜なりを声で殴りつけてやらなければ気が済まなかったのだ。さすがにゾルザルも顔をしかめた。
「……なるほど、なるほど。お前は俺の期待を裏切るということで、復讐しているということか？」
「そうよ。あんたの思った通りになんて、絶対に振る舞ってなんかやらないわ」
「ほほう。だったら、俺の期待を最後まで裏切り通すことが出来るかやって見せるがいい。俺はお前がどこまでそんな突っ張った態度をとれるか是非見てみたい」
するとボウロが馬車から降りてきて頭を下げた。
「くひひひひひひ殿下。どうぞわたくしめに、この兎女を下げ渡されますようお願いいたします」
「そうだな。戦い前の兵士達を疲れさせるようなことはしたくないからな。お前達ぐらいがちょうど良いだろう」
戦場にいるのは兵士ばかりではない。ゾルザルのような男が従軍するにあたっては、身辺の雑用や下働きのための奴隷達が必要なのだ。ボウロはその奴隷達の代わりに自分の手下を入れていた。
「な、いったい何をしようと言うのです？」

「俺は、お前が泣き叫び、許しを請う姿を期待している。慈悲の死を与えろと叫ぶことを期待しているぞ」

その言葉を合図にボウロを先頭に七〜八人の男が迫った。

男達の下卑た視線に自らの運命を悟ったテューレは、ぐびりと唾を飲み込むと勇気を奮い起こして叫んだ。

「ふ……ふん！　この程度の人数で足りるもんですか。わたしに許しを請わせたかったら、この十倍はもって来なさいゾルザル。揃いも揃ってあんたのお粗末な逸物と同じサイズだったら、十倍どころか百倍は必要でしょうね！」

「な、なんだと？」

あまりの言いようにゾルザルも目を剥いた。

「俺は、そこまで……」

お粗末ではないと言い返そうとするも、テューレは被せるように叫んだ。

「違うというなら、さっさとズボンを下ろして逸物を並べて見せなさい！　最初に、誰が一番かをとっくりと見比べてあげるわ。どうせひと撫でかふた撫でで果ててしまうでしょ？　そんな代物でわたしに許しを請わせたいなら回数を覚悟しなさい。もうだめだ勘弁してくれと言っても、許してやらないから、そのつもりで来なさい。枯れ果てて打ち止めて、どんな女を見てもピクリともしなくなるようにしてやるから！」

さすがにそれは嫌だと思ったのか、男達は股間を押さえて一斉に一歩退いた。テューレの迫力に圧倒されてしまったのだ。

誰ともなくこんなつぶやきが漏れ聞こえた。「この女やだ。食い千切られそう」

ゾルザルまでもが、気がつくと後ずさっていた。

「殿下。それどころではありません」

すると、カラスタ将軍が声をかけてきた。

せっかくの好機である。無防備な都市を前にして軍隊が整列してゾルザルの号令を待っているのだ。こうして無駄に時間を費やしている間にも、イタリカは防備の体制を整えつつあるはずだった。案の定、城門が開かれて中から兵士達が出て来る。見ていると城市を背にし、横に方形を広げた陣形を作り上げようとしているようであった。

「ちっ」ヘルムや幕僚達はそれを見て舌打ちした。

「売国奴共め、野戦でも挑もうというのか？」

ヘルムがゾルザルを振り返って叫ぶ。

「殿下！　まだ間に合います。ただちに攻撃命令を！」

陣形が整わないうちに襲いかかれば、敵はまともに戦い続けられない。混乱に陥り敵は城内に逆戻りすることになるはずだ。予定とは違うが、それでも充分に有利に戦えるとヘルムは言った。

だがゾルザルは首を振った。

「いや、待て。あ奴らが野戦に応じてくれると言うのなら、野戦で行こうではないか。その方が城攻めより手っ取り早い」

実際、城攻めは手間がかかる上に犠牲も大きくなる。それでも勝てるとは限らない。それに対して、野戦は数の多い方が勝つように出来ている。

数という要素は「戦力」を勘案する上での基本なのだ。そこから割り引いたり、割り増したりする要素が、兵器の質だったり、作戦だったり、地形だったり、兵の士気だったり、指揮命令系統の優劣だったりするのである。

そして、それらの要素の中で最も強い影響力を持つものこそが城郭の防御設備だった。

これに頼って準備万端の状態で籠もられると、大軍であっても勝つことは難しくなる。その優位を自ら捨てて野戦に応じてくれると言うのだから、ありがたいくらいなのだ。

ゾルザル派帝国軍とイタリカの正統政府軍は、兵器の質、指揮命令系統という点ではほぼ互角だ。従って野戦は、作戦の優劣や、兵の士気、そして兵の数を競うものとなる。すでに数の要素で敵をはるかに優越しているのだから、ゾルザルが野戦の方が都合が良いと言い放つのも理にかなっている。

次期法務官にして、帝権擁護委員長（オブリーチニキ）を兼ねるアブサンが言った。

「ヘルム将軍。ご覧いただければわかるように、敵の数は約六千。これに対して我らは一万。正面からぶつかっても余裕で勝てますぞ」

カラスタやミュドラもその意見には同意した。ラッパ手を呼び寄せて野戦の準備を伝えさせる。

たちまちラッパ手の奏でる金管の音が響き渡った。兵士達は城攻め用に用意した梯子などをその場に置き棄て、隊列を整え直していく。

陣列も、攻城の態勢から野戦用へ入れ替えられていった。弓箭兵達と、楯を構える歩兵達がその立ち位置を入れ替えた。

兵士達は剣を抜き、槍を構え、矢を番(つが)えて気構えを野戦へと切り替えていく。

「テューレ、戦いが終わったら、お前が望むように男を十倍用意してやる。それを楽しみに待っていろ。ボウロ、テューレは後で処分するからどこかに閉じ込めておけ。それよりも今は皇帝だ。敵に籠城されるよりは、やり易くなったはずだ。失敗は許さんぞ！」

「はいでござりまする」

ボウロは手下達にテューレを縛らせながら、ゾルザルに頭を垂れた。

「では、戦争を始めるとしよう」

ゾルザルが指先だけで合図する。これを受けてヘルムが命令を発した。

「前進！」

号令があちこちから轟いた。

「前へっ、進めっ！」

静まりかえっていた兵士達が歩調を整え、軍靴(カリガ)の響きをあげながら前進を開始する。楯を構え、その後ろに身を隠しながら、剣を、槍を構えゆっくりと進んだ。

これに対して、正統政府軍の陣列はイタリカ城市の前に陣を構えたまま微動だにしない。数が少ないこともあって、守勢をとることに決めているのだろう。

「守勢をとるなら、何のためにわざわざ出てきた？」

敵の拙劣な指揮を罵倒するかのように呟くヘルムが「第一列。速歩！」という命令を発し、ラッパ手の奏でる金管の音色が戦陣に響いた。

たちまち、最前列におかれた方形陣の兵士達が歩調を早める。

両軍の最前列の距離が瞬く間に狭まった。両陣営の後ろから頭越しに、凄まじい数の弓箭が放たれる。それは一瞬、空が暗くなるほどで、これが土砂降りの豪雨のように両陣営へと降り注ぐ。

「亀甲隊形！」

兵士達は身を寄せ合って楯を掲げ、その頭上を守った。

方形の楯に矢が次々と突き刺さり、貫通した鏃が楯を支える兵士の腕を傷つけた。

あちこちで呻き声や叫び声が轟き、楯の隙間から飛び込んできた矢を、足や身体に浴びた者が次々と倒れていった。

「陣形を解けっ！　前へ進め！」

ゾルザル派の将兵はさらに前進を開始した。

両軍の距離はさらに縮まって相手の表情が見分けられる距離となる。この時初めてゾルザル派の兵士達は気づいた。自分たちの目の前にいるのはヒト種ではなく、様々な種族を寄せ集めた軍勢で

あることに。
「つっこめ！」
兵士達が剣を振りかぶり、槍をしごきながら激突。
鉄と鉄がぶつかり、剣刃から火花が散る。
突き刺さった槍の柄がしなり、折れ、楯が戦斧の一撃で叩き割られた。
兜ごと頭が潰れ、兵士達の鮮血が大地に流れ、飛び散る。怒号と悲鳴の混在した、むき出しの暴力が暴風となって吹き荒れた。
「先頭、交代！」
百人隊長の号笛が鳴る。すると最前列の兵士達が後ろに控えていた兵士達と入れかわった。それに合わせるように敵側も最前列を後ろに退かせた。
自らの血か、あるいは敵の血か。いずれにしても鮮血でその身体を汚した兵士達は隊列の後方へと兵士達の隙間を抜けて退いていった。
そして、気力と体力ともに新鮮な兵士達が前進し、またぶつかり合う。叩き、ぶつけ、割り、弾く。あらゆる破壊の音が轟いた。
「くそっ！　ドワーフが相手かよ！」
ゾルザル派の兵士達が苦情を言うように叫いた。
力と力のぶつけ合い。叩き合い、斬り合い。そんな肉弾戦において、背が低いながらも骨太なド

ワーフが振り下ろす戦斧は、地を割るほどの勢いがある。体重があるために鈍重だが、激突した際の衝力は数人をまとめて弾き飛ばすほどだ。ドワーフという種族は、こうした正面からの肉弾戦で非常に優秀な戦闘員と化すのだ。

ゾルザル派の兵士達は、数には劣るものの個々の戦闘力に優れた彼らを前にその突撃を止められることとなってしまった。

「敵の陣中に、ピニャ殿下の旗印が見えます！」

斥候の報告にゾルザルは右側の眉を上げた。ピニャの性格であれば、きっと最前線で指揮を執っていると思っていただけに意外だった。

「なんだと？　アレを指揮しているのはピニャか？」

「はい」

「ヘルム。戦いづらいか？」

ヘルムはピニャ率いる騎士団の一期生である。彼がここまで昇進することが出来たのも、ピニャの騎士団で培われた基礎があったからとも言える。

「いえ。ピニャ殿下が相手ならば、敵に不足はありません。戦いにくいと手を抜いたら、ピニャ殿下にお叱りを受けてしまうでしょう」

ゾルザルはそれを聞いて、ふっと笑った。

「そうか。ならばピニャにお前の力を存分に見せてやるがよい」
「はっ」
頷いたヘルムは伝令兵を呼び寄せると命じた。
「間断なく新手をつぎ込むぞ。騎馬隊！　ケンタウロス隊！　前へ！」
再びラッパ手の金管の音が鳴り響いた。
「百歩後退！」
その号令に、最前列で戦っていた兵士達はあっという間に逃げ出した。
追撃のために陣列から離れてしまうドワーフ達。戦闘の興奮に我を忘れているのだ。
だが、鈍重な彼らでは帝国兵には追いつけない。
懸命に走っても距離がどんどんひらいていく。息が切れ、疲れ、その上に陣形は崩れた。その側面に馬蹄の音を轟かせてケンタウロス族と、騎馬兵の群れが槍の穂先を揃えて襲いかかった。
ドワーフ兵達はたちまち馬上槍の穂先にかけられ、馬蹄で蹴散らされてしまった。

あとがき

東日本大震災に被災された方々に、心からのお見舞いを申し上げます。そして少しでも早い復興と、安心できる生活を取り戻せることをお祈りいたします。

平成二十三年三月十一日の午後にそれは起きました。その時間、わたしは東京都中野から高円寺方面へと徒歩で移動していたのですが、目の前にあった自動販売機がガタガタと言い始めたのを見て、自販機が壊れた？　と思ったりしました。その直後、街路樹がガサガサと揺れ、ビルは鳴動を始めました。この時、わたしはいつか来ると言われていた関東地方を直撃する大地震が、ついに来たと思いました。屋根の瓦が落ち、ブロック塀が崩れた家があり、ビルの外壁が剥がれ落ちたところもありました。商店のガラスは割れ、駅前の街灯が落下し、怪我人も少なからず出てしまいました。

ですが、不遜なことを言うようですが、家に帰りつくまで震源地が何処で、どんな規模の地震だったかを知らなかったわたしは、「ああよかった、この程度で済んだか」と思っていたのです。

しかし、現実は違いました。震源地に近い東北地方・茨城県太平洋岸は、地震だけでなく、津波の直撃を受けて筆舌に尽くしがたい被害が出ました。たくさんの方々の人生が希望が、何もかもが中途で断たれてしまいました。

しかもその災禍はいまだに終わっていません。その影響は様々な形でわたし達の生活にも及び始

めて、広がりつつあります。もちろんそんなものは、罹災した方々の苦労に比べるのもおこがましいほどに些細なものですが、やはり小さいとも言いがたいものです。

『ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり』シリーズ最終章であった『4・冥門編』の原稿は三月七日に完成していました。

きちんと完結の文字をつけ編集部に送りました。計六百十八ページでした。これで終わったと感慨にふけってもいました。しかし問題は、その後ろ三分の一に書き連ねた地震やら災害が連続するシーンです。さすがにこの時期にこれを発表するのはどうだろうかと思いました。そこで編集部と連絡を取り、前半部三分の二と、後ろ三分の一の二冊に分けて、それぞれに加筆して出版することにしていただいたのです。

その為に今回のような形となりました。問題は後ろ三分の一ですが、こちらも適切な時期に、一冊の本として読むに値するものとして、皆様のお手元にお送りできると思います。

多くの方が既に「がんばって」いますので、わたしはこれ以上がんばれとは申しません。

ただ、必ず状況はよくなります。「大丈夫、俺に任せておけ！」と言ってくれる、主人公のいない現実はとても悲しくうとましく思いますが、その代わりに、陸海空の自衛隊、警察、海上保安庁、役所の方々、地元の人々、関係企業の現場職員、そしてボランティアの皆が、なんとかしようとしています。それを希望として耐えていきましょう。

著者　柳内たくみ



金も恋人も将来もない男が異世界に生まれ変わった――

何事にも諦めがちな性格の男は、一度命を落とした後、異世界にあるアルトデステニア皇国で生き返る。行き場のない彼を助けたのは、大貴族の令嬢メリエラだった。彼女の話によれば、皇国に崩壊の危機が迫っており、それを救えるのは"皇王になる資格を持つ"彼しかいないという……

定価：1200円+税　ISBN 978-4-434-15772-1



アルファポリス文庫

川口雅幸
MASAYUKI KAWAGUCHI

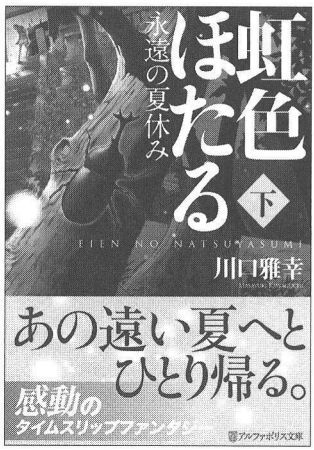
虹色ほたる
永遠の夏休み
上 下

一年前に交通事故で父親をなくした小学6年生のユウタは、夏休みに一人、父親とよくカブトムシを取りに来た山奥のダムで足をすべらせる。目を覚ましたユウタの前には、一人の小さな女の子とダムに沈んだはずの村が。どうやら三十年以上前の村にタイムスリップしてしまったらしい。そしてそれはユウタにとって、かけがえのないもう一つの夏休みのはじまりだった……

累計21万部突破!

泣きたくなるほど懐かしい。
あの遠い夏へとひとり帰る。





◉文庫本／上巻 570 円＋税、下巻 540 円＋税　◉装丁イラスト：丸山薫

誰の心にもある永遠の夏休みを描いた、感動のタイムスリップファンタジー、待望の文庫化!

ALPHAPOLIS
アルファポリス 作家 出版原稿 募集!

アルファポリスでは**才能**ある**作家**
魅力ある**出版原稿**を**募集**しています!

- ◉既存の賞の傾向や審査員の嗜好の枠からはみ出た小説
- ◉これまで知られてこなかった仕事の裏側事情
- ◉目からうろこの生活・情報ノウハウ　……などなど

アルファポリスではWebコンテンツ大賞など
出版化にチャレンジできる
様々な企画・コーナーを用意しています。
まずはアクセスして下さい!

▶ アルファポリスからデビューした作家たち



恋愛小説

市川拓司
『Separation』
『VOICE』



ファンタジー

吉野匠
『レイン』シリーズ



児童書

川口雅幸
『虹色ほたる』
『からくり夢時計』



ホラーミステリー

椙本孝思
『THE CHAT』
『THE QUIZ』

*次の方は直接編集部までメール下さい。

- ◉既に出版経験のある方（自費出版除く）
- ◉特定の専門分野で著名、有識の方

詳しくはサイトをご覧下さい。

アルファポリスでは出版にあたって
著者から費用を頂くことは一切ありません。



フォトエッセイ

吉井春樹
『しあわせが、しあわせを、みつけてきた。』
『ふたいち。』



心理エッセイ

本多時生
『イヤな人がいる!』
『幸せになる考え方』

電網浮遊都市

アルファポリス

ALPHAPOLIS

http://www.alphapolis.co.jp



アルファポリス　検索

モバイル専用ページも充実!!

携帯はこちらから
アクセス!
http://www.alphapolis.co.jp/m/

Webコンテンツが読み放題

▶ 登録コンテンツ9000超!(2011年3月現在)

アルファポリスに登録された小説・映像・ブログなど個人のWebコンテンツをジャンル別、ランキング順などで掲載!　無料でお楽しみいただけます!

Webコンテンツ大賞　毎月開催

▶ 投票ユーザにも賞金プレゼント!

恋愛小説、ミステリー小説、旅行記、エッセイ・ブログなど、各月でジャンルを変えてWebコンテンツ大賞を開催!　投票したユーザにも抽選で10名様に1万円が当たります!(2011年3月現在)

その他、メールマガジン、掲示板など様々なコーナーでお楽しみ頂けます。
もちろんアルファポリスの本の情報も満載です!

柳内（やない）たくみ

東京都在住。自衛官を経験した後、2006年に自営業を開業。本業に従事する傍ら、インターネット上で精力的に執筆活動を展開し、人気を博す。2010年4月、「ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　1. 接触編」で出版デビューを果たし、一躍注目を浴びる。

イラスト：Daisuke Izuka
http://www.kcc.zaq.ne.jp/d-trench/

ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　— 4. 総撃編 —

柳内（やない）たくみ

2011年 6月 30日初版発行

編集－太田鉄平
発行者－梶本雄介
発行所－株式会社アルファポリス
〒153-0063東京都目黒区目黒1-6-17目黒プレイスタワー4F
TEL 03-6421-7248
URL http://www.alphapolis.co.jp/
発売元－株式会社星雲社
〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
TEL 03-3947-1021
装丁イラスト－Daisuke Izuka
装丁デザイン－ansyyq design
印刷－大日本印刷株式会社

価格はカバーに表示されてあります。
落丁乱丁の場合はアルファポリスまでご連絡ください。
送料は小社負担でお取り替えします。
©Takumi Yanai 2011.Printed in Japan
ISBN978-4-434-15720-2 C0093

9784434157202

ISBN978-4-434-15720-2

C0093 ¥1700E

1920093017008

定価：本体1700円+税
発行 アルファポリス
ALPHAPOLIS
http://www.alphapolis.co.jp/
発売 星雲社

